
妖怪の山の半獣

Liger

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪の山の半獣

【Nコード】

N8845Q

【作者名】

Liger

【あらすじ】

妖怪の山に住んでいる少女。彼女は狼と人間から生まれた半人半獣。
山にいる動物たちのトップに立ち、平和に暮らしている。
これは、そんな少女の日常のお話。

*なお、戦闘はまったくない予定です。

設定集 (5月29日大幅修正&加筆)

主人公設定

名前 白^{はく} 苗字はない

性別 女

年齢 少なくとも主人公よりは年下

能力 あらゆる動物と会話できる程度の能力

相手の能力を無効化する程度の能力

九尾の尾をもっていた狼の妖獣の母と、幻想入りした人間との子。
つまり半人半獣。

あまり、というかほとんど妖怪の山からでない。

能力があるのでどんな動物とも会話できる。なので山から下りなくても情報には困らない。でも知らない人が見てると動物と会話している寂しい子。

もう一つの能力は自分に直接働きかける能力に対してのみ有効。
つまり心を読まれたり運命を操られることはないが、空間や時空、能力者自身や他の人に影響を及ぼす場合は何の意味もなさない。
結果的に相手の能力そのものを封じるわけではないので弾幕ごっこで役に立つのかは微妙。

天狗や河童と仲がいい。文や椋、にとり、果ては雛とも友好的な関係を築いている。

両親は既に他界している。

容姿

妖獣時

耳と尻尾が3本あり、毛は例によってふさふさ。毛の色は銀がかった白。名前の由来もここかららしい。安直な。

瞳の色は今は青い。成長するにつれ金に近付いていく。（実際の狼もこんな感じですよ）

身長はやや低くらい？

人間時

化けるけどめったに化けない。

妖獣時の耳と尻尾がなくなり、髪と瞳の色は黒くなる。

ただの狼

それ以上でもそれ以下でもない。でも人一人が軽く乗れるくらいには大きい。

母親

九尾の狼で八雲紫と面識があり、度々式にされそうになっていた。しかしことごとく逃げ切り向こうももう諦めた。

ここ数百年は会っていなかったので子供がいることも死んでしまったことも八雲紫は知らず、白に会って初めてそれを知った。

妖獣としての力は藍よりも上で、全盛期は本気を出した八雲紫にも引けを取らなかった。

人と交わったのは予想以上に体に負担をかけてしまい、幼少の白を置いて息を引き取った。

白のことをとても愛しており、自身の妖術やこの幻想郷での生き方をすべて教えた。

父親

実は外の世界からやってきた外来人。

そのシヨックからなのか記憶をなくして倒れていて、そこを母親に保護された。

その後二人は恋に落ち、白をもうけた。

この地で生き残るために霊術を扱えるようになり、それなりに強かった。少なくともそこらの陰陽師よりは。

母親を失って傷心の白を支えていたが、その翌年にこちらも息を引き取った。

プロローグ

「……だからさ、こんなにいらないうっていつも言ってるじゃん」

誰もいない洞窟でばやく少女。その目の前には大量の肉や植物などの食糧。少女一人が半年かけてもなくならない量だろう。

いや、一“人”というには語弊がある。

なぜならその少女には耳と尻尾が生えていて人外であることを如実に物語っているからだ。

「まったく、また誰かにお裾分けしないと……」

ため息をつきながら目の前にある大量の食糧を見る。

ここで疑問なのが誰がこの食糧を持ってきたか、ということだろう。その答えは簡単、それは彼女の部下たちだ。部下といっても妖怪ではなく、狼などの普通の動物たちのことを指す。

実はこの少女、この妖怪の山に生息している狼の頂点に立っている。そのため、狼たちからこのような物を受け取るのだ。やはりというべきか、肉食なので比率としては肉が多い。

彼女としては食事自体をそこまで必要としないのでいらないう言っているのだが、向こうはそんなのお構いなしに送ってくる。

無論、少食の少女が消費しきれる量ではないので、持ち込まれる度に山に住んでいる妖怪たちにお裾分けをしている。天狗に始まり、河童、最近は外から来たという守矢神社にまでそれは及んでいる。

「はあ……疲れた。もう寝て明日全部ぐっにかしよっ」

これはそんな半獣の少女

白^{はく}の物語である。

プロローグ（後書き）

こんな駄作を読んでいただき、ありがとうございます。
気に入ってくださいましたなら幸いです。

誤字脱字、その他何か気になったことがありましたらお知らせくださいと嬉しいです。

いつもの日常

私は今、狼の姿で山を登っている。理由は守矢神社にこの前もらった食べ物を持って行くため。

なぜ狼の姿なのか？ と問われると、それは単なる気紛れとしかいいようがない。最初に持って行った時にこの姿だったからそれを続けている、という感じだ。

……最も、もはや言い出すタイミングを失ったとも言おうが。

「あやや、白じゃないですか。どこに行こうとしてるんです？」

上空から声がしたので目を向けると、そこには鴉天狗の射命丸文さんがいた。なぜ普通の狼の姿をしているのに気付かれたんだ？ と思う方もいるだろう。答えは簡単、私の体毛は白いので目立つのだ。少し銀色がかった白。私の名の由来もここから来ている。

白で狼というと椀さんと同じ白狼天狗を思い浮かべるだろうが、あちらは天狗。私は妖獣だ。

このままの姿では当然話すことが出来ないので、いつもの尻尾を3本携えた妖獣の姿になる。

すると文さんが下りてきてくれていた。

「こんにちは、文さん」

「はいはいこんにちは。珍しいわね、こんな時間に出歩くなんて。どこに行こうとしてるの？」

「別に珍しくは無いですが……守矢神社です。食糧を献上しに」

「ああ、なるほど。まだその姿で行ったのね」
「タイミングを逃しちゃったんですよ。今更妖怪です、なんて言えないです」

もともとは「神社なんだし妖怪じゃダメなのでは？」と思ったので狼の姿で行ったのだ。ただの人間が行ける場所ではないので、人間の姿は最初から考えてなかった。目立ちたくないし。

後日、妖怪の信仰も集めていると聞いたときには驚いた。そういう事はもっと早く言って欲しい。

「文さんはどちらに？」

「私は今日の博霊神社の宴会を妖怪たちに知らせてるのよ」
「……またですか？」

私の記憶が正しければ一ヶ月……いや二週間くらい前にもこんなことをしてたはず。

どれだけこの人たちは宴会が好きなんだ。

「最近暇だからねえ……このくらいしか楽しみがないのよ。今日は地底からも来る予定だし」

地上に来ないと暇を潰せないのもどうかと思う。あるでしょう仕事くらい。

そしてそれを知らせ回っている文さんも類にもれず暇なんだろうなあ。こんなパシ……もとい、お使いをしているのだから。

「お疲れ様です。でも、ネタ探しも兼ねているんでしょう？」

「まあね。だから余計に疲れるんだけどね」

「勝手に首を突っ込んで相手を怒らせ、その流れで弾幕張ったりさ

れるんでしょう？ 自業自得です」

「はたてや貴方みたいに引き籠るのは性に合わないのよ」

「……まあ、否定はしませんけど。疲れすぎないように程々にしてくださいね」

私がそういうと何故か目が光りだした文さん。奇妙に手を動かしながら私ににじり寄ってきている。正直怖い。

「そう、私は今疲れてるのよ。癒しが欲しいのよねえ？」

「な、なんで近寄って来るんですか……？」

その行動に本能的な危険を感じて逃げようとしたが時すでに遅し。私は抱き締められて尻尾を掴まれてしまった。

そして、そのままとても柔らかかな手つきで撫でられる。

私に会うと誰でもこういうことをしてくるけど、正直やめてほしい。尻尾は動物にとって重要な部位。故に敏感……というか性感帯です。大抵の動物は触られるのも嫌がる場所だ。

「ちょ、くすぐりたいですって。やめてくださいー！」

「嫌。白の尻尾ってすごくさわり心地がいいから疲れも取れるわ」
「私は微塵も癒されないんですけどね……」

嘆息しながら抵抗をやめる。こうなると満足するまでやめないのは身を持って知っているのだ。

……ああ、別に発情期じゃないからその辺の心配は要らないよ？

「はあ……はあ……」

「ふう、存分に癒されたし、もう一回りしてくるわ」

かれこれ三十分くらい撫でられ続けていただろうか。ようやく満足したらしい文さんはとてもイイ笑顔で飛び立っていった。ああもう……今度から人間の姿になっていようかな……。

上がった息を整えながら再び狼の姿になる。守矢神社行く前にどれだけ疲れてるんだ。

……というか、撫でるだけならこっちの姿のほうがいいはずなのに、どうして皆あの姿で撫でたがるんだろう。なんて言っても全身体毛で覆われているのに。

しかも大抵は抱きついてくるし。謎だ、謎すぎる。

そんなことを考えながら目的地である守矢神社を目指すのだった。

いつもの日常（後書き）

尻尾の数などについては今後書いていく予定（これ重要）です。子供のくせに三本って多いと思いますが、現時点の白の実力はそんなに高くありません。妖力はあるけど使いこなせていない、みたいな感じでしょうか。

守矢神社でも撫でられる

漸く守矢神社に辿り着いた。予定よりもかなり時間がかかってしまった。

今回の目的は食糧のお裾分けなので境内にでも置いていけばいいのだが、少し疲れてしまったので休ませてもらうことにしよう。

「あれ？ また来てたの？」

食糧を適当な場に置き、水を飲んでいると背後から声が聞こえてきた。

そつと振り向くと、そこには特徴的な帽子を被^{かぶ}った少女の姿。言わずもがな、ここ守矢神社の石柱である洩矢諏訪子様だ。話せないので一鳴きして返事を返すに留めておこう。

……すごくどうでもいいけどこの水って美味しい。流石湖の神……は関係ないか。

今更ながら勝手に飲んでよかったのか疑問に思うが、そこは動物だから大目に見てもらえればと思う。というか見てください。

「お前も変な奴だよ。なんでこんなに持ってきてくれるのかなあ。本来肉食のはずなのに、その肉さえ私たちにくれるなんて」

積み重ねた食糧を見ながらそう呟く諏訪子様。

確かに持ってきすぎたかもしれない。山菜はともかく猪丸々一頭はやりすぎたか。でも私はどちらかというと野菜のほうが好きだから、こんなに肉いららないんだよね。妖獣は雑食なのです。

まあ、それを知らない諏訪子様たちにとっては不思議だろうけど……。

「諏訪子様？　そこで何をなさっているのですか？」

「ああ、早苗。またこの子がいろいろ持ってきてくれたみたいだよ」

「また？　なんでだろうね、諏訪子」

「あーうー。そんなの私ができるわけないじゃん、神奈子」

現れたのはここの風祝である東風谷早苗さんと、ここのもう一柱である八坂神奈子様。お二人とも私に近づいてきている。

……関係ないのですが諏訪子様、背中に乗るのはまだ良いのですが尻尾を弄るのはやめて下さい。たとえ今一本しかなくてもさっきの文さんので敏感になってるんです。

尻尾を触ろうとしてくる手をさりげなく払いつつ、神奈子様たちの元へ歩いていく。

ちなみに今の私の大きさは成人男性が一人乗れるくらい。諏訪子様くらいの体格なら、軽々乗せることが出来る。

「地下にいるさとりさんなら分かるかもしれないですね」

「ああ、そういえば今日の宴会にも来るんじゃないかなかったですっけ？」

「とは言っても連れていくわけにはいかないわよ。こんなに大きい狼をどうやって連れて行くっていうのよ」

さとり？　聞いたことない名前だ。誰だろう。

私の情報網は専ら地上の動物たちだからなあ。文さんの新聞は読んでないし……。押し付けられはするけど。

そんな事より、雲行きが怪しい。このままだと宴会に連れて行かれてしまうかもしれない。私は騒がしいのがそんなに好きじゃないからちょっと……。いや、かなり嫌だ。

神奈子様は渋っているが、その気になれば私を連れていくことく

らい簡単にできるだろう。なんて言っても神様だし。

……と、いうわけで、そんな目に会う前に逃げることにしよう。

上に乗っている諏訪子様が丁度よく下りてくれたので、その瞬間脱兎のごとく走りだす。

背後でお三方が「あっ」と言っているが気にしない。「私まだ撫でてないのに！」なんて聞こえない。

今日は疲れたし、もう帰って休もう。こんなに精神的に疲れた日はないってくらいに疲れた。

けどなんだろう……妙に嫌な予感がする。まるでまだまだ疲れることがあるような……。

「いや、気のせいだよね……きっと」

そう思い直し、私は帰路に着いた。

くその時の守矢神社く

「ほら、神奈子が怖いから逃げちゃったじゃん」

「なんで私のせいなのよ。にしてもあの狼、なんなのかしら。まるで私たちの会話が分かってるかのように行動してない？」

「言われてみればそうですね。でもここは幻想郷ですから、外の常識に囚われてはいけないのです！」

「早苗は極端だよな」

「先祖に似たんじゃない？」

「おいそれどどういう意味？」

「お二人とも何の話をされているんですか？」

「いやいや別に。まあ、あの狼に関して今日の宴会で訊いてみましようか」

「そうだねー。天狗とかなら山に関する事は知ってそうだしね」

無意識少女と狼

現在の時は夕方六時頃、仄かに暗くなりつつある時間帯である。そんな時間に私は散歩をしている。実は守矢神社から帰ってきた後そのまま寝入ってしまった、起きたばかりなのだ。かれこれ四、五時間は寝ていたらしい。昼寝にしては寝過ぎだ。守矢神社でそれだけ疲れたということだろうか。

そんなわけで目を覚ますためにこうして適当にぶらついている。ちなみに今は妖獣の姿だ。というか、普通はこの姿で出歩いている。「ん？」

数十分は歩いた頃だろうか、ふと前方に見覚えのない人影をとらえた。とは言っても、こんな所に人間がいる訳がないので妖怪なのは間違いない。

でも天狗が統治しているこの山にどうやって入ったんだろう。並の妖怪では無理なはずだ。

好奇心に駆られた私はその人影へと近づく。徐々に明らかになってくるその正体、それは……。

「うわぁ……」

動物まみれになっている少女だった。

「ふうん、あなたよく私のことに気付いたわね」

「あれだけ動物にまみれていれば誰でも分かりますよ？」

群がっていた動物を帰した後、軽い自己紹介をして手ごろな岩に腰かけるとその少女　古明地こいしさんも隣に座って話しかけてきた。

余談だが、動物たちに話しかけたら一斉に私に飛びついてきて帰らせるのに苦労した。

狼が飛びついてくるのはまだ分かる。だって私が狼の妖獣だから。でも犬猫も飛びついてきた理由がわからない。そっちはそっちでボスが居るものじゃないの？　ほら、橙さんとか。

「ちがうわよ。私は『無意識を操る程度の能力』を持っているの。だから誰も私を見つけれないはずなの」

「なるほど。でもそれは相手の無意識を操る能力でしょう？」

「そうだけど？」

「私は『相手の能力を無効化する程度の能力』を持っているんです。だからそういうの、効かないんですよね」

そう言うとき少し驚いた顔になったこいしさん。自分の能力が効かない相手は初めてらしい。

因みにこいしさんは地下から博麗神社の宴会に参加しに来たが、いつの間にか此処に着いてしまったらしい。自分の行動まで無意識なのだろうか。

「こいしさん。そろそろ宴会に行ったほうがいいのではないですか？」

暫くお互いのことについて話したりしていたら、ずいぶん時間が経ってしまったようだ。完璧に宴会は始まっているだろう。

「ん、そろそろ行かないとまずいかも。お姉ちゃんが心配しちゃう」

「急いでるならお送りしましょうか？」

空を飛べるとはいえ、土地勘のないだろう地上だ。私が狼化して走って行ったほうが速いだろう。

いくら妖怪の山からあまり出ないとはいえ、私だって天下の博霊神社の場所くらいわかるしね。

「いいの？」

「構いませんよ。送ったらすぐに帰りますし」

文さんとか守矢神社の方々に見つかったら面倒くさそうだけど、乗り掛かった船だ。どうせ暇だったし、地下の話など有意義な時間を過ごさせてくれたお礼としてなら安いものだ。

「じゃあお願いするね」

「分かりました。狼になるとしゃべれなくなるので先に言っておきますが、なるべく尻尾に触らないでくださいね？」

今日はこの尻尾で十二分に苦しんだのでそう言うしておく。

こいしさんは動物好きだから嫌がることはしないと思うけど念の

ために、ね。

そうして姿を変え、こいしさんが乗ったことを確認すると一気に駆けだした。

「わー、白って早いのね」

引き籠っていても狼ですから、地上でなら並の動物よりは速いですよ、と心の中で呟く。心なしかこいしさんの声も弾んでいるようなので、こちらとしても喜んでもらえて嬉しい限りだ。

「私のペットにならない？」

聞かなかったことにしておこう。私は犬ではない。

強制参加な宴会

それなりな速さで走ったので、あっという間に博霊神社に到着した。やはり宴会はもう始まっているようで、もの凄く騒がしい。

こいしさんは既に私から降りてそっちに向かっている。いつの間に行っただろう。

……まあいいか。私はすぐに帰らないと……。

「あ………」

「ん？ どうしたの早苗」

「いえ、あそこにいるのって………」

「うん？ あ、さっきの狼だね。そうだ、天狗は知ってる？ あの子のこと」

「そういうことはこの射命丸文におまかせを！ どの狼ですか………
って白のことですか」

「白っていうんだ、あの子」

「ええ。妖怪の山に住んでいる半人半獣です」

「え、半獣？」

喧騒にまぎれてこんな会話が聞こえてきた。

文さん、なんでばらしちゃうんですか？ 秘密にしたの知ってますよね！？ おおう………守矢神社勢どころか、知らない方まで興味深そうにしてるし………最悪のパターンだ。

……よし、ここは戦略的撤退だ！ 面倒なことになる前に逃げ

「だめだよー、逃げちゃ」

よつとしたらいつの間にかこいしさんに尻尾を引つ張られていた。ちよつ、毛の流れとは逆に撫でないでください。なんか気持ち悪いですから！

と、そんなことをしている間に諏訪子様と文さんがやってきてしまった。逃げようにもこいしさんが尻尾を離してくれないので意思とは裏腹に体が動かない。

というか、せめて毛の流れに沿って撫でてください、こいしさん。

「いつも絶対に来たがらなかった宴会に来るなんてどういう風の吹きまわし？」

「半獣つてことは人型の姿にもなれるよね。なってよ」

……もうこれは逃げられないよね。というか諏訪子様、強制ですかそうですか。

嘆息し、こいしさんに尻尾を離してもらい仕方なく、本当に仕方なくいつもの姿になる。

「……こんばんは、文さん。それとこの姿では初めまして、守矢神社の方々」

思っていたよりも不機嫌な声が出てしまったのは仕方のないことだ。結構な人数に好奇の目でじっと見られれば誰でも不快感を感じるだろう。見世物じゃないんだからこんな注目なんて集めたくないのに。

「あ……うん、初めまして。えつと白だっけ？」

「はい。苗字は無いのでそれで呼んでください」

「それで白、どうしてここに来たの？」

「別に……そこにいるこいしさんを送りに来ただけですからすぐに帰ります」

そう言っつて帰ろうとするとやっぱり尻尾を引っ張られた。もうこの行為はいじめに近いと思う。

「離してください文さん。痛いです」

「駄目よ。珍しく白が来たんだから絶対に宴会に参加してもらおうわ」「どうしてですか。嫌です」

しかし助けを求めて周りを見渡しても守矢神社の方たちは賛成の御様子。

こいしさんは……いつの間にかお姉さんらしき人の所に行つて私を指で指し示している。どうやら私の紹介でもしているらしい。あつちにいたりこつちにいたり忙しい方だ。

どの道私に味方はいないらしい。まさか知らない方たちに助けを求めるわけにもいかないし……。つまりあれですよ、諦めろつてことですよ。

「……………分かりました」

「すぐく間があつたね」

「でもいいんですか？ 知らない人がいきなり参加して」

「それは何の問題もないわ。そんなの気にする奴なんかここにいないもの」

ですよー。皆さん今のやり取りを酒の肴にしていますもんね。指さして笑われているのですが、今のやり取りのどこに笑う要素があったのか教えてください。

やっぱり酔っ払いというのは厄介だ。だから宴会とか嫌なんだよ

ね……。

「……やっぱり帰ってもいいですか？」

「……だめ」「」

「息ぴつたりですね」

さすが守矢神社。三柱の息が揃っていらっしやる。

……しかし今日は予想できないことが多い。まさかこんなことになるとは思ってもみなかった。

そんなことを考えながら重い溜め息を吐き、諏訪子様に手を、文さんに尻尾を引っ張られながら喧騒の中に身を投じていった。

……もう尻尾に関して何も言つまい。

酒は肝臓と要相談

連れていかれた場所には、守矢一家と文さんのほかに知らない方が数名いた。ここから離れた所に至ってはもう知らない人しかない。当然と言えば当然だけど……。因みに女性だらけ、というか女性しかない。

人見知りというわけではないが、あまり他人と話すのは好きではない。なので極力ここから離れないようにしておこう。

「えっと……白、さん？」

「呼び捨てで全く構いませんよ。早苗さん」

「そうですか？　じゃあ私も呼び捨てで……っじゃなくて！　どうして黙っていたんですか！？」

「どうしてと言われましても……強いて言うならタイミングを逃したからです」

「タイミング？」

「最初あの姿で行っちゃたので今更かな、と」

最初に話しかけてきたのは早苗さんだった。まあ、当然疑問に思っているだろうから予想通りだ。

しかし居心地が悪い……至る所から視線を感じる。超帰りたい。

「そんな理由だったの？」

「そうです、諏訪子様。神社に妖怪が行っては不味いと思ったのであの姿で行ったんです」

「別にそんなの気にしないのに」

「私もあとでそれを知ったんですが、なんとなくあのまま行き続けてしまったんですよ」

「じゃあなんでいろいろな食糧をくれたのよ？」

「別に他意はないですよ、神奈子様。あれはただのお裾分けです。私ひとりでは消費しきれないので」

「あんな量どうやって採ってきてるの？」

「さあ……あれは山の動物たちがくれたものですから」

そんなことを思っている間にもどんどん質問をしてくる早苗さんたち。

ちょっと落ち着いてもらいたい。かなりの注目を集めてしまっているし。

「なあ、お前妖怪の山に住んでるのか？」

「そうですけど……えっと？」

早苗さんたちからの質問攻めが漸く一段落ついた頃、それを見計らったかのように声をかけられた。おそらく、実際に計っていたのだろうけど。

話しかけてきたのはいかにも魔女、のような服を着ている金髪の女の子。多分、人間だろう。

「ああ、悪い。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ」

すみません、普通の魔法使って何ですか？

「よろしくお願ひします、魔理沙さん」

「別に呼び捨てでいいぜ。私も白って呼ぶからさ」
「いえ、私は敬語これがいつも通りなので」

小さい頃に父さんから年上には敬語を使うように言われてきたが、住んでいる場所が場所なので年下なんてなかない。なので必然的に誰に対しても敬語で話すようになった。

魔理沙さんは見たところ私と同じくらいの歳くらいだろうか。久しぶりに年齢が近い人を見た気がする。

「で、白って半獣なんだよな」

「そうです。人間にも化けれますけどね」

「へえ、すごいわね」

知らない声が話に乱入してきた。顔を向けるとこちらも金髪の少女。ちなみにその近くには人形が浮いている……て、ええ？ 人形が浮いているなんて……世界は広いなあ。

「え、えつと……あの？」

「あ、ごめんなさい。自己紹介がまだだったわね。私はアリス・マーガトロイド。ちなみに私も魔法使いよ」

「よ、よろしくお願いします」

魔法使い率高いね。連続だ。

そうなると、あの人形たちはアリスさんの力の一端ということか。知らないで見ると結構びっくりする。

「それにしても立派な尻尾よね。毛並みもいいし……」

少しおしゃべりをして打ち解けてきたころ、アリスさんにそう言われた。いきなり手を伸ばして触ろうとしないところに常識と優しさを感じる。魔理沙さんはさつき無断で触ってきたというのに。この差はなんなのだろう。

というか会う人会う人私については尻尾のことしか言わない。あれか、私の特徴は尻尾だけということか。

「そうですか？　ありがとうございます」

「めちやくちゃさわり心地よかったぜ。アリスも触らせてもらえよ……いいかしら？」

さつき魔理沙さんにいきなり掴まれたとき微妙な顔を浮かべたからか、申し訳なさそうに訊いてくる。

いいもなにも私はいきなり触られるのが嫌なだけなので、断ってくれば別に拒みはしない。機嫌とかが悪くなければ。あと発情期は論外。まだなっただことないけど。

「もちろん。誰かさんたちみたいにいきなりやられたり、変な触り方をしなければ別に怒りませんから」

誰かさんたち、と文さんも含めて遠まわしに抗議をしたが当の本人はどこ吹く風。なんて性質が悪いんだろう。性格もか。

「それじゃあ……触らせてもらうわね」

「どうぞどうぞ」

遠慮しがちに私の尻尾を撫でてくれるアリスさん。雛さん以外にこんな風に撫でてくれる人はいないから新鮮だ。

「本当ね……すごく触り心地がいいわ」

「だろ？ 藍にも負けず劣らずだ」

「藍？」

「ああ、知らないのか。あいつはお前と同じ妖獣だ。九尾の狐だな」

九尾？ すごいなあ……。私なんかまだ三尾なのに。比べてどうにかなるって物でないのは分かっているけど、やっぱり憧れる。

私もいつか九尾になりたいとは思うが難しいだろう。なんて言っても半分人間だし。

「ここにその方はいらっしやるんですか？」

「いや、いないな。あいつはとある妖怪の式だからな。その妖怪がこなければここにも来ない」

「そうなんですか……」

それは残念だ。九尾の妖獣なんて母さん以外に見たことないし、九尾の狐を式にするほどの力がある妖怪にも会ってみたかったのに。でもなんだろう……。何か忘れているような気がする……？

「ま、あいつは神出鬼没だからな。後でひょっこり顔を出すかもしれないぜ」

「そうね。いつもいつの間にか来ていつの間にかいなくなっているものね」

「え……？ あ、はい。そうだと嬉しいですね」

いけないいけない。つい聞き漏らしてしまうところだった。会話をしているときに他のことを考えるなんて失礼な行為だ。気をつけよう。

何か忘れているような気はするけど、後で考えればいいよね。

と、お酒を勧めてくる魔理沙さんから逃げつつそんなことを
思う。

動物の肝臓は人間ほどアルコール分解できませんから。私の臓器
を破壊しないでください……。

吸血鬼とスキマにはご注意を

「貴女、おもしろいわね。私の能力で何も見えない存在は初めてよ」
「え？」

しつこくお酒を勧めてくる魔理沙さんから逃れるため、動かないようにしようとした場所から離れて動き回っていた時に声を掛けられた。どう見積もっても外見が十歳前後の少女に。

ただ、溢れ出ている妖力がすごいので実際はいくつなのかは判らない。後ろには人間……銀髪のメイドさんが控えている。

……他人と会話するの嫌いとか言っておきながら、今夜だけでどれだけ話してるんだらう。

「私はレミリア。レミリア・スカーレットよ。それで後ろが……」

「お嬢様の従者の十六夜咲夜と申します。お見知りおきを」

「は、はい。よろしくお願ひします」

この二人とはなるべく関わらないほうがいいって私の頭が警鐘を鳴らしているのはどうしてだろうか。さっきの妖怪の話といい今といい、やっぱり何か引っかかる。ここは早めに退散しておくほうが良さそうだ。

「……それでは失礼しま」

「まあ待ちなさい。この誇り高き吸血鬼が直々に話し掛けているのよ？」

「え、吸血鬼……？」

「ええ。実は貴女に話があるの」

レミリアさんが何か話しているようだがそれは私の耳には入ってこない。

吸血鬼……そうだ、確か母さんから聞いた注意にあった。えっと、よく思い出せないけど確か……。

「私のものにならないかし」「こんばんは、皆さん」「っ、スキマ妖怪！」

いきなり目の前に現れたのはどこか胡散臭そうな女性。……此処、美女率高すぎない？

その女性はなにやら気持ちの悪い空間の裂け目から出てきている。今の呼び名からして、この裂け目のことをスキマと呼んでいるようだ。言い得て妙だと思う。

……ん？ スキマ……妖怪？

「こちらははじめましてね、狼の半獣さん。私は八雲紫」

「人の会話を遮って勝手に喋らないでくれるかしら？」

「あら怖い。喧嘩は苦手ですわ」

そんな会話さえ聞かず私は吸血鬼、スキマ妖怪、八雲紫という三単語を聞いた瞬間逃げだした。

……ここで一応確認しておくが、私は狼の妖獣。

飛行能力では天狗に敵う訳ないが、地上での純粋な走力においてはたとえ誰だろうと追いつけないだろうと思う。

では何故そんな私が全力で駆けだしたというのに

「…………え？」

依然として目の前にはさっきの妖怪がいて、首元にはメイド
咲夜さんのナイフが添えられているのだろうか。

「あら、人の顔を見た瞬間に逃げるなんて躡しつぽがなっていないわねえ」
「私の話を聞かないでいなくなるなんていい度胸ね？」

両者とも美しい笑みを顔全体に浮かべているが、目だけが笑って
いない。正直ナイフより怖い。

…………いや、そんなことより何？ 何が起こったの？

「そんな顔しなくてもいいわ。そのナイフ突き立てている人の主じ
やないんだから、別に何もしないわよ」

「真っ先に逃がさないように行動していた奴がよく言っわ。…………咲
夜、ナイフはしまいなさい」

「…………分かりました」

不承不承といった感じでナイフをしまう咲夜さん…………あれ？ 今
私の横にいたのにどうしてレミリアさんの後ろにいるんですか？

あー…………そうか、咲夜さんはその手の能力者ということか。厄介
な事この上ない。

母さん…………あの忠告のときに逃げ方も教えてくれたらよかったの
に…………。

「それで？ いきなり逃げだしたからにはそれなりの理由があるん
でしょうね」

それはもう威圧感たっぷりレミリアさんが聞いてくる。理由かあ……言ったら酷いことになりそうだけど、言わなかったらもっと酷いことになる気がする。

しかもなんだか周りの方々もこのやり取りを見ている御様子。さつきまでの喧騒はどこに消えました？

つまりは素敵な笑顔と好奇の目に晒されている私。……もうこうなったら、言うしか道がないじゃないですか。

「……母に言われたことがあるのです」

「何をかしら？」

扇子で口元を隠し、胡散臭い笑みを浮かべている八雲さんに問われる。うわあ……逃げたいけど逃げられない。

「『吸血鬼とスキマバ……八雲紫が絡んできたら絶対に逃げなさい』と」

「ちよつとその人呼んでもらえるかしら？」

おそらくスキマのあとに続く語が気に入らなかったのだろう。私も全部言うのは不味いと思って途中で止めたし。

「それは……無理です。母は数年前に亡くなりました」

「ふうん……。今思い出したんだけど、九尾の狼で私のことをそんな風に呼ぶ奴がいたわね。最近会ってないけどどうしているかしら」

「あ、多分それが私の母です」

「え？ でもあいつが人との子を成して、しかも死ぬなんて……冗談でしょう？」

「いえ……人と交わったのが大層体に堪えたようでした」

私を生んだせいで死んだといつても過言ではなかったのに、最期は笑いながら私と父さんにお礼を言っただけで旅立ってしまった母さん。あの人は今でも私の大好きで憧れの人だ。

「へえ、本当にあいつの子なのね……」

「ちよつと、私抜きで話を進めないでくれるかしら？」

値踏みするような八雲さんの視線と不機嫌な様子のレミリアさんに挟まれて私の精神力はもう0です。誰か助けてください。

「あんたたち、いい加減にしなさいよ」

そう思っていると、またしても聞きなれない声が響いてきた。

博麗の巫女

「あんたたち、いい加減にしなさいよ」

声のする方向を見ると脇の部分が開いている、ちよつと特殊な巫女服を着た少女が呆れ顔で立っていた。もしかしなくてもこここの巫女 博麗霊夢だろう。

……私だつて巫女の名前くらいは知ってるんだよ？

「寄つて集つて何してんのよ。たかが半獣一匹に」

「それがたかが、でもないのよ霊夢。今の話からするとこの子は、私と同等かそれ以上の力を持っていた妖獣の子。興味くらい持つものでしょう？」

母さんつてそんなに強かったんだ。天狗よりも排他的だからあまり知り合いとかもいなくなつたらしく、自分の強さもよく分からないつて生前言つてたし。

「知らないわよ。というか妖獣ならあんたのところににいるじゃない狐が」

「そうだけど、こつうものは側に置きたいじゃない？ だから……」

八雲さんがこちらを向いた瞬間、冷たい汗が背筋を伝う。どうしてだか嫌な予感しかしない。

「あなた、私の式にならない？」

「はあ！？ ちよつとスキマ妖怪！ 私が先に目をつけていたのを誘うんじゃないわよ！」

「私の意思は何処に……？」

そこはかとなく予想していたことを言われ、真っ先に反応したのは意外にもレミリアさんだった。

そして私の呟きは誰にも聞かれず霧散していった。悲しい。誰か少しくらい反応してくれてもいいと思う。

というかレミリアさん、貴女も私をペットにしたいんですか。こいしさんといい貴女方といい……今日は厄日だ。あとで雛さんに被ってもらおう。

「あんたも厄介なのに目を付けられたわね」

あのまま口論を始めた二名を一瞥して博麗さんが言う。……やっぱり、今日だけで済むはずないよね。母さんも八雲さんには何百年か付きまとわれたって言うていたし。

「そう、ですね。もう溜め息しか出ないです。……あ、今更ですが勝手に参加してしまい申し訳ありません」

「別にそんなのはいいわよ。どいつもこいつも勝手に来て騒ぐだけ騒いで帰るやつらだし、一人増えようと消えようと気にしないわ」

何というか、サツパリとした性格のようだ。それが神社に妖怪が寄り付く要因なのかもしれない。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。まあ、あの騒ぎで知っているでしょうが白といます。ご存じの通り、半獣です」

「この巫女の博麗霊夢よ。ま、よろしく。来たからには楽しんでいったほうが得よ？ あんなやつら気にしないで」

「あはは……善処します。まだ霊夢さんと同じくらいの歳なので、どうもあの手の対応がよく判らないんですよ……」

「は？ 尻尾二本あるくせに私と同じ年？ あんた一体いくつよ」

女性に臆することなく年齢を聞いてくるのも一種の才能だと思う。まあ同性だからだから、というのもあるだろうが八雲さん辺りに聞いたらすごいことになる気がする。

「十……幾つかです。きちんとは覚えてないですが……」
「はあ？」

何言ってるんだコイツ、見たいな表情をしている霊夢さん。いや、そこまで年いつてるように見えますか？ だとしたらちよつとシヨツクです。

「あんた何言ってるの？」

実際に言われると衝撃もひとしおです。

「たかが十歳ちよつとで尻尾二本とかありえないでしょ。吐くならもつとまじな嘘を吐きなさい」
「いえ、事実なんですけど……」

確かに尻尾で見ればそう思うかもしれない。よかった、容姿がどうこうという訳ではないんですね。

「過去にいろいろあって二本なんです。今後はこんなに増えてはいかないですよ」
「ふーん、変な奴ね」

正直その言葉を、神社に妖怪呼んで宴会をしている巫女に言われなくなかった。

私の過去について聞かないのはこの人の性格だろう。まあ、誰でも妖怪に過去のことなんてあまり訊かないだろうけど、あまり話したくないのが本音だから助かった。

「ところで、そろそろ逃げたほうがいいんじゃない？」

「え？」

「あれ。そろそろ終わるわよ」

何が？ と思いつながら霊夢さんの視線をたどる、と。

「ここは本人に聞いてみるのがいいんじゃないかしら？」

「そうね。このままじゃ埒があかないわ。……別に戦ってもいいけれどね」

「あら。最強の妖怪に敵うと思ってるの？ 大人げないと思って妥協案を出してあげたというのに」

「驕っていると足元をすくわれるわよ。ここで証明してあげましょうか？」

……忘れてた。いま私結構な窮地に立っているんですけどね。

って、あれ？ 私に意見を聞くんじゃないですか？ どうして2人ともスペルカード構えているんですか？

「早く逃げないと巻き込まれるわよ」

「……逃げます」

言っが早いか動くが早いか。私は元いた場所へと走り去った。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！」

「境符『四重結界』！」

「神社を壊すな！ 霊符『夢想封印』！」

……私は何も聞いていない。

ちょっとした休息（前書き）

ちょっとといつもより短めです。

つながりと思って読んでください。

ちよつとした休息

「災難だったわね、白」

元いた場所に戻ると、文さんに心底可哀そうな目をされながらその言われた。

見渡せば似たような目を向けている方がたくさんいる。そんな目で私を見ないでください。というか。

「そう思っていたなら助けてくださいよ……」

「まあ、これもいい経験よ。あなたも天狗に負けず劣らず排他的だから、こんなたくさん会話したことないでしょ？」

「確実にいい経験だとは言えないと思うんですけど……」

確かに山に引き籠ってばかりですけど……これ、最初にしてはハードルが高すぎると思うんです。

ちらりとさっきの場所を見てみると倒れ伏している八雲さんとレミアさん、そして何事もなかったかのようにお酒を呷っている霊夢さんがいた。さすが歴代最強の巫女……。絶対に敵に回したくない方だ。

「まあまあ、さっきのことは忘れて楽しくやろうよ」

そう言って飲み物を手渡してくれたのは諏訪子様。

飲み物といっても、さっきお酒は固辞していたのでただのお茶だ。

「ありがとうございます……」

「思ったんだけどさ、何であの二人を避けてるわけ？」

「……八雲さんは数百年前に母を式にしようと追いかけていた

らしくて。娘だからという理由で標的になるかもしれないからその前に逃げなさい、と」

「あー……なるほど。しつこそうだもんねえ」

「じゃあ、何でレミリアからも逃げようとしてたんだ？」

問いかけてきたのは魔理沙さん。ここを離れていたのはそんなに長い時間ではなかったはずなのに、出来上がっているようだ。酒臭い。微妙に呂律も回っていないし。

答えても明日には忘れていそうだが、他の人も聞きたそうにしているので答えておこう。

「吸血鬼と狼はあまり仲が良くないんですよ」

「へえ？ 初耳ね」

「私も聞いただけなんですけどね。なんでも吸血鬼は狼を下僕にしたりしていたとかで」

母さんが吸血鬼について話すときは凄かった。いつもは冷静で落ち着いているのにそのときだけは苛立っていたし。

その教育の賜物か、娘もすっかり吸血鬼が苦手になりました。会ったの今日が初めてだけだ。

「ねえねえ、白」

「え？ ……こいしさんじゃないですか。どうかしました？」

「お姉ちゃんに白を紹介したいんだけど……いい？」

あの後完璧にできあがってしまった魔理沙さんを私と早苗さんで介抱して、疲れたのでもう帰ろうかと思っただ矢先のこと。

紹介……私の何を？　と思っただけど、申し訳なさそうな顔をして言われてしまったては断るわけにもいかない。地底から来たと言っていたし、そうそう会える方ではなさそうだから今でないと今後機会があるかもわからないし……。

「文さん、こいしさんと少し話したら私はもう帰りますね」

「え、もう？　これからが楽しいのに」

「お酒が飲める方はそうでしょうね。それに、あの二人が起きる前には退散したいですし」

そう言ってピクリともしない八雲さんとレミリアさんを指さす。

それを見ると文さんも納得してくれたようで、了承の意を得られた。

「ところで白」

「はい？」

「どうして若干距離を置いて話してるのかしら？」

「酒臭いから」

「失礼ねえ。まだ二、三升しか飲んでないわよ」

「私とは価値観が違いすぎます。飲み比べも程々にしてくださいよ？」

酒は百薬の長だー、と騒ぐ文さんを無視して、私はこいしさんと共に歩き出した。

ちょっとした休息（後書き）

吸血鬼と狼の仲については諸説あるようですが、ここでは上記を採用しました。

白は吸血鬼苦手ですが嫌いではないです。自分が何かされたことがないので。

でも母の話により、苦手意識が芽生えたんです。

似ている姉妹

「へえ、あなたが……なるほど、興味深いわ」

「は、はあ……」

「お姉ちゃん、白が困ってるよ」

「ああ、ごめんなさいね。こいし以外に心が読めない存在がいるなんて思わなかったものだから」

現在、第三の目とやらでガン見されている白です。正直怖い……というより不気味なのでやめてほしいです。

「申し遅れましたね。私は地底　地霊殿の主の古明地さとります」

「あ、ご丁寧にどうも。私は白と申します」

こいしさんに言われ、すぐに見るのをやめてくれた。こうして並んでいると結構似ている姉妹だと思う。

「こうして会うまでは半信半疑だったけど本当に読めないわ、あなたの心。珍しい能力ね」

「珍しいだけですけどね……」

事実、以前文さんと弾幕ごっこをしたときは何の役にも立たなかった。

ちなみにさとりさんの能力についてはさっきこいしさんが言っていたので大体知っている。あちらも同じようにこいしさんから聞いたのだろう。

あー……しかし今日は疲れるなあ。なんかもう眠いよ……。

「ふふ、そんなに気を張らなくてもいいのよ。疲れているのでしょ
う?。」

「……………」

そう言っただけ私の頭をなでるさとりさん……………様のほうがいいのかな。
地霊殿というところの主って言うていたし。

それはともかくとして、こいしさんといいさとり様といい……………こ
の姉妹は撫でテクが半端ない。

「さつきのやりとりでだいぶ参っているようですね」

「お姉ちゃん、次私!」

さとり様に頭というか耳を、こいしさんにはやはりというべきか
尻尾を撫でられる。

特筆すべき点は、いつの間にかさとり様に膝枕をされているとい
う所だろうか。なぜ初対面の方にそんなことをされているのかとい
う疑問も吹き飛ぶくらいに、お二方とも安心するような撫で方をし
てくれる。

……………でもこれって、人じゃなくて完璧動物として見られているよ
うな気がする。ああ、今更ですかそうですか。

「さとり様は地霊殿で何を飼っていらっしやるんですか?」

「そうね……………化け猫とか地獄鴉とかかしら」

それがペットに区分されているとは思わなかった。

「普通の動物は……………」

「いるわよ、もちろん」

「私のペットもお姉ちゃんから貰ったしね」

安心した。

「うあー……」

撫でられて数分もしないうちにかなりの眠気が襲ってきた。因みに頭はまださとり様の膝の上だ。

なので本当に寝てしまわないうちに帰ろうと思い、立ち上がるつもりだったが押しとどめられた。

「別に寝てもかまわないわよ？」

「そしたらその間に地底に運べるしね」

「起きます」

ありがとうございます、こいしさん。貴女の一言で私の脳は覚醒しました。

「冗談なのに」

「目が本気だったと思うんですが……」

いつも野生動物を相手にしているからわかる。あの眼は本気だった。

「まあまあ。ですが気が向いたらいつでも地霊殿に遊びに来てください。ペット共々歓迎しますよ」

「最近温泉もできたしね」

確かにさつき言っていた化け猫や地獄鴉に興味はある。今度、暇ができたら行ってみるのもいいかもしれない。

「そうですね。ぜひ」

そう言っつて、今度こそ神社を後にするため歩き出した。

……正直、今日だけでかなり面倒事が増えた気がする。明日からが少し憂鬱だ。

↳その時の古明地姉妹↳

「あの子、何者なのかしらね」

「白のこと?」

「そう。さつき完全にリラックスしてたように見えただけど、実際はそうじゃなかったわ。何かあればすぐに行動できるようにしていた」

「どづいつこと?」

「常に周りを警戒していたってことよ。馴染んでいるようで、誰に対してもまったく警戒心を解いていなかった。……いえ、天狗には解いていたかもしれないわね」

「ふ〜ん。でも当然なんじゃないの、お姉ちゃん。知らない人しかいなかったんだから」

「それにしては警戒しすぎだったよ。うな気がするのよね……」

「まあ、私たちが気にしても仕方ないじゃん。それよりそろそろ帰るよ」

「……ええ、そうね」

人間との関係

「うわああああー!!」

さて、突然ですがここで質問です。

目の前で妖怪に襲われている子供がいます。あなたは助けますか？

- ・里から出た子供が悪いんだから放っておく。
- ・可哀想だから助ける。
- ・妖怪と一緒に子供を襲う。

……一番最後はないなあ。私はそんなことをしなくても生きていけるし。以前人間の肉を他の妖怪から貰って食べたこともあるけど、あれは不味かった。油っこいし、堅いし……とにかくそんなに好きな味ではない。

まあ、一番最初が妥当かな。ここは妖怪の山、本来人間の子だけでいい場所ではない。大人の忠告を聞かなかったのだから仕様のないことだ。

そんな結論に達したのでこの場を去ろうと踵を返そうとすると、

「た、助けて！ お父さん、お母さん！」

そんな声が聞こえてきた。

……お父さんにお母さん、か。確かにこの状況は自業自得だが、両親にとっては関係ないだろう。子供を先に失って、止められなかった自分たちを責めるのは目に見えている。

「……仕方ない」

溜め息をつきながらその子供と妖怪の間に割って入る。

私の姿を見て更に怯えた顔になる子供。おそらく、私からも襲われると思ったのだろう。そんな子供を放っておき、妖怪に顔を向ける。

この妖怪……せいぜい小妖怪か中妖怪の下位くらいだ。なら問題はない、私でも十分に倒せる。

「失せろ」

睨みながら徐々に妖力を解放していく。木々がざわめき、周囲には殺気が満ちていく。鳥も動物もすぐさま踵を返すように散っていく。

少しの間対峙していたが、その妖怪は自分では敵わないと悟ったのか飛び去っていった。

私はあまり人間だろうと妖怪だろうと殺したくないので、こういう手段を使うことが多い。もちろん向かってきた奴とは戦うけど。

ま、そんなことはさておき。

「……大丈夫？」

「っ!？」

私が声をかけると大きく体を震わせ、怖かったからか助かった安堵からかは知らないが、遂には泣き出してしまった。ああもう、子供って面倒くさいな……。

泣いている幼子をなぐさめる術など持っていないので、もう好きなように泣かせておくことにした。半刻もすれば流石に泣き止むだろうし。

その間は手持ち無沙汰だったのでその子供の観察をすることにした。

見た目からして、この子供は推定八歳くらいの女の子でそこそこ顔立ちもいい。今から将来が楽しみだ。そして足を怪我しているらしく、逃げなかったというよりは逃げられなかった、が正しいらしい。

……すごくどうでもいい情報だなあ、これ。何の役にも立たない。

「お姉ちゃんは……襲ってこないの？」

予想とは違い、半刻もしないうちに落ち着いたらしい。尤も、まだ怯えてはいるようだ。

「襲う理由がないですからね。それよりも一人で里に帰れますか？」

私の質問に、少し考えてから首を横に振って否定の意を示す少女。……結構頭の良い子のようだ。自分の怪我の状態からして、ここから逃げられないということがよく分かっている。

「ですよ。送ってあげますから、そんなに警戒しなくてもいいですよ」

そう言つと、今度は驚いた顔になってこちらを見上げてくる。表情がコロコロ変わる子だなあ。

そんな百面相少女は何かを言いたげだが、それに構わずその子をお姫様抱っこの形で抱える。おんぶは暴れられると体勢が崩れやすいという理由で却下。

「ほん、とう……?」

「ええ。それくらいの手間だったら大したことじゃあないですしね」「ありがとうございます……」

恐る恐る、しかし嬉しそうに言う少女。顔立ちと相まってかなり可愛いと思う。久々に和めた気がする。

何せ、この前の宴会から面倒事ばかり増えたからなあ……。

今日だって八雲さんが妖怪の山にいたという目撃情報を聞いたから出歩いていたのだ。幸い住処までは見つかっていないらしいが、ずっとそこにいたら見つかることは必至。だから引き籠り生活を改善せざるを得ない状況になっているのは余談だろうか。

そんなことを考えながら、少女を抱え直して飛び立った。

獣人と遭遇

「あつ、慧音先生だ！」

人間の里に向かっている途中、少女がいきなり声を上げた。

顔の近くで大声をあげられたので、耳がキーンとなった。もう二度とお姫様抱っこなぞするまい。

「……先生？」

「うん！ 里で寺子屋をやっているの」

「へえ……」

何にせよ、あの人はこの子を引き渡せば里の中に入らなくても済みそうだ。やっぱり堂々と入るのは面ど……いやいや難しい所だからね、人里は。

そう思い、その人影に近づいていくことにした。

Side 上白沢慧音

「いないな……」

今私は里からいなくなってしまった少女を探している。なんでも両親と喧嘩をして飛び出してしまったらしい。

いずれ帰ってくるかと踏んでいた両親だが、夕方になっても帰って来ない。心配になり里中を探し回ったが見つからないので、危険地域での搜索を私に頼んできた。

時間は刻一刻と過ぎ去っている。里の外に出ていたら妖怪に襲わ

れてしまっだろう。

「くそっ、どこにいるんだ……」

焦りが私の心を覆い始める。

「もしすでに妖怪に襲われていたら……」

そんなことが頭を過る^{よき}が、それを振り払うようにまた探し始める。大丈夫……あの子は寺子屋でも頭が良くて評判の子だ。もしかしたら、もう里に戻っているかもしれない。

そんなとき、頭上から妖怪が近づいてくる気配がした。妖力はそれほどでも無いようだが、如何せんタイミングが悪い。相手をしている時間さえ惜しい今、手加減など出来るはずもない。

そう思い、やられる前に倒してしまおうとスペルカードを構える。

「こんなときにつ……!!」

そう思っ上を見上げると、三本の尻尾を生やした少女が探し人を抱えて下りてきた。

Side 白

「この子を保護したのですが……」

そう言って近づくと、睨むようにスペルカードを構えてきた。え、刺激しては不味いと思って妖力も抑えていたのに……何故？

「え、あの……？」

予想外の出来事に混乱していると、腕の中にいる少女が慧音さんとやらの話しかける。

「慧音先生、このお姉ちゃんは私を助けてくれたいい妖怪だよ！」

「……本当か？」

「この場でこんな嘘を吐いて、一体私に何の特があると思います？」

「……そうだな。すまなかった、礼を言う」

「いえ、とんでもない」

打って変ってきちんとお礼を言うてくるあたり、真面目な人なのだろう。

そんなことを思いながら少女を手渡す。……そういえば、名前も聞いてなかったっけ。まあ、どうせこれきりだろうから聞く必要なんてないけど。

「では私はこれで……」

「待ってくれ。きちんとお礼をしたいのだが……里まで一緒に来てくれないか？」

「お構いなく。ただの気紛れからの行動ですから」

そう、私はいつもこんなことをするわけではない。人を襲いもするし、助けもしない傍観者でいることもある。

「だいたい人里は妖怪が簡単に立ち入って良い場所ではないでしょ

う？」

「私と一緒になら何も問題はないさ。それに、偶に妖怪が買物に来ることもある」

一向に帰してくれそうにないんですけど、この人。私の何が琴線に触れたんですか？

「それに、少し聞きたいことがあるんだ」

「私に、ですか？」

「ああ。だから里に来てくれると助かるんだが……」

聞きたいこと、ねえ。何か面倒くさそうな臭いがするので正直行きたくない。

でも、人間の子の目が……「来て！」って言ってるんだよね。何故ここまで懐かれた。

「……分かりました」

「ありがとう。助かるよ」

また面倒なことに……と思いついた深い溜め息は、二人には気付かれず消えていった。そんな重い足取りのまま、その二人のあとを歩いて行くのだった。

……………帰ってきたら、絶対雛さんに厄を受け取ってもらおう。

獣人と遭遇（後書き）

慧音の口調が掴めないですorz

これ中性的というか男口調っぽいですね……精進します。

番外編？紫との関係（前書き）

注意！

この先は作者が暴走した結果ひどいことになっています。
具体的にいえば恋愛的描写が割とたっぷりです。

あ、年齢制限はたぶん平気です。キスだけなので（殴

なので、そういうのが苦手な方は今すぐバックしてください。

大丈夫な方にもう一度言いますがこの作品は、

恋愛要素アリ・グダグダ・無駄に長い・ゆかりんの独壇場

となっております。

それすらも許せるという心が広い御方のみお読みください！

番外編？紫との関係

「…紫さん、何しに来たんですか？しょうもない用だったら帰ってください」

「ひどいわねえ。せつかく会いに来てあげたというのに」

「頼んでません。それに今何時だと思っっているんですか」

「丑三ツ時くらいかしら」

目下機嫌下降中の私です。理由？睡眠を妨害されたら誰でも不機嫌になるでしょう。

夜は妖の時間なんて誰が決めた。私は基本昼行性だぞ。

そして今までスルーしていましたが、どうしてあなたは私に跨っているのですか。

寝起きの頭では処理しきれないのですが。

「速やかに私に上から退いてそのまま帰ってください。私は眠いんです」

「妖怪でもあるんだから偶には夜に活動したらどう？」

それを聞いて私は妖力を完全に消す すなわち人間の姿になった。うん、これで霊力しか持っていない。どこからどうみても人間だ。

「今は人間です。もう良い子は寝ている時間なのでお休みなさい」

そういつて半ば無理やり紫さんをどかし、布団を頭までかぶる。目を瞑って完全に寝る体制になると、紫さんが動く気配がした。ようやく帰ってくれるか…これで寝られる。

そんな私の考えが甘かったことをすぐに知ることになったが。

「……何、しているんですか？」

「添い寝」

「出てっつて下さい」

もう年上とか最強の妖怪だとか関係ない。

私は側に誰かがいると眠れないのだ。野生の草食動物と同じように万が一の危険に備えて浅い眠りにしかついていないからだけど。だから、絶対に両親や信頼している人以外の前で眠ったことはない。

「いいじゃない。偶には人肌が恋しくなるでしょう？」

「なりません。なっただとしても貴女には頼みません」

私はそんなに幼く見えるか。

確かに何百、何千年と生きている紫さんからすればそうだろうけどさ……。

「別に人肌が恋しくなるのは子供だからじゃないわよ。大人…私でも偶になるもの」

「……意外としか言いようがないです」

「ひどいわね。あなた私のことどういふふうに見てるのよ」

自分の十分の一どころか百分の一も生きていないであろう半獣を式にしようと思いかけまわしたり、誰かれ構わず弄ったりする傍迷惑な妖怪。

とはさすがに言えないので、代替案を考える。

「…傍若無人な妖怪？」

「今すぐ式にするわよ」

「ごめんなさい」

これ以外思い浮かばなかったんです。

「そんなことより早く帰ってくださいよ…。寝れないじゃないですか」

「あら、あなた側に人がいると眠れないタイプ？」

「そうですよ」

私が頷くとなぜかニヤニヤしだした紫さん。嫌な予感しかしないのは経験からか。

もうやだこの人…藍さん助けて。

「じゃあ仕方がないわね。今夜はずっと起きてなさい」

「なんでそうなるんですか!？」

「私に帰る気が無いからよ。寝顔を見に来ただけどスキマ開いたらすぐ起きちゃったし…。もう今日は帰らないわ」

「だから何で!？」

意味がわからない!というかわざわざ寝顔見に来ただけですか!？そんなに暇なら、少しは藍さん手伝ってあげてくださいよ。

この前も結界のこと丸投げしてたでしょう。少し泣きが入ってましたよ、藍さん。

「だって最近構ってくれないじゃない？私の気配がするとすぐに隠れちゃうし」

それは貴女の行動が原因です。というか何で私があなを構わなければならぬのですか。

「藍とばっかり話してるし」

そりゃ妖獣の先輩ですから。師事しますよ。

「だから今は私のモノよ」

モノじゃねえよ。

つと、口調が……深呼吸深呼吸。うん、落ち着いた。

「だから意味がわかりませんって。…はあ」

溜め息をつきながら布団から出る。もう今日は寝れそうにないし。その行動が予想外だったのか目を丸くさせている紫さん。ちよっとレアだ。

「あら、どうしたの？」

「帰る気はないんでしょう？ だったらこうしても仕方がないじゃないですか」

「…別に私は構わないけれど？」

妖しい笑みを浮かべながらそういう紫さん。唇を舐める仕草が色っぽい。

男にやったらその人一発で落ちるんじゃないだろうか。

「私が構うのでやめましょう」

「つれないわね。可愛がってあげるのに」

私と二人きりになるといつもこんなことをいつてくるんだよね…。表情が冗談なんだかそうじゃないんだかよくわからないから余計性質が悪い。

なので一応、身を守るように後ずさりする…が、

「え？」

見事に私は上半身を起こしている紫さんに抱き締められました。ちよっ…何が起きた！？スキマですか！？

「まあ、それはもう少し白が大きくなってからにしましょうか。今はこれだけ、ね」

笑いながらそう言って、私の口に自分の唇を重ねる紫さ…えええ！？慌てて離れようとするが如何せん妖怪と人間。太刀打ちできない。もうどうしていいのかわからずにいると、ゆっくりと唇は離れていった。

目に映る紫さんの濡れた唇が、いやに艶めかしくて顔をそむける。

「まったく。こういうときは相手に身を任せて目を閉じるものよ？」

知りませんよ！と叫びたいところだが、今の衝撃が強すぎて何も言えない。

うわああ…恥ずかしい。穴があつたら入って二度と出てきたくない。

「ふふ、初心ねえ。たったこれだけでそんなに顔を赤くしちゃって」
「っっ！！！／／／」

もういやだあっ！！この先ずつとこれで弄られるなんて羞恥心で軽く死ねるよ！

「白、こっちを向いて？」

「……」

そう呼びかけられるが、赤くなった顔を見られたくないので無視をする。

するとそれが気に入らなかったのか、顎を掴まれて無理やり顔を上げさせられた。

目が合うとにつこりとほほ笑み、優しく頭を撫でられる。その笑顔が綺麗で、一瞬息をするのも忘れてしまう。

「っ…！」

「白、あなたがどう思っているか知らないけど…」

そこで言葉を区切り、またキスをされる。今度は額に。それでも私の顔を赤くするには十分だ。

「私は冗談でこんなことしないわよ？」

「…え？」

心底意外な声が出てしまったのは仕方がない。だって紫さんみたいな大妖怪が私なんか相手にするわけがない。しかし目の前の紫さんの顔は私でもわかるくらいに真剣な表情をしている。

いつもの、大人びた余裕そうな感じは見受けられない。

「っ、つつつまり…それは」

「白が大好きってことね」

「し、式としての器のことですよね!？」

「私は貴女のすべてを愛しているからそれも含まれるわね」

真顔でそんなこと言わないでください!!!

「い、いやいや紫さんは私を買い被りすぎです！母さんの子ということであつと興味を持ってそれを勘違いしているんですよ！」
「確かに最初はいいつの子供だから興味を持ったけど、今は違う。私はほかでもない、白、を気に入ったの。人間だとか妖怪だとかも関係ないわ」

またしても真顔で言われる。うう…ここまで言われると照れを通り越すよ…。

けど、いきなりこんなことを言われても私はどうもできない。なんといつか…紫さんだけじゃなく、誰かをそういう目で見たことが無いから。

そんな私の心情を読み取ったのか、紫さんが声をかけてくる。

「別に今すぐどうこうして欲しいわけじゃないのよ。さっきも言ったでしょう？もう少し大きくなってからでいいって」

「…でも、」

こういうことをそのままにしておくのは気持ち悪い。

かといって紫さんの望むような答えを出せるわけでもない。言うべき言葉が見つからず、結局私は口を閉ざす。

「生真面目ねえ。すぐに結論を出さないと気が済まないの？」

クスクス笑いながら私の頬を撫でる紫さん。

その優しい手つきは母さんを彷彿とさせる。

「時間が解決してくれることもたくさんあるんだから、そんなに急がなくてもいいのよ。でもそうね…」

そう言うとなぜか私の頭を膝の上に乗せる。いわゆる膝枕だ。そのまま布団を私の上に向け、髪を梳くように撫でる。

「…?」

「何かしてくれるっていうのなら、このまま寝なさい」

「いやいやこの態勢…」

「いいから。眠いんでしょ?」

それはさっきのことで…と思ったが体は正直なのかすぐにまた眠くなってくる。

さっきも言った通り誰かの前で寝るなんてこと今の私にはあり得ないはずなのに…。

それでも、久しぶりに寝るときに感じる温もりに安心している自分がある。

あ、もう駄目だ……寝ちゃう。

瞼を閉じる瞬間に見た紫さんは、今までで一番優しく綺麗な顔だった。

番外編？紫との関係（後書き）

はい、言いたいことは分かっております。
だから石を投げないで…いたっ、いたい！

ももも申し訳ありません！

テストの鬱憤とゆかりんへの愛が暴走し…ごめんなさい！

ですが、書いているときは楽しかった（殴
本当にすみません自重します。

番外編はいつもこんな感じにしようかなあ。

誰かと白の恋愛模様の…。あくまでifなので本編とは関係ない
感じで…。

などと考えている作者でしたー。

…あ、批判はオブラートに包んでくださると嬉しいです。
あまりメンタル強くないので…お願いします。

永遠を生きし竹林少女

「ここが私の家だ」

「……お邪魔します」

少女を両親の所へ送り届け、慧音さんの家に来た。見た目が妖怪な私が訪ねても迫害されるようなことは無かった。無論、慧音さんが隣に居たからだろうが。

あの一家ではお礼を言われ、適当に二、三言交わしてすぐに立ち去った。幸せそうな家族を、あまり見ていたくは無かった。娘が見つけた時の両親の安堵と喜びに満ちた表情、両親を見て再び泣き出した少女。

私も嘗ては持つていたものだ。あの温かな『家族』を。

目尻に浮かんだ涙を罪悪感と共に拭い去り、すぐに歩き出した。

慧音さんはその行動に何も言わなかった。家族の邪魔をしない空気を讀んだ妖怪と思われたのか、愛情が理解出来ない低俗な妖怪と思われたからなのかは判断のしようがない。

そんなことがあったが、少し歩けば冷静になるもので、道中で自己紹介などをした。慧音さんは考え事をしていたようなので気にしていなかったが、その後は沈黙が続いて居心地が悪かった。

おそらくその考え事は私のことについてだろうが、一体何なのだろう。……ま、考えても仕方がない。どうせすぐに分かることだ。

「あの奥の部屋に入って待っていてくれ。お茶を煎れてくる」

「分かりました」

やや緊張気味にそう返し、指示された通りの部屋に入る。するとそこには、

「あ、お帰り慧……あれ？」

先客がいた。長い白髪で赤眼の……少女、いや女性？

何というか、見た目は若いんだけど中身は違う、みたいな雰囲気の人だ。妖怪に多い特徴だが、この人からは妖力を感じない。隠している可能性も捨て切れないが。

そうこう考えてる間に、訝しげにこちらを見ていたその人。どうやら怪しまれているらしい。

まあ、人間だろうと妖怪だろうと慧音さんの知り合いにはかわりないし、きちんと説明しておこう。

「……はじめまして？」

「お前は誰だ？ 慧音は？」

超絶無視された。かなり敵意を剥き出しにしているようだ。

「白と申します。先ほど慧音さんにここで待っているように言われました。ご本人は現在お茶を煎れている最中です」

「慧音に？ なんで？」

「私にもわかりません。訊きたいことがあると半ば無理矢理……」

「ふうん……。まあ敵意は無いみたいだし、いいか。私は藤原妹紅、妹紅でいいよ。慧音の友人だ」

お互い軽い自己紹介を済ませ、私がここにいる経緯を話したところで慧音さんが入ってきた。

「すまない、待たせた。……妹紅、来てたのか」

「うん。お邪魔してるよ、慧音」

「構わないが……ああ、白。立っていないでそこに座ってくれ。妹紅なんか気にしなくていいから」

「あ、はい……」

「なんか、ねえ。仲が良いからこそその軽口なんだろうなあ。」

けれど、少し考えたい。その仲のいい二人に挟まれて、まったくの初対面の私。この時点で帰りたくなるのは当たり前ではないのだろうか。

「それで……訊きたいこととはなんですか？」

「ああ、大したことではないんだが……」

「じゃあ訊かないで帰して欲しい。」

「単刀直入に言うが、君の歴史が見えないんだ」
「……………」

意味がわかりません。歴史って何ですか。

「慧音、さすがにそれじゃあ通じないって」

「……そうだな。私は歴史　噛み砕けば過去のことを知ることができるのだが……」

あ、何が言いたいのか読めた。

「私は自分に直接働きかける能力を無効化できるんです」

慧音さんの言葉を遮って言う。何でこう厄介な人たちに絡まれるんだ私……。

溜め息をつき、驚いている二人を無視してお茶を飲む。熱い、舌火傷しそう。

「直接働きかける能力とは？」

「慧音さんのような能力や、心を読む、果ては運命も見えないし操れないらしいです」

「へえ、そんな能力が……」

呟く妹紅さんに、驚いている慧音さん。

能力の説明とか面倒なんだよなあ……。私自身、何を無効化できるかよくわからないし。

もう帰っていいかな、とそわそわしていると納得したように慧音さんが呟く。

「なるほど……こんなことでわざわざ済まなかった」

「いえ。とんでもない」

本当に申し訳なさそうな顔をする慧音さん。そんな顔をされたらこう言うしかないじゃないか。

「お詫びに……そうだな、夕食でも食べていかないか？」

なぜそこに辿り着いたんですか。

「別にそんなお気遣いは必要ないですよ？ そんなに時間もかからなかったですし」

実際、一瞬と形容していくらいしか話していないし。

「しかし……」

そう言っても引こうとしない。頑固なのか律儀なのか判断に迷うところだ。

「いえ、やはり私は帰りたい……そんなに食事を摂る必要もないので遠慮しておきます」

危ない。本音が出そうになった。

「かといって食べれないわけでもないんだろう？　今回のお礼とお詫びだ。遠慮しないでくれ」

「そうそう。慧音の料理は意外と美味しいからさ。食べてったほうがいいよ」

「意外とは何だ、意外とは」

何これ夫婦の会話？　もはや熟年夫婦の貫禄さえありそうな……。

結局、この後押し切られて夕食をご馳走になった。私はどうやら押しに弱いということがよく分かった日だった。

竹林の囃

慧音さんの家で夕食をご馳走になった後、私は妖怪の山とは反対の場所を散歩していた。

滅多にこない……というか初めてきた場所だから、テンションが上がっていたのは否定しない。否定はしないけど……。

「……どこだここ」

まさか迷うとは。

竹がたくさんあるなー、とか思いながら適当に歩いていたらこうなってしまった。参ったなあ……右を見ても左を見ても竹しかない。

「……まあいいか。ここまで来たら適当に行き続けよう」

最悪、空飛んで帰れば平気だろうし。そう思い、再び適当に歩き始めることにした。

（三十分後）

未だに出られる兆候はない。もう飛んで帰ろうかな……。

そう思ったとき、ふと竹藪の中に建物を見つけた。建物というより……屋敷？

それに少し興味を持って（いつもならあり得ないので、やはりテンションが高かったらしい）それに近づくと、

ズボツ

「うわっ」

落とし穴があった。落ちる前に浮いたので嵌^{はま}ってはいないけど。

「なんでこんなものが……ん？」

足下の穴を見ると結構深い。人間だったら怪我するんじゃないだろうか。

そのまま目線を前にずらすと、紐が目立たないように張られている。これで転べというのだろうか。まあ、落とし穴に落ちた後のこれなら引っ掛かるかもしれない。

注意して周りをよく見渡すと、似たような仕掛けがそこそこ数あった。落とし穴も他にいくつがあるに違いない。

「……………」

それを無視して浮かびながら進むと、ガサガサと音が聞こえてきた。見つからないよう気配を消し、竹藪の中に身を潜める。

そうしてから音の方向に目を向ける。そこにいたのは……兎耳の少女？

「さてさて、落とし穴に嵌った奴は誰かな？ 最近じゃ誰も引っつかんなくなってきたからなあ」

すみません、落ちてないです。

私に気付かず、落とし穴に近づいていく少女。……少女、と言っ

ても妖怪のようなので、実際が幾つだかわからないが。

「どれどれ……っっていない!？」

そのまま騒ぎ始めた少女を見ていたら、なぜか罪悪感に駆られてきた。

落ちといたほうがよかったのかなあ……とても落ち込んでるし。

「……あの」

「え？ あんた誰？ 診察ならあそこでやってるよ」

「いや……その落とし穴に」

「嵌った奴!？」

「落ちそうになりましたが、空中に浮いて難を逃れた者です」

そう言つと再び落ち込んだその人。むしろ私、今上げて落とすという最悪なことした？

「これ作るの大変だったのに……」

ですよね。暗くてよく分からないけど深そうですもんね。

「というかよくここにこれたね。落とし穴に落ちそうになったってことは歩いてたつてことでしょ？」

「適当に歩いていたら辿り着いたんです」

「へえ、あんた面白いやつだね。私は因幡てぬ。妖怪兎だよ」

「白といます。半人半獣です」

ふーん、と声を上げてゐさん。しかしその視線は私ではなく私の背後に向けられている。どうやら誰かいるかどうかを気にしているようだ。

そんなことを呑気に考えていると、突如として上がった大声に驚いて尻餅をついてしまった。

「てめ〜！ 大人しく出てきなさい！！」

「げっ、鈴仙……もうバレちゃったか」

「びっくり吃驚した……」

現れたのはこれまた兎耳をもつ少女。てめさんと耳の形は違うので、種族が違うのかもしれない。

立ち上がり、服についた土を払いながらそう思う。でも、同じ妖怪兎でそんなに違いがあるものなのかなあ。

「やっと見つけた。本っ当に逃げ足だけは速いんだから……」

「え〜、ちよつと薬品棚弄っただけじゃん。そんな怒ることもないでしょ？」

「あるわよ！ 薬を間違えたら私がお師匠様に怒られるじゃないの！」

傍から見ても反省の色が全く見られないてめさん。元来こういう性格なのか。

怒鳴って落ち着いたのか、後から来たほうのウサ耳少女は私の存在に漸く気付いたようだ。他人の気配に気付かないほど怒ってる人なんて初めて見た。でもそういう人の攻撃って、単調になってるから御し易いんだよね。

「あ、えつと……診察希望？」

「違います。ただの散歩です」

「散歩でここに来るのって普通じゃないんだけど……」

そんなこと言われても着いちゃったものは仕様がなない。

今の二人の言葉から察するに、この屋敷は治療施設みたいなもの
のようだ。そう言えば夜が明けなかった時、文さんがこの辺がどう
とか騒いでた気が……。

「ねえねえ白、今時間ある？」

「ありますけど……何ですか、てゐさん」

「ん、ちよつと興味わいたからお師匠様とか姫様にも紹介しとこ
うかなあって」

お師匠様と姫様？ 身内ネタはやめてください。

「てゐ！ それより隠した薬品を返しなさい！」

「あとで返すよ。白、鈴仙なんてほつといて早く行くこつ？」

「なんで尻尾を引っ張るんですか！？」

「ちよつ、待ちなさい！」

くそう……、最近尻尾触られてないから油断してた。

ジタバタと暴れながら私はその建物 永遠亭に入って行くのだ
った。

永遠の館にて

「お師匠様たちを呼んでくるから、ここで待ってて」

そう言い、駆け出していったてゐさん。元気な方だ。流石、あれだけのトラップを竹林中に仕掛けるだけのことはある。

立って待つのも嫌なので、通された部屋の椅子に座る。すると、溜め息をつきながら鈴仙さんも私の近くに座った。

「まったく……てゐは」

「……大変ですね」

この人は苦労人のようだ。

その気持ちは何となくわかる私としては声をかけずにいられたかった。山では私も色々大変なんだよ……。

「本当よ。ああ、白って言ったっけ？ 私は鈴仙・優曇華院・イナバ」

「……どちらで呼べばよろしいでしょうか？」

「好きなように呼んでいいわよ」

「じゃあ……鈴仙さんで」

そう言えばさっきから鈴仙さんは私の目を見て話さない。嫌われているのかと思ったが、てゐさんとも目を合わせていなかったような気がする。

どこか余所余所よそよそしい態度なので人見知りをするのだろうか、なぜてゐさんとも目を合わせないのだろうか。二人共ここで暮らしているようなのに。

「ここは治療施設なんですか？」

「それも知らなかったの？」

「お恥ずかしながら、知り合いから引き籠もりと呼ばれています。だから世間一般のことに疎いんですよ」

そんな他愛もない話をしていたら、てゐさんが二人ほど人を連れて戻ってきた。何となく恰好でどっちが『お師匠様』か『姫様』かが分かる気がする。

「てゐ、この子がその半獣？」

「そうですよ、お師匠様」

「ふうん……」

「珍しいわね」

おそらくお師匠様なる方に値踏みをするような目で見られ、姫様なる方には好奇心の目で見られる。別にどんな目で見られようと構わないけれど、無言になるのはやめてほしい。なぜかだんだんと居た堪れなくなってくるから。

そんな私の視線に気付いたのか、二人が自己紹介をしてくれてきた。

「私は八意永琳。ここで薬師をしているわ。それでこちらが……」

「蓬莱山輝夜よ。ま、よろしく」

姫様って意外と気さくだ。そして薬師さん、貴方に近づかないようにと第六感が告げてくるのは何故なのでしょう。

「よろしくお願ひします。……ところでてゐさん」

「ん？ 何？」

「なぜ私を紹介したんですか？ それと耳を弄るのやめてください」

「別に理由はないよ。面白そうな奴だなあって思っただけ」

後ろの言葉は見事にスルーするされた。せめて尻尾にしてほしい。

「まあ、折角来たんだしお茶くらい飲んでいかない？　ここに患者以外が来るなんて滅多にないから歓迎するわよ」

だったら尻尾を触るのをやめて下さい輝夜さん。耳より尻尾が良
いっただけで、尻尾を触って欲しい訳ではないんです。

「姫、てゐ、ほどほどにね。ウドンゲ、お茶を煎れてくれないかしら？」

止めてよ永琳さん。笑ってないでさ。

「分かりました、師匠」

あなたもです鈴仙さん。比較的常識人だと思っていたのに。

性格やら何やらが色々裏切られた永遠亭で、暫しの間私は愛玩動物として扱われた。

狂気の瞳

「白って何の妖獣なの？」

鈴仙さんが持つてきてくれたお茶を飲んでいたら、輝夜さんにそ
う尋ねられた。

……うん、まあ白いからね。分かり難いですよね。

「狼……二ホンオオカミです」

「狼？ 毛の色って白だっけ？」

「突然変異的な感じですね。母は普通の色でしたし」

「ふーん。でもこれ触り心地いいわねえ」

そう言って再び私の尻尾を撫で始める。いつもながら私の尻尾は
初めて会った人にも大人気だ。

でも、私の尻尾もさる物ながらここには兎がたくさんいる。もふ
もふには事足りているはずなのになあ……。

どうしてだろう、と思いながら視線をずらすと、鈴仙さんと目が
合った。しかしその瞬間、「しまった！」という顔をされ、すぐに
視線を逸らされてしまった。軽く傷つく。私とは目も合わせたくな
いということか……。

そう思ってちょっと落ち込んでいたら、鈴仙さんの焦った声が聞
こえてきた。

「……え？ ちょ、ちょっとあなた、大丈夫なの！？」

「何がですか？」

「い、いや今私と目が合ったでしょ！？」

「合いましたね」

「なんで平気なのよ！」

「すみません、誰か分かりやすく説明をしてください」

しかし気付けばみんな驚いた顔をしている。軽く疎外感を味わった。

「……本当にウドンゲの目を見ても平気なのかしら。もう一度目を合わせてくれない？」

「え、はい」

とはいうものの第三者にジロジロ見られながら誰かと目を合わせるのって……恥ずかしい。

それは鈴仙さんも同じようで顔が真っ赤になっているが、それでもなんとか目を合わせた。でも何も起こらない。ただ羞恥心を弄そとめばそれだけか。

「どうやら本当のようね。なぜかしら」

「すみません、説明を」

「簡単なことよ。ウドンゲの目を見た者は狂気に墮ちるの」

「へえ。能力ですか？」

「そうよ」

それじゃあ効かないよね。でも目を合わせられないっていうのも辛いよなあ……。さっきの『目を合わせる』という行為自体に慣れていなかったからあんなに赤くなったんだろう。

まあつまり、目を合わせてくれなかったのは嫌われているからではなかったということだ。よかった。

少し上機嫌になり、私は本日二度目の説明をする。説明し終わった後の驚いた顔にも、もう慣れたものだ。

「なるほど……ウドンゲの能力すら無効にできるのね」

「何が無効にできて何ができないのかは私も把握しきれていませんけどね。最近になって漸くいろいろな方たちと知り合ったもので」

「ふーん、白も姫様と同じように引き籠りだったんだ」

「ちよつとてゐ、引き籠りとか言わないでくれるかしら？」

「基本動物ってテリトリーから出ないものですけど……」

輝夜さんと二人でてゐさんに抗議をする。ただ私の場合は面倒だから出なかつたという理由が大半を占めているので、声が小さい。

輝夜さんは永琳に閉じ込められてたのよ、と大声で叫んでいる。誤解を招きますよ、その台詞。

「そう言えば、白つてどこに住んでるの？」

まだうつすら頬に赤みがさしている鈴仙さんに問われる。そんなに恥ずかしかつたんですか？

「妖怪の山です」

「へえ……こことはまるつきり逆方向じゃない」

「だからフラフラと歩いていたんですよ。物珍しくて」

そしたら迷つてここに辿り着いたのだ。聞けばここは迷いの竹林と呼ばれていて、深い霧と成長の早い竹で普通の人だったら此処には来れないらしい。

だったら人間はどうやって来るんだと思つたら、妹紅さんが案内をしているとの事。そして妹紅さんと輝夜さんは天敵だとか。さつき会つたことを言つたら怒られた。理不尽にも程がある。

そんなことをしばらく話していたら、もうけっこうな時間になっていた。そろそろ帰らないと迷惑だろうと思い、帰る旨を伝える。

「別に遠慮しなくていいのに。泊まっていてもいいのよ？」

「いえ、少し用事もあるので」

「そう、それは残念ね」

用事といっても雛さんに厄を被ってもらおうと思ったただけだね。夜中だけ。

わざわざ外にまで見送りに来てくれた皆さんにお礼を言い、私は山への帰路についた。もう竹林は歩きたくないので、もちろん空を飛んで。

……そういえば帰り際に鈴仙さんとまた目が合った時、また顔が真っ赤になってたけど何でだろう？

しかも他の三人はそれを見て憮然としてたし……永琳さんの笑顔が怖かった気がするし……。

頭を捻りながら飛んでいたら、竹林を出る直前に鈴仙さんの悲鳴が聞こえた気がした。

紅い館

夜中に行動するのは私にとっては珍しい。なぜなら私が昼に行動して夜に眠るといふ人間的なサイクルを送っているからだ。

しかし、偶に妖怪の血が騒ぐのか何なのか、夜に行動することもある。

今はその珍しい時で、私は夜の散歩を楽しんでいる。空を飛んで月を見上げたり、木の上で休んだり、高速で飛んでみたり……そんな平和な夜。

小一時間経った頃、高揚した気分も落ち着いたのでゆっくりと飛行する。その途中で手ごろな木を見つけたので、その上に座って少し休むことにした。

うーん、どうしようかな。この後も飛んで回ろうかなあ……。

「すすすみません、咲夜さん！　だ、だからナイフは勘弁し……いたあ……！」

「サボりを許すと思っているの？　美鈴」

うん、そろそろ落ち着いてきたからやっぱり帰ったほうがいいよね。そう言えば読みかけの本もあったはず。眠れないならそれで時間を潰せばいいんだ。

……決して、決してナイフを持ったメイドさんが怖いとかじゃないんだよ？　さあ、そうと決まれば迅速に行動しなければ

ヒュッ（ナイフが飛んできた音）

ガッ（私の頬をかすって木に刺さった音）

ダラダラ（私の冷や汗が止まらない音）

「逃げられると思っっているのかしら？」

「……………」

再びナイフを構えるメイド　確か十六夜咲夜さん　はにっこり笑っている。

その笑顔を見て引き攣った表情を浮かべた瞬間、私は木の上から大きな紅いお屋敷の前にいた。これこそ能力の無駄遣いだ。

「久しぶりね、半獣さん？」

「あ、あはは……お久しぶり、です」

「咲夜さん、この子は……？」

「以前お嬢様が仰っていた子よ」

「ああ……運命が視えないっていう」

「そう。あの時逃げられたから、お嬢様の機嫌がとても悪くなったのよ？」

そんなこと言われても、元々苦手な種族なのだから仕方がない。それに、ペットになれと言われて逃げ出すのは普通だと思う。こちらら自我も自尊心もあるんだから。

「それはすみませんでした。それではよろしくお伝えくd」

「だから、逃がすと思っっているの？　あの時は霊夢やスキマ妖怪にも邪魔されたけど、今回は逃がさないわよ」

「さ、咲夜さん、さすがにちょっとやりすぎでは……………」

いつの間にやら背後に回り込まれ、動きを完璧に封じ込まれた私を見ていう女性。そう言えば、今更ながらこの人……誰だろう？

妖怪なのは分かるけど。

この妖怪さんに言われたからなのか、渋々私を解放する咲夜さん。しかしその手には私の尻尾がしっかりと握られており、逃がす気は微塵もないようだ。

「だ、大丈夫？」

「……平気です。尻尾をぞんざいに扱われるのには慣れてますから」「そ、そう。あ、私は紅美鈴よ。ここの門番兼花壇の管理をしているわ。よろしくね」

「私は白と言います。よろしくお願いします、美鈴さん」

何この人すごい優しい。涙が出そう。

「さあ、そろそろお嬢様の所に行きましょうか」

「……どうしてもですか？」

「ええ、どうしてもよ」

嫌だなあ。吸血鬼って狼を下に見るって母さんが言ってたし……。かといって時を操る人間から逃げ切れる訳がないし……。

結局、尻尾を掴まれながらズルズルとこの紅い館　　紅魔館に引っ張られていくしか道はないのだった。

ちなみに引きずられている時、美鈴さんが頑張つてと声をかけてくれた。その優しさに全私が涙した。

吸血鬼姉妹

紅魔館は中まで紅い。なんだか目が痛くなってきた……頑張れ私の錐体細胞。

未だ尻尾を掴んで離さない咲夜さんは気にも留めていないようだけど……。慣れか、慣れなのか。

そんな彼女に連れられて、着々とレミリアさんのもとに向かって行く。向かう、けど……遠くない？ 見た目的にこんなに広がったっけ？ あ、もしかして。

「咲夜さんは、時間のほかに空間も操れたりするんですか？」

「そうよ。ここも私の能力で広くしているの」

すごく便利な能力だ。

「なるほど。……ところでそろそろ尻尾を離してくれませんか？」

そこまで強く握られているわけではないので痛くはない。が、時折撫でられるのがとても嬉しかったのだ。

「この触り心地、癖になりそうだわ」

「ひゃああっ!？」

ここで少し注射しておく、動物の尻尾には普通骨がある。骨があるということは筋肉もあり、神経もある。そのため付け根には神経が集中していて、とても敏感だ。

私の場合、尻尾の付け根を撫でられたり握られたりしたら力が抜ける。妖獣全てにこれが当てはまるのかは知らないけれど、基本的

は敏感だと思う。

そして今、私は咲夜さんに尻尾の付け根を触られた。
結果、思わず床にへたり込んでしまったし、変な声が出てしまっ
た。どうしよう、すごく恥ずかしくて顔を上げられない。

「……………うう」

「……………だ、大丈夫かしら？」

もう無理です。精神が特に無理です。ああもう、すごく顔が熱い
……………！

「ごめんなさい、不躰だったわね」

慌てた様子で私に言う。顔を覗きこまれるのを感じ、そっと伏せ
た顔をあげて咲夜さんを見る。

うう、絶対今顔真っ赤だよ……………心なしか目尻も熱いし……………。

「っ、付け根付近は……………敏感なんです……………」

「っ！」「ごめんなさい。けどちょっとこっちを見ないでもらえ
るかしら……………」

あれ、何で咲夜さんが顔赤くして顔背けたの？　なんか鼻押さえ
てるし……………。

「さ、咲夜さん？　そちらこそ大丈夫ですか？」

「だっ、大丈夫よ？　それより身支度を整えて。もうすぐお嬢様
のお部屋に着くわ」

そう言い立ち上がり、早足でその部屋へと向かう咲夜さん。私も

目元を拭い、二、三度深呼吸をしてからそのあとを追う。

……今のは脳内削除しておこう。

「お嬢様、失礼致します」

本当にすぐに着いた部屋に入る。入った先には当然ながらレミリアさんがいた。優雅に椅子に座って紅茶を飲んでいる。

「久しぶりね、白」

「……お久しぶりです」

「あら、そんなに邪険にしなくてもいいじゃない。とって喰いはしないわよ」

「……」

楽しそうにクスクス笑い、私に座るように促す。いつの間にか昨夜さんが紅茶を用意してくれていたようだ。最早もはや便利を通り越している能力だ。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

駄目だ動揺するな私。さっきの事は忘れるんだ。

心を落ち着ける為、出された紅茶を飲む。レミリアさんがニヤニ

ヤしているのが気になるが、今は心を落ち着けることが最優先だ。
あ、この紅茶かなり美味し

「さっきの叫び声は可愛かったわよ」
「ごほっ!？」

咽^{むせ}た。ついでに火傷もした。

「げほっ……ちょ、聞いてたんですか!？」
「ええ。付け根、弱いよね」

最悪だ! 吸血鬼に弱点知られた!

「ふふ……私も触ろうかしら」

それを聞いた瞬間扉まで逃げた私は悪くない。そしてその扉が開いてしまい、入ってきた誰かとぶつかっても仕方がない。

ぶつかったというよりは、尻尾にダイブさせてしまった、が正しいけど。

「す、すみません。大丈夫ですか？」
「……誰? 人間?」

何とも突飛な質問をしてきたのは金髪の少女。背中に生えた七色に光る翼が特徴的だ。

「フラン!? どうしてここに……」
「パチュリーが誰か来たって言うから見に来たの。この人?」

驚いたように声を荒げるレミリアさん。しかしそれを気にも止め

ず私を指さすその人。すごい。

「ええと、お怪我はありませんか？」

「うん？ 全然痛くなかったから平気だよ。それよりあなたは誰？」

「白といます。ちなみに半獣です」

「私はフランドールよ」

そう言っただけで笑う姿は容姿と相まってとても可愛い。思わずここに来てから初めて笑みを漏らしたくらいに可愛い。

……いや咲夜さんもレミリアさんも可愛いんだけど、なんと云うか雰囲気、ね。押し強い人は苦手なのだ。

「フランドールさんはレミリアさんとどういうご関係が？」

「妹よ、妹」

そう言っただけで私たちの間に入ってきたレミリアさんと咲夜さん。二人ともどことなく機嫌が悪いように見えるのは気のせいだろうか。

「半獣……？ もしかしてこの前お姉様が言っただけ？」

「そうよ」

「やっぱり！ よろしくね、白」

「こちらこそ」

さっきのので気に入ったのか、私の尻尾に抱きつくフランドールさん。さりげなく付け根は隠すが、それ以外は特に抵抗しない。最近はこのことが増えたからもう慣れてきた。

尻尾を触られて嫌がらなくなったどころか、フランドールさんを見て、「喜んでもらえてよかったなあ」と思い始める辺り、私の働

値観に何かが起きているのかもしれない。

そんなことをしていたら、なぜか先程よりも不機嫌そうな二人。な、なんですか……睨まないでください怖いから。

「……フラン？ 迷惑だろうから離れなさい？」

「えー、駄目？ 白」

「強く触らないのであれば別に……」

そう言うと再び嬉しそうにじゃれてくるフレンドールさん。それを見て眼を細めるレミアさん。更にその二人を見て複雑そうな表情をしている咲夜さん。

ふむ、全く状況が飲み込めないね。でも吸血鬼とかそんなの関係なく逃げたくなる空気だ。例えるならほら、愛憎の入り交じった複雑な関係とか。

何にせよ、姉妹喧嘩などに巻き込まれたくない。しかし、そんな夜はまだまだ続くのだった。

幻想郷に人権はない

「そういえば、さっき仰っていたパチュリーさんってどちら様ですか？」

「私の友人よ。地下の図書館にいるわ」

なぜか微妙な空気になったりもしたが、今は落ち着き全員で会話をしている。その際に、先程フランドールさんが言っていた人物について聞いてみた。

妖精メイドさんたちも合わせたら、意外とここに住んでいる人って多いよね。

「図書館まであるんですか」

「そうだよ。行く？」

そう言っつて私の手を引っ張るのはフランドールさん。なにやら尻尾のおかげでだいぶ懐かれたようだ。

「あら、行きたいのなら私が連れていってあげるわよ？」

そう言い私の空いているほうの手をとるレミリアさん。初対面の時から高圧的で良い印象はなかったりする。

うん、まさに両手に花じゃないかと？ …… 人外のとんでもない腕力で左右に引っ張られていなかったら、私も素直にそう思っていたかもしれない。

「痛いです。引きちぎれます」

「お姉様はいいよ。私が案内する」

「あら、客人をもてなすのも主の務めよ」

完璧無視だ。聞いてすらいない。

当事者を無視してだんだんと白熱していく姉妹の口喧嘩。幻想郷
つて人の話聞いてくれる方、なかなかいいよね。

そんなことを考えていても、止まる様子のない吸血鬼姉妹。そつ
と手を離しても気付く様子がないあたり、相当なものだ。

これはもう……。

「……咲夜さん、図書館まで案内して下さいませんか？」

「ごうすることが無難だと思つ。」

「ごうよ」

「大きいですねー……」

吸血鬼姉妹を置いて案内されたのは地下。二人を置いてきてよか
ったのかと今更ながらに思うが、後で咲夜さんが連れてくるこのこ
と。本当に良くできた従者さんだと思つ。

中に入ると膨大な本の数々。でも地下だから窓もないし、風通しも悪くカビ臭いのは否めない。

咲夜さんの後ろをついていくと、本が大量にのっている机を見つけた。どうやらそこに向かっていているようなので、そこにパチュリーなる方がいるのだろう。

「パチュリー様、少しよろしいですか？」

「……何か用なの？ 咲夜」

咲夜さんが私を指し示しながら今までの経緯を説明している。その説明を聞いているパチュリーさんなる方は本から視線を離さない。

と、思ったら、時たま顔をあげてこちらを見てはいるので多少なりとも興味はあるようだ。

「ふうん……誰が入ってきたのかと思ったら、レミイがぜひとも飼いたいって言ってた奴ね」

私は妖獣であって動物ではありません。

「そうです。……白、こつちに来てご挨拶なさい」

私は子供か。いや、妖怪とか魔法使いのような方たちに比べればそうだけど……。でも咲夜さんとはそんなに年違わないはずですよね！？

どこか釈然としない気持ちを抑えて2人のもとへ近づいていく。

「…突然の来訪、失礼しました。ご存じのようですが私は白と申します」

「あら、躑はきちんとなっているようね。偉いじゃない。私はパチユリー・ノーレッジよ」

そう言って頭を撫でてくるパチユリーさん。こっちでは犬扱い…。

ナイフで脅され、姉妹喧嘩に巻き込まれ、子供扱い、犬扱いと散々な目に遭うんですけどこの屋敷。苦手意識しか育たないよ。

そうは思うが、頭を撫でられるのが思いのほか気持ちいいので抵抗しない。基本みんな尻尾触るから新鮮というか……。

ち、違つよ？ 喜んでいいるからって子供でも犬でもないからね？

結局抵抗らしい抵抗はせず、しばらく撫でられていた。

この態度が私の扱いを悪化させる原因だよね……。

主人と従者の狙い

「それで？ここに何の用かしら」

撫でられるのから解放され、椅子に座って一息ついていた私に尋ねるパチュリーさん。咲夜さんはあの二人の様子を見に行っているのでここにはいない。

「……あの姉妹から逃げたいというのが一番でした」

「ここは避難所じゃないのよ」

「すみません……」

でも、あの二人に挟まれたら逃げたくなるのは当然だと思う。ただ結果的に迷惑をかけてしまったことは事実だ。反省しなくちゃなあ……。

尻尾や耳を垂らして反省の意を現していると、なぜか再びパチュリーさんに頭を撫でられ始めた。むう、気持ちい

「パチエ、邪魔するわ、よ……」

「どうかなさいましたか？ お嬢さ、ま……」

「あ、パチュリー！ ずるい！」

何でこのタイミングで三人とも来るのかなあ……。

椅子に座りながら私の頭を撫でるパチュリーさんと、それを眼を細めて受け入れている私。そしてそれを見て固まっている吸血鬼姉妹とその従者。

なんとという居心地の悪い空間だろう。

……あれ？ パチユリーさん何事もなかったかのように本読んでる？ ちよっ、この状況どうするつもりなんですか……。

「白……」

「え？」

「お手」

この空気の中、そんなことを言ってレミリアさんはいきなり右手を差し出してきた。やるわけないじゃないですか。犬じゃあるまいし。

そう思って突っぱねていると今度は反対の方向　パチユリーさんが声を発した。

「白、おかわり」

ポン

という擬音がぴったりなくらい自然に、私は自分の手をパチユリーさんにのせていた。し、しまった！　なんか日常会話のノリで言ってくるからつい……。

「ちよっと！　何でパチエにはやって私にはやらないのよ！」

「いや、今のは不可抗力で……」

「ほら、犬って飼い主の言うことしか聞かないからじゃない？」

何冷静に考察を述べてるんですか。しかもさらりと犬扱いしてる……。

「白！　私にもお手！」

「う……」

やりたくない。これ以上やれば犬扱いが今まで以上にひどくなる。だから、そんな期待に満ちた目で見ないでくださいフランドールさんっ……！

結局根負けしてしまった私は悪くない……はず、だよな？

さて、犬扱いというかなり雑な扱いを受けて

「犬と狼ってそんなに違いないわよね？」

「ありますよ咲夜さん」

なんて酷いことを言うんだ。

「例えば？」

「犬は飼い馴らすことが可能ですが狼は不可能です」

「へえ……でもここは幻想郷よ？」

その一言だけで動物の生態を破壊できるのか。恐るべし幻想郷。

「だから心置きなく番犬になれるわね」

「ならないですって」

「門番だけじゃ不安だと思っていたのよ」

「ちよっ」

悪乗りしないで下さい咲夜さん。美鈴さんきちんと仕事やってますよ……さつき寝てたけど。

「そうと決まれば首輪を買って来ないと……」

「待って！？ 咲夜さんそれは色々おかしい！」

何でそんな自然とその結論にいきつくの！？ ただの狼なら百歩譲れるかもしれないけど、自我を持っている妖獣にそんなことしないで下さい！

「いいじゃない。衣食住には困らないわよ？」

「今も困ってないです」

もともとそんなに食事とかいらないし。

「そんなことよりさっさと私にもお手をしなさい」

「いやですよ」

「レミイ、犬は群れに順位をつけるからこのままだと躰が面倒になるわよ」

「パチユリーさん。面倒なことを言うのをやめて下さい」

ツッコミ疲れた。ボケ過ぎだよ貴方たち。

もういいや、犬と狼は確かにそんなに違いなんてないよ……。先祖とか多分一緒だもんね、亜種だとか人間に馴れたのが犬だとか言われてるもんね……。

「まったく……少しお仕置が必要かしら」

「おかしいですよねその理論」

「駄犬に鞭打つのも飼い主の仕事よ」

「いつから貴女方は私の飼い主になったんですか」

もうやだこの屋敷……。こんなところずっといたら人権どころか動物扱いも剥奪されそう。

「という訳で、お仕置き」

「え、何を……ひゃあっ!？」

「あら、本当に付け根弱いよね」

「レミイ、そこは性感帯の場合もあるから程々にしてあげなさい」

分かってるならとめて下さいパチュリーさん！ 咲夜さんもフレンドールさんも見てないで助けて下さい！！

「お姉様ズルい！ 私も！」

「お、お嬢様方……」

「図書館では騒がないで頂戴」

冷静な魔法使いと狼狽えてるメイドとはしゃぐ吸血鬼×二。混沌としてるね。もうグダグダだよ此処。

というか何混ざってるんですかフレンドールさん。

咲夜さん、従者なら主人の暴走を止めて下さいお願いします……！！

結局こんな事をされていて、解放されたのは明け方近くだった。理由は吸血鬼姉妹が眠くなったから。実際そう言って二人ともさつさと寝室に戻って行った。自分勝手にも程がある。

正直『ちょっと待てやこら』みたいな心境だけどそれすら言えないほどに疲れた。今、咲夜さんに介抱されていなければ私はもうここに嫌悪感しか抱かなかつただろう。

「大丈夫かしら？」

「足に力が入らないです……」

「むしろそれで済んでよかつたじゃない。そこは性感帯でしょ？もつと最悪があつたかもしれないわよ」

本を読みつつ淡々と言葉を紡ぐパチュリーさん。最悪って何ですか、最悪って。

「今頃誰かとベッドの上で眠ってたりすることよ」

「……狼の交尾期は冬ですし、繁殖は群れの最上位のペアしかしないので私にあまり関係ないです」

「あなた群れないじゃない」

まあ、半妖仲間はいませんが。動物の群れならいますよ。

「白、もう立てる？」

「あー……はい、平気です。ありがとうございました、咲夜さん」

支えてもらいながら立ち上がり、自力でそれを維持する。若干ふ

らつてはいるけど、少しすればきちんと立てるようになるだろう。

しかしここでは散々な目に遭った。途中で動物の狼の姿になれば乗られたし、人間の姿になれば血を吸わせる（もちろん断った。とつかずぐに変身といた）。

なんて傍若無人な振る舞いなんだ。母さんがああ言ってたのも分かる気がする。

「白……」

「なんですか？ 咲夜さん」

「今日のことをよく思っていないかもしれないけど……またここに来てくれないかしら」

またここに来る？ そんなことしたら私は本当に首輪を付けられてしまうじゃないか。

「妹様の、あそこまで楽しそうな顔は中々見れないのよ」

「……？」

首をかしげる私に二人は説明をしてくれた。

なるほど……フレンドールさんは今までずっと地下にいたのか。魔理沙さんたちのおかげで多少は紅魔館を自由に動けるらしいが、ずっと館内だけでは飽きるのだという。

でも基本的に外に出ないというあたり、そんなこともないと思うけどなあ……。まあ、その辺りはフレンドールさんにしか分からないことだよな。

「お嬢様も、動ぶ……貴女なら妹様の遊び相手になってくれるんじゃないかって期待してたのよ」

「今明らかに動物つて言おうとしましたよね」

こいしさんと似たような方法で心を開かせる気か。それと今の話聞いた限りでは、弾幕ごっこ持ちかけられたら私死にますよね？私、弾幕ごっこかなり弱いですよ？

「大丈夫よ。妹様もあそこまで気に入ったのは壊さないと思うわ」
「そんなに気に入られてました？」
「ええ。もちろんお嬢様にも」

後者を聞いた瞬間、微妙な顔になったのは言うまでもない。
そんな私の表情を見なかったことにして話を続ける咲夜さん。流石瀟洒なメイドさんだ。

「だから、これからもなるべく来てほしいのよ」
「……仕方ないですね。真面目で主人思いな従者さんに免じてですよ？」
「！ ありがとう」
「ですけど、今後は危なくなったら助けて下さいね？ 主に首輪とか」
「……ええ。できる限りのことはするわ」

それを聞いて安心した私は、口元に笑みを浮かべながら図書館から出ていった。まあ、誰かの役に立てるのなら尻尾くらい差し出してもいいだろうしね。

道はだいたい覚えていたので、迷わずに玄関につく。門に出ると、気持ち良さそうに寝ている美鈴さんを見つけた。

……確かに、番犬がいる方がいいのかもしれない。

そんなことを考えながら長かった夜に別れを告げ、家路についた。

主人と従者の狙い（後書き）

犬の祖先は狼だとか、少し前の共通の祖先から分かれて別の進化をしているから全く別の動物だとかいろいろ言われています。

なのであまり鵜呑みにしないでください。あくまで参考程度に……。

そつだ、冥界に行こう(前書き)

藍の口調エ……orz

そうだ、冥界に行こう

「冥界に行くわよ」

「ちよつと待って下さい」

あの紅魔館強制訪問から数日後の夕刻、私は自分の住処で寛いでいた。あれから連日行ってたから久々の休憩時間。それをいきなり取り上げられては堪らない。

たとえ相手がこの幻想郷で最強と呼ばれる胡散臭いスキマ妖怪だろうとも、私は諦めない……。

「何かしら。どこか問題でも？」

「ありすぎてどこから手を付けていいのか分かりませんが、とりあえず何故ここがわかったのでしょうか」

「天狗に聞いたなら教えてくれたわ」

口止め忘れてた……。

「……そうですか。ではどうして私が冥界に行かなければならないのでしょうか」

「冥界の主が貴女に会いたって言うてるのよ」

「何故です？」

「私がいろいろと話したら興味を持ったらしくて」

「……いや」

「もちろん拒否権なんて存在しないわよ」

気付けば足下にスキマ。この世は理不尽で満ちている、と思いがら落ちていくしかなかった。

「さ、着いたわ。幽々子、連れてきたわよー」

もうどうでもいいや……力無きものは有るものに未来永劫勝てないんだよ……。あれ、どうしてだろう。目から汗が出てきた……。

「早かったじゃない。その子が？」

「そうよ。ほら白、最終的にはお世話になるかもしれないんだから挨拶しときなさい」

縁起悪いなあ……。それに地獄に堕ちたら関係ないよね。

「……お初にお目にかかります、冥界の主様。私、妖怪の山にて平穩無事の生活を夢見ているたのしが無い半獣にございます。そのような卑賤な身分なれば、貴女様に名を覚えていただき、なお言葉を交わすなどとは恐れ多きことと存じます。故に、早々の退出をお許し願えませんでしょうか」

どこか間違っている気がしなくもないけど、それなりの敬語だろう。ちゃんとこれを言っている間も揖礼をしていたし、悪い印象は持たないはずだ。

まあ、『何この子。頭がアレ?』と思われても仕方がない挨拶でもあるが。幻想郷でこんな言葉使って頭を下げる奴なんて見たこと

ないし。

「何言ってるのよ貴女」

「いたっ」

紫さんに頭を叩かれた。地味に痛い。全く、何なんですか。完璧な挨拶だったでしょう、今の。

「そんな挨拶しろとは言っていないでしょうが」

「するなとも仰られておりませんが」

もう今日はこの口調（似非敬語。あくまで似非）でいこう。いつもより丁寧なんだから、褒められこそすれ怒られる筋合いはない。

「ふふっ、面白い子ね。退出は許さないから、こっちを向いて自己紹介をして頂戴？」

駄目だったか。

「……改めまして、半獣の白と申します。何の価値も御座いませんで、忘れていただけると幸いです……いたっ」

「だから貴女は何がしたいのよ」

「紫様、扇子で叩かれたらさすがの私も痛う御座います」

「腹立つからその口調もやめなさい」

怒られた。様付けもしたのに。

「貴女様方のような大妖怪に私のような半獣風情がどうして口調を崩せましようか、いや、崩せるわけがない」

反語表現を用いてみた。

「まあまあ紫。どうせあなたが無理矢理連れてきたんでしょ？ それならこうなっただって仕方ないわ」

「あなたが連れてきてって言ったんじゃない」

何かを話している二人を無視し、周囲を見渡す。ふと横を見ると銀髪の少女と金髪の女性が立っていた。金髪の女性の方はどうみても九尾の狐。妖獣として尊敬の目で見ることしか出来ない。

向こうも私を見ていたようで、視線がかち合う。なのでこちらの二人にも挨拶をしておいた。え？ 何で中国の、しかも昔の礼なのかって？ 気分だよ、気分。

予想通りというかなんというか、微妙な顔をされたけど。

「……………初めまして。白と申します」

「あ、ああ。あなたが紫様の仰っていた半獣？ なんだか聞いていた話と態度が違うんだけど……………」

「気のせいで御座いましょう。それよりもかの御高名な九尾の狐様にお目にかかれるとは、光栄の至りに存じます」

「いや、そこまで畏まられると調子が狂う……………」

「ご謙遜を。隣に立っておられる方も相当な刀の使い手とお見受けします。そのような方々にお会いできるとは今日はなんと良い日なので……………いであっ！」

「そろそろやめないとスキマ送りにするわよ」

グーで殴られた！ グーで！

「ゆ、紫様、今結構痛そうな音がしたのですが……………」

「躰だから問題ないわ」

あれ、デジャヴ？ 紅魔館でも同じことを言われた気が……。と
いうか地味に殴られた所が痛い。ちょっと涙目になるくらい痛い。

「だ、大丈夫？」

「……還りたい、もう土に還りたい。万物の源、頂点である大地に
……」

「紫様！？ 変なことを言い出していますが!？」

しゃがんで俯き、のの字を書く。躡……もう聞き飽きた。犬じゃ
ないのに聞き飽きた……。

「いい加減にしないと式にするわよ」

「飼い犬になると式になるのはどっちがいいんだろう……」

どっちも変わらない気がしないでもない。

「誰の飼い犬になるのよ」

「紅魔館……」

「……あの吸血鬼、諦めてなかったのね」

溜め息をつく紫さん。私の方がつきたいです。私から見ればどっ
ちもどっち……というか嫌です。

「いいからきちんと挨拶しなさい。心配しなくても日をまたぐ前
には帰してあげるわよ」

「……先程は失礼致しました。狼の半獣、白と申します。以後お見
知りおきを」

「気にしてないわ。私は西行寺幽々子よ」

「私はここで庭師をしている魂魄妖夢です」

「私は八雲藍。紫様の式だ」

……うん？ どこかで聞いたことがあるような名前が……。

「あ、もしかして橙さんの主って……」

「私だけど……橙を知っているの？」

「はい。妖怪の山で偶にお会いしています」

猫を使役しようと頑張っている姿を見かけて、声をかけたのが切っ掛けだ。それからはちよくちよく会っていたりする。中々猫たちに言うことを聞かせられないようなのでアドバイスをしたり。

自分には式が憑いていて主がいるとは聞いていたが、まさかこんな所でお会いするとはね。幻想郷って狭いんだか広いんだか分からなくなってきた。

「橙が世話になっているようだね。礼を言うておくわ」

「とんでもないです。橙さんと話していると楽しいですから」

年上だけどなんか妹みたいで。

「橙と知り合いだったのね」

「山にいる妖怪とは交友くらいありますよ。引き籠っているわけでもないですし」

山では活動的なのだ。ただそこから外には出ないだけで。

「ここで立ち話を続けてないで中に入って。妖夢、お茶をお願い」

立ち話は強制終了。ちよっと空も暗くなってきたるしね。

紫さんは明日になる前に帰すって言うけど守ってくれるとは思えない。

逃げようにも帰り道が分からないし、周りは私なんか比較にもならないくらい力の強い方々。

無駄な抵抗はむしろ紫さん辺りに喜ばれるだけだ。それも癪なので大人しく上がらせてもらうことにしよう。

なんか最近ゆっくり休める日が少ない……誰か助けて。

そつだ、冥界に行こう（後書き）

『ゆうれい
揖礼』

男性は左手を右手の上に置き、女性は右手を左手の上においてお辞儀をする礼。相手に敬意を表す際に使用される。

まあ、これも参考程度にどうぞ。

下戸は辛い

「ほら白、飲みなさいよ」

「私の酒が飲めないって言うの？」

「飲めないって言うてるじゃないですか！」

只今酔っ払いに絡まれている私です。本当に酔っているのか、酔っているかと装っているのかは判断できないけど。

どうしてこうなったかと先刻までを振り返ってみるが、どう足掻いてもこの流れになるのは必然だったのだと思う。だって私、紫さんが帰してくれないと帰れないし。なのに本人はその気が全く無いし。

「ほら、さっさと飲んで飲んで。美味しいわよ？」

「アルコール分解出来ませんよ、動物は」

「藍は飲んでるじゃない」

「個体差があるんです」

「飲めば飲むほど強くなるのがお酒よ。貴方も慣れなさい」

嫌だ、と声を高くすることはないが、無言で逃げまわる。絶対に妖怪に口では勝てない。

「幽々子、藍、もう埒が明かないわ。押さえこんで」

「分かったわ」

「そ、そこまでしなくてもよろしいのでは……」

藍さんの言うとおりです。何でそこまで飲ませたがるんですか。

「楽しそうだから」

母さん助けて！ この二人を同時に相手取るのは無理だよ！

抵抗虚しく取り押さえられ、私の背後で藍さんが「すまない……」
と言っているのが聞こえてくる。式つて主のいうことには逆らえな
いからね……。貴方を恨む気は更々ありません、全て貴方の主人が
悪いのです。

「という訳ではい、これ」

「むがあ！？」

お酒は匂いから嫌いなのに……。あー、何だかだんだん顔が熱く
なってきた気がする。ポーっとするし……。

ここまでが私に有る記憶。

< s i d e 八雲紫 >

たった一杯。コップに入っていた一杯のお酒を飲ませた。これで
は妖怪はもちろん、人間でさえ相当な下戸じゃないと酔うのは難し
いだろう。

その計算を、あそこまで崩されるとは思ってもみなかった。

「紫さまあ……………」

「……………もう回ったのかしら？」

まさか一杯で酔うとは思わなかったわね。しかもこの子は酔うと甘え上戸になるらしく、今は私の腕に抱きついている。酔っているので潤んだ瞳に紅潮した頬、そして上目遣い。元々可愛らしい顔立ちなのも相まって、途轍もない破壊力を生み出している。

……………どうしましょう。今夜……………いや、今から食べちゃおうかしら。

そんな私の心情を知ってか知らずか、より甘えるように顔を押し付けてくる。…もういいわよね、誘ってるのよね、これは。

「白、今から私と楽しいコトをしましょうか」

「たのしいこと……………」

「ええ。最初は痛いかもしれないけど、いずれは最高の快「白、こちちに来てお酌してくれない？」……………ちよつと幽々子。邪魔しないでくれないかしら」

幽々子の言葉に従って私の腕から離れていく白。まったく、友人なら邪魔しないほしいわね。

そう思いながら幽々子にお酒を注ぐ白の姿を見る。

……………この子って器用ね。こういう酒の席は以前の宴会が初めてで、今回は二回目って言ったのに、そうは見えない注ぎ方をしている。初めてならもつとたどたどしいのが普通なのに。おそらく、藍や妖夢の姿を見て覚えたのでしょうかね。割と賢いみたいだし。

一を聞いて十を知るタイプで可愛い。やっぱり、ぜひとも式に欲しいわ。まあ、もう一つ気になることもあるのだけど。

結界のことに關しては既に藍に丸投……任せているから心配はな
いけれど、この子も式にすれば役立つだろうし。それに、式にすれ
ば何をして私に逆らえなくなる。つまり、今幽々子に邪魔された
ことだってし放題ってことよね。

「紫、顔がニヤついてて気持ち悪いわよ」

「もう少し、オブラートに包めないのかしら」

気持ち悪いはないでしょう。友人とは言え、女性に向かつて。

ふと白を見れば幽々子から離れて今度は藍に抱きついている。ど
うやら尻尾が母を思い出すとかなんとからしい。藍も母に甘えたい
という行動の上に、酔っぱらっているので無下にできないようね。
ふふ、こっちを見ても助けてあげないわよ。自分で何とかしなさい。

< s i d e 八雲藍 >

私は今非常に困っている。というのは、さつき知り合ったばかり
の半獣の少女に抱きつかれているからだ。亡き母の面影を見ている
らしく、聞けばまだ人間とさして変わらない年齢だと言う。まだま
だ甘えたい盛りに母を亡くしたというのだから、同情する部分があ
ると思う。

故にどうすることもできず、されるがままになっているわけだが
……。主人である紫様に助けを求めても意味深に笑われるだけ。一

体どうしたのか……。

「こ、こら、離れなさい」

「……だめ？」

「ぐっ……」

そ、そんな目で見ないでくれ。断ったら泣きそうじゃないか……。

目尻に涙を溜め、おそろおそろといった体で私の顔を覗き込んでくる。何だか禁断の扉を開いてしまいそうだ。い、いや私には橙が……。

「だめ、ですか……？」

同じことを再度問われる。違うのは声が泣きそうになっている所だろうか。今泣かせてしまったらこの子を気に入っていると明言している紫様はもとより、幽々子様からお叱りを受けてしまいそうだ。妖夢には……既に非難がましい目で見られている。

「いや、構わないよ……」

最強の妖獣と呼ばれている私が、ただの半獣にいいように扱われるとは。まあ、橙と同じように娘か妹ができたようなものだから構わないのだが。

そんなことを考えているとふと目が合う。私を見ると笑って腰回りに抱きついてくる少女。……酔うとまるで人が変わったようだ。さっきまでの敬語も消え失せ、幼子が親を求めるかのように甘えてくる。

もしかしたらこれがこの子の本当の姿なのかもしれない。両親を

失ってからは、なるべく誰にも甘えないようにしてきたのだろつ。頼ることと甘えることは違う。この少女は、どうも両親以外に無償で自分を愛してくれる者はいないと考えているようだ。それ故にか頼ることを良しとしないらしく、常に遠慮が先だっている。

押し黙ってしまった私に不安を感じたのか、じっと見つめてくる。その頭を撫でてやりながら、こう思った。

『せめて今くらいは甘えさせてやるつ』

と。それから……。

「白く、こつちにいらつしやい」

「幽々子、譲らないわよ？」

『……なるべく、危険な目をしている主たちから守ってやるつ』

妖夢も同じような目をしていたのが救いだつた。

< side 西行寺幽々子 >

紫が最近よく口にする少女。名を白と言い、昔追いかけてまわしていた九尾の狼の子だといふ。生憎と、私はその母親と面識がなかったが、よく紫が口に使っていたことも覚えている。

『母娘そろって面白いわ』

そう楽しそうに言う姿は久しぶりに見た気がする。だから興味を持った。私の友人をそこまで嬉しそうにさせる存在に。

今日、藍とともにここにきた紫に噂の少女を見てみたいと言つと、「今から連れてきてあげるわ」

との返事。藍を残してスキマに入ってしまった。

数十分が経つと、紫の声が聞こえてきたので外を見る。その隣には件の少女^{くだん}。中々に可愛らしい顔立ちで、どこか諦めたような表情をしている。たぶん、紫に無理矢理連れてこられたからだろう。事実、紫に促され発した口からは、遠まわしに早く帰りたいと訴えられていた。

あんな滅茶苦茶な敬語、初めて聞いたわ。紫や吸血鬼たちが気に入るのも分かる気がするわね。一緒にいて退屈しなさそう。ちょっと気になることもあるし。

妖夢や藍と話している時もあの似非敬語は健在。紫に殴られていじめていたけど、その後は普通に挨拶をしてくれた。礼儀も節度も弁^{わか}まえているようで、逃げようとはしなかった。

その後、家にあげているいろいろな話をした。交友関係や妖怪の山の生活、能力などについて。

その時に何となく感じたのは、この少女は他人と関わるのが苦手というか、干渉したからなということ。能力故か両親の死か、はたまた別の理由かは分からないがこの子は何でもかんでも一人でや

ろつとする。つまりは、典型的な自己犠牲タイプに近い。

長い時を生きてきた私にとっては、そんな風に生きている子を見るのは忍ばれない。……いえ、違うわね。普段なら、誰がどう生きようと気にしない。安全地帯でそれを観察しているだけ。けれど、この子のことは気になった。

まだ会って一日と経っていないけど、心惹かれるものがある。おそらく紫も同じことを感じたんでしょうね。だからあんなにもこの少女に固執している。

「幽々子さま……?」

「何かしら? 藍はもういいの?」

「ん。今は幽々子様がいい……」

いつの間にか私に近寄って来ていた白。今度は私に甘えたいらしい。……可愛いわね。紫の気持ちが良い分かるわ。

「ふふ…… 光荣だね。いらっしやい」

そう言うのと嬉しそうに抱きついてくる。そのまま耳を撫でてやれば甘えるような声をあげる。……油断していると、私が狼になっちゃいそうね。

そんな邪な考えを見抜かれないよう、私はその少女と盃を傾けた。
……紫、睨み過ぎよ。

番外 愛されすぎている半獣（前書き）

注意！

この作品はハーレム要素があります。
苦手な方はお戻り下さい。

…主人公も女だけど、ハーレムって言うのかな……？

それでは念のためもう一度。

ハーレム要素・キャラ崩壊気味・パチュリー落ち気味

が許せる方のみお読みください。

番外 愛されすぎている半獣

適当に妖怪の山を歩いていたら雛さんに会った。
そこまで久方ぶりという訳でもないが、ついつい話が盛り上がった。

そんな平和な日の話。

「ふふ…疲れているんですか？白」

「それはそうですね。この数日だけでだいぶ動き回りましたから」

「いいことですね。見聞を広めるといっのは」

「そう捉えますか…」

少しの邪気もなく楽しそうに笑う雛さん。

弄られている感は否めないが、反論しても無駄なのでスルーしておく。

子供の時から私を知っている姉的な存在だからか、なぜか逆らえないんだよねあ…。

「ふふ…そう言えば白は恋人とか好きな人とかいないの？」

「……………藪から棒に何ですか。いる訳ないでしょう」

本当に唐突だ。なんでいきなりそんな話題を

「だって二日くらい前、ここで告白されてたじゃない。男の天狗に」

「…な、ななな何を言っているんでしょつか？」
「白ってこの手の話題は本当に嘘つくの下手よねえ」

み、見られてたとは…気付かなかった。

いや、でもあれはあの天狗（名前も知らないほど付き合いが無かった）がいきなり言ってきただけだ。驚いて周りに気を配る暇が…

「その前も告白されてたわよね。女为天狗に」

「何で知ってるんですか…？」

「偶々よ」

…それも？気配消すのうますぎますよ雛さん…流石神様。

あの時は一応周りに誰もいないか確認したはずなのに……。

「それで、その時に断ってたから好きな人でもいるのかもって思ったのよ」

「…いえ、特にはいません。まだそういうのは考えたことないです」

「ふうん？本当かしら」

「いやいや…」

本当にいいんですから。

しかしもうこの話題は嫌なので無理やり話を逸らす。

確実に気付いているだろうが私が本気で嫌がったのが分かったのか、雛さんはそれについてくれた。

…まあ、嫌っていうかあまり考えたことないから、どの道これ以上

のことは言えないけど。

そのまましばらく他愛ない話をし、家に帰ることにした。

そう言えば今日は博霊神社に食糧渡しに行こうと思っていたんだっけ。

雛さんに別れを告げ、帰ろうとしたら

「頑張つてね」

と言われた。目がとても楽しそうだったけど、なぜか私には嫌な予感がした。

……………そして、その予感は当たることになる。

同時刻、その2人の様子を隠れて見ていた少女がいた。

「白が告白をされていた…?」

呆然とつぶやき、思案顔になる少女。

「今すぐ白を問い詰めたい…けれどこれは大スクープ。そして私は新聞記者」

何かを決心したのか、堅く閉じていた眼を開く。

「この射命丸文！たとえ親しい者でも新聞記事にする！！！」

「…騒がしい」

家で少し休んだ後、予定通り博霊神社に来た。

近くまで来たが、いつもより騒がしい気がする。

たくさんの人妖が来ているみたいだけど…珍しい。

今はまだ太陽が高く昇っている時間帯なのに。

夜なら別段珍しくもなんともないんだけど…。

「白！！！」

「はいっ！？」

疑問に思いながらも境内に向かうと、紫さんにいきなり声をかけられた。

大声だったのだからびびっくりした。
そしてちらりと神社の中を見ると、この幻想郷の実力者たちがほとんど揃っていた。

「な、なんです…驚くじゃないですか。というより何でこんなにくさん…」

「そんなことより！白、これはどういことよー！」
「はい？」

そんな逆ギレ気味に言われても、何の事だかさっぱりわからない。いつもは冷静で掴みどころのない性格の紫さんがここまで慌てているんだから、よっぽどのことなんだろうけど…

「私というものがありながら…」

「ちよつと紫、白は私のモノよ？」

「幽々子…あなたといえど譲らないわよ」

私はいつからモノ扱いされるようになったの…？
動物ですらなくなってるじゃないですか……。

「白」

「あ、霊夢さん。これは一体…」

「正直に答えなさい。これはどういことよ？」

そうやって押しつけられた物は…新聞？しかも文さんのやつだ。周りから痛い程の視線と殺気を感じる中、目にとまった記事。それには…

く『白、天狗に告白される！』

本日未明、妖怪の山に住む半獣の白が告白を受けていることが判明した。

それも一度ではなく、複数回に及ぶという。以下は証言者H・Kさんより。

「この前、山に住む妖怪でも滅多に行かない場所にあの子がいるのを見つけました。

声をかけようと思って近づこうとすると、別の…それも男性の声をしたんです。

その二人はどうやら私には気づいていなかったようで、私にも聞こえる声で話していました。

その時に聞こえたんです。その男の天狗が白に『お前のことが好きだ。俺と付き合ってくれ』と言うのを。

それだけではありません。それよりも前に女性の天狗にもそのようなことを言われていました。

おそらくはもつと多数の男女からも言われていることでしょう」

結果的に言うところらは断っていたようだが、その理由はすでに恋人がいるからではないか、と証言者と私は睨んでいる。

この後にもいろいろと憶測が書かれていたが、それは割愛。長すぎる。

というかH・K「鍵山雛だよね。
雛さん…あの時笑ってたのはこれですか…！」

そつと視線を上げると顔は笑っているけど眼は笑っていない霊夢さんがいる。

ちなみに他の方々もそんな感じだ。

何で？何でそんなに人の色恋沙汰に興味津津なんですか！？

「……………えーと」

「白。どうなのかしら？」

「いや、まあ…その」

「事実なの？」

「あの…事実と嘘が混ざってます」

「ふうん。告白されたのは？」

「……………本当、です」

有無を言わさぬ圧力。これが博麗の巫女か…！

しかも方々から「嘘ついたら殺す」みたいな圧力もある。

これに耐えられる者がいるだろうか、いや、いない。反語

「白、私たちに言うことは？」

体の底から凍えるような声。そんな形容がぴつたりな声の発信源は紫さん。

言うこと？特にない気がするけど…

「いや…何を言えと……仰るのですか」

本能辺りから来る体の震えをこらえながら問う。
かまなかった自分をほめてあげたい。

「へえ。私たちの気持ちに気付かないだけじゃなく、そんなことまで言うのね」

「で、でも、私が告白されようとされまいと関係ないでしょう…?」
「まずはその意識改革からね」

そうにつこりほほ笑みながらスペルカードを構える霊夢さん。
しかもその後ろでは紫さんや幽々子さんといったパワーバランスを担っている方々も控えている。
もしかしなくても、逃げ道は、ない。

「ま、待って下さい！何がどうなってこうなるんですか!？」
「お前が告白されて、それを報告しなかったからこうなってるんだ
ぜ」
「魔理沙さん!？」

何で報告する必要があるんですか!？

「どこの馬の骨とも分からない天狗にとられるくらいなら、まだこの中の誰かにとられた方がマシだわ」

「さ、咲夜さん？ナイフを下げてくださいると有り難いのですが…」

誰も目が笑ってない…

Q 知り合いが捕食者の目をしてるんですけど、どうすればいいですか？

A 諦めなさい。

私の脳内会議の結果

「いやいやいや！ああもっつ！！」

少しだけ自分の脳に不安を感じたが、猛ダッシュで逃げる。

もちろん逃げ切れるわけがないが、全員に訳の分からないことを言われるよりは逃げて多少なりとも人数を絞りたいという狙いがある。

とりあえず人間の目では追えないくらいの初速で立ち去ることに成功。

よかった。逃げる前に咲夜さんの能力でつかまるとか洒落にならないし。

「逃げ切れるとは思っていませんでしょうね」

「っー」

私と並走しているのはレミリアさん。吸血鬼速いよー（泣）
日傘さしてるから風圧とか半端ない筈なのに…。

「ま、そこまで馬鹿じゃないはずだからな」

魔理沙さん、あなた本当に人間ですか？

箒乗ってるからって追いつけるのはおかしいですからね!?

この姿ではしゃべれないのでひたすらに走る。

妖怪の山までいけば天狗が追いついてくれるはず…!

「そこまでね」

「うおうっ!？」

「さあ、楽しい楽しいお仕置き時間よ」

気付けば目の前にはスキマから上半身を出した紫さんがいた。

慌てて方向を変えようとするが他の追ってきた人に道をふさがれる。

くうっ…逃げ道がもうない……

ちなみに私以外に今この場にいるのは先述した紫さん、レミリアさん、魔理沙さんのほかに霊夢さん、咲夜さんの合計5名。

人数を絞るという点では成功だが、強さという点では失敗した気がする。

「さ、とりあえずは質問に答えてもらいましょうか」

紫さん。だとしたらその手に持っている縄は必要ないと思うんです。

「スキマ妖怪、これも使えるわよ」

レミリアさん。どうして貴女は首輪を持っているのでしょうか。

「だったらこれも使えるぜ」

そっという魔理沙さんの手には…キノコ？

「これは嘘がつけなくなる効果があるんだ…いわば自白剤みたいな感じだな」

待って。自白剤って大脳を麻痺させるだけだから、下手を打つと中毒や廃人になる可能性があったはず…

「ああ、流石に副作用とかは大丈夫だぜ」

それは良…くないですからねやっぱり。

「これも使えるかしらね」

それは…布？そんなの何に使う気なんですか咲夜さん。

「田隠しよ」

……。

「まったくあんたらは…」

呆れたように溜め息をつく霊夢さん。
まさか止めてくれ

「実力行使でいいじゃない」

る訳ないですよね。

ある意味一番危険ですもんね、この人。

「とりあえず、調きよ…話し合うためにもとの姿に戻りなさい」

「紫の言う通りね。ちなみに3秒以内にやらなかったら…」

妖怪最強と人間最強に言われて断れるはずがない。

どうしてだろう。霊夢さんの含み笑いが怖すぎて足が震えてきた…。

「何でこんな目に……」

只今私は、土の上に正座させられ、首輪をつけられ、後ろ手に縄で縛り上げられています。

…得体のしれないキノコと目隠しは勘弁してもらったことに感謝する所だろうか。

「それじゃ、本当にそうだったことは無いのね？」

「はい…告白は本当ですけど恋人はいないです……」

もうやだ…何この格好……生物として終わった気がする。

天狗に告白されて神様にそれを暴露されて天狗に公表された。

これだけでもだいぶ酷いことなのに、どうして更にこんな辱めを…。

「さて、それじゃあ行きましょうか」

「…どこにでしょうか。地獄ですか犬小屋ですか」

「もちろん私の家よ」

「はあ？聞き捨てならないわね、スキマ。紅魔館の番犬なんだから私たちが責任をもって連れて帰るわよ」

「その通りです。調教し直さなければ…」

「それもおかしいな。白はこれから私の家に来るんだぜ」

「あんたらこいつが神社に来た理由忘れたの？私に用があつてきたんだから私の所が筋でしょうか」

一触即発。

そんな言葉が脳裏をよぎった瞬間には、既に弾幕ごっこが始まっていた。

…もう解放してください。

近くで行われているパワーバランスたちの弾幕ごっこで消し飛びそうです。

こんな恰好で逃げれるほど器用ではないんですよ私は。

常人では理解できないほど激しい戦いが繰り広げられている中、ひとまず安全そうな物陰に隠れて俯く。

「…これからどうしろと？」

「そうね。逃げればいいと思うわ」

ポツリと呟いたはずの言葉に、本来ならあり得ない返答。驚いて顔を上げるとそこに居たのは…

「パチユリー、さん？」

外に出ることが滅多にないこの人が何故ここに居るのかと思ったが、拘束具を外してくれたと思ったら手を引っ張られて急ぐように言われたので慌ててそれに従う。

そうして、私は地形が変わりつつある場所から妖怪の山に向かったのだった。

「本当にありがとうございました。今度何かお礼をします」
「構わないわ」

山の麓まで送ってもらい、漸く人心地がついたのでお礼を言う。

あのままあそこにいたらどうなっていたか分からないので、感謝し
尽くしても尽くせない。

「…でも、一体どうしてあんなことになってしまったんでしょうか」
「あいつらもあなたのが好きだからでしょうね。愛故ってこと
よ」

「あれが…愛、ですか。痛いし、怖すぎます」

正直、しばらくは誰にも会いたくないくらいに。

愛って言っても友愛や家族愛なんだろうし、もう少し手加減してく
れてもいいと思う。

「…愛の意味を履き違えている気がしなくもないけど。まあ、あの
人たちにとってはそれも魅力なんだろうけど……」
「？ パチユリーさん？」

何やら眩いているようだが聞き取れない。
聞きとろつとして近づくと、今度ははっきり聞こえる声で話しかけられる。

「白、お礼を今もらってもいいかしら」
「え？ですが今すぐ用意できるものなんて……」
「平気よ。コレを貰うから」

気付けば唇に柔らかい感触があった。
しかも目の前には紫色の髪と閉じられた瞳。

「……ん……」
「……え？」
「これで一步リードかしら」
「……え？」
「ご馳走様。そのうちまた図書館に来なさいよ」

そう言い残し、パチュリーさんは去っていった。

残された私はそれを見ながらいつまでも呆然としていた。

オマケ的なもの

あの騒動後の図書館にて。

「…あの子が今度図書館に来たら脈アリってことよね」

「パチエ！」

「あらレミィ。ボロボロじゃない、どうしたの？」

「…白々しいわよ。貴女があの子を連れていったでしょう」

「さあ？どうだったかしら」

「『身内の不始末は主人が償え！』って言われて霊夢やら紫やらに何回殺されかけたか…。再生能力の高い吸血鬼じゃなかったら死んでるわよ。咲夜は早々に離脱するし…」

「そつ。御苦労さま」

「反省する気なしね……」

「弹幕も恋愛も駆け引きが重要なものよ。利用できるものはすべて利用するわ」

「……はあ。今回は熱くなりすぎた私たちの負けね」

番外 愛されすぎている半獣（後書き）

パチュリー可愛いよパチュリー

…ごめんなさい、やっぱり暴走しました。

今後の展開は皆様のご想像にお任せいたします！

最近リアルが忙しくなりつつあるという状況に。

宿題は多いし、送別の品を用意したり、歓迎会の準備したり…

うぁー休みがない……。宿題があ…（ノ）、（）。。。。

地底に赴く(前書き)

前回のあとは……酔いが醒めて危険な目をした人たちから逃げていたんではないでしょうか。

ちなみに、酔っていた時の記憶はないという設定です。

それだけ踏まえて頂ければあとは皆様のご想像のままにどうぞ。

地底に赴く

今更だが、私は半分妖怪で半分人間だ。

半獣である慧音さんは満月の夜に白沢になるという。私は常時、人型の妖怪・人間・動物の狼の姿になれるが、やはり月の満ち欠けに関わる部分もある。

具体的にいうと、満月の夜はやはり妖怪の血が騒ぐのか妖力が増す。なので満月の時は妖怪の姿になっている。と言っても、基本的にいつもこの姿だから新鮮味も何もないけど。

では逆に朔日、つまり新月の日はどうなるか。

この日は妖力が減るが、人間の姿をとるわけではない。妖怪の山つまり周りに妖怪がたくさんいるという場所柄、ヒトの姿をしているのは適切とは言えないからだ。

そういった理由で、動物の姿をとっている。なんだかんだ言っても山の動物たちには顔が利くので楽な部分もある。例えば食糧など。基本的に必要はないけど、どこかの肉食動物たちの群れに行ったら一番上質な部分をくれる。私の住処にも持ってくるけど。

ここで私の住処についても少し紹介しておこう。

簡単にいえば私の住処は洞窟だ。山の中腹部辺り、大蝦蟇の池の近くにある。洞窟と言っても、以前は両親と暮らしていた場所、それなりに広い。あるものといったら寝具くらいだろうか。ちなみに動物の毛で出来ているので冬に寝るときでも暖かい。まあ、私の暮らしぶりについてはこんなところだ。

そして今宵は新月、つまり今の私はただの狼。普通の動物よりは身体能力が高いけれど。

そんな姿で妖怪の山にある地底へとつながる穴へ来ている。以前にこいしさんとさとりにさんに誘われたのも理由だが、『動物の多い地霊殿にこの姿で行ったらバレないんじゃないか?』という子供染みた考えのもとに実行した所が大きい。

いや、ね……最近思う所がありまして。先の宴会然り、紅魔館然り、白玉楼訪問然り……。

なんというか、いつも厄介事の被害者だから、偶には自発的に何かしてやるうと思っただんです。ええ、それだけです何が問題ありますか？

誰に対してか言い訳をしながら穴を覗くと、底が見えないほどに広がる闇。太陽の光も届かないこの場所に新月の夜に飛び込もうとする者は後にも先にも私だけだろう。

まあ、深く考えるのはやめてさっさと行こう、と気合いを入れ直し、穴の中へ飛び込む。……着地、大丈夫かなあ。

危なかった。思ったよりも深いよこれ……。普通の動物だったら着地失敗で洒落にならない事態になるところだった。今はなんとか持ち前の身体能力で勢いを殺せたけどさ……。

「……何？ 何で狼が落ちてくるのよ」

一人恐怖で身震いしていると、声が聞こえてきた。顔を向ければ怪訝そうな顔をした金髪緑眼の女性。誰だろう。

「どうするのよこれ……地上に帰れって言っても無駄じゃない」

私を見て困ったような、面倒くさいような顔をするその女性。言葉からしてこの穴に出入りする人を見守るような役目を負っているようだ。

……うん、そんな役目なら動物が落ちてきたら困るよね。しかも普通のより大きいし。

申し訳ない気持ちになってきたので人型になろうかな、と思っていると不意にその女性が私を撫で始めてきた。あー……、戻るタイミング逃した……。

「……地霊殿に連れていったほうがいいわよね。あそこには動物がたくさんいるし……」

おお。謀らずとも目的地まで行けそうな雰囲気だ。けどなあ……黙ってるのは申し訳ないというかなんというか……。

少し悩んだが、いつもの姿に戻ることにし、女性があさつての方
向 おそらく地霊殿ある場所 を向いた瞬間に、いつもの妖獣
の姿になった。

「……え？」

「すみません、騙すつもりはなかったのですが……。一応、今の私の本来の姿ですから」

「……地底に何の用？」

さつきとは打って変わって警戒心をむき出しにしてくる。そりゃそうだ。

「貴女も今仰られていた地霊殿に行きたいのですが……」

「地霊殿に？ どうして？」

「以前、その主姉妹からお誘いを受けたからです」

ペットとしての勧誘もされたけど。

「……そう。ならこの旧都の中央に向かえばいいわ」

「え？ あ、ありがとうございます？」

てつきり帰れと言われると思っていたので返事が遅れてしまった。道も教えてくれたし、この妖怪さんは良い妖怪なのかもしれない。

「あ、私は白といます。帰りにまたここに来ると思うので、よろしくお願いします」

「……水橋パルスィよ。妬ましいからさっさと行きなさい」

……何が妬ましいの？

「ほ、本当に行っていないんですか？」

「……流石に地霊殿の主の客に手は出せないわよ。ああもうその真面目さが妬ましいわね早くどこか行きなさい」

……どういふ妖怪なんだろう、パルスィさんは。さっきから妬ましい妬ましいって。

そこでふと、以前のこいしさんとの会話が思い出される。ああそ
うだ、確か『嫉妬心を操る』とかだったような気がする。
なるほど。たしかに忌み嫌われそうな能力だけど

「ありがとうございます。パルスィさんが優しい方でよかったです」

そんなのは関係ない。

私の場合は種族や能力故かもしれないけど、妖怪だろうが人間だろうが、どんな能力を持っていようがどうでもいいと思っている。
大事なはその人自身の性格や個性だ。嫌な奴だったりしたら、たとえそれが大妖怪だろうと私は従わないし、付き合わない。極論
だけど、たとえそれが原因で殺されようともね。

このパルスィさんという方は私の中では、『優しいけれど素直じゃない』という感じだ。初見だからそのうちかわるとは思うけど、それでも私がこの人を嫌う要素が今はない。

「それでは失礼します。本当にありがとうございます」

そう心からのお礼を言って地霊殿へと向かった。

「何なのよ……あいつは。いきなり現れて訳の分からないことを言い出して……。優しいなんて初めて言われたわよ……」

後ろで、赤い顔をしている嫉妬姫に気付かないままに。

地霊殿にて

パルスイさんと別れた後、再び狼の姿になって旧都を歩いている。周りにはお店があったりして意外と活発そうだ。居酒屋的な店が目につくのは鬼が多いからだろうか。

まあ、そんなことはさておき。パルスイさんはさつき、地霊殿は旧都の中心とあっていた。おそらく、私の目の前にあるあの建物がそうなのだろう。名前とは裏腹に西洋風の外観をしているのには驚かされる。

「……くう？」

さて行くか、と足を進めようとする何処からか視線を感じた。横を向いてみると、何か言いたげな一匹の黒猫が私を見ていた。む、怪しまれてしまったかな。

ただまあ、冷静になってみればこいしさんには既にこの姿を目撃されているし、さとり様にも話がいつているだろう。どの道露呈することは確定しているので、別にバレても何の問題もない。

うーん、行き当たりばったりで物事を行うべきではないね。ちょっと考えれば分かることなのに……疲れてるのかなあ。

「……ねえねえ。あんた誰？」

正体を明かすかどうか悩んでいたら、黒猫がいきなり人の姿になって話しかけてきた。……耳が4つあるのは禁則事項なのだろうか。

「妖力を感じるから……妖怪？ でもかすかに霊力も感じるような

……」

あ、妖力も霊力も隠すの忘れてた。パルスィさんに会う前は隠してただけけど……油断したなあ。

まあ、怪しまれて攻撃をされる前に人型になったほうが身のためだよ。この姿で喧嘩売られたら勝てないよ。

「……私は半妖です。地霊殿に用があつて、地上から参りました」

遊びに来たのが用事なのかよく分からないけど。

「地霊殿に？ さとり様に何か用？」

「はい。以前お呼ばれされたので来たのですが……お知り合いですか？」

「さとり様はあたいのご主人様だよ。あれ、でも何でさとり様と知り合いなの？」

「以前、博霊神社での宴会でお会いしたことがあります」

「あ、もしかしてこいし様がすごく気に入ったっていう狼？」

「多分そうです……」

狼って……ペットとしか見られてないじゃん。あ、でも紫さんの式とか紅魔館の番犬になるよりは待遇がいい気がする。危なくなったらここに避難しようかな。

「そういうことなら案内してあげるよ。お客様だしね！」

「ありがとうございます。えっと……」

「あたいは火焰猫 燐。お燐って呼んで」

「ではお燐、さん？ 私は白と言います」

「別にさんとかいらなただけだなあ……。ま、いいや。よろしくね、白！」

「よ、よろしく願いします」

なんと言うか、元気な方だ。さとりさんのペットは誰も彼もこんな感じなのだろうか。だとしたら、地霊殿はとても賑やかなことだろう。

そんなことを考えながら、前を走るお燐さんを追いかけた。

「さとり様に報告してくるから、ちょっと待ってて」

そう言っただけでも走って行ったお燐さん。本当に元気な方だ。

「しかしまあ……」

本当に動物多いな！。犬猫はもちろんのこと、珍しいものもいる。流石に狼はいないかな、と思っただらいい。すごいな、あんな手間のかかる動物飼うなんて。餌とかどうしてるんだろう。人肉なのかな。

更にさとり様のペットの方々は旧地獄の管理をするのだとか。先ほどのお燐さんは怨霊の管理をしているらしく、死体を集めたりしているらしい。大変そうな仕事だ。こいしさんのペットになるのも躊躇ってしまう。

「どうしたのですか？」

「あ……お久しぶりです、さとり様。急に押しかけてしまい申し訳ありません」

「気にしないで。やることもなくて暇だったから、訪問は嬉しいことだわ」

いつの間にか近くまでさとり様が来ていて、私の突然の訪問にも柔らかい頬笑みと優しい言葉をくれた。最近の地上での扱いとの差に感激したのは言うまでもない。

「さあ、早く上がって。お隣、お茶の用意を頼める？」

「はい。すぐに持ってきます！」

「ありがとう。白、案内するからついてきて」

そう言って手を差し出された。……子供扱いか、はたまた動物扱いなのか判断に困るところだ。

しかし好意から来ることを拒めるわけもなく、おずおずとその手を握る。それを確認した後、さとり様はゆっくりと歩き出した。

……一瞬、私が手を出した時にニヤリと笑った顔が見えたのは気のせいだよね。

地霊殿にて（後書き）

さとり様はSっ気があると思います。

きつと欲しいもの手に入れるためにまずは外堀から埋めていくタイ
プ。ある意味紫たちより怖いかも……。

隠れドS

「なるほど。地上でそんな目に遭っているんですか」

「そうなんですよね……。心休まる暇がないと言いますか」

溜め息をつき、お隣さんが先程持ってきてくれた紅茶を飲む。

「人気者は辛いですね」

「あれは人気者というよりも、見世物とかそんなところだと思えますが……」

人気者なら、日々生物としての尊厳とは何かを考えなくてもいいはずだ。

「そういえば、こいしさんはいらっしやらないんですか？」

「あの子は奔放だから、いつもここにいるとは限らないのよ」

そういえば結構ふらふらと地上にも出てるんですけどね。守矢神社にも現れたとか聞いたし。

「こいしに会いたかったのかしら。私では力不足？」

「そ、そういうわけでは……」

悲しげな表情と声色で言われる。そ、そんな態度をされると謎の罪悪感が……。

そんなあわあわと戸惑っている私を見兼ねたのか、お隣さんが苦笑しながら口を開いた。

「さとり様、白が困ってますよ。からかうのも程々に……」

「わかってるわ。……そうだ、お燐。こいしを探しがてらお空を呼んできてくれない？」

「おくうを、ですか？」

「ええ。紹介しておこうと思って。別に他意はないのよ？」

「……はい、分かりました。（邪魔をするなってことですね）」

さとり様の命令なのかお願いなのか分からないが、それを了承しお燐さんは部屋を出て行った。去り際、私の頭を一撫でしながら「頑張つて」と言われたのがやけに気になる。何を頑張れと言っただろうか。

「お空という方もさとり様のペットなんですか？」

「そうよ。以前言つた地獄鴉with八咫烏ね」

前半は聞いた気がするけど、後半は聞いてないような。

「覚えてなくても別に良いのよ、今から会っわけだし。……それよりも」

「さ、さとり……様？」

いきなり私の横に来て微笑を浮かべるさとり様。す、素早い……。

よく分からない感想を思いながら呆けている内に、さとり様は私の頬に手を当て、その手の親指でこれまた私の唇をなぞり出した。え、何これ、何が起きてるの？

「邪……お燐もいなくなったことだし、もう少し親睦を深めましようか」

「今、邪魔って言……」

「何？」

「いえ……」

私の言葉を笑顔で押さえ、そのまま妖しい笑みを浮かべて顔を近づけてくる。

「ちょ、な、何を……!？」

「動かないで。優しくしてあげるから」

何を!? と思いながらもさつきまでとは違う、艶のある声で囁かれたことに気づく。あれ、不味いんじゃないかなあ、この状況。逃げようともがくが、吐息が直接顔にかかったりして思わず動きを止まってしまう。

「いい子ね。それでいいわ」

その言葉と同時に更に近づいてくる顔……というか唇。不意の出来事に体が動かせない私は、もはや目を強く閉じることしかできない。

徐々に近く聞こえてくる吐息に、もう逃げ場がないことを悟る。そうして、あと少しで私とさとり様の唇が重な

「……お姉ちゃん、何してるの？」

「じっ、こいし!？」

ることはなく、突然のこいしさんの登場に驚いたさとり様に突き飛ばされた。うう……何で地底でもこんな目に遭ってるの？

「白に手を出さないでよ。私が先に見つけたんだから」

「い、いつの間にか……」

「今、お隣が出てきたから、なんだろうって思って入ったの。……まさかお姉ちゃんが、白に迫ってるなんて思わなかったけどね」

「ち、違うわ。これはその……」

なるほど、これが世に言う姉妹喧嘩か。そういうのは兄や姉が勝つものだと思っていたけど、そうでもないんだ。

「白、大丈夫だった？ お姉ちゃんに酷いことされてない？」

「あ、はい……いいえ？ ど、どっちだろう……」

「あーもう白可愛い！ やっぱり私のペットになってよ。あんな色好きのお姉ちゃんなんか放っておいていいから」

「ちよつとこいし。誤解されるようなことを言わないで」

「まだ二回しか会ってないのに手を出そうとしてたじゃん」

「愛に時間はないわ」

愛！？ な、何を言ってるんですか！ 冗談ですよね！？

「あらあら……顔が真っ赤ね。私の部屋で休む？」

「お姉ちゃん！」

「か、からかわないでくださいよ、さとり様……」

「これだけ行動しても“からかい”止まり……。地上の人たちも苦労してそうね」

お、落ち着いて考えよう。愛ってあれだ、動物好きのペットに対するものだよ。だからそう、スキンシップなんだ、これは。

「さとり様、おくうを連れてきました。ってどうしたんですか？ の状況！？」

顔を赤くしている私、疲れた顔をしているさとり様、私をさとり様から庇うように抱きしめているこいしさん。

うん、誰の目から見ても奇妙な光景に漸くツツコミが入って安心した。

地霊殿（じりょうでん）での常識人はお隣さんしかいないと認識しながら、彼女のいる場所に向かっていった。

波乱の予感

「お燐、この子が」

声のする方に向かうと、会ったことのない人 いや鳥か がいた。もしかなくても地獄鳥 With 八咫鳥という方だろう。どうやら私の説明を受けていたらしく、確認をとるように顔を向けている。

「新しく地霊殿に住むことになるペット仲間？」

「違いますよ!?!」

前言撤回。私の説明受けてないよこの人。

「うん、そうそう」

「お燐さん!?!」

そんな事実は一切知らないのですが。

「ああ、それもいいわね。地上に帰すところくなことがなさそうだし

……」

「うん、それには私も賛成かな」

「変なところで意見を一致させないでください!」

喧嘩していると思ったらいきなり意見が合う古明地姉妹。なんて対応しにくい人たちなんだ。

「それでお燐？」

「ん？ 何、おくう?」

「あの子は誰？」

「今ご自分でペット仲間とか仰っていましたよね!？」

違うけど。断じて決して認めてないけど。

「あはは。ごめん、白。おくうは何というか、その……鳥頭？」

……えー。

「そ、それでもお仕事はやっていらつしやるんですよね？」

「この前調子に乗っちゃって、博麗の巫女にボッコボコにされたけどね」

「根はいい子だから仲良くしてあげて。ペットとしての先輩になるわけだし」

「さとり様。もはや決定事項になっているのですが」

捨てられた動物ならとにかく、言葉での意思疎通が可能ならば本人に意向を聞くべきだと思う。

「そうだよお姉ちゃん。私のペットだよ」

「こいしさん。私は貴女のぶらり旅に付き合える能力はありません」

「ん、白のためなら我慢する。白の行きたい所に行こうよ」

笑いながらそう言って、私に抱きついてきたこいしさん。

なんだか最近、こういう赤面するような言葉や行動をされることが多い気がする。できれば気のせいであって欲しい。恥ずかしくて困る。

この会話の流れを打ち切るためにこいしさんから離れ、おくうと呼ばれている方に目を向ける。すると向こうも私を見ていたようで

目と目がつちり合う。

「初めまして。私は白といいます。よろしく願いします」
「私は霊鳥路空。おくうって呼んでね」

近づいて来て、わしゃわしゃと頭を撫でられながら自己紹介をされる。ここでも子供扱いか。すぐ背が高いから、私の頭は撫でやすい位置にあるのも理由かもしれない。

この扱いをどうしたものかと悩んでいると、撫でる手つきがどんどん強くなってくる。

「うわっ……ちょ」

「この子可愛いー。連れて行ってもいいかなあ？」

「さとり様たちに怒られると思うけど……」

「そうだよ。白は私だからね？」

「こいし、抜け駆けはだめよ？ みんなで愛でましょう」

「まとめているようで根本的な解決になってない！」

さもこれで解決、みたいな口調で言わないでくださいさとり様。その方法は私が疲弊するだけだと思っただけです。

「お姉ちゃん、さつき抜け駆けしてたじゃん」

「親睦を深めたのよ」

「だったら私も親睦を深める！」

「へっ？」

「っ、こいしー！」

「こ、こいし様!？」

どうしてこんなに皆が騒いでいるかって？ まあ、現在の私の状況を見ればそうなるよね。

だって

「は、早く白の上から退きなさい、こいし！」

押し倒されて、跨られているんだから。

「くっつ！」

ああ、でも恥ずかしい云々より押し倒された時に打った背中
の痛みが酷い。骨が……私の大事な尾骨がああ……！

「あ、ごめん。大丈夫？」

うう……今まで生きてきた中で一番痛いかもしれない。

「かなり痛い……って顔近いです」

いつの間にかお互いの顔がとっても近い位置に。さっきのさとり
さんといい勝負だ。

「いやちよつと待」

「やだ」

気付けば頬に熱いなにか。それは軽いリップ音を発して離れ
ていく。

……へ？ い、今のって……まさか。

「あれ、足りなかった？ じゃあ今度は唇にしてあげようか？」

呆然としていると後ろから強い力で引っ張られ、そのまま犯人で

あるつさとり様に抱きとめられる。無反応な私の顔をじつと見ているかと思ったら、今度は反対の頬に同じ感触。

「……こいし。抜け駆けはなしって言ったじゃない」

「だからお姉ちゃんには言われたくないってば」

「さとり様たちずるい。私もー」

そう言っただけで来るお空さん。頭の中が大混乱な私はどうしていいのかわからない。呆けたままその場に立ち尽くしていると、額に本日三度目の感触。

「……え、今何が」

「は、白。大丈夫？」

「お、お隣さん。何ですか、何なんですか今の状況は」

「あー……はは。さ、さとり様。白にはちょっと刺激が過ぎたみたいですけど……」

よしちょっと落ち着こう私。落ち着いて今までの状況を整理するんだ。

さとり様に何かされそうになった。

押し倒されて骨強打。悶絶。

こいしさんに何かされた。

さとり様に何かされた。

お空さんにも何かされた。

今の状況が把握できません 今ここ

「(……よし、一時撤退だ!)」

背中痛みも忘れて、私は地霊殿から脱出した。

その後の地霊殿

「……逃げちゃいましたよ?」

「失敗したわね。首輪を用意し忘れるなんて」

「お姉ちゃんたちが一気にやるからだよ。もう少し時間をおかなく
ちや」

「あゝあ、いなくなっちゃった。まだあんまり話してないのに」

波乱の予感（後書き）

お空の口調が掴めない！

うう……精進します。

鬼と狼

「……………勝手に出てきたのは不味かったかな」

旧都を疲れた足取りで歩きながらそんなことを考える。

落ち着いてきてみると、さっきの行動はペットにはよくやる行為。犬や猫を飼っている人には覚えがある人もいるだろう。感染症には気をつけてもらいたい。

つまり ペット扱いに対して解せない部分は多々あるもの。あれは親愛の印として受け取るべきものだったのだろう。

則ち今の状況は、私が勝手に混乱して勝手に飛び出してしまっただけ。しかし何も言わずにいきなり出てきてしまった手前、謝りにも行き辛い。かと言って、このままにしておくのは失礼すぎる。

「……………どうしよう。怒ってるだろうなあ……………」

溜め息を吐きながら鬼の少ない場所へと向かう。鬼の多い場所は酒気が強くて考え事するには向かないのだ。酒に強くない私は此処にいるだけで酔ってしまう。

「……………おや？ 見ない顔だねえ。誰だい？」

ふと、背後から声を掛けられた。私の勘によれば、相手は鬼だ。こんなときに……………とは思いが無視するわけにもいかない。下手に目を付けられて絡まれたくないし、恨みを買ったりなんかしたら悲惨な未来が私を待っているだろう。

気取られないようにもう一度溜め息を吐いて振り返れば、予想通

り鬼がいた。額から伸びた立派な一本角がそれを雄弁に物語っている。

「……初めまして。普段は地上に住んでいるので御存知なくて当然です」

「地上に？　へえ、珍しいね。それで、地底に何の用だい？」

「地霊殿に少々。そこに住む方々に会いに来たのです」

「あそこの連中と交流があるなんてますます珍しい。名前は？」

「白と申します」

「私は星熊勇儀。見ての通り鬼さ。一杯やるかい？」

正直この流れでどうして酒に行くのかは分からないが、それが鬼というものなのだろう。噂には聞いていたが、本当にお酒が好きなようだ。

だがしかし、私は酒が苦手だ。この前白玉楼で飲んだ時の記憶もない。早々に酔ってしまったらしく、何かとんでもないことをやらかしてしまったのではと怯える毎日だ。あれから紫さんの私を見る目が怖くなってる気もするし……。

「いえ。お酒は苦手なので……」

「こんな美味しいものが？　信じられないねえ」

言いながら、一気にお酒を啣る勇儀さん。見てるだけで酔いそうな勢いだ。

「まあ、苦手なものを勧めても仕方ない。それでさっきから溜め息なんかをいついてどうしたんだ？」

……気付かれてたんだ。流石に鋭い。

どうやら相談に乗ってくれるようだが、知らない鬼にあんなこと

を言っているものか判断に迷ってしまう。

「……え、と。その」

「ははは、言いくいんなら別にいいさ。地上の話でもしておくれよ」

「す、すみません……」

謝ると、笑って「構わない」と言ってくれた。なんとというか頼もしい姿だ。理想のリーダー像、とでも言うのかな。

「そうそう。地上にいるのなら、あいつには会った？」

「あいつ？」

「私と同じ鬼さ。その様子じゃ会ってないみたいだけど」

地上にも鬼がいる？ 天狗たちはそんな事一言も……あーでも、霊夢さんが宴会がうんちゃらかんちゃらとか、文さんも一人だけ戻って来たとか言ってたような書いてたような……まあ、そんな気がしないこともない。

そんな調子で会話は続いていく。会話というか、私が訊かれたことに対して答えているだけなのだが……どうしてだか楽しい。おそらく、この勇儀さんの性格がそうさせているのだろう。

「（……この人なら、言っても平気なのかな）」

この短時間で、私がここまで他人に好意を持つことは珍しい。今回はその勘を信じてみようかと思う。それに、鬼は嘘を嫌うと言う。今はあの事に対して忌憚のない意見を聞きたくもあるから丁度いい。

「実は」

意を決して、私はさっきまでのことを話し始めた。

「なるほど。つまりはあいつらにどうやって謝ればいいのかわからない、と」

「そういうことです……」

「真面目だねえ。そんなことされたら逃げ出しても当然だと思うけど」

「勝手に飛び出してしまったわけですし、そこは謝らないと失礼だと思います」

「その心意気はいいね。若い奴にしちゃあ中々だ」

そう言って盃を持っていない手で頭を撫でられる。いや、撫でられるというか、もうぐしゃぐしゃとされる感じだが、それに不快感も感じない。

不思議なことに、なんだか勇儀さんといると安心する。頼りになるし、綺麗だし、強いし……これがカリスマか。

「ま、悩まないでいいと思うけどね。その気持ちをそのまま伝えればいいさ」

「……大丈夫でしょうか」

「心配性だね。そんなの気にする奴らじゃないから安心しな」

まだ悩んでいる私を見て可笑しそうに笑う。そうされると、なぜ

か本当に安心できるから不思議だ。

でもやっぱり、なんとなく行きづらいんだよね……。俯き気味で
そう考えていると、今度は優しく頭にも手をかける。

「一人で行き難いのならついてあげよ。だからそんな顔をし
ないで笑ってな。そっちの方が皆喜ぶよ」

「……はい」

微笑を浮かべながら返事をする、満足したように一つ頷き、私
の手を引いて地霊殿に向かって行く。

……なんだろう。すごく、格好いい。

引つ張られている手に優しさや温かさを感じながら、尊敬を込め
た目ですっと勇儀さんを見続けた。

再び地霊殿

「先程はすみませんでした……」

「いえ、私たちも配慮が足りなかったわね。ごめんなさい」

「ごめんね、白」

再びやって来た地霊殿。素直に頭を下げて謝罪する。

因みに、ここつれてきてくれた勇儀さんはすぐに帰ってしまった。避けが飲みたくなつたとかで。……鬼つてどれだけ飲めるんだろ。

まあ兎に角、勇儀さんの言った通り急に逃げたことを地霊殿の皆さんは笑って赦してくれた。良かった。これで心にしこりを残さないで地上に帰れる。

「お詫びに今日は泊まっていけない？ きちんと御持て成しをするから」

「いえ、結構です。私の方が失礼なことをしましたし……それにそろそろ帰らないと……」

「……さっきのことは白の中でどういう位置になつたんだろ」

こいしさんが何か言っている気がするが聞こえないので気にしない。どうせ無意識に呟いた何かだろう。

「いえ、泊まっていって。お詫びがしたいから」

「でも、そんなのご迷惑では……」

「私たちがしたいだけよ。気にしないで」

「ですけど……」

「いいから泊まっていきなさいと言ってるの。いい加減理解して？」

「すみませんごめんなさい一晩お世話になります」

「そう、いい子ね」

反射的に謝ってしまうくらいに恐怖を感じた。流石は数多のペットを飼われているお方だ……。

こうなったら、私が気にしている『ここに来た時は夜だったから、地上はそろそろ朝なのでは?』という疑問は投げて捨てるのが一番だ。この方に逆らってはいけない。

得体のしれない恐怖で身を竦ませながらも、隣の部屋で準備をするというお隣さんについていくことにする。客人といえど、やつぱりそういうのは手伝わないといけないよね!

……い、いや、さとり様から逃げたいとかそんなわけではないんだよ?

「お隣さん……何ですか、これは」

「あはは……さとり様もこいし様も、ついでにお空も『白が泊まってくから宴会よ』って乗り気になっちゃって……」

宴会というより酒宴だ。見渡せば部屋の至る所にある大量の酒。確かに地底は酒系のお店が多かったけど……。

どうする。さとり様とこの量の酒を同時に対処するのは不可能だ。更にこいしさんとお空さんも加わったとしたら、私は二度と日の光を拝めないかもしれない。(地上に帰れない的な意味で)

……どうしよう、いい案が浮かばない。けれど時間が止まってくれるわけもなく、酒宴は始まる。

慌てて今すぐに出来そうな打開策を見繕う。そして見つけた。安易で稚拙だが、やらないよりはマシだろう。

と、言う訳で。早速実行に移しますか。

「……お姉ちゃん」

「言いたいことは分かるわ。警戒されてるのかしらね、私達」

「だろうね」

「あの子ども動物の言葉が分かるみたいね。あんなに懐かれるのは誤算だったわ……」

「いいなあ。私も白に撫でられたい」

「お空!？」

……なんだか聞いちゃいけない会話が最後にあつた気がする。

まあ、それはともかくとして。私の逃げ道は意外と有効だった様子。嬉しい誤算だ。単に地霊殿の動物を侍らせただけというのには。ここには妖怪化していない動物もたくさんいるから、数はすごいけど。作戦というには残念なものだが、私が埋まるほどの動物と遊べばさとり様たちの近くに居る訳にもいかないということだろうか。

そして実は、これには私の願望も交ざっている。いつも撫でられているけど、偶には私だって愛でる側になりたいという願いが。兎にも角にも、これで一晩やり過ごせるかな……。

「白」

忘れてました。無意識を操れる方がいましたね。それならこの大量の動物たちに紛れ込んでも、私以外は不思議に思いませんよね。でもまあ、一人だけならまだなんとかなる……はず。

「いいしさん、抱き締めるならこっちにしてください」

抱きついてくるいいしさんに撫でていた猫を渡す。

私を抱きしめるよりこっちのほうがいいですって。見てくださいよ、このつぶらな瞳たち。癒されますよね。

そう思っただけの行動だったのに、なぜか不満顔になってしまっている。解せない。

「どうしました？もしかして猫が嫌いですか？」

「そうじゃないけど……今はこっちのほうがいいかな」

猫を離して空いた手で、再び腰回りに抱きつかれる。あーあ……猫が逃げちゃった。というか何だろう……心無しかさとり様たちの視線が厳しくなっているような。

「ねえねえ、白は地上にいて楽しい？」

「……突然ですね。まあ、楽しいですよ。最近は何れませんが」

最近の事を思い返すと、自然と苦笑が浮かんでくる。紫さんを筆頭としてすごいことされてるよね。よく耐えてると自分でも思う。

「じゃあ地底（じつ）は？」

「楽しいですよ。ここも地上も……優劣なんてつけられないくらいに」

「（そんなこと言われたら、ここに住んでなんて言えなくなっちゃうなあ……）」

妖怪の山で天狗や河童、群れの狼たちとしか関係を持っていないかった私にとっては、今の状態は何もかもが初めてといっても過言で

はない。知り合ったばかりとはいえ、地上も地底もいい人や妖ばかりだ。それこそ多少のからかいは許容できるくらいに。

……とは言っても、さっきの事はちょっとアレだったけど。

「私の世界を広げたくっかけになったのはこいしさんです。おかげで、今がとても楽しいです。本当にありがとうございます」

「っ……！ ど、どういたしまして。（やっぱり欲しいなあ………笑った顔可愛い）」

「……こいし様、攻めてますねえ」

「そうね、本当に。あれが外で得てきた経験かしら」

「こいし様、ああいう駆け引きつまそうですよね」

結局、あんな調子で酒宴を乗り切った。つまりは一晩寝ずにいたということだ。

最終的にさとり様にもお空さんに絡まれてしまい、流されないように自我を保つことで精一杯で楽しめた記憶が殆ど無い。

あーもう………眠い。早く帰って今日は一日寝てようかな。

番外 紅魔館で職業体験？（前書き）

今までの作品でこれほど恋愛色の強いのはないです。
なので苦手な方は即バックをお願いします。

ちなみにお相手は咲夜さんです。

それでは上記やその他諸々も許容できる方のみお読みください！

番外 紅魔館で職業体験？

ある日の紅魔館。

その主withメイドと半獣が向かい合っているところから始まる物語。

「白、あなたにこれをあげるわ」

「…レミリアさん。私の目が確かなら、それは所謂メイド服というものなのですが」

「その通り。ちなみに紅魔館のものよ。着なさい」

「それがメイドさんによっていつの間にかここに連れて来られた客人への言葉ですか」

家にいたはずなのに何故ここに居るのかさっぱりわからない。時止めて連れてくるとか荒業にもほどがあると思う。

「そんな顔しないでよ。タダで働かせる気はないわ」

「働かせるところは決定なんですわね」

大丈夫。話がいつの間にか決まっているのはいつものこと。

怒るか帰るかは話を聞いてから判断しよう。

「ほら、最近あなたここに来なくなっただけでしょう？」

「何処の世界に危険な目に遭うと分かっただけで来る人がいますか」

「結果としてフランに皺寄せがいったのよ。ちょっと痼癢起こしちゃって」

ちよつと、で片づけていい問題なのだろうか、それは。

しかしそうだったのか…教えてくださいよ咲夜さん。

そういうことなら断らないですから。原因は私にもあるようだし。

…え？一番の原因は此処に来たくないようなことをやった目の前の吸血鬼さんじゃないかな？

「で、そのフランがあなたに会いたがってるから相手してあげてくれない？」

うん、それだけだったなら良いんですよ。問題なく快諾できるんです。

「…なぜそれを着る必要があるんですか？」

「フランの要望」

そんなバカな！？

まさかの言葉に呆然としている私を見ながらも言葉を続けられる。

「『お姉様には咲夜がいるし、パチュリーには小悪魔がいるから私も欲しい!』ってわけのわからないことを言い出したの。おそらくは従者が欲しいってことだろうけど」

「…それで白羽の矢がたったのが私ということですか」

「そう。今日だけでいいからお願いできない?」

いつもの命令口調ではなく、きちんと頼まれてしまつと断りづらい。うう…これでフランさんが喜ぶのなら…!

「…分かりました。着ます」

「え、いいの?」

おそらく断られるかと思っていたのか、心底意外そうな声だった。私だつて着たくはないけれど、事情が事情ですからね…。

「はい。フランさんの要望に応えられるかは分かりませんが…」

「十分よ、お礼を言うわ。じゃあ咲夜、白を着替えさせてあげて」

「はい、お嬢様」

「一人で着れますよ!？」

ここでの私は自分で服も着れない子供認定されているのだろうか。むしろ見た目で言うなら目の前の方がよほど……。

「遠慮しなくていいのよ？」

「微塵もしていませんので大丈夫です。それより着替えられる部屋に案内してください」

「…分かったわ。こっちよ」

「どうして今残念そうな声色だったんですか!？」

咲夜さんって、よく分からない。

「うう……足がスースーする」

着替えての第一声がこれ。
普段こういう服は着ないので、なんとなく落ち着かない。
というか…

「裾短いよね、これ…」

なんかもう、下着が見えそうで見えないくらいの短さ。尻尾が出てもギリギリで見えない。

どう考えても私に合わせて作ったとしか思えないんだけど……。

「似合ってるじゃない」

「わきゃああああ!？」

いきなり現れた咲夜さんに驚いて変な悲鳴をあげてしまった。

服装と相まってとても恥ずかしいし、いきなりだったのでパニックになる。

どのくらいかと言うと、赤くなった顔を隠すことを優先して咲夜さんの胸に飛び込むというもっと恥ずかしい行為をしてしまったくらい。

「い、ごめんなさい咲夜さん!今なにかすごいことを…!」

「(お、落ち着きなさい私!で、でも羞恥で真っ赤な頬とか垂れ下がった耳と尻尾…ああ、もっと乱してみたい…!)き、気にしないで。私がいきなり声をかけたからだもの。そ、それより早く妹様のところに行くわよ?」

なぜか私と目を合わせないで矢継ぎ早に言葉を並べた咲夜さん。どことなく危険を感じたのは気のせいだよね?

地下室に向かう道を教えてもらい、他の人に見られないように猛ダツシユで駆けていく。

……なんで咲夜さん、あんなに息が荒かったんだろう？

扉の前に立ち、再び自分の姿をみて溜め息を吐く。

(やっぱり恥ずかしいよこれ……。着替えてこようかな……)

今更なことを思いながらも、これでフランさんが喜んでくれるなら……！と自分を鼓舞する。

そして覚悟を決め、扉をノックする。

「 ……誰？咲夜？食事ならそこに置いてって」

「 いえ、白で……ってうわぁ!?!? 」

返って来た声はとても不機嫌そうで、中に入れてくれるのに時間がかかると思っていたら名前を名乗るだけで扉が勢いよく開いた。危ない、もう少しで顔と扉がお友達になるところだった。

「 白！来てくれたの!?!? 」

「はい。遊びに来ました」

本当は拉致です、と言いつうになるのを堪えて抱きついてきたフランさんを撫でる。

本当に嬉しそうな笑顔を浮かべてくれるのはこちらとしても嬉しい。最近の私の周りは捻くれた人が多いので尚更新鮮な反応だ。

とりあえず中に入れてもらい、今まで何をしていたかを尋ねる。すると返答は読書。パチユリーさんから借りたらしい。

「それより白、どうしてそんなの着てるの？」

「…似合わないのは重々承知してますからあまり見ないでください。理由はまあ…レミリアさんに言われて、です」

「そんなことないよ！すっごく似合ってる！」

その会話でふとレミリアさんの言葉を思い出す。確かフランさんは従者が欲しいと言っていたはず。なら…

「ありがとうございます、フランお嬢様」

やってみた。自分で言っておいてなんだが、似合っていない。ほら、フランさんも目が点に…あれ？輝いてきた？

「ど、どうしましたかフランさん…」

「もう一回！もう一回言って！」

「え、えっと…フランお嬢様？」

「可愛い！うわぁ、ありがとう！」

そう言って再び勢いよく抱きついてくる。

少し苦しいけど、これは喜んでもらっているという解釈でいいのだろうか。

「喜んでいただけて何よりです。フランお嬢様」

嬉しそうに笑っているフランさんを抱きしめ返し、私も笑い返した。

「ふう…」

時刻は朝5時ごろ。既に陽が昇っている。

そんなわけで夜通しはしゃいでいたフランさんは夢の中。それを確認して地下から上に戻ってきた。

うん、正直かなり疲れた。何あの体力。さすが吸血鬼としか言いようがない。

多少乱れた服を着直し（やましいことは何もしていない。決して）、一息つく。帰りたいがその前にこれを着替えることが優先だ。弾幕で少し破けた部分があるので謝らなければいけないし、咲夜さんに会うのが良いだろう。どこに居るのか分からないけど。

「あれだけ体力使って、更にこの広い紅魔館で人探し…？無理な気がする」

今だって気を抜けば寝てしまいそうなくらい疲れている。

しかしそうも言ってもらえないのが現実なのでゆっくりと歩き始める。

「咲夜さん…居ませんかー？」

こんな時間なのでレミリアさんも寝ているだろうし小声で呼ぶ。意味がないとは思うが、黙って歩くと私の意識が彼方へ飛んで行ってしまいそうなので仕方ない。そこでふと気付く一つの可能性。

『あれ？この時間だと咲夜さんも寝てるんじゃない？』

…時を操れても人間だし、大いに有り得る。というか何故最初に気付かなかった。

仕方ないので挨拶は諦めて、もう帰ろう。

そう思い直しさつき着替えた部屋へ足を進める。

途中、足がもつれたり少し時間がかかったが無事に部屋に到着。もたれかかるように扉を開ける。するとそこには

「あれ…？咲夜さん」

「すう…」

備え付けられたベッドで眠っているメイド長の姿。見てみるとメイド服のままなので、おそらくはうたた寝の類なのだろう。瀟洒な咲夜さんの意外な一面を発見した。

いつもとは違い、年齢相当の寝顔。文さん辺りなら激写している。

「…疲れているでしょうね、主があれでは」

さりげなく今までの鬱憤を晴らすかのように毒を吐く。

本人の前では絶対に言えないのでこのくらいは見逃して欲しい。

しかし疲れているのは事実だと思うので今はこのまま休んでもらうことにしておこう。

「…寝顔って無防備だなー」

実際、メイド長という立場の彼女がこんなに誰かが近寄っても起きないのは問題だとは思いますが、疲れすぎているのだと納得しておく。

しばしの間、少し離れた所に腰かけ寝顔を見つめる。やっぱり咲夜さんって…

「…綺麗、だよね」

ポツリと口から出た言葉に恥ずかしくなる。誰も聞いていないと分

かっているはずなのに。

咲夜さんが気になり始めたのは最近のことだ。きっかけはレミアさんたちに弄られた私をいつも慰めてくれたから。そんな優しい所に惹かれたのだと思う。

しかしこういう気持ちを持ったことなんてないわけで、どうしていいのか分からない。

周りに相談しようものなら酷いことになるのは目に見えているのでそれもできない。

…だから、自分の気持ちに整理がつくまでは何もしないでおこうと決心している。

そもそも咲夜さんが私をそういう目で見ることはないだろうから、このまま封印しておくのもいいと思う。

今以上の関係を求めて、今の関係が壊れてしまうのは辛いから。

ただまあ…私もまがりなりにも感情はあるわけで、その…好きな人が無防備に目の前で寝ている姿とかを見ていると変な気分になってしまう。

「少しだけなら…いい、よね？」

あれだよな。こんなところで寝ている咲夜さんが悪いんだよ…たぶん。

心の中でそう考えつつ起こさないようにそっと近づく。

そしてそのまま　柔らかい頬に口付けた。

「……／＼／＼き、着替えよう」

どうしようもなく照れてしまったので、誰にと言つ訳でもないが誤魔化すように立ち上がる。

否、立ち上がるうとした、が正しい。

私はベッドに引き込まれていた。犯人は私を横抱きに行っている咲夜さ…ってちよつと!?!?

「さ、ささ咲夜さん!?!?ま、まさか起きて…?!?」

「ええ、しつかりと。いいものが見れたわ」

「っ／＼ち、ちが…あれは!?!?」

「欲を言えばもっと押ししてもらいたかったけど…まあいいわ」

「ちよつ…ん!?!?」

開こうとした口は強制的に閉じさせられた。咲夜さんの唇によって驚いて声を発しようとしてもそれは音にならずに消えていく。

「はっ…さ、咲夜さん…?!?」

「白。さっきの貴女の行動…期待してもいいのよね？」

「期待…？」

「私は貴女が好き。だから今の行動を起こした…白はどつなの？」

「す、好きって…え？あ、あの！？」

「落ち着いて。もう一回されたい？」

その一言で硬直する体。いや、決して嫌がっているという訳ではないんだけど…いきなりすぎる展開に頭がついていかない。

つ、つまり咲夜さんが私のことを好きって言ったんだよね？え、これ本当に現実？

「…返事は？」

「っ…わ、私も好き、です／＼」

「ありがとう。嬉しいわ」

そう言って綺麗に笑って強く抱きしめられる。おそろおそろ私も抱きしめ返すと、よりその力が強くなる。少し震えているのは気のせいだろうか。

「咲夜さん…？」

「…ずっと、こうしたかったのよ。でもあなたは自由で誰でも翻弄するから…諦めかけてたの」

「…そうですか？自分では良く分からないですけど…」

「そうなのよ。でも、漸くそれが叶ったわ」

近づいてくる顔に意図を理解し、今度は目を瞑ってそれを待つ。予想通り訪れたキスに抱きしめている力を強くして応える。

どのくらい時間が経ったのか、離れていく唇とともに目を開ける。すると目の前には何か思いつめたような顔をした愛しい人。

「白…」

私の名を呼ぶかすれた声に、何を求めているのかを理解する。少しの躊躇いもあったが、最終的にそれに応えるように私からもキスをする。

するといつの間にか視界には天井と咲夜さんの顔。背中にはベッド。これが何を意味するか分からないほど子供ではない。

「…いいのね？色々と溜まってるから優しく出来ないかもしれないわよっ？」

「お、お手柔らかにお願いします…」

私の言葉を合図に、本日3度目の口付けが降ってきた。

「おまけ的な何か」

「メイド長…腰が痛いです」

「貴女が悪いわ」

「まさかの切り返しにびっくりです」

「あんな格好されて我慢しろって言う方が無理なのよ。むしろ起き上がるだけ有り難いと思いなさい」

「立ち上がれないんですけど…これじゃあ帰れません」

「今日は1日ここでゆっくりしてなさい。お嬢様には言っておくから」

「ですけど…」

「いいから。あんまりつづいづい言つと今度こそ起き上がれなくするわよ」

「お心遣い感謝します。暫くは勘弁して下さい」

「…さて、そろそろ行かなくちゃ」

「さりげなく無視された!？」

番外 紅魔館で職業体験？（後書き）

あれえ？当初は添い寝程度で終わらせる予定だったはずなのに……。
あるえ？

これが暴走の極みでしょうか。もう駄目かもしれないですね、私の
脳内。あ、今更だ。

最近、いいネタが思いつかないです……。
なので「こうして欲しい」や「このキャラ出して」みたいなのを感
想に書いて下さると有り難いです。

番外（別名は暴走回）のリクエストなども受け付けます。

なるべくはそう言ったご意見を参考にしたいので、宜しく願いま
す。

天上に住みし人間（前書き）

紫の若干キャラ崩壊警報発令。若干です、たぶん。

天上に住みし人間

今日も気の向くままに散歩をする。慣れた道なので目を瞑って歩いていても支障はない。もちろん、整備などされていないのでそこには気を使わなければいけないが。

それが悪かったのだろうか。目を開けたら眼前に降ってきた厄介事。だが、今日のそれは少々毛並みが違う。そう思いながら目の前に降り立った人間　天人を見つめる。

「……」

「私に何か用？」

私に気付いたその人は、面倒くさそうにそう問ってきた。ていうかやつちゃった。ポカンとしてないで何事もなかったかのように通りすぎれば良かった。

「いいえ。ただ、どうして天人ともあろう御方が地上にいらっしやるのかな、と」

「暇なのよ。天界での暮らしって」

とりわけて天人の生活に興味はなかったので生返事を返す。それに関してちよつと睨まれたが、無視して一応自己紹介をした。最近ツッコミの技術とスルースキルが上がっている気がするならない。それにしてもこの天人　比那名居天子と名乗った　はああ言っただが、だからといって気軽に地上に来ていいものだろうか。聞けばそれなりに高位な方のようなのに。

その疑問を口にするのと不機嫌そうになってしまった。しまった、これは地雷だったのか。

「天界では働く必要も悩む必要もないけど、毎日が歌って踊っての生活。そんなの耐えられるわけ無いでしょう。地上の方が面白いわ」

天人と言うのは地上の生物を嫌うものと思っていたが、目の前の人は違うようだ。

位からくる自尊心は高そうだが、そこを刺激しなければそれなりの関係を築けると思う。……築く気はないけれど。

「ところで妖獣」

「はい？」

あ、やっぱり自分を高く見てるのは確定だ。自己紹介をした意味が無いじゃないか。

「暇？」

「散歩の途中です」

「そ。じゃあ一緒に来なさい」

「いやそれおかし」さつさと行くわよ「……はい」

強く言われると断れないこの性格、どうにかならぬだろうか。初対面の人の命令さえ聞いていたら私の身がもたない。……というか、皆が殺気を出してくるのがいけないと思うんだ。

久しぶりに来た気がする博霊神社。聞いた話によると、天子さんはここを倒壊させた事があるのだとか。能力の無駄遣いだ。

「何か失礼なこと考えてない？」
「……滅相も御座いません」

天人というのは勘が鋭いようだ。眼光鋭く睨んできて怖い。

「……まあいいわ。さっさと行……げ」

「どうされました？」

「最悪だわ……。なんで昼間からアイツがいんの？」

「あいつ？」

境内に目を向けると大妖怪、八雲紫さんの姿を確認出来た。あちらも気付いたようで私と目が合った、と思っただらとても顔を顰められた。……あれ、嫌われてる？

何かしてしまっただかと思いついてると、不意に馬鹿と形容してもいっくらの力で天子さんに肩を掴まれた。すごく……痛いです……。

「あなた、あの妖怪のお気に入りでしょ？」

「……お気に入り？」

言われて紫さんにやられたことを回顧する。式にされそうになったり、酒を無理に飲まされたり、無理難題を吹っ掛けられたり……。うん、これでお気に入りって言われても困る。ただの玩具じゃないか。

「ふふつ、良い事知っちゃったー」

「何が……ひゃあ!？」

いきなり後ろから抱き締められたと思ったら、手を尻尾へ伸ばされる。そのまま付け根を擦るように触られたものだから、変な声が

出てしまった。

「や、やめっ……あっ」

「へえ、こういうところは動物なのね。尻尾つて性感帯なものね」

「分かってるなら……やめて、くださいっ……！」

しかし私の願いも虚しく、その行為を続けられる。だんだんと足に力が入らなくなって倒れ込みそうになった時、紫さんが私たちを引き剥がしてくれた事でそれは終わりを迎えた。

見たことがないくらい不快感を表している紫さんなのに、私を抱き締めている腕は優しい。天子さんから守るように回される手に安心を覚えて気が抜けてしまう。

「……何用かしら、天人。ここはお前の来るところではない」

「別にいいじゃない？ 好戦的で困るわ、地上の妖怪は」

「この子を襲った罪は重い。今この場で息の根を止めて差し上げましょうか」

「だってその子、あなたのお気に入りでしょ？ だつたら是非とも手に入れたいじゃない。貴女の悔しがる姿が目浮かぶわ」

「貴様……！」

抜けた気が一瞬にして戻ってきた。何この一触即発の空気。相当仲が悪いんだね、この二人……。

それより、このままだと弾幕どころの騒ぎではなくなる気がする。強大な力を持った二人が殺し合いなんて始めたら、周囲一帯が消し飛んでもおかしくない。なんとかして止めないと……。

現状で一番効果があるのは、やはり博霊の巫女。期待を込めて神社を見ると、当然ながらその姿を確認した。必死に目でどう收拾をつけるのかを尋ね……ん？ 何か言ってる？

常人より優れた耳と眼を駆使して何を言っているのかを調べる。微かに聞こえてくる声と、視認出来る唇の動きを合わせればそう難しくもないことだ。

えっと、何々？ 『今から私が言うことを繰り返さない』か。どういうことだろう。

疑問を考える間もなく霊夢さんは次の言葉を紡いでいる。つまり今からの台詞を私も言えつてことなのかな。まあ、やってみよう。

「紫様あ、体が熱いよ……。もう立つてられないから、抱っこして……？」

「っ！ 白、大丈夫よ。今すぐ私とその火照りをなくしてあげるから。天人なんかに触られたままじゃ気持ち悪いでしょうし、貴女の全てに私を刻み込んであげるわ」

今までの殺伐とした空気はどこへやら。一転して甲斐甲斐しく私の身を案じてくる紫さん。息が荒いのは気のせいだと信じている。天子さんもこの変わりようには驚いているようで、口を開いて啞然としている。気持ちはよく分かるけど。

「ちよ、ちよっと……」

「今は天人風情に構ってる暇はないのよ！ 白が私を求めているの！」

「白、よくやったわ。そしてあんたはちよっと黙ってなさい」

ここで真打ち登場。

……遅いなんて思っていない。変な事を言わされて怒っているなんてことも私に限ってあるわけがない。

「……分かった分かった、悪かったわよ。だから睨まないで」

「本当に悪いと思つてます？ まあ、もういいですけど……」

「動かないで済むんならそっちのほうがいいじゃない」

「博霊の巫女が一般半獣を犠牲に平和を手にしてどうするんですか」

紫さんからも解放され、伸びをしながら霊夢さんと話をする。そんな私の傍で、ふらふらな紫さんが立ち上がった。実は今、霊夢さんが紫さんに向かって攻撃をしていたのだ。いくら紫さんといえど、無防備な状態で、しかも片手で私を抱きしめていたから喰らったらダメージは大きい。

おかげで冷静さを取り戻したようなので、このことに関して霊夢さんを咎める気は一切ない。

「霊夢、不意打ちは卑怯よ……」

「あんたらが暴れたらまた神社が壊れるでしょうが！」

「まあまあ。いいじゃないですか、大きな怪我でもないですし」

漸く自由になった嬉しさで、自然と笑顔になりながら言う。するとなぜか紫さんが押し黙ってしまった。ついでに霊夢さんも。

訳がわからない状況に首を傾げていると、霊夢さんが少し慌てて神社に上がらないかと聞いてきた。断る理由もなかったのでお言葉に甘えてそちらに向かう。

あれ？ 誰か忘れているような。

「……私、最後空気じゃない。何なのよ、この扱い……」

天と地、相容れぬ人妖

現在、私は紫さんに背中から抱き締められています。他人様の家で一体私は何をされているのでしょうか。

「紫さん、いい加減離れて下さいよ……」

「駄目よ。あんな奴に触られたんだから消毒しないと」「消毒つて……」

ここまで露骨に嫌悪感を示すほど相手を嫌っているのか。だがそれは天子さんも同じらしく、今も私を挟んで睨み合っている。おかげで私の精神力がガリガリと削られている。

「あら、貴女に触られる方が汚いんじゃない？ 地上の妖怪は泥臭いもの」

「幼稚な挑発ね。天上の生活で呆けているんじゃない？」

「……（イラッ）」
「……紫さん、喧嘩したら二度と口利きませんよ。そして山に一生引き籠ります」

「わ、分かっているわよ。ちょっとしたお巫山戯じゃない」

「……ならいいですけど。嘘だったら藍さんに言いつけますからね」
後ろを振り向いて言う。私を挟んでこんなことをしないで。本当に。」

「……本当にお気に入りなのね。見てて気持ち悪いくらいだわ」
「そうなのよね。なんであんなに固執してるんだか」

天子さんと霊夢さんが話す声が聞こえてくる。が、その疑問の答

えが私に分かるわけもない。むしろ教えてください。

考えつくのは式にして藍さんと雑用をやらせたいからくらいだが、私を使役しても何の役にも絶たないと思うんだけどな……。

「はいはい。……どうして藍にこんな懐いちゃったのかしら」

「優しいですから。尻尾が九本あるのにも懂れます」

「私の式になれば毎日会えるわよ？」

「最近誘い方が雑になってませんか？ 出来ればそのままやめて欲しいですけど」

「あなたは最近冷たくなってない？」

「気のせいです。別にこの前お酒突っ込まれたことなんて気にしてないですもん」

「……………」

どうして黙るんだろう。怒っていないと笑顔で言い切ったのに。

「……謝っておいた方がいいんじゃないの、紫」

「根に持つタイプなのね、この子」

失礼な事を言う二人だ。気にしてないと言ってるのに。

「顔は笑ってるけど目が笑ってないわよ」

おっと、初歩的なミスを犯してしまった。

まあ、実際そんなに気にしていないのですぐにこの表情をやめる。ほんの少しくらいは怒ってるけど。

そしてこの体勢のまま暫く歓談する。新手の羞恥プレイだ。抵抗は尽く抑えつけられてしまったのでどうしようもない。

紫さんと天子さんは未だに唾いがみ合っているが、気にした所でどう

にかなるものでもないのもう放っておくことにする。酷くなった
ら霊夢さんも仲裁してくれるだろう。

「総領娘様、またこちらにいらしたのですか」
「あなたは永江の……衣玖だっけ。何か用？」

不意に空から響いてきた声。それに反応を返したのは天子さん。
声のする方を見上げてみると、桃色の服と羽衣を纏った人がいた。
天子さんの声色が不機嫌そうなそれなので、彼女にとってあまり良
い客ではないようだ。

「『また来たの？』ではありません。あまり地上に来ると、他の天
人の方々から奇異な目で見られますよ」
「もう見られてるから関係ないわ」
「まったく……」

今の短い会話で分かった。衣玖と呼ばれたこの妖怪は苦勞人に違
いない。

「あら。そちらの方は初めましてですね。私は永江衣玖です」
「こちらこそ初めまして。白と申します」

衣玖さんは一体何の妖怪なんだろう。天子さんと知り合いという
ことは、やはり天界に住んでいるのだろうか。

気になったので聞いてみることにした。疑問は忘れるかすぐに解
決させるのが一番だ。悶々と悩むのは疲れてしまふ。

「私は竜宮の使いです。地震が起きるときにそれを知らせて回るのが役目です」

「へえ……と言うことはこれから地震が？」

「いえ、今は総領娘様を呼びに来ただけです」

確かにそんなに急いでいる訳ではなさそうだ。地震のお触れを知らせる時にこんなものんびりはないもんね。でも天子さんを連れて帰る気はなさそう……いや、これは諦めてるのか。

あまり人に迷惑かけちゃいけませんよ、と心の中で呟く。勘の鋭い天人が私を見た気がしたが、きつと気のせいだろう。

「大役あるお勤めをされているんですね。尊敬します」

こんな我が儘そうな天人の尻拭いなんて。それに、地震を知らせて回るというのも大変そうだ。

「そんなことを言われたのは初めてかもしれませんが……。この方々は伝えても戦いを挑んでくるのです」

「伝え方に問題があると思うのだけど」

紫さんの言葉に首肯を返す霊夢さんと天子さん。そんな問題のある伝え方って逆に気になるじゃないですか。

「私はただ伝えるだけが使命。それをどう捉えるかはあなた次第です」

「漠然と『地震が来る』だけじゃ意味が分からないわよ」

「どう捉えるかはあなた次第です」

大事なことなので二回言ったらしい。

……成る程、この話し方だと人によっては反感を買いかもしれない。

その後、衣玖さんは嫌がる天子さんを無理矢理連れて帰っていった。どうやら天子さんの父君に頼まれたらしい。嫌がる天子さんが引きずられながら帰っていくのを、紫さんが指さして笑っていたのが印象的だった。だからどれだけ仲悪いの。

……まあ、もう二度とあの二人が一緒の所には行くまい。私の精神が持たないって。

博麗神社でまったり

「ねえ白」

「何でしようか、霊夢さん」

「ソレ、鬱陶しくないの？」

「若干重たい痛い耳を引っ張らないでください」

「女性にそれは禁句よ。マナー違反だわ」

「じゃあ背中から抱きつくのをやめてください。変な体勢でいい加減腰が限界です」

天子さんと衣玖さんが帰った後、どういう訳かそのまま博麗神社に残ってゆっくりさせてもらったことになった。これぞ摩訶不思議現象。

大してすることもなく暇だったので、今は霊夢さんと将棋を打って遊んでいる。言葉の通り私の背中には紫さんがまた抱きついているが、暑いし対局に集中できないのでそろそろ離れて欲しい。時折良い手を教えてくれるけど、にとりさんや椀さんと大将棋に興じることもある私はそれなりに強いので、助言はそんなに必要ではないのだ。

「『女性』に禁句、でしょ？ 紫の歳ならもういいじゃない」

「白、2四金」

「王手ですね」

「二人相手なんて卑怯よ！」

しかし私も紫さんもその叫びを無視する。どの道私もそこに打つてただろうし。

結局この勝負は私の勝利で終わった。霊夢さんがまだ何か言いたげなご様子だが、それを無視して盤と駒を片付ける。

「……というか紫。あんた白に入れ込みすぎじゃない？ 傍から見ると気持ち悪いわ」

私に引きずられる形で動く紫さんに言い放つ。

「……ここでまた重いとかが言ったら今度こそ無事じゃ済まないか。でもこれ地味に足にくる。」

「私だけじゃないでしょう？ 私以外も大概酷いことしてるわよ」「
「自覚があるならやめてくださいよ……」

そもそも、どうして私の扱われ方を知っているんですか。スキマ（覗き）は犯罪。ダメ、絶対。

「……こう言って素直に聞く相手だったらこんな苦労はしないのに。」

「白ってついつい虐めたくなっちゃうのよねえ」

「何ですか、その訳がわからない理由」

「苛めたいという構いたいというか……。そんな不思議な雰囲気を持つてるのよ、貴方は」

これは褒められているのだろうか。嬉しくも何とも無いんですけど。
ぞ。

しかし反論しても不毛な言い争いになりそうなので自重しておく。とどのつまり、話題をそらしちゃえばいいんだよね。

「……今日、藍さんは一緒ではないんですか？」

「別にいつも一緒って訳じゃないわ。会いたいの？」

「はい、出来れば」

「即答なのね……。私にもこれくらい懐いてくれればいいのに」

「無理でしょ。誰があんたに懐くつてのよ」

「霊夢には言っていないわ」

ぶつぶつと何か呟きながらもスキマを開いてくれた。その中には藍さんが確認できる。

「なんだかんだ言っても、ここまでしてくれる紫さんは優しいと思う。」

「紫様、何か御用ですか？」

「白が貴方に会いたいです」

「白が？」

「お久しぶりです。無理を言って申し訳ありません……」

「ああいや、大丈夫よ。丁度結界の点検も終わったところだったから」

「だから気にしなくていいのよ、と優しく頭を撫でてくれた。……
なんだか橙さんが羨ましい。」

「尻尾を振るほど喜ぶなんて。……主である私を差し置いていい度胸ね、藍」

「わ、私のせいですか!？」

「藍さんの式にならなくてもいいかもしれないです」

「白、頼むから紫様の神経を逆撫でするようなことを言わないでくれ……」

「いやでも、紫さんと藍さんのどちらの式になるかが選べるなら、扱的な点とかから藍さんの方がいい気がする。」

「私だつたら式なんて面倒なものになりたくないわね。主従関係なんてめんどくさい」

「そうですね？ 私は別に嫌なことばかりではないと思いますよ、」

従者というのも」

「あんたも大概変な奴ね。私じゃ考えられないわ」

「だって、主となる人に必要とされているわけじゃないですか」

「……はあ？」

「存在意義を与えられるのはとても幸せなことですから。例えその関係が偽りで利用されているだけだとしても、縋れるものがあるのは良い事でしょう？」

「白、あんた何言ってる……」

「……ただの例えですよ。気にしないでください」

いつになく饒舌な私に、三人は訝しげな視線を送ってくる。それを誤魔化すように笑いかけるが、果たしてうまく出来ているだろうか。

……まだ、偶にこんな事を口走ってしまう。駄目だ、気を付けな
いよ。

「……白」

「何ですか、紫さん？」

「私は貴方が自分をどう思っているのかなんて分からない。けれど、私はあなたを必要としているわ。それだけは心に留めておきなさい」
「私も紫様と同じだ。だから冗談でも『自分には価値が無い』なんてことは言っではいけない。これから先に同じようなことを言ったら、本気で怒るからな？」

「っ……！」

厳しいけど愛情がある　まるで親が子供を叱る時のような表情
をしている藍さんと紫さん。それが今はいない母さんと被って……
胸に何かが込み上げてくる。

父さんと母さんがいなくなってしまう時、後を追おうかと

思ったことが何度かある。私を本当に必要としてくれるのは両親だけで、だったらもうこの世にいる意味が無いんじゃないかと思ってるからだ。生きていてもただ虚無感を感じるだけなんだ、と。けれど、今の言葉を信じるならば。それはただの杞憂で、父さんと母さんの他にも私を必要としてくれる人がいる。こうして、諭してくれる妖怪がいる。

……だけど。だけど、それでも私は。

「……と、まあ。こういう時は優しい言葉と態度を示してあげるべきなのよ」

紫さんが俯いている私を抱き寄せて、顔を胸に導く。これは誰も見てないから泣けということか。有り難くはあるんですけど……窒息しそうで怖いです。

そんな関係ないことを考えていけば涙が引つ込むのも当然な訳で乱れた思考も落ち着いたので顔を上げさせて……え？ ど、どうして頭を押さえつけてるんですか？ ちょっと待って、本気で窒息する……！

「それなのに霊夢。あなたそれでも巫女？」

「巫女は関係ないでしょ。だいたい、なんで私が慰めなくちゃいけないのよ」

「貴方がこの話題を振ったじゃない。一声二声かけてあげるのが人として当然でしょう？ こんなに震えちゃって可哀想に」

「うっ……」

震えてるのは息が吸えてないからです。酸素をください。それと霊夢さん、乗ったのは私ですから。私が全部悪いんです。……と、言いたいのに言えないこの息苦しさ。死ぬ。

「……白。あんたが来てから随分家計も助かってるし、境内の掃除とかもやってもらったし……。それなりに世話になってるから、出来ればこの先も」

「紫様？ 白の震えが止まりましたよ？」

「あ。落ちちゃった」

「ちよつと！？ 私に言わせておいて何よそれ！」

「まあまあ。起きたらまた言ってあげなさい」

「いやよ！」

「やれやれ……全くこの二人は……」

巫女の感情（前書き）

試験中の逃避に書いたのでいろいろ酷いですが多めに見てやってください。

作者もこの話のわけが分かってません。

巫女の感情

side 博麗霊夢

白が気になり始めたのは何回か会ってからだった。

初めのころは紫やレミリアなどの大妖怪、果ては魔理沙や咲夜などの人間にも気に入られている可哀想で変な奴としか見ていなかった。

私は立場上妖怪に厳しい姿勢をとっているが、本音はそんなのはどうでもいい。

誰と一緒にいようと一人でいようと変わらない。妖怪も人間も関係ない。

だから、この子も含めた周りに全くと言っていいほどに興味がなかった。

ある日、追っかけ共から逃げてきた白が博霊神社に来た。

曰く、『ここならあまり追いかけて来ない』とのこと。

そりゃ、うるさくなったら私が問答無用で追いつからただけ。実力で。

ただ、押しかけてきてしまった手前から居心地悪そうにして何か手伝うとまで申し入れてきた。勝手な奴らが多い幻想郷で、いかにも人間らしい思考の持ち主だ。魔理沙とかにも見習わせてやりたい。

そんなことが数回あって、白が博霊神社の構造も覚えられるくらいになった頃に感心したことがあった。

それは価値観。この子は私と同じようにあまり妖怪にも人間にも興味がない。

追いかけてくるから逃げているだけで、自分からは誰も求めない。自身が半妖というのも相まって尚更そんな思いが強いのだろう。

私と似ていると思った。種族は違えど、考え方は一緒。だからと言ってどうという訳でもないけど、妙に感心したのだ。

それからだ。私が白を気にし始めたのは。

気にし始めたと言っても神社に来る白を客としてもてなしたり、一緒にお茶を飲んだりする程度だけだ。

この気持ちは何なのかはよく分からないけど、どうも紫には誤解されている節がある。具体的に言えばニヤニヤ顔と挑戦的な顔がうざい。「ついに霊夢にも春が…」とか「負けないわ」ってどういう事よ。意味が分からないわ。

しかもさっきは突然白に謝れたの励ますようなことを言えだの言われて、仕方なく感謝の意でも伝えようとしたら紫が白を気絶させるし…。その気絶させた方法は私に対する当て付けかっというくらいにイラッときたわ。あれで窒息とかほんとふざけてんでしょ。白も満更ではなさそうにしてたし…。ムカついたから白が起きたら諸共に肅清してやる。

side of a third party

〈霊夢の決意から数分後〉

「う…あれ？なんで私はここに…？」

「あ、白。起きた。『夢符』封魔陣」　　「ってきゃあ!？」

情け容赦なく攻撃を放つ巫女。先程も天人とのくだりで紫に攻撃を食らわせたというのに。

しかし目が覚めたばかりの半獣とそれに気を取られていた大妖怪に躲せる道理はない、と思うなかれ。

仮にも大妖怪、こんな場面には幾度と無く遭ってきている。可愛らしい悲鳴と同時にスキマを開いて半獣共に怪我はない。

それに霊夢は舌打ちするが、更に攻撃を放つ気はないようである。ちなみに半獣は何がなんだか分かっておらず、終始困惑の表情を浮かべていた。まだ意識もはっきりしていないようで、頭を整理しているのかもしれない。

「なんだか今死にそうになった気がするんですけど…」

「気のせいよ。この中の誰がそんなことをするのよ。私の神社でそんなことは起きないわ」

「意識が無くなる前にも死にそうになった気が…」

「それも気のせいだわ。ねえ藍？」

「え…は、はい。この暑さで疲れていたんだな。きちんと体を休めないといけないぞ」

「……そうだったかなあ…」

疑問をすべて否定され、記憶との齟齬に悩む白。

霊夢と紫は互いが互いを睨みつけている。その視線に「嘔吐してんじゃないわよ」と入っているのは言うまでもない。それに気付いた藍は気取られぬよう大きな溜め息をついた。

しかし悩んでいる白を見てまずいと感じたのが、睨み合うことをやめて話題を逸らし始める。

「ま、まあそんなことは置いといて。さっきからそこで覗き見をしている鬼に出てきてもらいましょうか」

「そ、そうね。白、あんた鬼って見たことある？」

「え？ えーと…地底で星熊勇儀さんという方になら」

賢者とは思えないほどの不自然な流れだが、それに巫女ものつかったのが功を奏したのか白が気付く様子はない。

「地底に行ったの？」

「はい。地霊殿の方々に会いに」

「へえ…。どうだった？」

「……………楽しかった、です」

白が思い出したのはさとりやこいし、果てはおくうからつけた行為たち。

楽しかったのは事実だが、恥ずかしくてならないことをされたのも事実だ。

幸いにも沈黙の数秒はスルーされたようで言葉を続ける紫たち。

「今ここにいるのはそれとは違う鬼よ。というわけでそろそろ出てきなさい、萃香」

「相変わらずいい性格してるね、紫も。私ら鬼にそんなこと言えるの紫くらいなもんだよ」

「私も言うわよ？」

「まあ霊夢には宴会の準備とか場所とかで世話になってるからねえ」突然現れた鬼という少女と普通に会話する2人を呆然と見ている白。すでにさっきまでの事は忘れてるので目論見は成功といえる。そんなポカンとしている白に萃香が話しかけ始める。

「こうして面と向かって会うのは初めてだなあ。私はあなたのこと結構知ってるけどね。いっつも誰かにかかわれてるよね」

「ど、どうしてそれを？」

「ん、まあ私の能力だよ。あと勇儀からも聞いたりね」

「勇儀さんから…?」

「うん。あの古明地姉妹に襲われたんだってね。よく無事だったと思っよ」

「ちよっ、それは!」

「白？ちょっと今の話詳しく訊きたいんだけど」

「私もよ。藍、あなたは萃香から他にもそういいう事があったか聞き出して逐一私に報告しなさい」

「だからちがつ、あれは…」

「霊夢、隣の部屋って使って平気よね？」

「構わないわ」

「話を聞いて…」

首根っこを捕まれ引きずられていく白。

前門の紫、後門の霊夢。このコンビから逃げられるものはそうそういない。

襖が閉じられた後の叫び声に深く藍と萃香は同情した。

「…あちゃー、私のせいだよね」

「これ以上紫様に報告するようなことはないよな？」

「あるにはあるけど、言わないほうがいいよね」

「そうしてくれ。さて、私たちはどうするか…」

「多分酷いことされてるだろうから^{ひんが}勞^{らう}ってあげれることでもしてあげたら？」

「そうだな…そろそろ夕餉時だから食事でも作ってあげようか」

「おっ、いいねえ！今夜はちょっとした酒宴になるかもね」

博麗神社の話はまだ続く…

巫女の感情（後書き）

試験中なのに投稿。英語終わったな。

そんなことはさておき、萃香を出してみました。口調が掴めてないので。それなのに次話にも続くという自分でも訳の分からないことをしでかしました。どうするよ私。

関係ないのですが、リア友にこの小説バレました。

生温い目で「お前やっちゃったな」みたいなことを言われました。それを聞いた他の友人も探し始めるとかこれ悪夢？

まあそんなことはいいんですが、それをうけて最初の話を読み返してみたらこれは酷い。口調とか一致してないorz

ということが分かったので今後はちょいちょい修正とか加筆をしていこうと思います。

気が向いたら読み返してあげてください。喜びます。

これぞ修羅場？（前書き）

友人からのネタを使ってみた。

でも書いてる途中で兄にタブを消された。つまり一回執筆中のデータ消えました。

結論。投稿が遅くなり、何を書きたかったのかわからなくなった。

「これぞ修羅場？」

「うう、酷い目に遭った…。身体の節々が痛い…」

「知ってるかしら？ こういうことを自業自得っていうのよ」

「絶対に違…。何でもないですごめんなさい私が悪かったです」

「よろしい」

そう言っつて悪魔の微笑みを消し、スペカを懐に戻す紫さん。

流石にこれ以上は死んでしまう。濡れ衣だつて何度も言つたのに聞く耳持つてくれないし…。

「あ、でもね」

「……なんですか？ もう痛いので嫌ですよ」

「それはあなた次第。今回のことはさっきの消毒で許してあげるけど、次はないと思つていたほうがいいわよ」

「消毒つてなにをしたのさ、紫」

「霊夢と私で地底の妖怪がおいたをした場所に更にキ「わー！ー！ー！ー！？」…そんなに照れることでもないでしょう？ 頬にちよつとだけじゃない」

「ちよつとじゃないでしょう、あれ！ 何回やっと思ったてるんですか…././」

「なに自分で言っただけで恥ずかしがってるのよ」

「もうやだあ！ 藍さん助けてください！」

「よ、よしよし。よく頑張ったな、偉いぞ。ほら、もう夕食時だから食事でも食べて落ち着こう」

からかうような紫さんの視線から逃げるように助けを求める。

苦笑いしながらも頭を撫でて話題を逸らしてくれる藍さんが私は大好きだ。

このメンバーでただの食事会になるわけがない。

早々と酒を持ち出してきた紫さんと萃香さん、何気に乗り気な霊夢さん。この3人を止める手立ては藍さんと私にはないのだ。

何時ぞやの誰かさんのせいで更にお酒が苦手になった私が萃香さんから本気で逃げていると、いつの間にか微酔ほろ酔い加減かへんになっていた紫さんがいきなりこう言い出した。

「愛してるゲームをしましょう」

「ん？ 何それ、名前からして怪しいんだけど」

「紫が言っただけでも怪しくなるわよ」

「酷いわねえ。でも大丈夫よ。これはただのゲームだから」

ただの、の部分をいやに強調させて私たちを見渡す。

その目が何かを企んでいるように見えるのは気のせいではない。

「ルールは簡単。自分の右隣にいる人にただ『愛してる』って言うの。照れたり笑ったりしたらその人の負け。あ、言われた人は『え？』とか『本当？』以外返答しちゃ駄目よ」

「うわ〜…いかにも紫が好みそうなやつだね。まあいいよ、私はやっても」

「私は紫様がやれというのなら…」

「ふふ…2人はやるって。霊夢と白はどうする？」

「やるわけないでしょ。馬鹿馬鹿しい」

「ふうん、そう…。白はやるわよね？」

「……拒否権なんてないじゃないですか」

「その通りよ。そう、じゃあ…霊夢だけはやらないのね。(折角白の愛の告白が聞けるのに…勿体無いわねえ)」

「っ！…やるわ。付き合っただけよっじゃない」

「(霊夢って単純だな…)」

「その調子よ。順番はこのままでもいいわよね」

このままというところ…こうなるのか。

私 紫さん 藍さん 萃香さん 霊夢さん 私に戻る

……… 作為と悪意を感じる。私はなんでさっきの2人に挟まれているんだ。

「最初は言い出した私からでいいわ。でもただやるだけじゃ面白くないから、負けた人には罰ゲームでもつけましょう」

「罰ゲームって何をするのさ？」

「そうねえ……。無難に照れたほうがキスとかでいいんじゃないかしら」

「どこがどう無難なのか分からないんですけど」

「じゃあそういつことで早速。藍く、愛してるわ」

無視されるなんてもう日常茶飯事だ。

「あ、はい。ありがとうございます」

「…何その切り返し。つまらないわ。この私に言われたんだからもう少し慌てたらどうなの？」

「そう仰られましても…」

「あー、もういいわ。次行きましょう、次」

「……伊吹萃香、愛している」

「フルネームで真面目な声で更には疲れたような顔で言われてもねえ。返答する必要もないってどうか」

藍さん……。今ので更に深い溜息をつかれている……。

「んじゃ次は私か。霊夢く、酒の次の次くらいに愛してるよ」

「むしろ酒の次は何？」

もはやみんな紫さんが最初に言った返答のルールを忘れていてるのではないだろうか。

「言い換えると霊夢より酒が好きだよ」

「すぐくどうでもいいわ」

敢えて言おう。もはやルールなど存在しないと。

「じゃあ次は霊夢だよ。ほら、早く早く！」

「そうよ。後ろも詰まってるんだから」

「何であんたらそんなにニヤニヤしてんのよ！」

うん？ 次って私が霊夢さんに言われるのか。心を落ち着けておかないと。

特に、悪ノリ妖怪による不測の事態にも動じないように。

「~~~~っ！ 白、愛してるわ」

「……………（無心無心無心）」

「ねえ紫。今の霊夢って絶対に照れてたと思うんだけど」

「奇遇ね、私も思ったわ。という訳で霊夢、罰ゲーム！」

そのノリ、なんか嫌だ。

「はあ！？ 照れてないわよ！」

「言い忘れてたけどね、その判断は周りがするの。だから今霊夢が照れてたと思った人は挙手」

手をあげたのは私と霊夢さん以外の3名。半数を超えたので罰ゲーム決定……………ってちょっと待て。

内容って公開処刑で、しかもこの場合私が標的^{キス}？

……………どうしよう。一瞬それくらいはいつも通りだとか思った自分
がいる。

ていうかさっき散々やってたじゃないですか2人とも。

「さね、どうぞ。私たちが気にせずによっちゃいなさい」

「くっ……………腹の立つ顔ね…………！」

「ほらほら早く〜」

「唇でもいいのよ?」

それは本人に訊いて欲しい。そして流石にそこはやめてほしい。

「あとで覚えておきなさいよあんたら…!」

今にも怒髪天を衝きそうな勢いで近づいてくる。

どうして私が恐怖と羞恥を感じなくてはならないのだろうか。最近こんなのはっかりだ。

「白…」

「……………。(色即是空空即是色…心を落ち着ける。私が反応すればするほど酷い事になるんだから…)」

「今更ですが紫様、いいのですか? 白がキスされるんですよ?」

心の中で般若心経を唱えながら目を瞑る。外部の刺激に反応したらいろいろと終わるので頭を空にすることも忘れない。

紫さん…いつもいつも貴女の思い通りになるわけじゃないんだ

「ええ。だって白の初めてはいろいろと私が貰ったもの」

「どついう事ですかそれ!? ……あ」

しまった、と思ったときにはもう遅い。私が不覚にも紫さんの爆弾発言に反応してしまったせいで少し位置がずれてしまった。

そしてその頃にはもう霊夢さんの顔は目の前。そんな距離で止まれ

るはずもなく、当初の予定だった頬ではなく唇どうしが触れる結果と相成った。

事態を理解した霊夢さんがすぐに離れていったので一瞬といえは一瞬。

だがその一瞬はこの場に沈黙を降らすには十分だった。…いや、紫さんは肩を震わせて笑ってるか。

「~~~~っ！／／／」

「あ、ちよっ…」

この状況をどうするか考えていたら霊夢さんが顔を赤くして走り去ってしまった。この状況で置いていかないでください…。

ん？ いやに私は冷静じゃないかって？ あれだ、人は自分の許容量を越えることが起きると逆に冷静になるんだよ。

「くっ…ふふ。霊夢も可愛いところがあるじゃない」

「いやそれもそうなんですけど、今の紫さんの発言のほうに気になるんですが」

「じゃあ次は白の番よ」

「流さないでください」

「もう…。じゃあこれが終わったら教えてあげるわ…貴女の、初めて、を貰ったあとで、ね」

「っ！／＼／」

艶のある声と色香を纏った表情で私の唇に指を押し当てる紫さん。急にそんな仕草をするものだから対応しきれない。

「ふふ…。ほら、白の番よ。私の目を見てきちんと試してみなさい？」

「う…／＼ あ、愛して 「言わせないわよ！ 喰らいなさい、神霊『夢想封印』！！」 って霊夢さあん！？」

轟音が響くのと目の前の紫さんが吹っ飛んだのはほぼ同時だった。ついでに流れ弾で萃香さんも飛んでいた。不意打ちとはいえ鬼さえ一撃で……？

「うわぁ…」

「ゆ、紫様？ 大丈夫ですか？」

大破とはいかないまでもそれなりに壊れてしまった部屋とピクリとも動かない大妖怪2人。

凄惨たる光景に思わず頬が引き攣ってしまう。

そしてゆっくりとこの状況をつくった人を見てみれば、何故かジト目で睨まれる。

な、なんで？ 私になにか気に障ることをしましたか？

「れ、霊夢さん…？」

「…藍、片付けよろしく。白はちょっと来なさい」

「おい霊夢!？」

藍さんの言葉を無視して部屋を出て行く霊夢さん。

どうしようかと視線で訴えると溜め息をついて「行って来なさい」と言われたので慌てて後を追う。

着いた先は霊夢さんの部屋らしきところ。どうしようかと逡巡していると入って来いと言われたので遠慮がちにお邪魔する。戸を閉めると月明かりのみが部屋を照らしていて、お互いの顔もあまり見えない。

「あの…」

「さっきの紫の言葉。あなたの初めてって本当に紫なの？」

私の言葉を切り、唐突に質問をしてくる。その表情は暗闇で見えない。

ただ、声はからかうようなそれではない。

「……………分からないです。私の記憶にはないですが、以前お酒を飲んだ勢いでやったとかが有り得るかもしれません」

「酒の勢い、ね…」

「…お恥ずかしながら、その時の記憶が全く無いので肯定も否定もできません」

酒弱すぎるよね、私。記憶がなくなるとか最悪のパターンだ。いずれ洒落にならない事態が起きるかもとは思っていたが早過ぎる。もう少し人生経験を積ませてからこういう事になって欲しかった。

「まあ境界を弄られていたのも否定出来ないけど…」

そこで言葉を区切り私の方に凭れかかってくる。月光に照らされた顔はお酒の余韻が紅く、どこか思い詰めたようだけど
綺麗だった。 綺

「れ、霊夢さん…?」

「私も今酔ってるの」

そう言って近づいてくる顔。頬を滑る白い手に魅せられてしまう。

「…っ。な、にを………んっ」

目の前の瞳を閉じた顔と、唇にある柔らかい感触に、「やっぱり酒って怖いな」と思い直した。

これぞ修羅場？（後書き）

なんぞコレ。フラグどころの騒ぎじゃなくなってきた。

もうしーらないっ。カオスでいいよ。

本人の意志が不明瞭のまま修羅場になればいいよもっ。

……これからどうすればいいんでしょっつね。ムムム。

白黒つける(前書き)

PV15万突破！ ありがとうございます！

今回はあれです。映姫様の説教の内容が意味不明。
作者の貧相な語彙ではあれが限界です…。

白黒つける

「……………はあ」

「深い溜息ね。どうしたの？」

「……………雛さん」

「具合でも悪いの？」

「いえ……………」

「相談くらいならなるわよ？ これでも貴女よりは長く生きてる神様だから」

「……………知り合いとちよつと深い関係になってしまった場合、その人とは今後どう接すればいいのでしょうか」

「……………はい？」

「つまり、あの……………お酒の勢いで一晩寢所を共にしてしまった場合、どうすればいいのでしょうか」

「……………ええええええ！？ それ本当なの！？」

「……………はい」

私の返答後、雛さんの叫びが妖怪の山に響き渡った。

「整理したいんだけど……あの、そういう行為をしたの？」

「あ、そこまでは。所謂その……深いキスくらいまでです。寢床を共にしたというのもそのままの意味で、最後の一線は越えてない……です。だから気にし過ぎなのかもしれませんが……」

「つまり、キスしたあとにそのまま眠ってしまったと。でもキスだけとはいえ恥ずかしくてどうしていいのかわからない。そういうこと？」

「……その通りです」

私の拙い説明で一から十まで理解してくれた雛さん。流石神様です。こんな事を相談できるのはこの方以外にはいないだろう。文さんたちは新聞に書かれるから論外だ。

「相手は訊かないけど、どうやってそこから帰ってきたの？」

「……お酒の勢いで、とさっき言ったじゃないですか。キスされた際にちよつとそれが入ってきたのと頭が混乱したのとで気絶同然に寝ちゃったんです。でも朝起きたらきちんと毛布が掛けられていますし、着衣も乱れていなかったので取り敢えず安心したんですが……」

「うん、それで?」

「ふと横を見ると相手の方がすごく近い位置に寝ていらっしやって……その寝顔とかが綺麗でその瞬間いろいろ思い出してしまって……頭がわーっとなってしまったので今逃げてきたところなんです……」

「え、今?」

「今です」

「話もせずにな?」

「……はい」

私との問答に終始驚いた顔をし続ける雛さん。神様でも理解出来ないことはあるらしい。ひとしきり頷いたあとに再び私に視線を向けて口を開く。

「白はその相手のことをどう思ってるの?」

「……よく分からないです」

「訊き方をかえるわ。その人のことが嫌い?」

「……嫌い、ではないです」

「そんなことがあった後でも?」

「はい」

「ふふ……そう。ならそれでいいと思っわよ」

「どっという事ですか？」

「さあね。少しは自分で考えなさい」

「……？」

『厄は抜ってあげるから、落ち着いたらその人の所に行きなさい』

そう言い残して雛さんはどこかに行ってしまった。

……落ち着いたら、かあ。いつになるんだろう。

「その妖怪、待ちなさい」

いろいろ思考を巡らせつつ歩いていると、背後から凜とした声が響く。

妖怪とは私のことに違いないので後ろを振り返ると、そこには緑髪に大きめの帽子をかぶった女性の姿があった。

「ふむ……」

「……あの？」

「あなたは自分にやってくる好意の数々を否定し、親しくなり過ぎないようにいつも他人との距離を測っている。頼ることを良しとせず何もかもを一人でやるうとし、本当の気持ちをはなかなかに表に出さない。そう、あなたは自分にも周りにも無頓着すぎる」

い、いきなり怒られた。誰なんだろうこの人は……。

「今の貴方は両親を失って寂しいのにそれを隠し、傷ついている心を見なかったことにしている。その行為は貴方も救われず、周囲にも心配をかけてしまうただの強がりです」

「……っ！」

「他人との付き合いを増やし、もっと頼ること。それが今のあなたに積める善行よ」

誰だかよく分からない人に言われた言葉には効くものがあった。なんとというか……背けていた事実を突きつけられてしまった。

「……善処します」

「そうしなさい。とはいえ、最近はその傾向も強いようなのでそこまで意識しなくても良いとは思いますが」

「そうですか……？」

正直自分のそんな変化になんて気づいていない。なので全く実感が湧かない。この説教をしてくれた人の素性が明らかではないのも相

まっつて。

「生きる者は自分でも気付かぬ内に日々変化しているものです」

「なるほど。ところであの……あなた様は一体？」

「私は四季映姫・ヤマザナドゥ。地獄で閻魔をしています」

……ものすごく偉い人であられた。説教にも説得力があるわけだ。

「閻魔様がなぜこのような所に？」

「貴方のように新たに教えを説いたり、以前説いた者がそれを理解し守っているのか見に来たのです」

この幻想郷で素直に誰かの教えを受け止めて改善する人は中々いないと思う。絶対に紫さんは話半分に聞いて適当にその場を繕って逃げているに違いない。

「その通りです。むしろ八雲紫は私の話を半分も聞かず逃げまわっています。貴方の素直さの1割でもあれば良いのに……」

心を読まれた？ ……閻魔様だからなんでも出来るんだよね、きつと。

そして紫さんは想像以上にお説教が嫌いらしい。やられる側で好きな人はいないだろうけど……。

「次に会ったら半日は教えを説いていられます」

どれだけ長い間逃げてるんですか。私なんてお説教だけの時間なら

五分もかかっていないのに。

「紫さんはまだ博麗神社にいますか？」

「博麗神社に？ あの巫女の様子も見たいし一石二鳥ね。今日はそちらに向かうとしましょう」

「でしたら、私に会ったという事は伏せて頂きたいのですが……」

「理由によりますね。何故？」

「……浅くて深い事情が、で納得して頂ける訳がありませんよね」

「出来ません。どうせ死後にすべて暴かれるんですから閻魔に隠し事は無意味ですよ？」

「どういう脅し文句ですか。」

「……端的に言うと、大人の世界の入り口に霊夢さんと立ってしまいました？」

「……なるほど」

「分かっていただけでしたか。それではよろしくお願い」
「そういう事ならあなたも一緒に行きましょう」
「しまつて何故ですか!？」

「そのような色恋沙汰は一步間違えれば事件に発展してしまふ。よく聞くでしょう？ 恋愛感情のもつれからの殺人などを。罪を犯させないことも私の仕事です」

「裁くことが仕事ですよね!?　というかそんなことしませんよ!」

「そう言っている者ほど危ういのです。いいから行きますよ」

「絶対にしませんってば!」

結局閻魔様に敵うわけもなく、鉛のように重い心を引き摺って博麗神社へ戻っていった。

パニック騒動（前書き）

久しぶりに平日更新した気がする…。

パニック騒動

……とても、目を合わせづらい。
恐らく向こうもそう思っていることだろう。

「あなたはもっと大妖怪たる意識を…聞いていますか、紫？」

「…聞いてます聞いてます。こんな有り難い話を聞けるとは、私はなんて幸せなんでしょう」

「…よろしい。一時間追加です」

こんなお説教が繰り返られているのと同じ部屋に私はいる。藍さんと霊夢さんもこの場で紫さんが説教されている姿を見つめている。萃香さんは閻魔様が見えた瞬間霧になって逃げていった。

2人がこの場にいる理由はよく分からないが、私の理由は至って単純。

ここを離れてしまったらその分霊夢さんと2人きりになってしまう可能性が高いから。あんな事があつた後なので先述したとおり目を合わせることから気恥ずかしい。

そもそも閻魔様がここに連れてくるからいけないんだよ…。
何が恋愛感情のもつれだ。ちょっとした雰囲気とお酒の勢いのせいなんだからそんなのがあるわけがないのに。

紫さんの恨みのこもった視線、藍さんの心配そうな視線、霊夢さん

が私をちらちらと見ている視線をすべて無視して閻魔様から離れない私。

……誰だ今ケルベロスみたいだとか思った奴。じゃあ映姫様はハデスで幽々子さんはペルセポネー？ ……私は何を言ってるんだ。

そんなことはさて置いて。離れないとはいっても映姫様の後ろに控えているだけで、別に身体的接触は私からはしていない。もう一度言うが、私からは。

さつきからしきりに頭やら耳やら尻尾やらを映姫様に撫でられている。地獄にモフモフはないのだろうか。

まあとにかく、説教というものは誰かを撫でながらするものということを経験しているわけだ。

「そんなわけないでしょうが！」

「黙りなさい、紫。これは貴方への罰も含んでいるのです」

「どこがよ!？」

「先程から私を羨望の目で見ていることには気づいています。が、説教が終わるまではお預けです。白もそれまでは近づいてはいけませんよ」

「はい、映姫様」

「…いつからあんたらはそんなに仲良くなったのよ」

低い声でそう言ったのはもしかしなくても霊夢さん。とても不機嫌そうなのに驚いてしまって、思わず映姫様に飛びついてしまった。

「よしよし、そんなに怖がらなくても平気ですよ。博麗の巫女、貴方はもう少し優しく相手に接してあげなさい。特に動物というのは人の感情に敏感なのですから」

「人の感情に敏感だったら、周りはこんなに苦労しないわよ」

「そちらの感情に関してはこの子も非がないとはいえませんが、貴方がたの態度にもいえることです。怖がらせてしまっただけは何の意味もありません」

side 博麗霊夢

「はい、映姫様」

昨日の夜に聞いた戸惑いの声とは違い、純粹に懐いているような、尊敬しているような声で返事をした白。今まで閻魔と知り合いだなんて話は聞いたことがないので、ついさっき会ったばかりだということに親しげに会話をする2人を見て腹が立った。

白に会ったばかりでそこまで懐かれた閻魔と、今朝何も言わずに去ったのに閻魔に言われたから大人しく戻ってきた白の両方に。

「…いつからあんたらはそこまで仲良くなったのよ」

だから思いの外不機嫌な声が出てしまった。こんな事で怒ってもしょうがないけど、なかなか自分をコントロール出来ない。そのくせ、私の声に怯えた白が閻魔に飛びついたのを見て更に腹が立ったとい

うんだから自分でも救いようがないと思う。

耳を垂れさせて尻尾を自分に巻きつけるようにして縮こまっている白。どうみても怯えた犬と同じことをしている。閻魔に撫でられて多少落ち着きを取り戻したのか、こわこわ恐恐といった体でこちらに目を向けてくる。……可愛い。

「人の感情に敏感だったら、周りはこんなに苦労しないわよ」

何となく罪悪感を感じ、白を視界に入れないようにしながら閻魔を睨むように言う。

こんな皮肉まがいなことを本人の前で言ったので私も説教かと思っ
ていたら、予想に反して肯定的な言葉を返してきた。

「 貴方がたの態度にもいえることです。怖がらせてしまっ
ては 何の意味もありません」

正直言っ
て怖がらせた覚えなんてあんまりないんだけど。せいぜい
今くらいなものよ。昨夜は…怖がっていたのかよく分からないし。

ちらりと白を見てみれば向こうも私を見ていたのかすぐに目が合っ
た。しかしすぐに逸らされてしまう。…今、絶対顔赤くなってたわ
よね。

「白、あんた昨日のこと…」

そこまで言っ
たところで今まで何もしていなかった白が行動を起
した。具体的に言っ
と、狼の姿に変化した。

……「いつ、話し合う気皆無じゃない。

もういやだ。此処怖い。霊夢さんと紫さんがすごく恐い。

映姫様と一緒に来た私も悪かったのかもしれないが、主に紫さんの「よくも私を売ったわね」的な視線で氣勢を削がれ、先の霊夢さんの不機嫌すぎる声を聞いて完全に心が折れた。もう根元からポツキリと。

人型の姿で蹲ひづくまるのは何となく嫌だったので、狼の姿になって手近にあった机の下に身を潜り込ませる。………冷静になって考えてみたら、外に逃げるのが最善じゃないか。何をやっているんだ私。これは完全に悪手だ。

「はあ…何をやっているんですか、貴方は」

「話しかけようとしただけなんだけど」

「それであんなに怯えるということは今までにも相当な事をしてきたという証拠です」

近づいてくる足音に身を強ばらせながら尻尾で強く身を抱く。どうしよう。この先どうすればいいんだろう。うわわ、考えが纏まらない…。

「完全にパニックになっていますね。ああほら、尻尾を噛むのはやめなさい」

気づいたらそんなことをしていて、うつすらとだが血も出ているようだ。しかし、もはや何がなんだか分からなくなっているのが構わずに嘔み続ける……と映姫様に力づくではがされた。あんな細身のどこにこんな力が……。

「自傷行為などやってはならないことです。少し落ち着きなさい」

「くうん……」

怒られた……。いやでももう考えが纏まらなくて頭が混乱してきて……どうすればいいのか判断がつかないんです。

「これはストレスからくるものと判断してよさそうですね。迂闊でした……ここに連れて来るべきではなかった」

「くう……?」

勢い良く立ち上がったかと思うと私を引っ張って立たせる映姫さん。何がしたいのかまったくわからない。

「決めました。白、今日は私と共に行動しなさい」

「がうう!?!」

「「「はあ!?!」」

「善は急げと言います。さあ、参りましょう」

「ちょっと待ちなさいよ! 何でそうなるわけ?」

「今、白を此処に留めて貴方達と一緒に居させるとひどく負担になると考えたからです。お互いに落ち着くためにも一時離れたほうがいい」

「私は落ち着いてるわよ！」

「その声を荒らげている時点で落ち着いてなどいない。貴方はもう少し自分の感情を把握するべきです」

「…っ」

「もう文句はないようですね。では白、行きますよ。その姿のままで構いません」

「く〜ん……」

ここに至って漸く私は博麗神社を後にすることが出来た。実際は短い時間だったけど、感覚的に一番長く感じた日だった。

パニック騒動（後書き）

藍様が空気だった……！

私も予想だにしない展開で吃驚仰天しています。勢いで書くところなるんですね。いつもですけど。

しかしやってしまったものは仕方ない。着々と映姫様にもフラグを立て、小町にも可愛がられればいいんだ！

今日はこんなテンションです。それでも良い方なんですよ…たぶん。

閻魔様とぶらり旅(前書き)

後書きに質問があるのでご意見くだされば幸いです。

あと、この回つまりらないと思います。つなぎなので、
何の繋ぎは後書きにて…。

閻魔様とぶらり旅

何がどうなったのか映姫様を背中に乗せてあてもなく歩いている私。背中云々の前に目的地くらい決めておいて欲しいが、だいたい何処に行っても説教すべき相手はいるらしいのでどうでもいいらしい。そんな感じで目的地の決定は私に委ねられているわけだ。

折角なので気持ち新たにやる意味でも今まで行ったことのない遠いところに足を伸ばしてみようと思っっている。不測の事態になっても映姫様がいるし。まあ、この幻想郷の大抵のところは行ったことがないので迷っているわけだけども。

う〜ん…。山とは反対の方に行ってみようかな。奥まったところとか。

「ああ、太陽の畑に向かっているのですか。勇気がありますね」

「……………」

どうしよう。早くも目的地を変えたくなってきた。

「あそこには長く生きた妖怪がいますからね。様子を見に行くのもいいでしょう」

乗り気だ。映姫様意外に乗り気だよ。今更変えられないよね…。

もしかしなくても最近運が悪い。やることなすことすべて裏目に出ている気がする。

「着きましたね。この辺りに居る筈なのですが…」

探さなくていいですから。そういう強力な妖怪の知り合いは間に合っているのをお願いしますこれ以上面倒を増やさないでください…！しかし、こういう時に期待が裏切られるのが私の運命だ。

「珍しい顔ね。いつかの花の騒動以来かしら？」

「そうですね。きちんと私の言いつけを守っていますか？」

「さあ。試してみる？」

「長く生き過ぎるところになってしまつから困りものですね。貴方は少々好戦的過ぎる」

「生憎と素直に言うことを聞く性分じゃないのよね」

強い人妖特有の素敵な笑顔をしている日傘を被った妖怪。

…あれ、対峙してるだけで膝が震えてきた。よく分からない汗も一緒に。

既に私の顔からは血の気が失せているだろう。どこかの巫女さんとかスキマさんにあんな笑顔でいろいろやられたからね！ もはやあの手の笑顔はトラウマなんですよ。

「ところで、その下のはなにかしら？」

「狼です」

「犬じゃなかったのね。大人しく人に乗られるようじゃ狼として失格じゃない？」

放っておいてください。最近狼としての自尊心どころか、生物としての尊厳まで粉々に破壊されているんです。

「この子は心に傷を負ったのでそれを癒すために私と行動しているんです。別に野生を忘れたわけでもないでしょう」

「貴方は動物にまで説教してるの？ それもう閻魔とかそういう次元じゃないわよ」

「この子は半獣です。軽く対人関係に恐怖と不信を抱いているので、喋らなくてもいいようにこの姿になっています」

「その傷ついた動物に乗ってるのね」

「……………」

今の言い分を気にしたのか黙ってしまった映姫様の手を、別に気にしていないという意味を込めて舐める。実際、嫌ならそういう素振りは見せますよ。

「……………（ペロペロペロ）」

「は、白。分かりましたから。擦くすくすりたいです」

「くくく？」

「気を使ってくださっているんですね。ありがとうございます」

「…へえ。その子、強いのかしら？」

「！ きゃ、きゃいん！」

瞬間、緑髪の妖怪から殺気と妖力が溢れ出る。正直あれです。ガクブルです。

「…弱い奴と戦う気はないのよ。そこまで逃げなくていいわ」

戦闘狂という言葉が真っ先に頭に浮かんだ。動物の第六感舐めないでください。

そして野生の動物は敵わない相手には戦いを挑まない。繁殖期は別としても、そんな無謀なことをやったら子孫なんて残せないからね。格上の相手に睨まれたらすぐさま服従か逃げる。これは野生の鉄則だ。動物によつては子供を捨てても逃げることもある。今の私は映姫様を乗せているので腹側を見せる服従の姿勢は難しい。だからちよつとだけ逃げてみた。

「私は風見幽香。花に何かしない限りは私も貴方になにもしないわ」

その名前は確か文さんが「敵にしたら厄介」って言つてた人妖の1人だった気がする。

え、そのほか？ 八雲家主従コンビとか永琳さん、あとレミリアさんはカリスマ具合によるって言つてたかな。

…あれ、私その全員と知り合いだ。これつてもしかして危険な立ち位置にいる？

…私、この散歩が終わつたら今春生まれた動物たちを愛でるんだ。大丈夫、私は必ず…必ず動物達みんなの元に帰るから。

「こつこのつのを死亡フラグって言うのかしら」

「わおおん!？」

馬鹿な!？ 心の声に紫さんのツッコミが!？

いや落ち着け、落ち着くんだ私。紫さんの能力は境界の操作だし、そもそも私の心を読むなんてさとりさんでも出来ない。今のは何か

の気のせいだ、うん。
と、思いつつも気になって人型の姿になる。2人にも意見を訊いてみたほうがいいよね。

「やっぱりこの子、おもしろいわ」

「紫様？ 何をされているんですか？」

「ああ、藍。霊夢も不貞寝しちゃって暇だから、閻魔にも幽香にもバレないようにしながら白にイタズラをね」

「昨日のこともありますし、程々にしてくださいよ…」

「分かってるわ。ただ適当に表情を読み取ってるだけよ」

「（…ストーカー？）」

「いきなり騒いでどうしたのですか？」

「いえ…今、紫さんの声がしませんでした？」

「私の耳が確かならしてないわ。紫と親交があるってことはやっぱり強いんじゃないの？」

「前後の文が繋がってない気がします…。私が貴方様と張り合えるくらいに強かったら、私は今頃平和に生きています。弱いからこそこうして逃げ惑う日々を送っているのです」

どうしてだろう、言っていて悲しくなってきた。私だつてそこの妖怪くらいには負けられないのに…。目の前と追いかけてくる人たちが異常なんだ。

…今更だけど、私を追いかけて何が楽しいのだろうか。まさか全員極度の加虐的思考の持ち主で私をただ虐めたいだけとか言わないよ…ね？ いや最近の行動を見ているとどうも…。

「それもあるわね」

「うわああ!？」

絶対いる！ 見てるでしょう紫さん！

というかなんでさっきといい私の心内語に語りかけてくるんです!？

「意外と貴方つて考えてることが分かるわね。普段はそんなでもないのに。やっぱり今は精神的に弱ってるから?」

そう声が聞こえた瞬間、私は映姫様を連れて太陽の畑から逃げ出した。

今の行動は自分で凄いと思ったよ。狼に変身 映姫様のせて離脱、の流れるような工程。

しかし紫さんが来ない所なんて幻想郷にないよね。何処に行っても

仕方ないんだからもう諦めて帰ろう。取り敢えずは映姫様を三途の川辺りに送り届けようっと。

「幽香」

「久しぶりじゃない、紫。あの半獣が言っただのは本当だったのね」

「ちょっとしたイタズラよ。からかい甲斐があったね」

扇子で口元を隠し笑う紫。それは胡散臭くなく、ただ純粹に思ったことを口に出しているような雰囲気だ。

「ふうん。じゃあ私も色々やればよかったわ」

ふと風見幽香は思う。最近、紫のような強者と戦っていない。今は弾幕という力ある者同士が戦ってもそれなりな被害だけで済むものがある。戦ってみるのもいいかもしれない、と。

「貴方は駄目よ。手加減しないでしょ？」

しかしこの妖怪が素直にそれに応じるとは思えない。しからば、怒らせるようなことを言って挑発すればいい、と。そのような精神を逆撫するのはこの妖怪が得意とし、好きなことである。

「随分入れ込んでるのね。そこまで大切そうにしてると壊したくなっちゃうわ」

これで気分を害せばいい。予想外に激昂して殺し合いになったとしても、それはそれでいい。

そんな事を考えていた幽香は拍子抜けした。なぜなら紫はさつきと態度を微塵も変えず、未だにクスクスと笑っていたからだ。まるで、あなたの考えはお見通し、とでも言わんばかりに。

「残念でもないけど、私は貴方に付き合ってる暇はないの。あの子、いろんな所でフラグを立てるからその回収をしなくちゃいけないのよ」

「折る、の間違いじゃない？」

「そうとも言っわね」

扇子をしまい、クスリと上品に笑ってスキマを開く。

相変わらず訳の分からない奴だ、と内思いながらその場を去ろうとする幽香。

すると、既に半身をスキマに埋めている紫がその背中に声を掛ける。

「…あ、そうそう。幽香、もし本当にさっき言ったことをやったらただじゃ済まないわよ？」

「良い事を聞いたわね。退屈になったらするかもしれないわ」

そう言って振り返ると、顔には変わらず笑みを浮かべているが、目だけが異様なほど冷たい紫がいた。

「あなたの望む展開にはならないけれどね。私や霊夢、幽々子や吸血鬼、更には天狗の大逆襲が待ってるわ。さしもの貴方でも手も足も出ないでしょうね」

「…覚えておくわ」

再び背を向け、日傘をさして優雅に歩いて行く。
考えるは今の言葉。紫の目からしてあれは事実。ただ戦いたいだけなら、生け捕りにして取りにこさせるのが最適だろう。

「いい暇つぶし道具が出来たわね」

そう言った顔は、白が恐怖する笑顔をしていた。

閻魔様とぶらり旅（後書き）

携帯からご覧の方は中々ここを見ることもないのかな、と思い前書きで散々引つ張りました。

早速質問なのですが…。

あの、今回むりやり幽香を出したのはとある番外編を書きたくなつたからなんですネ。

花粉ネタなのでいたほうがいいかなあ、と思ひまして。今考えればそこまでしなくても良かったんですが…。

それですね、あの…その内容がちょっと問題なのかなあ、と。具体的に言えば幼文化するんです。白ではなく、既存キャラたちが容姿だけだなく、中身もきっちり。

オリ主を弄る訳ではないので好き嫌いも別れると思うので、皆様のご意見を賜つて決めたいと思つています。どうか、皆様の忌憚なき意見をお願いします。感想の制限はなくしてありますので、どんどんお書きください。

番外編 幼女がたく（ry）（前書き）

完全なるキャラ崩壊であります。タイトル通り、私の独断と偏見で選ばれたキャラの一部が幼女化します。

いろいろ酷いでもう。勢いで書きましたので…。1万文字超えつてどういふ事だよ私…！

後日これの逆パターン、つまりオリ主が幼女化するのも載せるつもりです。テスト明けになると思いますが…。

なのでキャラが弄られるのが苦手な方は即バックして、そちらをお待ちください。

確認のためにもう一度。

- ・キャラ崩壊
- ・オチなんて存在しない
- ・意味がマジで分からない
- ・その他いろいろもうダメ

が平気な方のみどうぞ！

これだけ注意は行ったので、批判はやめてください。優しく忠告でお願いします。

番外編 幼女がたく(r y

今の私はかなり混乱しています。はい、現在進行形です。なんというか、理解できないことってありますよね？ 例えば目の前に

「え、紫さん…？ いやでも小さいし…娘？ いやいや…」

見知った顔とよく似た幼女がいるとか。

「落ち着け落ち着け。これは夢だ。そうに違いない」

頬を抓ってみるが、一向に目覚める様子がない。これだけはつきりした痛覚を伴ってるのに起きないということは、夢ではないということ。

しきりに私の名を呼びながら走り回っているのを横目で見て頭をかかえる。なんなのこれ…紫さんの新手の嫌がらせ？

訳の分からない事象に頭を痛めつつ状況把握を試みる。しかし今のところ情報は1つだけ。

・目が覚めたら紫さんそっくりな幼女がいた

意味がわからないって？ 大丈夫、私もわからないから。

とにかく情報を集めようと、今現在私の尻尾で遊んでいる紫さん似

の幼女を呼ぶ。すると素直に私の前に正座をした。

……ちがう、これは紫さんじゃない！ あの人がこんな素直に動くわけがない！

変な所で確信を持ったが、そうなるとう当然この子は誰なのかと疑問が残る。取り敢えずはこの子に質問しないと…。

「えっと…貴方は誰かな？」

「白、私のこと忘れちゃったの？」

私の質問を聞くと、小さな目に涙を溜め始めてしまった。そんなことをされても、ただでさえ破裂しそうな頭が更に混乱するだけだ。

「ご、ごめんね！ 何処かで会ったことがあったっけ？」

「ぐすつ…いつも、博麗神社とかで会ってたのに…藍と一緒にいたのに」

……ん？ 藍？ いやいやまさか…。

「本当にごめんね。だから、お名前教えてくれないかな」

最悪の予想を立てつつも確認のため名前を尋ねる。だってまさかそんな

「八雲 紫」

幼児退行とか勘弁してくださいいいいい！！

「わーい！ 白と一緒に散歩！」

「うん…そうですね」

私の住処にいても埒があかないので博麗神社に向かう道中。手を繋いでくれとせがまれたのでそうしている。しかしあちこち動きまわるのですごく疲れる。手がすごく痛い。

これは異変なのかの確認のために向かっているのだが、正直空を飛んで行きたい。しかしそれは、さっきの幼怪…じゃなくて紫さんとの会話で諦めた。

「紫さん、空を飛べますか？」

「今は歩きたい気分だから飛べない」

「…じゃあどうやってここまで来たんです？」

「スキマ！」

「……それで博麗神社に「やだ。歩く」そうですか…」

ざっと説明するとこんな感じ。根源的な（自分勝手な）性格は変わってないようだ。

そんなように振り回されながらも、なんとか博麗神社に着く。なんでこんな疲れるんだ…世のお母さんたちって本当に凄い。尊敬する。

「霊夢さん、居ます…か…」

「いるわよ…。あんたは紫？ 面倒くさそうね」

「そちらは魔理沙さん…ですか」

「そう。というか何これ、異変？」

「それを解明するのも巫女の仕事でしょ？」

「アリスさん…」

神社にはすでに幼女化した魔理沙さんと、その相手をしている大人のアリスさんがいた。人形を操って魔理沙さんと遊ばせている。それをぜひ紫さんにもやっってください。

「紫様！」

「あ、藍だー！」

「よかった…漸く見つかった。白の所に行っていたのか」

「はい、まあ…。それより藍さん、これは一体…」

「私にも分からない。小さくなった紫様を見て混乱していたらいつの間にかいなくなっていて…。今し方冥界にも探しに行ってきたところなんだ」

「冥界は平気だったんですか？」

「ああ。向こうは2人ともかわりなかったよ」

「じゃあこれは地上だけで起きているんですね」

「地上？ 紫様だけじゃ…って魔理沙、か？」

不測の事態に藍さんは混乱している。アリスさんは魔理沙さんの面倒で動けない。霊夢さんは興味がなさそう。…私が動くしかないの？ 嫌だよ。

「霊夢さん…。頼みますから仕事しましょうよ」

「嫌よ。だいたい異変なのかも微妙じゃない。別に害ないし」

「ありますよ。もう…どうしたら動いてくれるんですか？」

「んー？ そうねえ…」

少し考えていたと思うと、すぐに悪戯っ子のような笑みを浮かべて私を手招きする。

訝しく思いながらもそれに従って近づいていくと。

ちゅ、と頬に軽いリップ音がした。

「なあ！？ / / /」

「まあ、これはただの前金だから。これ以上に疲れたら追加を貰うわね」

「…お金にしてください」

「さあね。それより、あなたは永遠亭に行つてこれを治せるか訊いてきて」

「はい。霊夢さん、お気をつけて」

「…あんたもね」

飛んでいった霊夢さんを見送り、私も永遠亭に向かうために飛…ぼうとしたら足を掴まれて墜落した。痛った…顔面強打とか地味に落ち込む…。

「紫さん…スキマはこういうことに使うものではないですからね？」

「霊夢と白がイチャイチャしてるのが悪い」

「してないですよ」

「今キスしてたのにな？」

「今のは…ほら、親愛の印です」

「じゃあ私もする！」

「え、いやちよっ…うむ!? / /」

誰が唇にやってました？ しかもこの幼女舌入れようとしてるし…。
変な知識だけ覚えておかないでくださいよ…。

「っ…。こ、こういう事はもっと大人になってからです！」

「えー」

「えー、じゃないです。とにかく、邪魔をするなら私は紫さんのことが嫌いになってしまいます。ここで大人しく待っていてください」

「すまない、白。紫様は私が責任をもって見ているから行ってきてくれ」

「お願いします」

出鼻を挫かれた気がするが、そんなことより永遠亭に行かなければならない。
博麗神社を幼女と少女2名ずつに任せるのもあれだがそんなことは言ってられないよね。

「というか、どうして子供にさえ攻められるの？」

何のことを言っているのかさっぱりです、アリスさん。

自分の最高速度で永遠亭に向かう。途中焦っていたのか、竹に激突したりしたけどなんとか無事に着くことが出来た。

「すみません、永琳さん。少し緊急のことが……って輝夜さんがあ！」

「白ー！ 一緒に遊ぼう！」

「輝夜！ 白は私と遊ぶんだ！」

「更には妹紅さんまで！？」

「こら、2人とも。白は用事があってここまで来たんだ。邪魔をし

てはいけないよ」

「えー、慧音のケチ」

「ご、ごめんなさい、2人とも。後で時間があつたら遊びますから、今は勘弁してくれませんか？」

「約束ね？ 仕方ないから妹紅、一緒に遊んであげる」

「こっちのセリフだ、輝夜！」

「喧嘩なら向こうでしてきなさい」

慧音さんにそう言われた2人は元気に駆けて行った。馬鹿な…蓬菜人は体にかき起る変化を拒絶する筈なのに、どうして幼女になっているんだ…。

「け、慧音さん。これは…」

「朝、いきなり小さくなった妹紅がいてな…。慌ててここに連れてきたら…ああなった」

「誰です、輝夜さんと仲悪いとか言ってた人…」

今を見る限りでは仲いい部類に入ると思う。まさか記憶にまで変化が…。

「ま、待つてください。永琳さんも…まさか……」

「私なら平気よ。ここでああなったのは姫とてみだけ」

「え、永琳さん。良かった…貴方まであなっていたら幻想郷が終わってました…」

「大袈裟じゃない？ これ、1週間もすれば私が薬を作らなくて元に戻るわ」

「1週間も小さくなった妖怪の賢者を相手取れと…？」

「特効薬がまだあるから持ってくるわ。これを飲めば明日には戻りから」

私の苦労を瞬時に理解してくれた月の賢人様。この御恩は忘れずに紫さんに払わせませす。

すぐに薬の入った袋を渡してくれた永琳さん。あれ…量が多い気がする。

「他にも不特定多数がなつてると思うから、手があいたらその人達にも渡してあげて」

「ありがとうございます。…ちなみに、これの原因って何だったんですか？」

「花粉。大方、誰かが変に品種でも改良したんでしょうね。自然発生では中々に有り得ないわ」

幽香さん…、何をやらかしてくれてるんですか。

霊夢さん気づいてくれたかな…。まだそこら辺を飛んで搜索中じやなければいいけど…。

「姫と妹紅には既に飲ませたし、てゐはウドンゲに世話させてるから、私も漸く一息つけるわ」

「てゐさんも…。幼児化するのには理由があったりするんですか？」

「完全に運ね。花粉だし。てゐなんかはもともと子供みたいな性格だから、違いがよくわからないけど」

「つまり誰がなっけていてもおかしくない、と」

「そういう事。薬を飲ませても今日1日はこのままだし、その辺を逆手にとって黒い歴史でも作ってあげたら？」

「それをする手痛い仕返しが来るので遠慮しておきます。というより、今の記憶って引き継がれるんですか？」

「恐らくね」

そうなるぞんざいな態度は取れないなあ。後でネチネチ言われそう…。

「それでは、私は失礼します。お薬、ありがとうございました」

「気をつけてね。貴方、子供にも強く出れなさそうだし」

「…な、何のことですか？」

「白、子供にいけないことをいけないと教えるのは大人の役目だ。時にはきつくも言ってあげたほうがいい」

慧音さんは子供の扱いには慣れてしている。実際、さっきの輝夜さんと妹紅さんのあしらい方は上手かった。でもそれは毎日子供と接しているからであって、私みたいに年上の知り合いしかいない訳ではないので成せる技。

加えて普通の子供ならともかく、今は知り合いが基底となっている子供。きつく言えなんて無理な話だ。しかもこの記憶は引き継がれるという新情報、下手なことを言って報復されるのも怖い。

「…無難に熟こなすように努力します」

「どことなく後ろ向きねえ。まあいいわ、頑張って頂戴」

「はい。それではお邪魔しま

「中々やるわねもこたん！」

「お前もな、ばかぐちゃ！」

私の声を遮るほどの大きさに聞こえてきた2人の声。返してるんだか認め合っているんだかよく分からない会話だ。この声と共に聞こえてくる爆発音らしきものが無かったら、笑って聞けていただろう。

「……お互いに、頑張りましょう」

「ああ…そうだな…」

「今日1日の辛抱だから…」

「」「」はあ……」「」「」

私たちの心が1つになった瞬間だった。

行きと同じように出来るだけ早く博麗神社に戻る。その上空まで来ると、既に霊夢さんがいた。まさかもう帰ってきてるとは…巫女の勘ってすごいな。

「ん？ あら、おかえり白。どうだった？」

「飲ませれば明日には治る薬を頂いてきました。そちらは？」

「幽香が絡んでたからそれをちょっと粛清してきたわ。というか、薬作るのが早くない？」

「輝夜さんと妹紅さんも幼児化していらっしやっで…。その為に作ったお薬の余りだそうです」

「あいつらも…。ま、こっちにしては渡りに船だわ」

「ですね。早速飲ませましょうか」

相手をしているアリスさんと藍さんにも疲労の色が見える。元が元だからね…。子供になっても元氣すぎる。取り敢えず、まだ手のかからなさそうな魔理沙さんと呼ぶ。薬を渡して飲むように言うと意外と素直にそれを聞いてくれた…。って。

「魔理沙さん、今薬を隠しましたよね？ 見えていますよ」

「か、隠してない！」

「嘘言わないの。小さい時からこつだったのかしら…」

溜め息を吐くアリスさん。そのまま逃げようとする魔理沙さん人形に掴まえさせ、自分は手に薬と水の入ったコップを持つ…。まさか。

「それ」

「うわあああ！」

「…本当にやるとは」

アリスさんは何の躊躇いもなく薬を口に入れ、すぐに水を入れて出さないように口を閉じさせた。うん、鬼畜だ。

「粉薬なんですし、もう少し優しくしても良かったのでは…」

「甘い。こいつは優しくすると調子に乗るから、この位が丁度いいのよ」

しかしげほげほと咳き込んでいる背中をさすってあげている辺り、飴と鞭を使い分けている。流石だ。

「今日1日はこのままなので、それまでお願いできますか？」

「1日ならね。この際だから戻ったときに赤面するようなことでもさせておこうかしら」

みんな考えることは一緒だ。良かった…私小さくならなくて。

「次は…難しい。というか怖い…」

「白、遊ぼうよ」

「ゆ、紫様！」

この人戻ったら赤面するようなこと自分からやってるよね。明日悶えてるんじゃないだろうか。

「紫さん、その前にお薬飲みま」やだ「……………」

素晴らしい反応速度だ。魔理沙さんを見られてしまったか。

「駄目です。飲まないと…ってああ！？ 薬を捨てないでください
！」

「やだもん」

「もんじゃありません。あー、もう……………」

予想通り頭を悩ませてくれる。子どもになって更に我儘になったな…。これならまだいつもの方がいい。
私が途方にくれているのを知ってか知らずか、紫さんが言葉を紡ぐ。

「白が飲ませてくれるなら飲む」

「飲ませる？ 粉薬をどうやって…」

「口うつ」白、私がこいつを押さえ込むからあんたはそれをアリスと同じように突っ込みなさい」「」

「え、いいんですか？」

「構わないわ、やっちゃんなさい」

「ご、ごめんなさい紫さん」

アリスさんほど勢いは出さないよう気をつけながら、粉薬を口に入る。霊夢さんに顔までがっちりホールドされているので抵抗らしい抵抗はないのだが、それがなぜか罪悪感を募らせる。

咽ないように水を流し込ませ、飲み込んだのを確認すると、その目には涙が。霊夢さん、これを見ても放さないってどういう事ですか。

「…白なんてもう嫌い！」

「じゃあ私が貰うわね」

「何を訳の分からない事を言ってるんですか霊夢さん」

拘束を無理矢理解き、逃げようとする紫さんを私は出来るだけ優し

く抱きしめる。ジタバタと暴れるので蹴りなどが当たって地味に痛い。

「ごめんなさい。嫌なことをされたら誰だって気分悪いですよ。でも、飲んでくれないと私たちが困ってしまうんです。分かってくれませんか？」

「……しばらくこのままできてくれるなら、許してあげる」

「勿論いいですよ」

やっぱり思考は子供みたいなんだ。可愛らしいお願いだね、今のあれ？ 霊夢さん、どうして睨んでくるんですか？

287

「……すう」

「寝ちゃいましたね」

「朝から動き回っていたから……。疲れが出たんだろう。白、色々済まなかったな」

「いいえ。お互い様ですよ」

しばらくして眠ってしまった紫さんを藍さんに渡し、変に緊張した体を伸ばす。動物以外の子供を抱っこしたのなんて初めてかも…。疲れた…。
ちなみに魔理沙さんは未だに元気に走り回っている。アリスさん、超頑張ってください。

「…あ、そろそろ私は他にもこうなっている人たちが居ないか確認してきます。永琳さんにも頼まれたので」

「そうか…。気をつけてな」

「白、これを一杯飲んでいく位はいいんじゃない？ 水分補給は大切よ？」

「ま、まあそうですね…」

「だから、はいこれ」

「あ、ありがとうございます…」

どうしてだか私の野生の勘がこれは危険だと警鐘を鳴らしている。しかし笑顔で勧めてくるものを断れるはずもなく、覚悟を決めて差し出されたお茶を流し込む。あれ…思ったほど味は変ではないけど…。

「きちんと飲んだわね？ それじゃあ行ってらっしゃい。あ、終わったら此処に戻って来なさいよ？ 被害を聞きたいから」

「は、はい…分かりました」

杞憂だったのかな…。疑うなんて悪いことをしてしまった。
心の中で謝罪をしながら、私は最初の目的地　紅魔館を目指すの
だった。

「霊夢、何を飲ませたんだ？」

「お茶よ。普通じゃないお茶」

「だからそれは何だと聞いているんだ」

「幽香から盗…譲って貰った、この異変の花粉を混ぜたやつよ」

「おい…そうなると白は…」

「明日小さくなるわね」

「な、なんて事を…」

「別にいいじゃない。これに関わった奴らがある意味一番望んでる
ことでしょ？」

「否定はしないが…」

「ま、そういう事だから神社に戻ってくるように言ったのよ」

一言で表すなら、そこはカオスだった。

「さ、咲夜！ ナイフを投げるのはやめなさい！」

「嫌です！ 美鈴に当てるまでやめない！」

「さっきからもう10本は当たってますよ!？」

「なんだこれ…」

まさか咲夜さんが小さくなっているなんて…。レミリアさんやフラ
ンさんの方が容姿的にましだったろうに…。
昼間なので吸血鬼は外に出られない。故に室内で暴れているので、
部屋がだいぶ酷いことになっている。これを直すのって結局咲夜さ
んなんだろうなあ…。

「しかし、時を止める暴走少女が…。色タイタいな」

「白！ 丁度いいところに来たわね。咲夜を止めるのを手伝って」

「無理です」

吸血鬼でさえ手を焼くのに私が出れる幕なんてない。薬だけ置いてさっさと次の場所へ行…。

「白、覚悟！」

「なんで私まで標的に!？」

「今の咲夜は普通によく切れるナイフを使ってるから気をつけてね」

「無茶言わないでください！」

「妖怪なんだから5本や10本刺さっても平気でしょ？」

「私半分人間なんですけど…」

「あ、そうだったわね」

その一言ですまさないでください。

「レミリアさん、紅魔館で幼児化したのは咲夜さんだけですか？」

「ええ。フランとパチエは図書館でこの光景を笑いながら見ているわ」

姉が鬼畜なら、その友人と妹も鬼畜だ。

「じゃあここに1人分の薬を置いておくので、隙を見てあげてください。飲ませれば明日には戻ります」

「飲ませなかったら？」

「1週間はそのままです」

「美鈴、本気で押さえるわよ。咲夜が1週間このままだったら紅魔館が終わるわ」

「はい、お嬢様！」

美しい主従愛だ。これなら任せても全く問題ない。むしろ部外者が手を出さない方がいいだろう。だから私はさつさと次に行こう。

「逃がさない！」

「だからどうして私を重点的に追いかけるんですか!?!」

「その調子よ、白。そのまま引きつけておきなさい！」

「いやだぁー!?!」

結局この不毛な追いかけっこは、私を憐れに思ったパチュリーさんが魔法で咲夜さんを眠らせるまで続いた。最初からそれをやって欲しいと思ったのは私だけではない筈だ。

「ぐう…痛い」

時を止められた上での無数のナイフを避けられる訳もなく、大量の掠り傷。完璧に刺さっていないのはレミアアさんや美鈴さんが庇ってくれたから。何だかんだ言って、死なない程度にはいつも加減してくれる。死なない程度には、だけど。

次にやって来たのは守矢神社。ここもここで面倒じゃないといいんだけど…。

「あ、面倒くさそうな雰囲気だ」

「白…。丁度良かったわ、手伝って」

「はい。私もうだいぶ特殊な子供の扱い方が上手くなったと思えますよ」

「ここ以外もこうなってるのね…」

「もう各地で目茶苦茶ですよ、神奈子様。でも、どこも住人の半数を超えるほどには幼児化していませんでしたので、そういう意味ではここが一番被害が大きいです」

「そうなの…」

どことなく遠い目をしながら、小さくなった早苗さんと諏訪子様を見る。いや別に諏訪子様容姿変わってないじゃんとか思ってますよ？

「あ、これが薬です。飲ませれば明日には戻りますが…2人となりますと、大変ですよ。というより神様に薬って効くんですか？」

「ああ、別に諏訪子はいつも通りって感じだから数に入れなくてもいいのよね」

そ、そんなことないですよ。ほら、いつものあの、神様特有の…その、み、ミシヤグジ様とか。え？ 関係ない？

「諏訪子は置いておけても、早苗は困るのよ。薬は有り難く頂いておくわ」

「お礼は永遠亭の方をお願いします。私はただ届けただけですから」「ごういう時は素直に受け取っておけばいいの。変な所で律儀というか固いというか…」

「す、すみません…」

「また謝る。…あ、1つ気になっていたんだけど」

「なんですか？」

「このう時に真っ先に駆けつけてくるあの新聞記者はどうしたの？」

「……そういえば」

確かにこんなおいしいネタを文さんが放っておくはずがない。となると、考えられるのは……。

「…薬を届けに行つてきます」

「貴方も大変ね」

「最近ではもう諦めがつかしました。神奈子様、お手伝いできず申し訳ありません…」

「真面目ねえ……。別にいいから、早く行ってあげなさい」

灯台下暗しとはこの事か。家である山のことを忘れるなんて…。そういえば紫さんと歩きまわっても天狗たちが何も言つてこなかった。向こうでも混乱が起きていたのだろう。そうと分かればすぐに戻らないと。

「それでは失礼します。どうしても手が回らなくなったら、博麗神社に行くといいと思います」

「分かったわ、ありがとう」

別れの挨拶を簡単に済ませた後、私は文さんを探しに山に戻った。薬は十分にあるし、最悪他の方がなっていたら道中渡しながら行く。

「あ、にとりさんに榎さん」

「白。無事だったの？」

「お陰様で。それを知っているということは、やっぱり山の中でも？」

「何人かが小さくなってるね」

「おかげで仕事にならないから、将棋でも打とうと思って」

「なるほど。どこもかしこもこんな状態ですから、侵入者はいないでしょうしね」

朝に比べればだいぶ落ち着いてきてはいるらしく、別段混乱もない

らしい。
ついでに文さんの居場所を聞くが、2人とも無事かどうかも知らないということなので私が足を使って探すしかないようだ。

「それではお2人ともお気をつけて。私は山を一回りして来ます」

「大変そうだねえ。手伝おうか？」

「お気持ちだけ頂いておきます。速さには多少の自信がありますし、最近では体力もつきましたから」

リアル鬼ごっこで無理矢理鍛えられたんだけどね。いきなり空間に裂け目ができてそこから現れたり、有り得ないほどの速さで追いかけてきたり、物理攻撃で気絶させられない限りは負けたことはない。しかし勝ったこともない。なぜなら最終的に皆今言ったことをして私を捕まえるから。

「そう？　気をつけてね」

「はい。椛さんも程々に」

やっぱり普通のままが一番だよな。

道々、それなりな人数に会ったが幼児化している方はいなかった。秋姉妹や雛さんからは「神様補正じゃない？」なんていう常人では理解出来ないお言葉まで賜った。あれ、諏訪子様は？

…太陽の畑は遠いから、山にいれば花粉も少ないのだろう。そう考えれば納得出来る。早苗さんや諏訪子様は人里に出ていたりして接する機会が多かったんだ。そうに違いない。

まあ、この推測は間違っていないだろう。だから山はそんなに被害は多くない。誰がなんと言おうと多くない。神奈子様はどうなんだとかいう質問も受け付けない。

つまり、逆を返せば普段歩いている人ほどなり易いということだ。思い返せばそんな人達が幼女になっていた気がする。蓬莱人はノーカウントだ。

「…ですから、文さんがこうなっているのも頷けるわけなんです」

「そうね。にしても傑作だわコレ…！」

「それくらいにしておいたらどうですか、はたてさん」

「えー、もうちょっとくらいいいじゃない。私が念写じゃなくて普通に写真を撮ることなんて中々無いのよ？」

「そうですね…。文さんに怒られても知らないですからね？」

「文だつていろんな人妖の写真を無断で撮ってるんだから、偶にはその気持ちになつてもらわないと」

「確かに、一理ありますね……」

自分が小さくなったときの写真なんて誰も見たくないだろうし、事あることにそれを引き合いに出せば理不尽な要求が多少緩和されるだろう。おそらく、きつと。

「薬を置いておくので後で飲ませておいてくださいね。じゃないと1週間はそのままです」

「そっちの方が平和でいいんじゃない？」

「……」

どうしよう。否定できる材料がない。

「まあ、私が飽きて尚且つ脅は……恥ずかしい写真が十分に撮れたら飲ませるわ」

「本当に誰しも考えることは一緒なんですな」

そこまでして弱みを握ってどうするんだろう。足で使うのかな。そして今日あった人たち皆腹が真っ黒だということがよく分かった。

笑顔でそんなことを言ってたし。

「じゃあ次は脱いでもら「それは駄目ー！ー！」」

腹が黒いとかいう次元じゃない人もいるらしい。

「と、まあ。こんな感じの被害でした」

「どこもこんな感じなのね。ご苦労様、今日はここで休んでいきなさい」

「…お言葉に甘えさせていただきます」

既に空は暗く、精神的にも肉体的にも色々限界が来ている。最後の力を振り絞って神社に来たようなものだから、その提案はとても有難い。……………どうして複雑そうな目で見ているんですか、藍さん。

「紫と魔理沙ももう寝たし、あんたも寝ちやいなさい。明日に備えてゆっくりと」

「どっという意味ですか…?」

「明日は記憶も身体も元に戻った奴らの相手だからね」

「……寝ます」

ある意味今日よりハードですよ、それ…。大人しく休んで、体力を回復させておこう。

そのまま案内された部屋で、私はすぐに眠りについた。……明日に起こる出来事があるな酷い事になるとは知らないままに。

「記憶も身体も元に戻ったあいつらを、小さくなったあんたが相手するんだけどね」

「相手をする、というよりされる、が正しいと思うけど」

「紫様はどうするんだろうな…。今日の行動と、その時の白を見て」

「さあ。むしろ白の小さい時の性格が分からないわね」

「酒を飲むと甘え上戸になったから、そんな感じじゃないか?」

「……飲ませたの?」

「あ、いや、誤解するな、霊夢。あれは紫様が…」

「アリス、捕縛して」

「分かったわ」

「いや、どうしてだ!？」

「白に酒を飲ませてあまつさえ甘えられた？ 羨ま…破廉恥な妖獣
ね、退治してあげるわ」

「破廉恥つてもはや死語に近くない？」

「辞書に載ってるうちはセーフよ」

「どつでもいいから早く放してくれ…」

番外編 幼女がたく（ry（後書き））

ええ、やってしまいました。後悔も反省もそこそこしています

テスト勉強放って書いたので焦りが出ている気がします。

え？ 内容がおかしい、詰め込みすぎだろって？ ……書きたかっただけだよ！ すみませんごめんなさい調子に乗った結果です。

1万文字超えたからってわけでもないですが、そろそろテストなので勉強しないと不味いです。

なのでこの大量の文字にて1、2週間分とさせていただきます。

それでは次回をお楽しみに！

…とか言ってハードルあげちゃったよ。ヤバいどうしよう（笑）

番外編 私が幼女！？（前書き）

テスト？ 何ですかそれは。知りませんな。

という訳でなんだか更新しちゃったわけですが、そんなにカオスくは無いと思います。書いてて色々思うところがありました。

まあでも、キャラ崩壊気味なので苦手な方はご注意を。

番外編 私が幼女！？

神社の朝は早い。それは博麗神社でも例外ではなく、既に巫女は起床して境内を掃除している。

そんな巫女に近づいてくる影が1つ。勿論巫女は気づいているが、どうせ九尾の狐あたりだろうとさして気にした様子はない。

しかしその影を視界に捉えた瞬間、箒が手から離れた。それほどの衝撃だった。

「霊夢おねーちゃん！」

「え？ …は、白！？」

「あそぼー！」

朝も早いというのに元気に走ってきたかと思えば腰回りに抱きついてくる。昨日飲ませたものは確かに効いたようでした。しっかりと小さくなり、子供の姿でも損なわれていない獣耳、尻尾は嬉しそうに揺れている。

「お掃除してたの？ 霊夢お姉ちゃんは大変だね」

「お、お姉っ…！？」

「どうしたの？ 顔赤いよ…風邪？ 大丈夫？」

「え、ええ…。ちよっと、刺激が強すぎただけだから…」

「刺激？」

心配そうに自身を見上げてくる白を霊夢は抱き上げる。異変解決を

行っている巫女だ、そのくらいの力はある。しかし、この幼子をどうにかする手立てはなかった。

「きやー！？」

「うわー！？」

「？ 今のはなに？」

「あー…あいつらも目が覚めたようね。昨日自分がしたことを思い出して悶えてるんじゃない？」

「昨日…？」

2人のそんな会話がなされている中、悲鳴をあげた者たちが勢いよくやって来る。その顔はいわずもがな赤い。ちなみに同時刻、これと同じような悲鳴などが各地で起こったとかそうでないとか。

「霊夢！ 貴方昨日何してくれたのよ！ 白も…って、白はどこかしら？」

「アリスはどこだ！ あいつ私になんてことをしやがったんだ…！」

白がもうちょい早く薬を…おい、その白は？」

「ここにいるじゃない」

「魔理沙お姉ちゃんに紫様だ！」

霊夢が抱いているのは幼女。しかしその姿には聞き覚えのある声、見覚えある尻尾と耳。

何度瞬きしても変わることはないその姿を漸く認め、2名はこう言った。

「…グッジョブ霊夢」

「でしよう?」

「紫様、お目覚めに…白、か?」

「うるさいわよ魔理沙。…可愛いじゃない」

今の怒声ともとれる声を聞いてこちらでも起きたのか、遅れてやって来たアリスと藍。予想してたとはいえ、実際にみるのはやはり違うもので少々戸惑っている。

「アリスお姉ちゃんと藍様! 遊んで!」

霊夢の腕から抜け出し、後から来た2人に駆け寄る白。尻尾ははち切れんばかりに振られている。そんなのは今まで見たことがなく、この場にいるものは驚いた。そんなことを気にせず藍へ飛びつく白。不意の事に蹠跟よんめきながらもそれを受け止め、霊夢と同じように抱き上げる。

「結局懐くのは藍なのね…」

「なんでだろうな…」

「あと、呼び方も違うわよね。お姉ちゃんと様って…」

「年の違いじゃないか?」

「ピチユらすわよ?」

数々の羨望なのか非難なのかわからない言葉をチクチクと受けてい

る藍は、なぜか泣きたくなつたという。昨日今日とで流石に疲れていたらしい。

「そついえばどうして私は此処に…?」

「そ、それは…」

口籠り、助けを請うように視線を向ける藍。それを受けて真つ先に動いたのは彼女の主の紫だつた。

紫は2人に近づき、不思議そつに自分を見てくる白を藍から奪い取……譲り受け、自分も白を抱き上げた。抱っこが流行っているのかもしれない。

「紫様? どうしたんですか?」

「私には敬語のままなのね…。霊夢たちみたいに呼んでもいいのよ?」

「紫様や藍様は偉いからこうです」

「だからさ、お前らはもうお姉ちゃんなんて年でも性格でもないだろ?」

「貴方は黙つてなさい」

「魔理沙お姉ちゃん、藍様は優しくて頼りになるいい人だよ?」

「人じゃないがな。紫は?」

「……偉い人だよ?」

「子供つて正直だよな。なあ紫」

「…白、私のこともこいつらと同じように呼びなさい」

今のやり取りで不機嫌になつたのか、やや低い声色でそつ言つ紫。

普通の子供なら怯えるところだが、白はそんなことはないらしい。しかし怯えはしなくても今の紫の申し出を断っている。胆力はあるてもそこらのこだわりは譲れないらしい。

「お父さんが目上の人には敬語で話せって言ってたし、お母さんもスキマ妖怪の機嫌は絶対損なわせないようになって言ったもん」

「もう既に損なわせてるわよ？」

「子供相手に大人げないぜ。まだ場を濁す術を知らない純真な心から出た言葉じゃないか」

「魔理沙の言うとおりよ。いくらこの中で一番嫌われているからって僻まないことね」

「…ねえ白、私のことは嫌いかしら？」

いつもは飄々（ひょうひょう）としている紫だが、口々に心に刺さる言葉を言われて流石に傷ついたのか悲しそうに問いかける。演技かもしれないが、それは無意味。子供に大人の表情を読み取れるはずもない。果たして、白は本心を口にする。

「うーん…。紫様は苦手です」

「……………」

「見てみるよ霊夢、アリス。あの紫が暗い影を背負い始めてるぜ」

「自分の行動を鑑みれば分かることでしょうに」

「そんなに酷いことしてるの？」

「いや、まあ…やってるな」

またも口々に刺さることを言う。それを受けた紫は悲しみよりも怒

りが勝ってきたのか殺気をその4人に向ける。これはまずい、と藍は慌てて取り繕おうとしたが、それより早く怒りを鎮めるものがないた。

「でも嫌いでもありません。紫様も、困ったら助けられる優しい人です」

「白…！」

「（あいつが無償で助けるのって白くらいだよな）」

「（無償はないでしょ。絶対対価を貰うわよ、あいつ）」

「（霊夢と一緒にね）」

「（白を式にした暁には、いよいよ結界の管理は私に丸投げだろうな…）」

「（今もでしょ？ 大して変わらないじゃない。というかその前提がおかしいけど）」

「（まあ、な…）」

「外野、さつきから五月蠅いわよ」

白の言葉で多少なりとも機嫌が良くなったのか、殺気はなくなった。睨みつけてはいるが。

しかしその空気を再び殺伐としたものに変えるのも、また白なのだ。

「でも、夜寝る時にいきなり隣に来るのはやめて欲しいです…。びつくりします」

「…紫？ あんた何してるのかしら？」

「紫様…最近昼間に行動することが多いと思ったたら…」

「白のために夜行型から昼行型に移行してるのよ」

「しなくていい！ 妖怪は夜に活動してればいいのよ！ という訳

で今から夜まで寝てなさい。霊符『夢想封印』!」

「ふふつ、こんなもの楽しよ……」

「恋符『マスタースパーク』!」

「魔操『リターンイナニメトネス』!」

「つて3人がかりは卑怯でしょ!」?

ぎゃあぎゃああと騒ぎながら弾幕ごっこに発展してく様を、頭を抱えながら見ている藍は気付かなかった。白がその隙に山に戻っていったことを。

「誰も構ってくれなくて暇だった」 後に白はそう語ったという…。

「むう…? 結局あそこにした理由が判らなかつたなあ…。ま、いっつか」

そう呟きながら山道を登る白。飛ばないのは狼としての名残だろうか。てくてくと歩いていると見知った人影が見えたようで、走ってその人のもとへ行く。

「はたてお姉ちゃん! 文お姉ちゃん!」

「はたて! いいから昨日撮った私の写真を返し……白?」

「嫌に決まってるでしょ？　これであんたの弱みは……え、なんでそうなるの？」

「2人とも喧嘩してたの？　駄目だよ？」

「い、いや…喧嘩っていうか文が勝手に絡んできてるだけ…。あれ、昨日はいつも通りだったわよね…？」

「そんなのはどうでもいいわ。これを記事にしなくてどうするのよ！」

そう言う文は既に白の写真を何枚も撮っている。おそらく、というか確実に新聞に載せる気である。当の白は写真を撮られるのが嫌なのか逃げていたが、はたての後ろに隠れることで落ち着いたらしくそこに留まっている。

「くっ…！　はたてとのツーショットなのが腹立たしいけど、これで記事に出来るわ。昨日逃した分、今日は張り切るわよ！」

「あっ！　待て文！　これ記事にしたらいろんなのが来ちゃうですよ！」

「行っちゃった…」

白を置いて飛び去っていった2名。残された白はつまらなさそうに再び道を歩き出す。

しばらく歩くと、前方に目的が現れた。

「（アルファ）！」

嬉しそうな声をあげてそれに近づくと呼ばれたモノも白に近寄っていく。

そして手の届く範囲に来たとき、白はそれに抱きついた。

「探したんだよ？ ごめんね、昨日いなくて。なんだか博麗神社にいたんだよね」

そう言っただけでなく怒っている雰囲気を出している。に弁明をする。それでもは納得していなさそうな視線で白を見る。それを理解した白は行動に出る。

「あれをやれって？ 仕方ないなあ…目、瞑って？」

言われたとおりに目を閉じる。それを確認してから、白は自分の顔を近づけていき

「気持ちいい？」

毛の流れに沿って、撫で始めた。所謂グルーミングである。なぜなら相手は白の群れの狼だから。一応性別はオスではあるが。

「あ、皆も来たの？」

いつの間にか白の周りには10頭程の狼たち。ただ、そのどれもが微妙そうな顔つきをしている（と、分かる人には分かる）。それはそうだろう、何せ自分たちの群れのボスが小さくなっているのだから。

ボス、と言っても白は最近群れに関わらないので実質すべてを任せている。しかし、そこは妖獣のカリスマなのか群れの支持は得ていてとても好かれている。住処に食料を持ってきたり、会ったら甘えられるくらいには。

「やっぱり此処が一番落ち着くなあ…。野生の本能って言うのかな？」

ピントの外れたことを言いつつ狼たちの頭を撫でる。狼たちも何も気にしないことにしたのか素直に甘え始めた。

（1時間後）

あの後何がどうなったのか、子狼と追いかけてこを始めた白。空を飛んだり木に登るのは遊びとして成り立たないのでただ山道を走りまわっているだけだが、それを1時間続けられるのは流石である。このまま何事もなければ一日中駆け回っていたらだが、遂にその何事かがやって来る時間となった。

「…ぬ？」

突然感じた巨大な力に、足を止めてその方向を見つめる。睨むようにそうしていると、横には臨戦態勢に入っている狼たち。どうやらこちらでも何かを感じ取ったようだ。

それを見た白も不測の事態に対応できるように身構える。しんと静まり返った山の中、その姿を現す巨大な力の持ち主。それは

「…萃香様？」

「おお…ホントにちっちゃくなってるんだねえ。まーたあの天狗のデマかと思ってたら」

「ちっちゃく？」

「気にしなくていいよ、そこは。どうやら私が一番乗りみたいだね」
「何がですか？」

「いやいや、もうすぐこの山にたくさんの人妖が集まるから天狗が大変だなんてことさ」

「？ どうしてですか？」

「子供は知らなくていいことさ。で、ここにいると天狗の邪魔になっちゃうから私と一緒に来ないかい？」

「私がおここにいると文お姉ちゃんたちが困るのですか？」

「たぶんね」

「むう……」

少しの逡巡の後、白は首を立てに振った。鬼は嘘を嫌うので、言っていることは事実。天狗の邪魔になるというところが気になったのだらう。

「そつかそつか。んじゃあ行こうか」

「何処どこにですか？」

「地上じじょうにいたらどこでも同じだから、上か下か…どっちがいい？」

「地底に行きたいです！ 勇儀様にお会いしたいです！」

「勇儀もやるねえ。何をしたらそんなに好かれるんだか」

「勇儀様はかつこいいし、優しいし…とにかく大好きです！」

「わかったわかった。ま、取り敢えず行こうか」

「はい！」

狼たちを一撫で二撫でし、萃香と白はその場を後にした。

その後の山への侵入者の数と強さは今までの比ではなかったという
……。

「久しぶりという程でもない地底です」

「白、誰に説明してんの？」

「誰よあんたら」

「お、橋姫さんじゃあないか。勇儀どこにいるか知ってる？」

「馴れ馴れしいわね。鬼は珍しくないけど、それは誰？ 見ない顔
だけど覚えがあるような…。ああもう妬ましいわね」

「ああこれ？ 白だよ」

「…白？ 確かにどこことなく面影はあるけど…」

「今地上で流行ってる新種のウイルスがあつてね。こうなったの」

「お久しぶりです、パルスィお姉ちゃん！」

「お、おねえっ…！？／／／…妬ましいわね早く何処か行きなさ

い！」

「だから勇儀はどっつて」

「知らないわよ！ 旧都にいるでしょう妬ましいー！」

「ありやりや…白、あんまり誰彼構わずそっついうこと言っちゃだめだよ」

会話が成り立たなくなったため、その足で勇儀を探そうと歩き出す2人。萃香の能力を使えばいいのだが、それは白と手を繋いでいるので不可能である。振りほどくという選択肢はない。

「怒らせてしまったのでしょうか…」

「んー、あれは照れてるだけだから気にしなくてもいいよ。後でまた話したらいいんじゃない？」

「はい。…あ、あの方勇儀様ではないですか？」

「うん？ あ、ほんとだ。おーい、勇儀！」

「お？ って萃香じゃないか。珍しいね、いつもは地上にいるのに」
「避難してきたんだよ。この子とね」

「勇儀様！ お久しぶりです！」

「…えくと、萃香？ この子は…」

「白だつて。見れば判るでしょ？」

「見た目からは判らなくもないけど…おかしいだろ、こんな姿になるなんて」

「いやいや勇儀、そんな常識は捨てるべきだよ。昨日は紫さえ…プッ」

どうやら萃香は昨日のことも全て見ていたらしく、それを思い出して笑っている。

その際に白は勇儀のもとへ行き、その胸に飛び込む。どうやら仲間内で飲んでいたらしく、その内の数人が声をかける。

「ははっ。勇儀よ、中々様になってるじゃねえか。母娘に見えなくもないぜ」

「いや、どつちかってえと姉妹じゃねえか？」

「何言ってるんのさあんたら。どうみたって誘拐犯でしょ、あの不慣れな手つき」

「なるほど」

「お前らちよつとそこになおれ」

器用に片手で白を抱えながらも一方の腕を回す。しかし鬼たちは誰も気にした風ではなく、むしろ楽しそうに笑っている。

「そう怒んなって。あの勇儀姐さんが子供を抱く日が来るとは思ってたなかったんだ」

「しかももう一人の四天王はその子供と手を繋いできたなんて…ははは、今日の肴は極上だ」

「…よし、そういう事ならお前らも抱けば同じ穴の貉だな。さあ抱き上げ、ろ…？」

「……」

「おいおい、その嬢ちゃん服掴んで離さないじゃねえか。どんだけ好かれてんだよ勇儀！」

「……白？」

誰の呼びかけにも反応せず、勇儀の服を掴んで離さない白。服を掴

む、とうより最早腰回りに抱きついて胸に顔をうずめている。誰がどう見ても、離れたくないという気持ちが見て取れた。しかし、白を知っている萃香と勇儀は引っ掛かることがあった。自分たちの知っている白は、たとえどれだけ嫌なことであろうとも、初対面の人に失礼な行為はせず、ましてや

「白？ 大丈夫かい？」

知らない人に触られそうになって、ここまで怯える奴ではない。鬼たちの顔だつて人間とさして変わらない、むしろ美男子の部類に入る。男性恐怖症ということも天狗と喋っていたことから有り得ない。さすれば、答えは自ずと限られてくる。

『白は幼少期に何らかのトラウマがあり、初対面の者と関わることを極端に恐れている』

根拠はないが二人はそう思った。それでもない限りこの状況に説明がつかない。

「白、こいつらは悪い奴らじゃない。酷い事はしないから安心しな」

「そうそう。案外良い奴らだったりするからさ」

「…本当ですか？」

「鬼が嘘をつくと思うかい？」

「本当に人間を蔑んだり、馬鹿にしたり……殺したり、しませんか？」

「!?!? …鬼が嫌うのは嘘をつく奴だ。それは人間だろうと妖怪だろうと変わらない。けど、それをしなければ人間をどうこうする気

はないよ」

「ん…判りました」

そう言つて鬼たちのもとへ行く白。鬼たちは今のやりとりをさして気にした風ではなく、単純に白を可愛がっている。白もそんな鬼の性格が良かったのか、心を開いたよう^で楽しそうに笑い始めた。

「…萃香、今のは」

「さあね。でもどうみたつて鬼を、妖怪を…まあ知らない奴に限つただけど、畏怖嫌厭の目で見てたね」

「どういうことだ？ あいつの母親は妖怪なはず…」

「わかんないよ、そんなこと。でも今の言い方だと…」

「白の父親、若しくは親しかった人間は…妖怪に、つてことか」

「…考えて見れば半妖つてさ、完全な妖怪でも人間でもなく、またそのどちらでもあつて…妖怪から見れば弱く、だけど人間から見れば畏れの対象。そんな存在じゃん？ …妖怪にも人間にも、自分の存在を認めてもらい難い」

「まあ、ね」

「この前紫が言つてただけどさ…いや、誰から見ても、白は自分を卑下しすぎてる。能力も相まつて誰も自分の奥深くまで辿り込ませない。自分も踏み込まない。霊夢に似てるよ、こんな所は」

「そうだね。白はどうも…自分に自信がないというか。自分を謙せ^{へりくだ}て、相手を立てることを最優先にしてる節がある」

「弱い自分を守るための処世術つてやつかな。確かにそうしていれば相手を悪い気分にはさせないだろうからね」

「だろうね。でも、じゃあどうしてそこまでして最近交友関係を持つようになったのか疑問になつてくる」

「そうなんだよね…。まあ、変な花粉でちっちゃくなつたから曖昧なところがあるのかもれないよ。私たちを知っている時点で、それはもう本当の子供の時の状態じゃないしね」

「それに、本人が何も言わないんだからこれもただの推測。やめにしよう、こんなしんみりした話、当人抜きでやるもんじゃない」

「当人入れたらもつとしんみりすると思うけどね。ま、確かに今やることはこんなことじゃない」

「そうそう。嫌なことは酒で忘れるのが一番だ。一杯どうだい、萃香？」

「いいねえ」

萃香と勇儀は横目で鬼たちと楽しそうに遊んでいる白を見ながら酒を呑む。そこに先程までの不安げな様子はない。それを確認して人知れず安堵する。

「いやでも、勇儀がそんなに白のことを気にするとは思わなかったなあ。どうしたの？」

「気に入った奴の世話くらいはするよ。特に、あんなに目に見えて懐かれちゃあねえ。無碍に出来るわけがない。私としては、むしろ萃香のほう意外なんだけど」

「私は単に面白いことが好きただだよ。紫と霊夢の三角関係だけでもアレなのに、更にいろんな奴らから好かれてるからね。見てて飽きないよ」

「あー…地霊殿的にもツボらしいしね、白は」

「流石に今の状態で手籠めにされるのは可哀想だからね。実を言うと天人とかの所のが安全だったんだけど、白がどうしても勇儀に会いたいって言うもんだからさ」

「ははは、光栄だねえ。ま、私の妹分である白を手に入れたきゃ私

を超えてからにしまって地上の奴らに伝えておいてよ」

軽口を叩きながら酒を煽る。そして再び白たちの方を見ると、

「何やってんだお前ら!？」

鬼の酒を一気飲みしている白がいた。

「しばらくお待ちください」

「完璧に寝入ったね」

「そりゃ、成長しても下戸な子供に鬼の酒を飲ませたらこうなるよね」

「しかも一気飲みときたもんだ…。何考えてんだ、あいつらは」

目を向けると気絶している鬼が数体。言わずもがな萃香と勇儀がやつたものだ。

ちよつと悪乗りが過ぎたということで、四天王2人から有り難くない拳を賜ってしまったらしい。

実際、身体の出来ていない子供、しかも基底は狼だ。下手をすると大惨事になっていたかもしれない。主に急性アルコール中毒的な意味で。

「にしても、これからどうしようかな。薬は地上にあるけど、おいそれと渡してくれる奴らじゃないし…でも飲まないと1週間はこのままだっというし…」

「地底にいても安全とは言い難いしなあ…。今のとか、地霊殿とか」「けど、地上にいたらそれこそねえ…」

「悪循環だな…」

後にある妖怪は言った。

『鬼が幼子を挟んで話し合っているのはすごくシユールだった。だって狼の幼女と鬼の幼いぶげらっ』

ちなみに、この妖怪の姿を見た者はこの後いないという。

番外編 私が幼女！？（後書き）

前書きでの『色々思うところ』

これはですね、全キャラ出したら收拾つかないし長いなーということとです。

そこで考えました。幼女白を順番に回していけばいいじゃない、と。そんなわけで、後書きまで見てくださっている方にアンケート…というほどのものでもないですが、下からちよいと選んでくださると嬉しいですよ。

- 1 日目～地霊殿
 - 2 日目～紅魔館
 - 3 日目～妖怪の山
 - 4 日目～永遠亭
 - 5 日目～白玉楼
 - 6 日目～博麗神社
- もとに戻ったよ！ 全員集合！

くらいですかね。因みに日付は思いついた順です。ただ、これを決めとかないと後々面倒なのです。

例えばこの結果で博麗神社が選ばれた場合、その前の所には全て行ったものとして話が進められるということです。判り難くてすみません。

そんな感じでお好きな場所を幾つでも良いので、選んでください。うん？ 全部やれ？ それってもはやシリーズ物じゃないですか。

でも、この要望が多かったらそれも考えます。そのかわり書き終わるまで長いですよー？

因みに…要望が来なかったら多分何も書きません。

彼岸？ まだ渡らないよ（前書き）

私、文系なんですけど生物部に入っているんです。

一番好きなのは爬虫類系統なんですけど、もちろん他のも好きです。

何が言いたいのかといいますと、今回のお話は狼の生態について色々書いてあります。

ソースはウイキ先生といろんな本からです。

ですがニホンオオカミの生態なんて審らかになっているわけがないので、想像や他の狼の生態を当てはめています。

確証がないので鵜呑みにせず、興味のある方はご自分で信頼できる文献を探してください。

というか前述したとおり、ニホンオオカミの生態なんて誰も分からないのでテキストに流し読みしてください。

彼岸？ まだ渡らないよ

幽香さんと、おそらく確実に居たであろう紫さんから逃げてやって来たのは三途の川。映姫様が何か言いたげなご様子なのでいつもの姿に戻っておく。

山の裏側の中有の道を猛ダツシユで駆けてきたので少し疲れたが、まあそんなことは二の次。

今は映姫様をお帰しして私も暫くは山に籠ろうと思う。少し気が早い気もするが、そろそろ繁殖について考えようと思っているのだ。

ニホンオオカミというのは個体数が少ない。それはこの地が隔離される前……江戸時代の狂犬病発生時による駆除や、明治時代初期くらの狼信仰増加による乱獲が大きな原因。何でも加持祈祷に頭骨などの遺骸を使っていたとか。なんて事をしてくれたんだか。

そういえば、外の世界ではもう既に絶滅認定を受けているって父さんが言ってたっけ。それが本当ならもう此処にしかないということだ。

そうそう、全く関係ない事だが私は山に迷いこんできた里人に『送り犬』に間違われることがしばしばある。せめて送り狼と呼んで欲しかったりする。

送り犬というのは地方によって狼になったり、単に山犬の事をさしたりと呼ばれ方が違う。それに伴ってなのか行動の伝承にも違いがある。転んだら喰われるだとか、逆に山道の護衛をしてくれるだとか。人の後を付けてまわる習性がニホンオオカミにあるから、その辺りの人間の解釈の違いだろうと思うけど。

因みに私、どっちもやったことがあったりする。いや喰ってはいないけど、転んだところにのしかかって脅したりした。まあ、半分妖怪のほんの茶目っ気なので大目に見て欲しい。きちんと大蝦蟇の池

に來た里人を送ったりもしたし。

話が逸れたが、何が言いたかったのかというと「群れをでっかくしたいよね」という事だ。

基本、狼の群れは家族単位。私は血縁関係なぞ無いが、そこは妖獣ということスルー。というか母さんから引き継いだようなものだから、もとより関係ないといえばそうだけだね。

それで、最近その数が気になり始めた。外の地でも消え、この幻想の地でも消えるなんてことはさせたくない。ならば個体数を増やすしか無いということで、今年辺りから私が全面協力をしよう、ということだ。

なので前段階として今のうちから メス……群れで唯一子供を産む、雌のトップ狼を中心に世話をしておこうと思っっているのだ。

「……く、白！」

「うえい！？ な、何ですか映姫様……」

「いきなり黙っておきながら、何ですかではないでしょう」

「す、すみません……」

「まあまあ四季様。そんな高圧的な言い方は動物には良くないですよ」

「？ えつと、貴女は……」

「あたいは小野塚小町。四季様の部下で、この三途の川で船頭をしている死神さ」

「ご丁寧にも難う御座います、小野塚さん。私は半獣の白と申しませう」

「馬鹿が付く程にお固いね、名前がいいよ。若いうちからそんなだと、四季様みたいになっちゃおうよ？」

「事あるごとに仕事をサボる貴方よりはましだと思いますが」

わしゃわしゃと小町さんに頭を撫でられる。その手つきはどこか勇儀さんを彷彿とさせた。

隣では映姫様が溜め息をついて、軽く小町さんを睨んでいる。

「この状況：死神様に閻魔様に囲まれているなんて、傍から見れば完璧に犯罪者ですね」

「そうでもないさ。傍から見れば自殺志願者にも見えるかもよ？」

「しませんよ。まだ（メスが）子供を産んでないですし」

「こ、子供を産む？ 相手は？」

「群れのボスですよ？」

まー、メスとの相性が悪かったらN.O.2になるかもしれないけど。その辺りについては本人たちに任せていいだろう。

「は、白。もう一度よく考えてみなさい。そういう事はまだ早いでしょう？」

「そうですか？ 性的な成熟は迎えているはずですが…」

因みに、今まで子供を産んでた雌はN.O.2になっていた。順位は変動するものなので仕方ないことだが、そうなると今のメスは初産ということになる。やはり私がついていたほうがいい気がするんだけど…どうして反対するんだろう。

「それは関係ありません。社会的に考えてまだ早いと言っているのです」

「そうでもないと思いますけど…というか私達に社会性を求められても…」

「半分人間なので、そういった節度は弁^{わか}まえるべきでしょう」

「むー…そう言われましても、少子化の波が私のところにまできていまして…。今年からは是非ともあいつに頑張ってもらわないといけないのです」

「うわ…。年からも容姿からも判らないけど、お前さん意外と情熱家なんだねえ…」

「なりません！ そのようなことを考えるのはもう少し成長するか、博麗の巫女とのいざこざをどうにかしてからにしないさい。そうしなければ、あの人妖たちにとって失礼に値します。今は諦めなさい」

「えー…」

狼の個体数を増やすことに対する生態系への影響を心配しているのだろうか。しかしその辺りはきちんと私が何とかするつもりだし、そもそも群れを形成している時点で過度な繁殖は防げるのに。一つの群れで一对のペアしかいないのもそのためだ。

…あ、そうか。この私の考え方が自分勝手に動物たちのことを考えていない。つまり、愛情が足りないということか。それに自分で気付かないうちにはそんなことをするな、映姫様はそう言いたいのかもしれない。

確かにそうだ。今度きちんと皆に意見を訊いてみよう。

「そうですね…。もう少し考えた後に実行しようと思います」

「なるべく実行に移して欲しくないところですが…」

「いえ、いつか必ず実行させてみせます。そして山で平和に暮らす…それが私の夢です」

「どこか切実な響きがするね」

「もう嫌なんですよ…ペットどころか玩具として扱われるの」

「ですが、今言ったことをすると余計ひどくなってしまう可能性が高いですよ」

「ペットは飼い主から愛情を貰えるのに、私はあの人達の加虐嗜好趣味を発散させるだけの傀儡となるんですか…」

「おお、難しい言葉をよく知ってるね。偉い偉い」

馬鹿にされた気もするが、どこか小町さんは憎めない。なんとなく頼ってしまう雰囲気さえある。この人に送ってもらえる幽霊たちは楽しいだろうと思う。

「筋金入りの鈍さですね…」

「何か言いましたか？」

「貴方はもう少し周りの人妖を観察しなさい。あれだけ判りやすい行為をされているというのに…」

「仰っている意味がよく判らないです…」

「まあ、悩め若人よ！ ってことかな」

「ますます判らないです…」

結局こんな問答が30分くらい続いた。山に戻ると意外と疲れていたことに驚いた日だった。

…勿論、映姫様や小町さんにももの凄い誤解を受けているなんて私は

知らなかった。

後日、紫さんを通じて繁殖期である晩秋から晩冬のと看私から目を離さないようにとの御触れが出ていたことも、勿論知らない。

彼岸？ まだ渡らないよ（後書き）

まーた無理矢理感漂う感じで終わりました。

小町との絡みなんてほぼ皆無じゃねーかい。何してんだよ私は。

…まあ、過ぎ去った事は置いておき

次は紅魔館の予定です。おげうさまではなく妹様と絡めたい。
もしくは例の番外編かなあ…。

動物介在活動（前書き）

まさかの同日二回目の投稿。

今回のお話、ちょこっと血が出てきます。戦闘はではないですが、まあ吸血鬼だもの。ってことで。

動物介在活動

動物は人を癒すという。そのため病気で塞ぎがちになっている方などに動物と触れ合わせて元気になってもらうための治療法も存在する。こいしさんもある意味そうだと思う。

しかしそれは動物たちが人間と話せない　つまり人を差別したり、批判したりしないから成り立つことだ。

つまり何が言いたいのかというと…私は人間並みの自我があるので、その役目は向いていないということです。

実は今日、「フランの相手をして欲しいの。ほら、動物ってそういうのに効くっていうじゃない？　大丈夫大丈夫、貴方フランの能力も効かないでしょ？　万が一があつたら労災もおりるから」ということでレミリアさんと咲夜さんに拉致られてきた。勿論ムリヤリ。逃げたら弾幕撃つてくるとかどれだけです。結局最後は咲夜さんに時止められて詰みだし。最初から勝ち目なんてないじゃないですか…というかですね、確かに能力は効きませんが弾幕一発で私消し飛びますよ。本当に。そして私が死んだらどこに労災おりるんですか。

…まあ、そんなわけで現在地下のフランさんの部屋にいるわけだ。他愛もない世間話をしているだけだけど。

「…それで、お姉様つたらね…」

「そうなんです。それはまあ…なんとも言えませぬね」

「でしよっ？」

レミリアさん曰く、私と一緒にだとフランさんは安定するんだとか。動物の神秘ですね。

というかこうしてお喋りするくらいなら拉致らないできちんと話して欲しい。これなら余程のことがない限り断らないのに。

たくさん話して渴いた喉を潤すために、用意された紅茶を飲む。冷めていても美味しいのはすごいというか流石というか。

「咲夜さんって紅茶淹れるの上手ですよね」

「うん、そうだね。…白の紅茶って普通の？」

「普通？」

「人の血入ってる？」

「入ってないです」

なんというか、吸血鬼ですもんね。でも紅茶にそれを混ぜるって斬新…なのか？

「じゃあ、ちょっと頂戴？ 普通のも飲んでみたいの」

「構いませんよ。どうぞ」

カップを差し出すと、すぐにそれを飲み始めたフランさん。容姿と相まって可愛い。

…とてもじゃないけど、吸血鬼ですなんて言われても羽根が無かったら信じられないだろう。

「…ん、これも美味しいんだね。ありがとう」
「いえ、とんでもない」

戻された紅茶に再び口を付ける。…何度飲んでも美味しい。

…ん？ 今一瞬フランさんがニヤリとしたような……気のせいかな。

「これって間接キスって言うんだよね？」

「…あ、本当ですね。すみません、気が付きませんでした」

「…なんだか期待してた反応と違う」

ふっ、紫さんや霊夢さんにこんな事を何度もされたらそりゃ慣れま
す。

もはや私の中で唇以外のキスまではセーフですよ。……霊夢さんの
は、アウトです。

そんな私の態度が気に入らなかったのか、拗ねてしまったフランさ
ん。

頬を可愛らしく膨らませてそっぽを向いている。なんだか手のかか
る子供みただけで、年上なんだよね。怒らせてしまったら後々レ
ミリアさんにも小言をいただいてしまう。早く機嫌を直してもらお
う。

…ちなみに、機嫌を直してもらうのに相当な労力（めっちゃ撫でら
れた）と時間（軽く30分以上）掛かったことは言っておく。

「ねえねえ、白」

「どうしました、フランさん」

「白から血の匂いがする」

「急ですね…。そうですか？」

血の匂い？ それはこの部屋全体に充満しているとも言えるので、鼻が利く私にはどこも一緒なただけだ…。

「うん、絶対してる。この辺からかなあ…」

「ちよっ…腕を引つ張らないでください」

「あ、ここからだ！」

「華麗に無視ですね」

引つ張られている左腕を見てみると、肘の辺りに掠り傷があった。レミリアさんたちにやられたか、何処かにぶつかったのだろうか。

「本当だ。まあでも、このくらい放っておけば治りますよ」

「……………」

「フランさん？」

急に黙って俯いてしまったフランさんに戸惑い声をかける。顔をあげたフランさんの眼は、狂気とかそんな意味ではない危険な色を放っていた。例を挙げれば紫さんやレミリアさんにそっくりだ。……思わず数歩後ずさりしてしまった私を、誰が責められようか。

「フ、フフランさん？ どどどどうしましたか？」

「ねえ…白って半分人間なんだよね？」

「そ、そうですけど…？」

「じゃあ…私が吸血鬼らしい行動をしても仕方ないよね」

吸血鬼らしい行動？ まさか私…食料的な意味で喰われる！？

レミリアさん、どこか安全なんですか！ 私今まさに人生の終幕を迎えようとしているんですけど！？

…と、そんなことを思っていたら肘に違和感。具体的に言うとな暖かいモノ…見ればフランさんの舌が、私の怪我をした部分を舐めていた。

「…ってちょっと！？ ななな何してるんで…うひゃああ！？／＼」

「美味しい…。もっと…頂戴？」

「いや待ってくださいっ…擦りたい…！」

いやですね？ なんかもっとグロテスク…こう、歯をガブツと突き立てられるとか痛みがあるとかならまだ良かったんです。や、良くないけど。一番いいのは何もされないことだけ。

でも…なんとというか今みたいに、ね？ 何となく絵面的にマズイ物をされたら恥ずかしいわけです。

これって理由を知らない人が見たら変な誤解を…

「失礼します。フランお嬢様、お嬢様がお茶のお誘いを……申し訳
ありません。お邪魔しました」

なんと見事なフラグ回収。流石瀟洒なメイドさん……でも待って。逃
げないでください。

「咲夜さん咲夜さん、今のこの状況ってどう見えます?」

「……私の口から言わせるの?」

「いえ、今でもういいです。十二分にこの状態が奇異なものだと
判りました」

「ふふっ…あまあい」

「人間と妖怪のブレンドですよー、と……。さ、レミリアさんが本当
のお茶にお招きしてくれているようなので行きましょう」

「えー、もうちょっと」

「駄目です。ほら、咲夜さんも待っていますから行きますよ」

この待遇の悪さについてレミリアさんに文句を言うチャンスだ。労
災だけではなく給金も払ってもらわなくては割りに合わない。献血
代を寄越してください。

何時まで経っても私の血を狙うフランさんを尻尾で抱え、うつすら
と頬を染めている咲夜さんについていった。

……咲夜さん、「私は二番目でもいいから」ってどういう意味です
か? 貴方も血を飲むんですか? ……うん、此処の人たちって本当
に判らない。

所詮は子供（前書き）

どこかで道を間違えたのかもしれない。

所詮は子供

「あら白……疲れている顔をしてるけど、どうかしたの？」

「……労働条件の改正を要求します」

「却下。……と言いたるところだけど話なら聞いてあげるわよ？
聞くだけだけど」

「じゃあいいです」

「まあ、私の妹が貴方の血を吸ったって言うのかしら？」

「知ってるんじゃないですか……」

どうせ見ていたに違いない。見た目は子供だが頭脳は大人で性格は子供な方だ。……言って気付いたけど、コレって結構最悪の組み合わせっばいよね。

「白の血、美味しかったよ。お姉様も飲ませてもらったら？」

「嫌です」

「あら、気前がいいのね。貴方のことだからってつきり独り占めしたいのだと思ってたわ」

「嫌って言うてんでしようが」

「最近口調が崩れてきたわね。良い傾向よ」

「そーですか」

言っておきませんが別に信用したとかそんな理由じゃないですからね。ただ人の話を聞かないのに腹が立っただけですからね？

ささくれ立った心を落ち着けるためののか、咲夜さんが紅茶を勧めてきた。有り難く頂戴しておこう。冷えても美味しかったけど、や

っぱり熱いほうが美味しいし。

「ん〜、別にお姉様が血を飲んでも一方的なだけだし」

「どつという意味かしら？」

「私は白と唾液を交換したわけだから」

「ゴぶっ!?!? ってうわ熱っ!?!」

「あーあー、何やってるのよ。それよりフラン? 私が白に牙を突き立てれば、その問題は解決できると思わない?」

「白の身体に傷を付けるの? キズモノになつたら可哀想だよ」

「私がそんな失敗をすると思う? 私の唾液が白の体内に、白の血液が私の中に…素敵な体液交換よね」

「一々言い方が生々しい! そんな事言われたら余計に嫌ですよ!」

わざとそういう言い回ししてるでしょう!?! やめてください何か気持ち悪いですから!

「なるほど、言葉攻めには弱いよね」

「これ言葉攻めなんですか!?!」

「白、それより火傷してない?」

「へ、平気です。有難う御座います、咲夜さんってちょ………/ / /」

「ならいいけど………もう少し落ち着きなさいね?」

「すみません………けどあの、顔が近い……/ /」

「あと積極的な行動も苦手みたいね」

「典型的な奥手タイプだね」

「………何か文句があるんですか?」

「ぜーんぜん? 可愛いなあって思うだけだよ」

「………私よりも皆さんの方が可愛らしいですよ」

そんなに私をからかって楽しいのだろうか。そりゃあ私も一応女……雌？ だから可愛いとか言われたら嬉しい気持ちも勿論ある。あのけど、それを言われるのがもつと相応しい方が傍にいたら手放しで喜べない……というか普通にお世辞だと思いますって。

「その上天然」

「確実に恋愛に向いてない」

「動物に先祖返し過ぎですね」

「何なんですかさつきからもっ！」

もしかしなくても馬鹿にされている気がする。全く以て理由が判らないけど。

「全く……鈍すぎるのも問題よ？ それなりに永く生きる妖怪はその過程も楽しむだろうけど、人間は事を性急に進めたがるから」

「……………」

「その顔は思い当たる節があるようね。まあ、妖怪でもせっかちなのはいるから人間と決め付けるのもアレだけど……何があったのかしらっ？」

「……な、何も？」

「顔を赤くしてどもって目を逸らす……これで何もなかったと思う？」

「思わない」

「思いません」

3人で虐めなくてもいいじゃないですか。これでパチュリーさんまで居たらと思うと……。

「思えないわね」

「紅魔館の人たちってフラグの回収が本当上手ですね」

「……いきなり何？」

「いや本当に」

気配どころか匂いすら感じ取れませんでした。怖い此処。これで美鈴さんまで来てしまったら……！

（15分後）

「ここで来ないんだ……」

「白、さっきからなんなの？ いきなり叫んだり黙ったりして」

「いや、今のは期待するところでしょう……」

「訳が判らないわね」

「だって……」

今までの流れを読んだだけなのに……。私も変に毒されて来たなあ。

「もう覚悟は決まった？ さあ、何があったのか吐きなさい」

「どうしてそんなにノリノリなんですか……。面白いことは何もあ

りませんでした」

「そうね。面白いんじゃないかと恥ずかしいことがあったのよね」

「……にゃ、にゃにを仰います。ありま………せんでしたよそんな事」

「カミカミね」

「思いつ切り舌噛んだし」

「嘘も下手なんだ」

「狼なのに」

「4人で貶さないでくださいなんだか酷く刺さるから！」

狼が嘘つくのが得意とかいう先入観は捨てて欲しい。むしろ昔は大神って崇められていたのに、いつの間に嘘付きの代名詞になったんだか。

「もういい加減諦めなさい。私達から逃げられると思うの？」

「だから何も無いと言って……」

「白、貴方最近博麗神社に行かなくなっただって噂よ。魔理沙に何かされたの？」

「いや霊夢さんに……ゆ、誘導尋問は卑怯です！」

「所詮は動物。会話術で私に勝てると思わないことね」

ぐうう、なんとという姑息な手段をッ………！

「ねえパチュリー、お姉様って会話を誘導してた？」

「してないわね。どう見ても白の自爆よ」

「まあ、子供の狼だもんね。文字通り大人と子供の会話なんだから、むしろお姉様の方が情けない」

「……うるさいわね」

見た目だけなら年下な人たちにいいように遊ばれるのはやはり気持ちの良いものではない。無論、妖怪の外見年齢など何の参考にもならないことくらい判っている。が、それでも思ってしまったほどになんだかグサツとくるものがある。

「そんな事より。白、早く吐いちゃったほうが楽よ？」

「……だ、だから何もありませんでしたって。プライベートに踏み込んでくるなら帰ります」

「ふうん、踏み込まれちゃ駄目なことをされたのね」

駄目だ。喋れば喋るほどドツボに嵌まっていく気がする。

お、大人げない……私の周りにはこんな人達ばかりだ。もう少し子供と動物の扱い方を学んで欲しい。え、私をもっと性格が子供な大人の扱い方を学べ？……そっちのほうがいいかもしれない。

「しかし私には切り札がある……助けて紫さん！」

「ふう……本当にこんな目に遭ったのね。私の可愛い可愛い式（予定）に手を出したのですから、当然それなりの覚悟はありますわよね？」

「あら、覗き見？ 随分と低俗なことをするわねえ、貴方」

「……お姉様。誰、この胡散臭い妖怪」

「覗きが趣味のストーカー妖怪です。お嬢様、如何なされますか？」

「態々ご足労頂いたのだから、それなりのお持て成しをしなくちゃいけないわ。……血が滴るくらいの、ね」

「それはそれは……私としても有難い限りですわ」

見よ、この一触即発の殺伐とした空気！ これぞ我が秘策、というか兵法三十六計の第三計『借刀殺人』しやくとうころんだ！ まあ私は消耗した相手を倒すなんて無謀なことをしないで逃げるけど。消耗するといっても吸血鬼と境界を操る妖怪だよ？ 倒すとか無理無理。

……卑怯？ いいえ、生き残るための手段です。

まあ、巻き込まれるのは最も避けたい事態だ。ささっと逃げよう。

「何か言いたいことは？」

「魔法使いを甘く見ていました」

「全く。貴方があんなに頭脳派紛いなことをするとはね」

「いえ、文さんに教わりました」

「あの烏天狗の言う事を鵜呑みにしないほうがいいわよ」

「確かにパチユリーさんが出てくるというのは大誤算でした」

……状況説明、要りますか？ 要りませんよね。

まあささっと簡略に説明すると、あの場で唯一冷静だったパチユリ

「さんに捕まりました。まる。

まさかのダークホースだ。図書館から出て来ないと踏んでいたのに。

「それで、どうする？ 私はこの事をあの人達に告げ口することが出来るけど」

「……ご要望をお聞き致しましょう」

あの人達、というのは確実に紫さんやレミリアさんたちのこと。もしバレたら……想像したくない未来が待っている。既に看破されている可能性も否めないけど。

「そうねえ……じゃあ、私の使い魔にでもなってもらおうかしら」

「私は魔導書から出てこれません」

「そういうのじゃなくて。原理としてはあのスキマ妖怪の言った式と同じかしら」

「……よく判らないです」

「私も」

じゃあなんで言ったんですか。

「それは追々考えていくとして……今日は小悪魔と本の整理でもしてもらおうかしら」

「前半は聞こえなかったことにおきます。本の整理くらいならいくらでもいいですよ」

「それじゃついてきて。小悪魔を紹介するわ」

結局私は誰かの下でこき使われる運命らしい。

悪魔と狼（前書き）

私は妖怪について、東方よりぬ 孫の世界観で考えるときが多々あります。

つまり……和服ってイイよね。ということですよ。

なので白も和服なのさ！ 理由はこれだけなのさ！

まあ、あんまり言及しないのでどうでもいいことですが。

絵を描くなんて自殺行為ですし。私テストでカバーして美術3とか4ですから。

以上、なんだかよくわからない前書きでしたー。

悪魔と狼

あのままの流れで小悪魔さんを紹介された後、パチユリーさんは何処かに行ってしまった。その小悪魔さんから本の整理の作業工程を教わり、現在は一人で黙々と本の整理中。紅魔館は広大、それはこの図書館も例外ではないので手分けをしたほうがいいのだ。そこまですべて複雑怪奇な作業というわけでもないし、分担したほうがお互いに気を使わないで済むしで。

「……………そういえば、あの人達はどうなったんだろう」

お互いに最強を自負している身、ただでは済まない戦いに発展しているかもしれない。どう終結しようとも、私に火の粉が飛んで来ることは殆ど確定事項なのでどうでもいいと言えどもいいが。

「出来るだけ共倒れ方向に傾いてくれると嬉しいんだけどなあ……………」

「残念。もう終わったよ」

「ひょへ！？ フ、フランさん……………驚かさないでくださいよ。とうか終わったって……………」

「うん、あの胡散臭いオバさ……………」

「誰のことかしら？」

「……………条約を締結したの。白に関する」

うん、この時点で嫌な予感しかしないね。紫さんを含めた全員が無傷で此処に集結してるから。

条約……悪魔の契約は絶対だとか聞いたことがあるから、内容が途轍もなく気になる所だ。

「大丈夫よ。貴方にとってもそんなに悪くはない内容だから」

「つまりちよつとは悪い、と」

「揚げ足を取らないの」

「いいから教えてください」

「簡潔に言つとね、貴方が成人するまでは全員で愛でましょう、つてことね」

「考え方が地底の方とまるっきり一緒だ！ あの時も思ったけどそれ私が疲弊するだけですからね！？ 即時撤回してください！」

「いやよ面倒くさい……私はもう帰るわね」

「何のために来たんですか貴方は！」

「貴方が呼んだんじゃない。まあ、朝になったら迎えに来るわ」

「なんで!?!」

「朝からは私の番だから」

「もういやだああ!!」

私の心からの叫びも虚しく、紫さんはスキマに入って見えなくなつた。去り際に、悪魔顔負けのニヤリ顔をしていつて。

「……………」

「……………頑張つて」

膝と手について落胆どころか真つ白に燃え尽きている私に、励ましの言葉をくれたのはいつの間にか来ていたパチュリーさん。無表情

に少しの憐れみを含めた表情で肩に手を置かれる。どうしてだろう、余計に悲しくなってきた。

「全くもう。人間を襲わない以外に条約を結ぶとは思わなかったわ」
「……結ばないでください……」

「私にとっても悪い条件ではなかったもの。無駄に血を流すよりは好都合だったわ」

「私にとっては不都合しかない……」

「そんな事より、どうして貴方がここに居るの？」

私の絶望はそんな事レベルか。もうやだ、早く夜が明け……たら今度は紫さんか。ははは……逃げ道どこるか帰り道まで塞がれてるのか。……泣いてもいいよね？

こんな状態の私に痺れを切らしたのかパチュリーさんが代わりに返答しているのが聞こえる。

「本の整理を手伝ってもらってたのよ」

「なるほど本の整理を……。白？」

「……………」

未だに微動だにしない事に何を思ったのか、咲夜さんがいきなり私を（無理矢理）立たせる。

そうして私の全身を探るような目付きで散々眺めたあとに、

「頂けないわね」

と言われた。

……勝手に変な条約を締結され、今日は完徹も決定され、更には容姿にまで文句を言われるなんて……。

「ああ、変な誤解をしているようね。頂けないのは貴方のその格好」

カツコウ？ あの托卵たくらんをする鳥？

……判ってます、ちよつとした現実逃避だからそんな冷たい目で見ないでください。

というか格好……服装？ 別に変ではないと思うけど……何がお気に召さないのやら。

「どうしてそんな江戸時代のような着物を着てるのかしら。里人だつてもう少し欧米文化を取り入れてるわよ？ 弥生時代の貫頭衣だつてワンピース状だつていうのに……」

「和服は日本の文化です」

「此処は和洋折衷が基本よ」

そもそも動物にファッションセンスとやらを求めるほうがどうかしている。当たり前ですけど、狼の時って服着てないですからね？ なぜか化けると服を着た状態になるのは禁則事項というか、触れてはいけないところだ。

「この前は羽織袴着てたし……男物も女物も関係ないの？」

「こんな物、隠すところが覆われてればいいんですよ。あとは楽かどうかですね」

「女性としてそれでいいの？」

「(どうでも)いいです」

因みに、スカートはなんか変な感じがするから嫌だ。咲夜さん、よくそんな短い履けますね。

女性としての嗜みなんて、狼と野山を駆けずり回って泥だらけになる私に求めるものではない。

「……まあ、そこは本人の自由だけれど。でも、ちよつとした手伝いとはいえ紅魔館で働く以上はきちんとしてもらわないと」

「判りました。帰ります」

「……」

あんなのが締結されてしまった以上、告げ口されてもさほどのことはされまい。雲行きも怪しいし、ここらで引き下がるが吉だろう。

「白、約束を破る気？」

「ぐう……」

とはいえ、確かにやると言ったことをやらずに帰るのは良くない。口約束とは言え、自分の発言責任のくらは取らなければ。

「……朝までのお約束は果たします。が、服装はどつにもなりません」

「あら、そうでもないわよ？」

「そうよ。咲夜、持ってきたさい」

「どちらをお持ち致しましょうか」

「私の服とかでもいけるんじゃない？」

「レミイ、体格的にはむしろ私のよ」

「お姉様のが平気なら私のも着れるよね」

「畏まりました。すべて持ってきます」

「ちよつと待て！？ 何言っちゃてるんですか本当に！！」

駄目だこの人達！ もういろいろ駄目すぎる！

なんで私がこの人達の服を着なくちゃいけないの！？

「持ってきました」

「時止めてまで持つてくる必要があるんですか！？ 無いでしょう」

「！？」

「あるわ。主に私達が楽しいから」

「勝手過ぎる！！ ……って、うわちよつと待っ」

（一時間後）

「……もうお嫁にいけない……………」

ははは、立派なミニスカメイドの誕生だ。自前の獣耳と尻尾がとってもチャーミング……………ってどの層が喜ぶんだよ！ 需要ないよ私のこんな格好なんて！

「大丈夫よ。私たちが貰ってあげるから」

「たちってなんですか……………」

「独り占めはいらぬ争いと誤解を招くから、条約が効いてる間はねえ」

「早く成人したい……………そういえば成人っていくつです？」

「そうねえ……………私達の匙加減？」

「一生大人になれないとか……………」

不自然に寒さを感じる足を気にしながら、遠い目をして朝を待つしか道はないのだった。

……………短すぎるよ、本当に。

悪魔と狼（後書き）

いつぞやのアンケートは、全部書くことになりそうです。
夏休みだし、いけるかなーと。講習あるけど。

現在もちよこちよこ書いていますが……如何せん数も多くて。
中々進んでいないのも現状です。

そこで今回はシチュエーションと相手の希望をお聞かせ願えればな
あ、と思います。

どちらかでも構いませんので、なるべく多くの方の御意見をお待ち
しています。

諦めも大切

肉食獣は睡眠時間が長い。外敵に襲われる心配もなく、肉という短時間で栄養となるものを食べているからだ。

私の場合は生肉の丸かじりをそんなに好まない……というか、食事という行為をそこまで重視しないのでその限りではない。睡眠時間もそんなに長くはなく、眠り方もむしろ草食動物に近い。

狼は生態系の上位にいるので、他の動物に襲われる心配は確かに殆ど無い。しかし、此処は妖怪が跋扈する地。他の動物は気にせずともこちらを無視するわけにはいかない。いくら人間を襲うことが常とは言え、妖怪は気紛れなので危険性が無いとは言いつれない。動物同士の争いに介入する気はないが、相手が妖怪となればその対処は妖獣たる私の仕事だ。

……こんな最もらしい前口上を述べておきながら、妖怪に襲われたことなんて無いだけだね。

まあ、半分人間でもある私に対して向かってくる妖怪はいたけど。つまりこの行為は自分のためにはなっているので、以後も続ける気だ。

「……とは言えですね、睡眠が全く必要ないわけではないのです」

「大丈夫よ。私の家に招待するわ」

「帰らせてくれるのが一番嬉しいんですけどね……」

約束通りというか変なところで律儀というか、夜が明けてすぐに紫さんが来た。無論、私は先の服装（ミニスカな）メイド服のまま

まだだった。

紫さんが現れた瞬間、私はすぐさま着替えようとしたが……着替えを奪われ、憐れこのままの姿で紫さんに付き合うことになってしまった。スキマはズルい。

今の会話の流れからして、紫さんの家に行くようなので少し安心した。こんな格好で幻想郷中を回るなんて言われたら二度と口を利かないところだった。

「そんなにそそられ……いえ、可愛い貴方を無闇に人の目に触れさせたくないもの」

「可愛いや綺麗は紫さん達のような女性に相応しい言葉です。私には程遠い言葉なのはよく判っているので、気を使わなくてもいいですよ」

「……貴方、誰かにそういうこと言われたことないの？」

「両親や文さんたちに言われたことはありますが、あれは親と身内の鼻屑目でしょう」

「本当にもう……」

どうして目の前で紫さんに重い溜息をつかれなくてはならないのだろう。解せん。

「貴方、自分に無頓着すぎるわ」

「女らしさを磨けということですか？ 群れでの生活ではそんなものよりも統率力のほうが重要です」

「獣に近すぎる生活も考え物ね。……やっぱり、私の式にした方がいいわ」

「いやーですー。私はまだ自由に暮らしていたいんです」
「そこらの妖怪なんか目じゃないくらい強さを手にできるのにな？」
「今の生活にそこまでの強さは要りませんから」
「まあ、取り敢えず腰を落ち着けるために私の家に行きましようか……藍もいるわよ」

最近、私を釣るのに藍さんを使うことにしたようだ。概ねそれが正解だったりする。

紫さんの家というのは誰にも知られていないらしい。あの霊夢さんでさえも。

藍さんが出入りしているので幻想郷の何処かであるとは思うが、それを特定するのは難しい。というか部屋に直接落とされたら不可能だ。

「おお……意外に和風だ」

「意外かしら？」

「だって格好から派手なのが好きなのかと……い、いひゃいひゃい」

「そんな事をいうのはこの口かしら。確かに派手なのは嫌いではないけど」

「じゃあなんで抓ったんですか……」

思いのほか強くやられたようで、ヒリヒリと痛む頬をさする。抓られ損だ。

「そんなに強くやったつもりはないのだけど……赤くなってるわね。大丈夫？」

「自分でやっておいて……。まあ、そこまで気にすることでもないです」

「駄目よ、冷やさないと。藍、濡れタオル用意して」

「だから自分でやっておきながら、なんでそんなに過保護になるんですか」

「自分でやったからこそ、よ」

頬をさすっている私の両手を片手で押さえ、残った手で代わりに私の頬を撫でる紫さん。正直、とんでもなく撥つたい。逃げようにも両手を拘束されているのもあってせいぜい首を動かす事が精一杯だ。そんな微々たる行動で止まる人ではなく、むしろ余計に楽しそうになるし……打つ手が無い。

はあ……藍さんが来るか紫さんの気が済むまでこのままなのか。

「は、入りにくい……」

そういえば藍さん遅い……ん、今なにか聞こえたような……気のせいかな。

紫さんは未だに楽しそうに私の頬を撫で……今度はつつき始めたよこの人。そんなに頬を弄って何が楽しいのやら。

「ふふ……柔らかいわね。妬げちゃうわ」

「……何に？」

「これで何の手入れもしていないのでしょうか？ 同性としてはね」

「紫さんの肌の方が綺麗じゃないですか」

そう言うと何故か拘束が弱まったので、そのまま手を紫さんの頬に滑らせる。予想通りスベスベしていて気持ちいい。

そんなことをしていると、どこか紫さんの動きがぎこちなくなっただけというか私の頬に手を置いたまま動かない。

「あれ？ どうしたんですか？」

「……時々突拍子もないことをするわね、貴方も」

「？ 何の話です？」

「無自覚すぎるわ。こんな事、霊夢とかにやつちや駄目よ？」

「……なにか変なことしましたっけ？」

「はあ……藍、居るんでしょう？ 入って来なさい」

「し、失礼します」

「え？ 居たんですか？ なら早く入ってきてくだされば良かったのに」

「……」

「な、なんで二人して溜め息をつくんですか？」

特に藍さんがすごく生温い目で私を見ている。何ですかそのいろいろ

るな人から好かれていくせに自覚がなくて何も気付いていない鈍感な子を見る目は。失礼な、私はそんなに鈍感ではないですよ。

「どの口が言えるんだか……」

「確かにこれは……」

「何なんですかさっきから。それともうタオルは必要ないです、痛くないので」

「マイペースすぎるわ……お仕置き、ね」

「ほへ？」

間が抜けている返事を返した瞬間、フワツとした浮遊感。声を上げる間もなく私は紫さんの膝に乗せられ、背中から抱き抱えられた。でも足を崩しているとは言え、これはむしろ紫さんのお仕置きになるんじゃない……。膝痛いでしょう、この体勢。

「下ろしてください」

「藍、貴方はそのタオルでこの煩い口もろとも頬を冷やしなさい」

「冷やす必要ないって言うてるじゃないですか」

「これは罰だもの。そうだ藍、超至近距離で見つめ合いながら冷やしてあげたら？」

「冷やすんなら自分でや……う、腕を放してください！」

「ダ・メ。さあ藍、やってしまいなさい」

「放してくださいよー！」

……どんな星の下に生まれてきたら、こんな目に遭うんだろう。

そんな事を考えながら迫り来る事象に身を投じた。

諦めも大切（後書き）

く没ネタ（キャラ崩壊してるよ！）

見たい方だけ見てください。深夜テンションだよ！

紫さんの家というのは誰にも知られていないらしい。あの霊夢さんでさえも。

藍さんが出入りしているので幻想郷の何処かであるとは思うが、それを特定するのは難しい。というか部屋に直接落とされたら不可能だ。

「いつもながら反則的な能力ですね」

「褒め言葉として受け取っておくわ。……それよりも」

「はい？」

「貴方、短いスカート嫌がっていなかった？」

「ああ……やっぱり紅魔館でのやりとりを見ていたんですね」

「あの時あんなに抵抗していたのに、もう慣れたの？」

「その後は覗いていないんですか？」

「ええ、全部見るとつまらないから」

「うーん、慣れたというか何と言いますか……」

確かにこれは短い。短すぎて足が変な感じた。しかし、逆に言えばその不快感を軽減できればいいということだ。なので咲夜さんに頼

んで、

「……………短パンを履きましたから」

「ああもう、何をしているのよ貴方っ……………!」

なぜかそう言つと目に見えて落胆し始めた紫さん。そのやりきれなさの滲む声はどういう意図が？

「そういう格好は見えるか見えないかのチラリズムが良いんじゃない。あなたの行為は邪道よ!」

「いや何の話ですか?」

「見えそうで見えなくて、ふとした拍子にチラツと見える……………それがスカート醍醐味でしょう?」

「幻想郷でスカート履いてる女性をどういふ目で見てるんですか!? 殆どそんな格好してるじゃないですか!」

「いいから脱ぎなさい! 早く!」

「うわっ、ちよっやめてください! 一旦落ち着いてください、これただの変態行為ですよ!」

必死に抵抗するが、相手は知能も身体能力も勝る妖怪。いとも簡単に取り押さえられて床に押し倒される。また誤解されるような体勢に……………って、このパターンは!

「ゆ、紫様……………白……………。え、あの、ご、ごゆっくり?」

「やっぱりか! フラグ回収上手すぎる! でも助けてください藍さん!」

「あ、あの……………い、一体これは」

「藍……貴方も絶対領域の中に短パンは邪道だと思っわよね？」

「え、ええ？ 何の話ですか？」

「邪道よね？」

「はい」

「意思弱っ！」

「貴方も見て感じれば判るわ。私か藍の見る？」

「見ないですよ！ 私を何だと思っているんですか!？」

「駄目よ、動物じゃなくて妖怪にも興味を持たないと」

「妖怪限定!？ 人間は!？」

今日は紅魔館といい紫さんといい壊れすぎてるんですけど!？
な、何が起こってるの……? これがいつも通りだったら私ついて
いけない……。

「藍、白を押さえなさい。うふふ、大丈夫よ。怖いことは何も無い
わ」

「目……目が怖いです」

「さあ、三人で愉しみましょって痛!？」

「駄目よ紫。無理強いは美しくないわ」

「ゆ、幽々子……貴方今思い切り私のこと殴ったでしょう」

「こんな場面見せられたら止めるわよ。おかげで扇子が壊れちゃっ
たわ」

「扇子で殴ったの？」

「拳の方が良かった？」

「此処もう嫌だ……」

幽々子さんによって紫さんは私の上から退けられ、変な圧迫感は消

えた。それに一息ついていると、安心させるように私を抱きしめてくれた。なんだか落ち着く……けど、どうしてここにいるんだろう。

「そもそも、紫が面白いものを見せるって言ったから此処に来たんじゃない。何勝手に暴走してるのよ」

「白が悪いのよ。あんな誘惑されたらねえ……」

「してない……」

言葉を発しながらも私の頭を撫でる手を止めない幽々子さん。時折あやすように背中を叩いて守るように強く抱かれる。……こんな事を言ったら怒られるかもしれないけど、母さんみたいだ。どこか懐かしい感覚と、今の謎の恐怖感からつい涙腺が緩んでくる。

「よしよし、あんな事やられたら誰だって嫌よね。もう大丈夫よ……私が紫の体に直接叩き込むから。だから藍と妖夢と少しの間だけ向こうに行っててね」

「は、はい……」

言い知れぬ悪寒を感じて直ぐ様藍さんと共にそそくさと部屋を後にする。紫さん、そんな目で睨んでも自業自得としか言えないです。

收拾がつかなくなったので強制終了しました。

一歩前進？（前書き）

いつぞやの幼女白シリーズ。忘れている方もいるかも知れませんが、あれはもう少し後……具体的には今月中旬辺りに載せられたらなと思っております。予定です。

紅魔館と永遠亭が難航中……。その他はそこそこ進んでいるので頑張りたいです。

一步前進？

「……」

「……」

「……」

「………済まない」

「あらあら二人して見つめ合っちゃって………妬けるわねえ」

「貴方がやれって言ったんでしょうが！」

「文句あるの？」

紫さんの挑発的な笑みに言い返すこともできず臍を噛む。此処で無策に言い返したらより酷い事になるだろう。性格悪いから。

「なにか失礼なこと考えてない？」

「心を読むのはさとり様の専売特許です」

「乙女の神秘ね」

「………乙女………？」

どうにも得心がいかない部分を小声で復唱する。

なんとというか、まず性格がこう………その言葉の雰囲気ではない。他人をからかつてはその反応を楽しみ、時には他人の不幸さえ喜ぶ。他人という文字に私を当て嵌められるのは仕様だ。………妖怪なんだし、当たり前といえば当たり前だけだ。

外見は私以外から見れば相応しいのかもしれないが、私の知っている紫さんは少女を連想させる乙女というよりも、大人の女性だ。いつも余裕を崩さず、何を考えているのか判らない、けど何故か嫌い

になれない女性。それが私の認識だ。

そんな理由で気になっただけで、決して気分を害させようなどとは考えていなかった。ましてや年齢のことなど二の次にも程があるというか、妖怪と日常的に関わっている私にはどうでもいいことなのだ。そもそも人間基準で妖怪を測ろうとは思わない。

しかし、相手はそうは思ってくれなかったようで。恐ろしい怒気に目を向ければ、顔は笑っているのに背後に般若が見える乙女（誤字ではない）がいた。

「白がそんな事を言うなんて。どうしてくれようかしら」

「違っ、何か誤解を……いたたた！？ 千切れる、耳が千切れる！」

「私だって傷つくのよ？ 特にそんな事を言わないと思っていた子に言われたら」

「だって紫さんは乙女というより……本当に取れるほどの激痛があ
！」

「口を閉じないと^{むし}筆るわよ」

「だっ、から誤解……」

「うるさい口ね。……塞ぐわよ」

「う、むうっ!?!」

目の前は金色一色、唇には暖かくて柔らかいもの。そう、どう見ても間違えようのない

「ふふ、これ結構人気なのよ？」

藍さんの尻尾が私の顔を覆っていた。

暖かくて触り心地は絹のごとく。癖になる。息を吸う度に触れる毛が擦ったいのが唯一の欠点か。

そんな余計なことを考えつつ、名残惜しいが尻尾から脱出する。今度は是非冬にやってもらいたい。

「これが橙さんが言っていた最強のもふもふか……」

「橙がそんなことを？」

「はい。藍さんのことはよく聞きます」

主に自慢だけど。私の主はこんなにすごいんだぞー、みたいな。

それには同感だし、そんな主に恥じないように努力する姿も尊敬している。ただ、そう言っている間にも猫に引っ掻かれていたのは……

…まあ、要特訓だ。

「マタタビで橙さんに命令するときもあるって聞きましたけど……」

「いや、それはあれだ。ついというか……」

「本当にねえ。式神くらい使いこなせるようになってくれないと」

「橙さんって紫さんから見れば孫みたいな立場なんですか？」

「まあ……そうね。あんまり一緒にいないけれど。私は一日の大半寝てるし、橙は山奥にいるしで」

「スキマを使えば一瞬じゃないですか」

「あの子は猫をしもべにしようとして頑張ってるじゃない。邪魔したら悪いでしょう？」

「成程、面倒くさいと」

「……」

確かに半分くらいはその理由だろうけど、もう半分は私の理由だと思う。だって紫さんだもの。

「橙さんはまず、猫の使役を完璧にしないとイケません。今の生傷が絶えないような状態では……」

「橙はそんなに猫を操れてない？」

「ないですねえ……。あれは餌付けの前段階みたいなものでしたし。最近はずいぶん改善中ですが……」

「この前橙に会った時、白のことを言っていたよ。猫の扱い方を教えてくれる姉みたいな存在だって嬉しそうに」

「……照れますね、なんだか。そんな大層なことをしたわけでもないのに」

「いや、私は主という立場だからあまり表立って助けたくはないのよ。甘え癖がついてしまうからね。だから、白みたいな子が橙の側にいてくれると本当に安心する」

「か、買い被り過ぎです。私はただ……」

「照れなくていいのに。これからも橙の面倒を見てくれる？」

それに頷きを返す。断る理由はない。どちらかというとは私は困難から逃げる癖があるので、橙さんの頑張りを見習いたいところである。

そんな調子で藍さんと会話をする。落ち着くなあ……普通誰かと話すのはこのくらいほのぼのしてるものだよね。最近はずいぶん荒げることも多かったし、というかさつきも荒げたし。

そんな小さいけれど大切な幸せを噛み締めている時、不意に響く声。それは怒っているようで寂しげだった。

「藍。今のを聞いてると最近橙に会いに行っていないんじゃない？
今から会いに行ってきたら？」

「そ、そうですが……宜しいのですか？」

「ええ。私も久しぶりに会いたいし、連れてきて頂戴」

「判りました。……なるべく、ゆっくりと時間をかけて戻って来ます」

「流石私の式神。判ってるじゃない」

「え？ え？」

訳が判らない。どうして時間をかける必要があるのだろうか。

藍さんは最初の時と同じ生温い目に憐れみのような色合いを入れて、私の頭をさらっと撫でて部屋を去っていった。どういふことなんだ、主従にしか判らない何かがああ会話に隠されていたのか。

「さて。ふふ、邪魔者はいなくなったわよ。これで泣いて叫んでも誰も助けてはくれないわ」

「邪魔者って……どこことなく台詞も悪役っぽいです」

「その余裕もいつまで持つのか楽しみね」

「完全に悪役の台詞だ……」

背筋に感じる悪寒を無視して言葉を紡ぐ。あんまり二人きりになりたくない人となってしまうた。どうしよう。

「じゃあもう一つの罰をしましょうか」

「もう一つ？ この流れですか？」
「そう、それをやめることが罰よ」

流された。どうみてもそんな流れではないことは自明の理なのに。
……というか、『それ』では何を指してるのか判らない。私に藍さん程の理解力を求めるのは無謀です。

「敬語と敬称よ」

「無理です」

「そう。そんなに此処から帰りたくないのね」

「卑怯です。悪役どころか黒幕のすることですから、それ」

「そんなに私の式神になりたいのね」

別名を雑用係と言うものになりたくはない。

敬語と敬称は最早身に染み付いているので今更やめると言われても困るものがある。でも最近はいぶ崩れてきたと思うんだけどなあ……。

「そうね。最近の貴方の口調は乱暴だわ」

「四割くらいは貴女のせいですからね？」

「それはともかく。さっさとタメ口ききなさい」

「その言葉も斬新ですよ。普通は敬語を強要する物なのですが……」

「誰だつて気に入っている子の特別なものを持ちたいでしょう？」

それは人によつて言葉だったり物だったり、千差万別。私の場合は貴方が誰に対してもその口調だからこれを選んだだけ」

「ああ成程。つまり私は紫さんに気に入られていると」

「そうよ」

「お断りします」

「押し倒されたい？」

その言葉を聞いて反射的に距離をとった私は悪くない。結局捕まっ
て、また抱きしめられたとき悪寒がして逃れようと暴れたのも悪く
ない。簡単に抑えつけられたし。くそう。

「ほら早く。どうせ逃げられないし、私はこと貴方に関しては気が
短いんだから」

「……………どうしてもですか？」

「どうしてもよ」

「うう……………ゆ、ゆか……………」

「ふふ……………頑張って」

楽しそうに、それはそれは楽しそうに笑っている紫さんを睨む。
さっき気に入っているとか言っていたが、どうせそれは建前で本音
はこうして困る私を見たいだけだろう。

……………それでも、やっぱり嫌いになれない。おそらくそれは、直感的
に紫さんが私の敵ではないと確信しているから。今だって泣いて本
気で嫌がれば紫さんは強要してこない、と思う。私が本当に嫌なこ
とには踏み入ろうとしないその距離感というか、気の使い方がとて
も嬉しいのも確かなのだ。

だから私も覚悟というには大仰なものだが、まあそんなのを決めよ
うと思う。

恩返しみたいな気分だけど……うう、なんで名前を言うだけでこんなに恥ずかしいんだろう……。それでも深呼吸をして気持ちを落ち着ける。そういえば、誰かを呼び捨てにするのなんて初めてだ。だからこんなに恥ずかしいのか……慣れないことはするものじゃない。

「っ……ゆ、紫い／＼／」

声が裏返って語尾も変に伸びてしまい、お世辞にも良く言えたとは思えない。

でも、それでも嬉しそうに笑っていた紫さんに……一瞬、目を奪われたのはどうしてなんだろう。霊夢さんにも感じた気持ちを、此処でも感じるなんて……。

考えても判らない謎の感情のことで、暫く私の頭は一杯だった。

一步前進？（後書き）

紫フラグ……立ちました、よね？ 同時に霊夢フラグも。

そろそろ周囲だけでなく、白自身にもドキドキ（死語）してもらいます。感情を理解するのはまだ先になりそうですが……。

それと、今まで敬称とかつけてた人をいきなり呼び捨てってなんだから気恥ずかしいですよね？

あだ名ならともかく、呼び捨ては難易度が高いと思います。相手が同性でも。

私は専ら苗字にさん付けなので、名前呼び捨てとか……無理です。

昔馴染みたちは別ですけど、あれは幼稚園からの付き合いなので今更というか……。

八雲家での受難（前書き）

迷走気味だなあ……。

意外と講習とか部活とか宿題で時間が取れないし……頑張ります。

八雲家での受難

「ゆ、紫……そろそろ藍さんたちが帰ってくるだろうから家に帰してください……」

「敬称はとれたのにどうして敬語はやめられないのかしら。子供の時からそうだったわけでもないでしょう?」

「それはそうですね……」

「ほらまた。今日は敬語が直るまで帰らせないわ」

もうやだ……しつこいよ紫さん、いや紫か……頭の中でもそう言うっておかないと慣れないなあ。まだこれだけでも恥ずかしいっていうのに、敬語やめるは難しすぎる。

「ほら、早く大好きとか愛してるとか言いなさい」

「ごめんなさい、私嘘はつきたくな……いたいたい！　大好き、

紫大好き!」

「私もよ」

「うう……暴力反対。しかもなんで告白紛いなことをさせられるの……」

「私についてくれば幸せにしてあげるわよ?」

「はいはいそうですね。まずは藍さんを幸せにしてあげてから言うてください」

「ふう……どうしても本気にしてくれないのね」

何やら溜め息をついてなにかぶつぶつ言っているようだが正直どうでもいい。忘れているかもしれないが、私は今日一睡もしていない

のだ。当然眠い。思考も判断も正常な時とは程遠いからこそ、敬称を取るという暴挙にも出れたのだと思う。

「あーうー……眠い」

「……貴方、守矢神社の神とも仲が良いの？」

「それなりに」

ちよくちよく食料、言い換えれば供物を贈っているので心証はいいらしい。神奈子様も諏訪子様も行く度に撫でて可愛がってくれる。早苗さんも優しいし、最近のお気に入り場所は守矢神社だ。

「紫……より優しいからあっちのほうが好き」

「……ふうん。そういう事を言うのね」

「え、いや何を……う、嘘！ 紫さんの方が好き！」

「もう遅いわ。いいじゃない、霊夢にもやられたんだし。それに今さん付けしたでしょ。お仕置きも含めて、ね」

「いやいやいや！ おかしい、それはおかし……い？」

まあ、あの。霊夢さんにやられたことと言えばあの夜のことを思い出すわけで。当然あれに準じた行為を想像してしまう訳だ。

……だから、額にある柔らかい感触に気の抜けた声が出ってしまった。しまった、これでは見ようによっては期待していたみたいじゃないか。穴があつたら入りたい。

「……と、油断させた所で」

「へ？ つ！」

一瞬、本当に一瞬だけ唇に触れた暖かいもの。それは紛うことなく、その……。

「……………／／／」

顔に熱が集まるのが判る。パニックになりたい所だが、そうなるよりも落ち着いて脱出してから奇声をあげる方がいい。こんな所藍さんならともかく、いや良くはないけど、それより橙さんに見られてしまったらと思うと……。

「藍様、白が本当に此処にいるんですか？」

「ああ、いるよ。その部屋だ」

「白。どうして紫様のお家に……って、ええええ！？」

「橙、どう……し、失礼しました。橙、また出直そう」

うわああああ！ 畜生、結局こうなるのか！ 主を止めてよ式神さん達い！

私もう外歩けないよこれじゃあ……。というか藍さん落ち着きすぎでしょう。予想してたとか？ ……いや、まさかね。

「誤解されちゃったわねえ」

「みぎやああああ！！」

「どつという悲鳴よ」

「にやああああ！！」

「貴方犬でしょ？」

ふう。奇声をあげてすつきり……するわけないよ。

よ、よし落ち着こう。あれだ、まずは橙さんたちの誤解を解くことが優先だ。まだそんなに遠くに行っていないだろうから追いかけないと……。

「私は別に誤解されたままでいいのだけどね」

「良くないですよ……。ああ、映姫様に叱られる……」

「閻魔とも交流が続いてるの？」

「閻魔様のお仕事は二交代制ですからね。会おうと思えば結構簡単に会えます。時間を調節して」

「会いたくないわ」

心底嫌そうな表情をする紫……駄目だ、呼び捨てにすると奇妙な沈黙が生まれてしまう。慣れる気がしない。

……む？ 霊夢さんの時ほど慌てていないじゃないかって？

それはまあ、二回目というのもあるし、雰囲気もあの時と違ってちよつとした軽いノリみたいな感じだし。お巫山戯程度に考えている。ほら、ペットに愛情表現でキスする人とかいるし。でもあれやめたほうがいいんだよなあ……細菌とかいるから病気になる人もいるし。

それよりどうしよう……映姫様に『八雲紫と二人きりになったりしたら説教一時間』って言われてたの忘れてた。曰く、『手が早すぎる』らしい。

何に対して手が早いのか判らないが、その約束を守ることが私の身

を守ることに繋がるというので承諾したのに……やってしまった。早く橙さんたちの誤解を解いて、三途の川で正座しないと。」

「だから橙さん。私の話を聞いてください」

「あ、だ、大丈夫だよ。ちよつと吃驚したけど白が紫様の相手なら仕方ないかなとも思うし……で、でも藍様は渡さないよ!」

「落ち着いてください。紫……も藍さんも橙さんにあげますのでちよつと深呼吸しましょう」

「紫様や私は物扱いか?」

「ごめんなさい、文句はすべて貴女の主人に。」

「橙さん、さっきのはその場のノリというやつです。ほら、ペットとのスキンシップ的な。……頼めば藍さんもしてくれますよ」

「白、何を言い出すんだ!?!」

度々ごめんなさい。でも原因はすべて貴女の御主人様です。

「え……ら、藍様?」

「橙、今の白の言うことを真に受けたらいけない。もう少し理知的な子だと思っていたんだけど……」

「動物に理性を求めないでください」

「私も橙も素は動物なんだが」

そうでした。

「本当にどうしたのよ。ちょっと落ち着いたら？」

「黙ってください元凶。貴方なら……映姫様の怖さを知っているはず」

「それが、ここ数百年は逃げ続けてるから全然」

「……あの御方、どうしてもだか最近説教が体罰に変わりつつあるのです」

「それ、貴方に原因があるわ」

「どこにです」

「なんて言うか、貴方って幻想郷では珍しくまだ純粹なのよ。それを自分色に染めたい衝動に駆られるのよねえ。気持ちは判るけど、他人にやられると良い気持ちはしないわね……」

「そんなことはないでしょう。ねえ？」

「……」

「ちよ」

藍さん通り越して橙さんにまで目を逸らされるなんて……。私は一体どういう目で見られているんだろう。

「誤解が解けてない気がしますもう帰ります。紫、お願いします私まだ映姫様に裁かれたくない」

「……あの方には私も逆らいたくないのよねえ。頑張って耐えて」

「この前本気泣き入りました」

「……何されたのよ」

「禁則事項ですっ」

「……」

「そんな目で見ないでください！ 聞かれたらこう言えっつて映姫様に言われたんです！」

「あの方の趣味も判らないわ……」

それには全くの同感です。

まあ、この後何だかんだ理由をつけて三途の川に送ってもらおう事に成功した。ついでに呼び捨ては善処、敬語は諦めてもらうことにも。……うん、キス？ 何のことかな（脳内から削除完了）

……映姫様に何されたかは禁則事項だつてば。ただ結果を言つと、……下半身の感覚がなくなるまで正座をさせられました。あと右腕も暫く使い物にならなくなった。正直、何回か三途の川に飛び込もうとも思つた。

纏めると、紅魔館から始まったこの日は心より身体が痛かつた珍しい日だった。

八雲家での受難（後書き）

ちび白のシリーズが書き終わりません。口調も安定しないしオチもないし山場もないし意味もない。特に紅魔館が難産過ぎます。

本編もなんだか知らぬ内にえーき様がS属性に目覚めかけてるし…。
…。最近どうしたんでしょう私の脳内。ちょっと落ち着かせないと
いけませんね…。

1日目〱地霊殿（前書き）

ちび白シリーズ第一弾です。

この作品は私が方向性を見失ってしまったが為に、なんだか酷い事になりました。なので、

- ・キャラ崩壊
- ・オチなんて存在しない
- ・意味がマジで分からない
- ・その他いろいろもうダメ

が平気な方のみどうぞ！

1日目 地霊殿

「お燐お姉ちゃん、何してるの？」

「死体を運んでるところ。ごめんね、これが終わったら遊んであげるからね」

「うっん、お仕事は大切だもん。それに、こいし様が遊んでくれるから平気だよ」

「そうなんだ。……因みに、今は何を？」

「私が鬼のかくれんぼ」

「それ、勝負がつかないからやめといたほうが……」

「大丈夫だよ？ お空お姉ちゃんはもう見つけたし」

「おくう！？ 何サボってんの！？」

「いやー、可愛い白の頼みともなるとねー」

「さとりに様に怒られるよ！？」

「大丈夫。さとり様も見つかったから！」

「白、鼻を使っちゃ卑怯よ？」

「だって此処広いんだもん……」

「さとり様ああああ！？」

地霊殿に、そんなお燐の叫び声が響き渡った。

「まあ結局のところ、白の能力がある限り私とかくれんぼしても問題ないのよね」

「正直言って、私の鼻があればかくれんぼの鬼とか無敵です」

「遊びとして成り立ってないじゃないですか……」

無意識を操る能力を持つこいしと、人間どころかそこらの妖怪よりも優れた嗅覚を持つ白。どう考えてもかくれんぼで遊ぶ面子ではないだろう。

しかし白もそこは弁えているので、無闇矢鱈に嗅覚による捕捉はしない。するのは自分が飽きたときか、どうしても見つからずに降参するときくらいだ。

「にしても、本当に子供っぽくなって……」

「あの鬼が連れてきた理由はよく判らないけど、確かに良い物が見れるわね」

「そうですね……。どうしてあんなったのかとかは気にならないんですか？」

「別に気にはならないわ。どうでもいいじゃない、そんな事」

「そうだよ。今大事なのは小さくなった白を愛でること」

「（もう駄目だこの姉妹……）」

白が地霊殿に来たのは数時間ほど前。理由は至って簡単、ただ萃香が連れてきただけ。曰く、『もみくちやにされるのも経験。一日交代でいるんな所に回してやって。レッドゾーンに突入したら助けるけど』だそうだ。それだけを言って萃香はすぐに去ってしまったので、小さくなった理由如何は何も知らされていない。

「ねえねえお隣お姉ちゃん」

「ん？ どうしたの？」

「お燐お姉ちゃんは黒猫に成れるんだよね？」

「そうだけど……」

「じゃあなって」

「うん、もう少し判りやすく相手に言葉を伝える努力をしてみようか」

唐突すぎる言葉にこの場にいる者すべての頭に疑問符が浮かぶ。流石のさとりも心が読めないととなると、言葉でコミュニケーションをとるしかない。

「あのね、私いつもは狼の姿が主なんだけど……」

「あれ？ その姿が主流じゃなかったっけ？」

「うーん……最近群れで、『お前の噛む力は強すぎる。もう少し適切なじゃれ合いの時の噛む力を練習してこい』って言われたんです。それで、どの程度の力なのか教えてもらいたくて」

「ああ、そういうことかあ……でもあたいは猫だからイヌ科のことはよく判らないよ？」

「でもネコ目だよ？」

「いや、妖怪になってる時点でその辺の線引きはどうでもいいというか……。もはや雑食だし」

「……教えてくれないの？」

今にも泣き出してしまいそうな顔と声で白はお燐を見上げる。

そんな行動には慣れていないのか、お燐は殊更困った表情を浮かべて苦笑し頬を掻く。

「わ、判ったからそんな目で見ないで……」
「教えてくれるの？　ありがとうお燐お姉ちゃん！　大好き！」

途端に笑顔になってお燐に抱きつく白。お燐も嫌そうな顔ではなく、むしろ喜色満面といった様子だ。しかし、それを黙って受け入れることの出来ない者が二人いた。

「白？　お燐は怨霊の管理をしなくちゃいけないの。だからその訓練は私としましょうか」

「いやいや、お姉ちゃんも何かと忙しいよね。私と一緒にやったほうがいいよ」

「あ、あの、お二人とも？　噛み付かれるんですよ？」

「妖怪だもの、身体的な怪我なら別に。それに白に傷を付けられるのも悪くは……」

「何だか所有物の証ってどうか……」

「（もう駄目だこりゃ）」

『イヌ科のペットにやらせるのがいいのでは？』というお燐とお空の至極最もな意見に危機感を覚えた古明地姉妹が協力したのは、それから三十分後の事だった。

「うーん……まだ少し力が強いわね。もっと弱くしてみましようか」
「むう……難しいです」
「焦らないでいいのよ。ゆっくり、ね」
「流石お姉ちゃんだね。動物にしか好かれないから、扱いも心得てるといっか」
「嫌味？」
「まさか。あ、白、今度は私とやろうねー」
「はい！」

その返事に、白の頭を撫でるこいしの手付きは優しい。自身が妹という身のため年下に接する機会は皆無に等しいので、密かにこいしう事に憧れていたのかもしれない。

「ねえ白。汗もかいちゃったし、温泉にでも行かない？」
「温泉？ そんなのがあるの？」
「うん。あんまり他人もいないし、今なら丁度いいよ」
「行ってみたい！」
「あ、お姉ちゃんはどうする？」
「行くわ。一応、お隣とお空にも声をかけておきましょう」

行くかどうか問われた二人は二つ返事でそれを了承した。こうして、五人という大所帯で温泉に向かうこととなった。

「ほあ……」

「どうしたの？ 温泉がそんなに珍しい？」

「ん、山の地獄谷にはあるけど……というからお空お姉ちゃんがやってるやつだけど……硫黄が湧いて危険だからって仙人様に近寄らないように言われた」

物珍しげに温泉を見つめる白。その体には大きなタオルが巻かれている。

本来なら必要のない体型だが、主姉妹に一抹の不安を覚えたお燐が巻かせたものだ。その考えを読んださとりは大きく息を吐いた。ペツトにそこまで変態扱いされていたのか、と。

ただ、白が初めて地霊殿に来た時にしたことを考えれば当然とも言える流れだった。それに気付いていないのは当事者だけである。

「そっか。じゃあ今日は存分に楽しんでいきなよ」

「うん！」

快活に返事をする白とお燐の後ろでは、やはりというべきか古明地姉妹の喧騒が聞こえてくる。

どうやらどちらが白の面倒を見るかで揉めている様だ。それに気付いたお燐は相手にすること諦め、白とお空を連れて浴場へ向かって行った。

「お燐お姉ちゃん、二人を放っておいていいの？」

「いいの。あつちに構ってると風邪引いちゃうからね。それに何だかんだ言っても、さとり様はこいし様と話せて嬉しそうだし」

「二人は中が悪いの？」

「悪いっていうか……こいし様はいつも何処かに行ってしまうから、中々会う機会もなくて。それで疎遠になってる感じかな」

「よく判ないけど、今は喜んでるの？」

「たぶんね」

「じゃあいいや」

物珍しげに手でお湯を触っている白の両脇を持ち上げて、お空は一緒に湯船につかる。それを見てお燐も湯船に入り、白の頭を撫でる。

「こいし様はいたく白を気に入ってるから、白が此処にいる間はこいし様も出て行かない。だから必然とさとり様と会話をするんだよ。白のおかげだね」

「私の？」

「うん。あたかも白が地霊殿で暮らしてくれればなー、って思ってるよ」

「それは私も」

彼女なりに気を使っていたのだろうか、今まで口を開いていなかったお空がお燐の言葉に賛同する。因みに、白はその彼女の豊満な体にしっかりと抱きついている。普段は水浴びが主な白はお湯になれるまでそうすることに決めたらしく、離れる気配はない。

「一緒に火力の調節を調節したいわね」

「無理だよ、あそこ暑すぎて長くいられない……」

「じゃあ、あたいと一緒に死体を集める？」

「あんなに手早く死体なんて集められないよ……。それにまだ地上にいたいから、その話はまた今度がいい」

「あれ？ 嫌じゃないの？」

お隣にとっては断られることを承知で振ってみた話だったらしい。地上にいる者で、地底に住みたいという物好きなど普通はいない。ましてや白は地上の人間にも妖怪にも好かれていた身なので、嫌われて移り住むというのも現実的な話ではない。

「嫌じゃないよ？ 此処にはお隣お姉ちゃんたちもいるもん」

「私は？」

「もちろんお空お姉ちゃんも。鬼のお兄さんもお姉さんも優しいし、地底はとつてもいい所だよ」

「じゃあ、もしかしたら何十年か後には此処で一緒に暮らしてるかもね」

「そうだったらいいなあ。地上も楽しいけど、地底で皆と居るのも憧れるから」

「気長に待つてるね。まあ、今は温泉を楽しもつか」

忌み嫌われている者たちが集う地底を好んでいるという白に、お隣は内心とても喜んでいた。この子なら数年後本当に暮らしているかもしれない、と。

そんな思いを抱えながら、白をお空から奪おうと腕を伸ばす。が、それを嫌がり逆に白を抱き締めるお空。両者の間で、一瞬火花が散った。

「お隣は私より長く白といるんだから、今は私が相手する」

「あたいだって、いつもさとり様たちにいいとこ取りされてるから大差ないよ」

「それでも私よりは絶対に長い」

「そんなことない」

「ある！」

「ない！」

遂には口喧嘩に発展してしまい、大声が木霊こだまする。

古明地姉妹に引き続き、親友同士の喧嘩。すなわちそれは、白を放っておくというのと同義である。お空も論が発展してか、白を離してしまっている。

初めての場所で、子供を一人にしておく。その行為の結果は言わずもがな。

「白うう!!?」「」

逆上せて湯に浮かぶに決まっているのだ。人間だったら色々危険な状態である。

「うあー……」

「大丈夫？ やっぱりもう上がる？」

「んー、へいき」

「呂律が回ってない気がするんだけど……」

「へーき。もうなおった」

「あー……判った、髪を洗ったらもう出ようね」

何を言っても聞きそうにない白を納得させるため、もう少しだけこの場に留まることにしたお隣たち。白もそれです承したので、お隣は早速白の髪を洗おうとする。しかし、当然の如くそれを阻止する影が三つあった。

「お隣？ どこまでいい所取りをするのかしら？」

「さつきも私達の喧嘩中にいい思いをしたでしょ？ だからもういいよね」

「お隣ばかりずるい。私にも貸してよー」

「こいし様とお空は良いとしても……さとり様、本当に大丈夫ですよね？」

「……貴方、すごい失礼なことを考えたわね。いくら私でも幼子を無理矢理手箆めにしようとは思わないわよ」

「」「」「」

「二人して同じ事を考えなくてもいいじゃない。あとこいし、貴方

も同じ様なことを考えたでしょう。心読めなくても判るわよ」

心外だ、という風に言うさと。しかし疑惑の眼はまだ続いている。その筆頭であるこいしが更に言葉を放つ。

「無理矢理はしないって事は、同意があればやっちゃん気でしょ？」

「もちろ いえ、しないわよ」

「今更誤魔化したって意味ないわよ！ 変態！」

「そういう言葉は慎みなさい。愛があれば年齢なんて関係ないでしょう？ そんな事を言ったら人間に手を出す妖怪はみんな変態じゃないの」

「そうだけどそうじゃないでしょ、白の場合」

「つまり白の母親はショット言わせないわよ！ 白の前でそんなこと！」

珍しくこいしが声を荒げる展開になり、それを呆然と見ているお隣とお空。しかし内心ではこいしを応援しているようだ。

しかしまたこの四人は忘れているのだ、白の存在を。しかも半分のぼせている状態のを。その結果はつまり、

「白ううー！！？」

先程と同様になるということだ。人間なら死んでいてもおかしくはない。

「あー……」

「大丈夫？」

「らいじょうぶー……」

「完璧にアウトだね」

あの後、倒れた白を脱衣所に連れていき介抱を始めた一行。最初は全員で付いていたものの、そこまでの人数は必要ないだろうということでお燐とさとりは飲み物などを取りに行った。この行為に主人であるさとりは渋ったが、満場一致でさとりはここから離れるべきと言われていた。

「白、ごめんね。私達が目を離さなければこんな事にはならなかったのに」

「私もお燐と変に片意地張らなければ……」

「んー……楽しかったからいい。また今度来てもいい？」

「……！ うん、勿論。今度は私も地上に遊びに行くね」

和気藹々とした空気になり、酷くはなかったようで白の体調もすぐに戻った。戻って来たさとりたちも安心した表情を浮かべる。しかし心配性なお燐を筆頭に、もう休んだほうがいいとの声。現に今も

こいしの腕の中で船を漕いでいる。

「こいし、私今日いい思い出があまりないのだけど」

「自業自得じゃない？」

「だから寝る時くらい一緒にいいわよね」

「断固反対。何されるか考えたくもないよ」

「平気よ。貴方が思ってる程、私は自分を制御できないわけではな
いから」

「それ、心がだいぶ危険な方向に傾いてることを意味してるからね」

ジト目で姉を睨みながら、腕にいる存在を守るように抱き締める。
その目には白に対する慈愛の色。対するさとりにも似たような色。
しかしその対象には違いがある。

こいしは白が好きだ。それは動物好きの延長のようなもの。

さとりも白を好んでいる。それは自分の妹の心を開かせつつあ
る存在だから。

結局、どこまでいっても姉は姉。長らく疎遠だった妹と話せること
に一番の幸せを感じているに違いないのだ。だから自分たちを結び
つけている白に感謝する。

「じゃあ、こいしと私とで白を挟んで寝るのは？」

「うー……ん。まあ、それなら……」

「決まりね」

こうして主人姉妹に挟まれて眠り、白の地霊殿での生活は幕を閉じた。

2日目〜紅魔館（前書き）

前回と同様に、

- ・キャラ崩壊
- ・オチなんて存在しない
- ・意味がマジで分からない
- ・その他いろいろもうダメ
- ・紅魔館難産過ぎた〜（＾o＾）ノ

が平気な方のみどうぞ！

2日目 紅魔館

「貴方、一体何の本を読んでのの？」

「狼の生態について書いて書いてある本です」

「それ自分のことじゃない。読む必要あるの？」

「半分人間であるからして、たまに彼らの行動が理解できないので
す」

「例えば？」

「生肉って不味くないですか？ お腹壊します、アレ」

「それはただの好みの問題だと思うけど」

「ネズミの尻尾って食べる意味あるんですか？」

「……それも好みじゃない？」

「外来人の肉って脂が多「結局食に関することだけじゃない」……
だってそれ以外は判りますもん」

拗ねたような顔でそう言い返すのは白。突っ込みを入れたのはパチ
ユリー・ノーレッジ。

例によつて萃香が連れてきて、現在紅魔館の地下にある図書館にい
る。何も知らされていないのでこの主姉妹は未だお休み中であり、
メイド長にも小悪魔が連絡している所。必然的にパチユリーが白の
面倒を見ている訳である。

「まあ、正直私に食のことを訊かれても困るけど」

「捨食の法……でしたっけ？ あんなに凄いいことが出来るなんて、

流石パチユリー様です！」

「これが出来ない魔法じゃないもの。……それより、貴方本
当に白？」

「白ですよ？」

「元氣すぎるわよ……どうやったら十年前後であんなに落ち着いた性格になるのかしらね」

「何のことですか？」

「なんでもないわ。それより、そろそろ咲夜かレミィが来ると思うわよ」

「レミリアお姉ちゃんと咲夜様か？」

「……貴方の敬称の基準は何なの？」

「むう、特に意識したことはなかったですが……強いて言うなら、オーラ？」

「尚更それ逆にした方がいいわよ。レミィが泣くわ」

その言葉に頷きを返し、再び本を読み始める白。それに倣い、パチユリーも本に視線を戻す。

無言の状態が続く中に、どこか騒々しい足音が聞こえてきた。

「パチエ！ 白が来てるって本当！？」

「寝巻きのままだし、うるさいし慌てすぎよ。着替えてから出直してきなさい」

「し、仕方ないでしょ？ 咲夜に起こされて急いできたんだから。」

「……あら、咲夜は？ 一緒に来たはずなんだけど……」

「そこで白を抱っこしてイイ笑顔を浮かべているわ」

「咲夜ああ！？」

パチユリーの言った通り、咲夜は笑顔を浮かべて白を抱っこしている。見る人が見れば危険だと判断するかもしれない表情だ。

しかしそんな危険も感じず、白は咲夜に甘えるように自分からも抱

きつく。どうやら紅魔館の中では最も信頼している人のようだ。

「咲夜お姉ちゃん、お腹すいた」

「そう？　なら何か作ってあげるわ。何がいい？」

「お姉ちゃんの作ったものなら何でもいいよ。だってどれも美味しいもん！」

「ふふ、ありがとう」

傍から見ればどこぞの新婚夫婦に見えなくもない。今も妻（咲夜）が夫（白）の頬にキスをしている。

「ってちよつと！？　何してるのよあんたら！」

「おはようのちゅー？」

「お嬢様にもしますか？」

「要らないわよ、ていうか息合いですぎでしょ！」

「レミイ、もう少し静かにしてくれない？　それが出て行って」

「パ、パチエ……貴方私に敵しすぎない？」

「白>レミイなのは確かね」

「なんて友達甲斐のない……」

「愛情の前の友情なんてそんなもんよ」

既に当主かと問われると閉口してしまう姿を晒しているレミリア。友人と従者と客人に置いてけぼりをくらっている。しかし、そこまでされて黙っているレミリアではない。眼光を鋭くし、威厳たっぷりの声を三名に向ける。

「貴方達」

「白、オムライスでいい？」

「おむらいす？ 何それ？」

「西洋で作られたようにみせかけて、実は日本で生まれた料理のこと。卵アレルギーとかある？」

「ううん、ないよ。大丈夫」

「じゃあそれでいいわね。パチュリー様はいかがされます？」

「紅茶をお願い。今日は調子もいいからテラスにでも行きましょう」

「聞きなさいよ人の話！！」

少々灸を据えてやろうと思ひ、怒気を発した結果がこれだ。全員さして気にした風もない。どうやったらカリスマの具現たる吸血鬼をこいつらに畏れさせることが出来るのか、割と真剣にレミリアは考えた。

「どうかしましたか？ お嬢様」

「どうもごうも……。もういいわ、なんか疲れた……」

「それじゃあ、取り敢えず着替えてきたら？ 寝間着のままの吸血鬼に敬意は払えないわ」

「霊夢お姉ちゃんたちは着替えてても払ってないよね」

「白、それはシー」

「……………」

何も言わずレミリアは立ち去る。おかしい、この中では最年長の筈なのになぁ……と遠い目をしながら。

咲夜と白は去っていく姿を不思議そうに、パチュリーは無表情に見送る。その後、一行はテラスへ向かう。外を見れば日は既に傾きかけていた。白が来たのは昼と言える時間だったが策士なパチュリーは白と読書をし、だいぶ時間が経った頃に連絡をしていたのだ。

「このくらいならレミイも出てこられるでしょ。陽はもうすぐ隠れるわ」

「お待たせしました、パチュリー様。あと白、これがオムライスよ」
「へー……」

ある意味珍しいメンバーでのお茶会もどき。しかし、元々側に立って仕えるのが仕事のメイド、社交的ではない魔法使い、食べるのに忙しい子供。イマイチ盛り上がり欠ける。

「……それで、どうして私が呼ばれたんですか？」

「別に侵入者なんて殆ど来ないでしょう？ どこかの魔法使いには貴方じゃ意味ないし」

「うっ……」

「だからお得意の気を使う能力で場を盛り上げなさい」

「いえ、私の能力はそういうのではないんですけど……」

「何か一発芸でもやったら？」

「無茶ぶりですよ!？」

咲夜に連れてこられたのか、いつの間にか場に美鈴が増えている。訳も分からず連行され場を盛り上げるように言われるその姿に同情を覚えたのか、白は美鈴に近づいていく。

「パチユリー様も意外と楽しみにしてるみたいだから、頑張ってるね」
「ただハードル上げに来ただけ!？」

冗談ですよーと笑いながら言い、そのまま落ち込んでいる美鈴の肩
によじ登り始める。突飛な行動にその場の全員が目を向けるのも構
わず、安定した位置を見つけてそこに座り込んだ。

「どうしたの？」

「ん、理由はない。何となくー」

「そ、そう」

普段から性格が大人びているとは言えないお嬢様方を相手にしてい
るとはいえ、子供のやることはやっぱりよく分からないと思う三名
しかもお嬢様方は姿はあれでも約五百年は生きているのでまるつき
り理解出来ない言行は少ないが、白は真正銘ただのお子様。理解
出来ない行動を取りまくる。

「うわぁ、高い。視界がすごく広くなった」

「空を飛べば同じじゃないの？」

「夢が無いもん」

「普通の人とは発想が逆ね」

やっぱり子供の言うことは分からない、と全員で顔を見合わせなが

ら思っていた時、何者かたちがテラスにやって来た。言わずもがなスカーレット姉妹である。

姉は未だ不機嫌そうに、妹は興味深そうにしている。そんな二人に動じず、一瞬にして紅茶を差し出す咲夜は流石だと言えるだろう。白も二人の存在に気付き、両名の機嫌の違いに首を傾げながらも声をかけた。

「あ、レミリアお姉ちゃんとフラン様だ。どうしたの？」

この時レミリアの額に青筋が入ったのを白以外は見逃さなかった。同時に、フランがとてもおもしろそうな表情をしていたことも。自分の忠告がきいていなかったことにパチュリーは溜め息を吐き、咲夜はどうフォローするか考え、美鈴はオロオロしている。動き回られることで安定が悪くなったのか、白は美鈴の方から飛び降りスカーレット姉妹の前に立つ。こうして見ると身長差はほぼない。

「白、貴方私を舐めてるでしょう。いくら温厚な私でも怒るわよ？」
「舐めてないよ！ お母さんは吸血鬼を信頼するなって言っただけだよ」

「狼の隷属の事？ 昔ならいざ知らず、今は要らないわよ。動物は手間がかかるし」

「ただまあ、自分のことを自分で出来る白なら欲しいんだけどね。あ、でも大丈夫だよ。私はお姉様と違って白の嫌がることは絶対にしないから」

ちやっかり姉の前に立ち、人当たりのいい笑みを浮かべて言う。こ

いしと同じく妹という立場にあるフランも、年下という存在に弱い
のかもしれない。

「フラン、今の言い方だと私が嫌がらせしかしてないみたいじゃな
い」

「実際そうですわよ、お姉様？ ねー、白？」

「否定はしない………というかできない」

「………」

またも額に青筋が走る。もはやピキツ、という擬音まで聞こえてき
そうだ。

そんなレミリアを無視しつつ、フランと白は馬が合ったのかキヤツ
キヤツと二人でお喋り中だ。それが原因で余計にレミリアの怒気は
膨れ上がっていく。

「ねえ白。さっき私のこと様付けで呼んだじゃない？」

「うん」

「でもね、その呼称は紅魔館（まじか）だと普通なのよ。だから変えてくれな
い？ まあ、お姉様の悔しそうな顔を見るのもいいんだけどね」

「なんて呼べばいいの？」

「うーん、そうねえ………あ。じゃあ私を『お姉様』って呼んでみて
？」

「おねーさま？」

「うん。『お姉ちゃん』っていうフランクさはお姉様に任せておく」

「なんかややこしいね、フランお姉様」

その会話を聞いた瞬間、レミアアの堪忍袋の緒が切れた。背後にゴゴゴ……とおどろおどろしいものがうごめいている。

「いい加減にきなさいよ！ 舐めすぎでしょ、姉であり狼を使役する者よ私は！」

「何を言ってるの？ 私は常々敬意を払ってますわ、お姉様」

「狼っているんな種族に使役されてますし」

「あんたらねえ……！」

「あはは、お姉様が怒っちゃった。白、逃げよう！」

「はい、フランお姉様！」

「待ちなさい、こちら！」

「げ、元気ですねえ……お嬢様方は」

「普段はストッパー役を担ってる白がアレだからねえ……止めどころが分からないわ」

「捕まえてきましょうか？」

「いいわよ別に。疲れたら戻ってくるでしょ」

魔導書を捲りながら興味なさ気に呟く。紅茶を飲み、夏の虫の声に耳を傾けながらの読書も中々だと思

ドーン（なんか色々壊れた音）

パリーン（数少ない窓が割れた感じの音）

きゅっとしてドカーン（割と反則的な音）

「……咲夜」

「畏まりました」

一瞬姿が見えなくなったかと思うと、レミリアたちを連れて再び一瞬で現れる咲夜。その顔には『壊したものは誰が片付けると思ってるんですか?』と書いてある。

背後の静かな怒気と、前方の安楽を邪魔されてキレ気味の魔女に引き攣った笑みを浮かべるレミリアとは対照的に、フランは落ち着いて白にこそそと耳打ちをしている。聞き終わり、頷きを返す白に笑みも浮べている。

「えっと……パチュリー様、館の物を壊したのは全部レミリアお姉ちゃんだよ!」

「ちよつと!?!」

「そうなの? なら片付けはレミィの仕事ね」

「パチエ! 最後の効果音は私じゃないの分かるでしょ!?!」

「いいから片付けてきなさい。一人で」

「一人!? 無理よ、どれだけ壊したと思ってるの?」

「自業自得よ。さっさと行きなさい」

半泣き気味になりながら場を後にするレミリア。パチュリーが白に甘々なのは周知の事実なので、逆らうと今後は魔法でチクチクやられる可能性があるのだ。そうなるその後々厄介になる。

「良かったの? なんだか可哀想だった……」

「いいのよ。結局咲夜もついていったし」

「白、覚えておいたほうがいいわよ。あいつはまともに話すと調子

付くから、こんな感じに有耶無耶にするのがいいの」

「それは幻想郷の強者殆どに当てはまることですけどね」

今までで一番ほのぼのとした空気が流れる。それを堪能し、二日目の生活は幕を閉じた。

おまけ（ちょっといい話）笑（？）

「……つとに、どうして私がこんなこと」

「私も手伝うので早く終わらせましょう」

「咲夜、貴方はもうあがりなさい。あんまり手伝われすぎてもパチエが納得しないだろうし」

「ですが……」

「いいから。時止めてまで手伝うことではないわよ。もう休みなさい」

「……はい。では失礼します。お嬢様も程々に」

「はいはい」

三十分後

「とは言ったものの……一晩じゃ無理」

「お手伝いします」

「……白？ 寝たんじゃなかったの？」

「これ終わらせたら寝る」

「徹夜になるわよ?」

「責任の一端はあるもん……」

「目え擦るほど眠いんなら寝なさいよ」

「やるもん……」

「あーはいはい。じゃあその辺の埃でも纏めておいて」

更に十分後

「ま、予想通りというか運命通りっていうか。ぐっすりだわ」

床に横たわって寝ている白を抱え、比較的片付いたスペースに移動させる。その際にも全く起きる気配はない。

「その心意気は買いだけど、結局私に手を煩わせてるし。元に戻ったら覚悟しておきなさいよ?」

そう言うレミリアの顔は最近の妹を見る目と同じく、優しげだった。

3日目／妖怪の山（前書き）

しつこく書きます。

- ・キャラ崩壊
- ・オチなんて存在しない
- ・意味がマジで分からない
- ・いろいろもうダメ
- ・意味不明

が平気な方のみどうぞ！

3日目く妖怪の山

「懐かしいわね。ちょっと前まではこんなだったのに」

「半分人間なだけあって、成長も同程度なものね」

「加えて妖怪って元から成体であることが多いから、子どもの姿なんて無いに等しいし。そういう意味で白って貴重よね」

「でも本人はこの前『狼と人間って染色体の数が違うのに、どうやって私が形成されたんだろう』って言ってたわよ？」

「幻想郷の神秘じゃないの？　そもそも狼である前に母親妖怪だから」

「『妖怪の染色体数も人間と同じなのかな……。』というか妖怪って人々の恐怖心とかから発生したんだから、生殖行動で増えるのっておかしいと思う。単為生殖のほうが有り得る気がする』とも言ってたわね」

「相変わらず訳の判らないことを……。あの子あれよね、偶におかしな事言うわよね」

「付き合っていると『どうして生物が生まれたんだろう』まで遡るから面倒なのよね……」

「文お姉ちゃん、はたてお姉ちゃん、疲れた顔してどうしたの？」

「何処で道を誤ったらあんな屁理屈を捏ねる娘になったのかぁ、と思ってたの」

「誰が？」

「あと一週間もすれば思い出すわよ」

「ふーん……？」

鴉天狗と白の仲は良好である。接する機会の多い射命丸文、姫海棠はたて、犬走椋などは特に良質な関係を築いている。新聞に関しては辟易する所もあるようだが、それ以外に関しては面倒見も良い

ので白もよく懐いている。

「文お姉ちゃん、守矢神社に行ってもいい？」

「私と一緒にならね」

「どうして？」

「写真が撮りたいから」

「私も行くわ。文だけに独占させるわけにいかないから」

「写真やだ。一人で行く」

「駄目」

小さい頃に写真を撮られ過ぎたことは白の中でトラウマとなっているようだ。今も敏感にその言葉を聞きとり、顔は嫌悪感でいっぱいだ。確かに今の表情も撮影している辺り鴉天狗のしつこさが垣間見える。

「うー……じゃあ、お姉ちゃんたちが戦って勝った人と行く」

「なるほどね。後腐れなくていいわ。はたて、準備はいい？」

「当然。あんただけがこの特集記事狙ってる訳じゃないのよ!」

「……よし、行くっ」

始まった戦いを一瞥して、白は守矢神社に向かう。最初からこうする気だったらしい。

しつこい身内には意外と冷徹な反応を返すことが明らかになった。

白は山に住んでいるので、当然此処には知り合いも多い。天狗を筆頭に、河童や仙人、神様など。引き籠もりと呼ばれることもあるが、錚々（そうそう）たる妖怪と知り合いなのである。故に、山を歩いていれば誰かしらから声を掛けられることは必至なのだ。

「あら、白じゃない。本当に小さくなってるわね、懐かしい」

「雛お姉ちゃん！」

「天狗の新聞が出てから山にいる気配は無かったから心配してたのよ？ ……誰かに監禁されてるんじゃないかって」

「地底と紅魔館に行った。楽しかったよ」

「そう、良かったわね。今は何処に行こうとしてるの？」

「守矢神社」

白は他人の能力を無効にするのであって、雛の厄を無効化出来るわけではない。長時間一緒にいればその厄の効果を受けて不幸が起きる。しかし白は神様の中では一番と言っているほど雛に懐いている。何かあったら相談するのはまず雛だ。本人の談では、『雛お姉ちゃんは優しいから好き』らしい。

雛も何度離れるよう言っても聞かない白に、ある種の諦めと好意を持っている。妖獣故の能天気さからか、そこまでのどん底とも言える不幸を味わわないのも理由の一つだ。勿論、そうならないように雛が調節しているのも確かだが。

「活動的ねえ。少しは休もうとか思わないの？」

「……一人でいたってつまんない。誰かと一緒にいるほうが……寂しくない」

悲しげに言う白に雛は、そういえば両親が亡くなって暫くは一人でいるのを嫌がっていたな、と漠然と思い出した。同時に、あの時は厄を被つてもらおうとでもしていたのかよく私の後について回っていたな、とも。その辺りから雛も白を受け入れ始めたのだ。

「じゃあ守矢神社まで一緒に行く？」

「……いいの？」

親しいといえども相手は神様。遠慮が先立つのも無理のない話だ。

「構わないわ。道々話しながら向かいますよ」

「うん！」

白は地霊殿や紅魔館でのことを話す。何も隠さずに言う所はやはり信頼の表れなのだろう。雛も楽しそうに話す白の姿を愛しげに見つめている。

話しながら歩けば目的地にすぐに着く。雛は近くまで来ると、白に神々に宜しくと言伝をして去っていった。一抹の寂しさが胸を覆う

が、本来の目的は此処に来ることと心を入れ替える。

「あれ……白、ですよ。うわぁ、本当にちっちゃい……」

「あ、早苗お姉ちゃん」

「まさかと思つてたけど、すごいわ。流石幻想郷、何でもありね」

「よく判ないけど、今日だけでどれだけ『文々。新聞』の信頼がないのかよくわかった」

さらりとひどい事を言いつつ、早苗に近づいていく。

白が守矢神社に来た理由は群れの狼を回収するため。以前白が狼を連れてきたことがあり、その時に何故か居着いてしまった個体がそこそこいたりする。神社側も、別段悪さをしないため放つておいてるようだ。

「うちの奴ら、何か粗相をしませんか？」

「狼たちのことなら心配ないわ。むしろ参拝客に好評なのよね」

「参拝客つて妖怪だよ。狼なんて珍しいのかな」

「お手とか伏せをする狼は中々いないからね」

「洒落で躡けてみただけなんだけどなぁ……」

居着いてしまったのは大人しい性格で、お手や伏せ程度なら誰の命令でも聞くだろう。どうやら妖怪たちもそれが面白い様子なので別にいいかと白は思い直す。苦情があつたら持つて帰ろう、と。

「用事はそれだけ？」

「うん。迷惑かけてないみたいだからもういいや、帰る」

「あ、待って。諏訪子様たちも貴方を愛でた……見たいでしょうから、寄っていかない？」

「途中でボロボロな天狗が来てもいいなら」

「……何したの？」

相変わらず行動が読めない子だと思いつつも、それ故に付き合いが楽しいのだろうと考える。無邪気さと冷静さを併せ持つと思えば、意外と排他的で極力山以外の妖怪や神々と付き合おうとしなかったり。最近では何処か悟った様な目をして山を留守にすることも多くなったが。

「文お姉ちゃんとはたてお姉ちゃんをけしかけて、そのまま放ってきた」

「度胸ありすぎですね」

パワーバランスを担っている天狗をぞんざいに扱える白に、早苗が戦慄したのは言うまでもない。

白は結局守矢神社にお邪魔することになった。天狗に関しては何も気にしないようにしたらしい。懸命な判断といえるだろう。

着いてからまず白が気にしたのはやはり狼の事。キョロキョロと辺りを見回しお目当ての姿を探す。すると白よりも早く向こうがその存在に気付く。久しぶりに会えたので狼たちも嬉しいのだろう、二、三頭がものすごい勢いで迫ってくる。しかし、平時なら避けるなり何なり出来たろうが、子供の身体で出来ることなどある筈もなく。

ドボーン

のしかかられた拍子に盛大な水飛沫をあげて湖に落ちることとなった。背後が湖だったのは幸いなのだろうか。因みに、狼たちは『ヤベツ』みたいな空気を醸し出し、この場から逃げていった。

いきなりな展開に呆然としている早苗を尻目に白は自力で湖から上がり、濡れた服の袖を絞る。我に返った早苗が持っていたハンカチで髪などを拭いてあげている。

「ぐっしより濡れてるわね。着替えたほうがいいわ」

「……もうお家帰る」

「夏場だし風邪は引かないだろうけど、その姿を写真に撮られるのは嫌でしょう？」

「早苗？ 何か音がしたけどどうし……ああ、落ちたの。ちっちゃい白が」

「小さい神様にちっちゃいって言われた……」

「どこにシヨックを受けてんのよ。というか今そんなに身長差ないでしょ」

現れたのは守矢神社の一柱である洩矢諏訪子。瞬時に事の顛末を理解し、二人に声をかける。白は小さいと言われたことがどうにも気になる様子だ。

「早苗お姉ちゃん、やっぱりもう帰る……」

「駄目よ。そんな格好でいたら危ない人に襲われちゃう」

「危ない人……紫様のこと？」

「貴女の中ではあの妖怪が一番危険なのね」

「強^{あなが}ち間違ってもないけどね」

諏訪子は濡れた白の頭を撫でていると見せかけ狼耳を引っ張っている。その顔は実に楽しげだ。早苗もそれを羨ましげに見ており、白だけが不機嫌な顔つき。しかも湖に落ちて更に弄られるのは子供の精神には堪^{こた}えたのか、目尻に涙が浮かび始める。

「うう……」

「あーうー、ごめんね。中に入って着替えないとね」

「もうやだあ、帰る……」

「駄目だって。早苗の言うとおり、変なのに絡まれるから」

左腕を諏訪子に右腕を早苗に掴まれ、神社の中に引きずられていく。神様と現人神に勝てる道理はなく、隠れている狼を睨みながら本殿に連れられていった。

「……早苗、落ちてるものを何でもかんでも拾ってきたら駄目と何
回言ったら分かるの？」

「湖に落ちてたのは拾いますよ」

「誘拐つてあつちでもこつちでも犯罪よ」

「この幻想郷では常識に「囚われて、その辺は囚われて。お願いだから」

「神奈子、それ白だから事件に成り得ないよ」

「天狗とかの信仰が薄れたらどうするのよ」

白が通された部屋にはこの神社のもう一柱、八坂神奈子がいた。泣きそうなる顔で全身ずぶ濡れの姿を見て頭を抱えたのは彼女だけだ。

「本殿に私が入っていいの？」

「別にいいよ。そういうのはあんまり気にしないんだよね、私」

「諏訪子、あんたは気にしなさすぎ」

「いいじゃない。元々私の神社だし」

「今歩いてきた道、水の跡が点々と続いているけど本当にいいの？」

「いいのいいの。乾くってその内」

快活に笑いながら手近にあったタオルで白の頭をガシガシと拭く。

それから逃れようとしたのか、白は身を擦って暴れまわる。

そうなれば、未だ濡れている白の服から水がはねるは必然の理。それが神奈子や早苗にかかるのも当然だ。

「いい加減にしなさい！　そういう事は風呂場でやりなさいよ！

何しれつと居間でじゃれ合ってるの！？」

「神奈子は怒りっぱいなあ。湖の神なんだから水くらい良いじゃん」

「それとこれとは話が違うでしょ！」

「はいはいっと。じゃあ白、ついでにお風呂にでも入る？」

「温水とか熱湯実は苦手。地底では頑張った」

「予想を裏切る回答だね。まあ、野生動物としては普通かあ」

「普段、水意外に触れる機会なんてないでしょうからねえ」

「なんで早苗もそんなに落ち着いているの？　私がおかしいの？」

「神経質なんだよ、神奈子は。水飛沫程度で」

タオルを白の頭に乗せて、再び部屋を出ていく諏訪子と白。早苗はその後姿に声をかける。

「……着替えて、一体誰のを着せるんですか？」

「体格的に私のだよな」

「早苗お姉ちゃん、奇跡起こして！ やっぱり帰るー！」

「何をそんなに嫌がってるの？ 神様の服を着れるなんてすごい誉れだよ」

「神様の知り合いいっぱいいるもん！ 静葉様達の服だって着たことあるもん！ それでかなりからかわれたからもう嫌だ！」

「まあ、やることはみんな一緒だよな」

「神様って性格悪い……もう雛お姉ちゃんしか信じられない……」

「私は？ あと早苗」

「諏訪子様の一味だもん……」

「一味って。一括りにしないでよ。しかも、さも諏訪子がトップみたいな言い方しないで」

それには返答を返さず、というか引つ張られていったため会話は打ち切られ、早苗もその後を追っていく。残された神奈子は、楽しそうに遠ざかっていく三つの後ろ姿に溜め息を吐いた。

「普段ツッコミ気質な子がああなると面倒くさいわ……元に戻ってくれたほうがいいわね」

そう言つて不意に聞こえてきた喧騒に耳を澄ます。

「白……よくもやってくれたわね。はたてに勝つたと思つたら居なくなつてるし……覚悟はいい？」

「うわ、文お姉ちゃん！」

「今から着替えさせるから、可愛く撮影してあげなよ」

「ほう……流石、分かつてらっしゃいますね。白、もう逃げ道はないわよ」

「うわあああん！ もう山から出たいー！」

「……あの子にとつても、あの姿は鬼門のようだし。あいつらがやり過ぎたら助けてあげましょうか……早苗は止めないだろうし。あの子を助けておくと後々信仰が増えそうでもあるしね」

故郷といえる場所で一番雑に扱われた白は、元に戻つた後真剣に山を出ようかと考えたという。雑が説得しなければ八雲家の一員になりそうだったとは本人の談である。

こうして、三日目の生活は文にバツチリと写真を撮られることが主な出来事だった。因みに、事の発端である狼は白には怒られたが、それ以外には褒められて待遇が良くなったとか。

4日目／永遠亭（前書き）

もはや恒例

- ・キャラ崩壊
- ・オチなんて存在しない
- ・意味がマジで分からない
- ・いろいろもうダメ
- ・輝夜がイナバと言わず、鈴仙やてるといつ名前を使う

が平気な方のみどうぞ！

4日目／永遠亭

「白、これをお師匠様に持って行ってくれる？」

「永琳様にです。判りました、鈴仙お姉ちゃん！」

「ありがとうございます。それが終わったらお昼ご飯にしようか」

「はい！」

「……見た目も中身もてゐより子供な筈なのに、役立ち度はまるで違うのね……」

そんな鈴仙の呟きが響くとある日の話。

「永琳様！ 鈴仙お姉ちゃんがこれを届けてくれ、って」

「ありがとうございます。これで薬が調合できるわ」

「永琳様のお薬は幻想郷一との噂を聞いています。文お姉ちゃんも確か……胡蝶夢丸という記事を集めた気がします」

「ああ、あの学級新聞。貴方、あの新聞購読してるの？」

「してないです。いつも勝手に持ってくるのです」

「そうなの。……貴方も元に戻ったら必要かもしれないわね、胡蝶夢丸が」

聞こえないように呟く永琳。しかしその手には胡蝶夢丸ナイトメア。天然なのか、本当に心配しているのか、はたまた実験をしいただけなのかは彼女のみぞ知れる所だ。

「鈴仙お姉ちゃんがこの後昼食にするって言ってましたが、永琳様はどうされます?」

「もう一段落ついたら休憩するわ。……ああ、それと白。昼食の後
は暇?」

「一応何も無いですけど……?」

「じゃあ、姫様の相手をしてくれる? 最近暇らしくてねえ……正
午近いっていうのにまだ起きないし」

「輝夜お姉ちゃん?」

「どうして私が様付けなのかとても気になる所だけど、そう。輝夜
の相手をしてあげて」

「はい」

様付け云々の話をスルーして返答する。元々適当に呼んでいる所が
大きいので回答のしようもないのだが。

昼食の用意ができて起きてこない輝夜を起こす係にも任命された
白。特に異論もないらしく、教えられた部屋に向かっている。

部屋の前まで来ると起きるようになら一声二声かける。しかし何の反応
もなく、起きる気配はない。その場合は入って叩き起こすように言
われているのもあって、そっと障子に手をかける。

「失礼します……輝夜お姉ちゃん、朝といつかもつお昼です。起きてくださ、いつ!？」

「っーかまえた」

「お、起きてたの？」

「ええ。貴方を此処に来させるように言ったのも私だし」

「なんで？」

「ちょうど抱き枕が欲しかったのよね」

枕元にやってきた白を引つ張り、自分の布団の中に押しこむ輝夜。妖獣といえど体は子供、抵抗はいとも簡単に抑えつけられる。

それでもジタバタと暴れる白を、先ほどの言葉に漏れず抱き枕よろしく抱き締める。その行動に諦めたのか思ったほど嫌ではなかったのか、抵抗を止めてされるがままになっっている白。それに気を良くしたのか輝夜は頭を撫でたり頬ずりしたりとやりたい放題だ。

「早くお部屋に行かないと永琳様に怒られちゃうよ？」

「んー……別にいいんじゃない？」

「永琳様が怒ったら輝夜お姉ちゃんを犠牲にするよ、私」

「いい野生の勘をしてるわね。永琳が本気で怒ったら蓬莱人じゃないと危険なもの」

「じゃあ早く行こうよ。怒られるのやだもん」

「私蓬莱人だし」

「ずるいよー!」

全く起き上がって活動する気配のない輝夜に白は焦る。薬を片手に輝夜を起こしてこい、と言った永琳に何かしらの恐怖を抱いたらしい。今はもはや涙目だ。そんな白の姿を見て、輝夜は抱く力を強く

する。

「大丈夫よ。鈴仙には言っておいたし」

「なんて？」

「昼過ぎまで寝てる、って」

「絶対怒られるよそれ！」

「仕方ないじゃない。あの忌々しい妹紅と明け方近くまで戦ってたんだから」

「布団の上で？」

「違うに決まってるでしょ！？ 誰に習ったのよそんな事！」

「紫様」

「あの馬鹿妖怪……！」

怒りからか呆れからか溜め息をつく。だが毒気は抜かれたようで、布団に横たえていた体を気怠そうに起こす。しかし白は未だその腕の中にいる。

「離してよう……」

「減るものでもないからいいじゃない……さ、行きましょう」

「着替えないの？」

「その間に逃げる気でしょう？」

「うん」

「もう少し嘘も覚えたほうがいいわよ」

「お姉ちゃんはまだ少し羞恥心を……」

「何千何百年単位で一緒にいるもの。今更裸同然の格好をしようとする溜め息をつかれるだけよ」

「呆れられてるじゃん……」

寝ていたので、当然今は寝間着姿。季節柄もあって薄着である。よって麗しい身体のラインが丸分かなりなわけだが、現在の白は子供、下心などある筈もなくただの親切心からの言葉である。尤も、普段でも下心は持たないだろうが。

「なあに？ 私が美し過ぎて見るのが恥ずかしいの？」

「いや別に。風邪も引かないし、お姉ちゃんがそれでいいならどうでもいいや」

「即答……。無邪気な分可愛いんだけど、悪気がない分心に刺さるわね……」

「早く行こうよー」

「……着替えるから待ってなさい。いい？ きちんと待ってるのよ？」

「それはフリ？」

「それは誰に教わったの？」

「霊夢お姉ちゃん」

「あのダメダメ結界コンビ……！」

普段でもまだ子供と言える白に、色々と変なことを教える奴らが結界を管理している実態に頭を痛める。それでいいのか幻想郷。

「……とにかく、フリではないから大人しくしていなさい。というか此処にいなさい」

「ええー……」

「何よ、その嫌そうな顔は。千年前の男たちなら泣いて喜ぶところ

よ

「だって……妹紅お姉ちゃんに悪い」

「霊夢！ 紫！ あんたら絶対に許さないからね！！」

響く輝夜の怒鳴り声。ただならぬ怒気を感じ取ったのかビクツと体を震わせ、脱出を謀る白。

しかし輝夜もそれを見逃すほど前後不覚になっているわけではない。首根っこを捕まえて自分の眼前に持ち上げる。

「貴方もねえ……言っつていいことと悪いことの区別がつかないの？」

「ご、ごめんなさい……」

「世の中つてね、謝っつて許してもらえない時もあるの。それを今から教えてあげる」

「や、やだよ！ ごめんなさいっつてば！」

「許してあげない。さて、どうしようかしら。まずは泣いて縋り付くまで逆さにも吊るして　「いい加減着替えて早く昼食を食べなさい！ この駄目姫！！」　え、永琳！？　きゃあああ！！」

突如として現れ猛攻撃を仕掛けたのは先の薬師、八意永琳。容赦無く攻撃を仕掛けたせいもあってか、部屋は瓦礫と埃が舞っている。うまく白を外して輝夜だけに攻撃を当てている辺り、流石である。

「ゲホツ……え、永琳様あ」

「泣かないの。ほら、ウドンゲが待ってるから行きましょう」

「ほ、放っつておいていいの？」

「大丈夫よ。髪の毛一本くらいは残したから……残っつてるわよね？」

「……（ガクガクブルブル）」

さらりと放たれた言葉に戦慄しつつ、白は永琳にくつつきながら歩を進める。その震えはもはや輝夜のせいも永琳のせいも判らない。

「ああ、それと姫。あの会話だけで巫女と賢者を犯人扱いするのは零点です。変なことを教えられたのは確かでしょうが、貴方と妹紅の関係をそれとなく示唆したのは私です。楽しそうだったので」

えええりいいいん！！ と、どこからか突っ込みが入りそうだが、それも全て無視して元・輝夜の部屋であり現在はただの瓦礫の山と化している場所を後にする二人。もちろんその間も白は顔面蒼白で震えていた。

「鈴仙お姉ちゃあん！ 怖かったよー！」

「えっ、ちよっ……ど、どうしたの？」

「怖かった、医者と姫が怖かったあ！」

「し、師匠と姫様が？ 何かあったの？」

「髪の毛一本しか残らなかった……」

「あーうん、大体分かった。怪我は……ある訳ないよね、師匠だし」
「当然よ」

永琳が扉を開けた瞬間、鈴仙に向かって走りだした白。そのままの勢いで飛びつき頭を鳩尾にめり込ませる。本人に自覚はないので鈴仙も呻き声をなんとか我慢した。妖怪でも苦しい物は苦しいのだ。

「ぐっ……白、お願いだからちょっと離れ」

「白、ウドンゲがとても嬉しそうだからもっとくっついてあげて」

「し、師匠……」

「良かったね、鈴仙」

「てゐ……あんたねえ」

そんな可愛らしいいざこざがあったものの、この日は四名でそれと
いった混乱もなく過

「私を抜かすんじゃないわよ！」

「ああ姫。漸く復活したのですか」

「地の文に突っ込むなんて流石姫様ですね」

「ロリコン」

「（ガクガクブルブル）」

「何よその棒読みは。あとてゐ、誤解されるようなことを言わない」

白が部屋の隅で膝を抱えて震えているのには気にしないらしい。輝
夜どころか鈴仙すらスルーしている。

「いえいえ、隠さなくていいんですよ、姫様。誰にでもそういう秘

密はあるものです」

「……………てぬ。ちょっとお話ししましょうか」

「遠慮しておきまーす。ほら、私も見た目は幼女なので」

「てぬ!」

元気に走り去って行く輝夜とてぬを一瞥して、永琳は鈴仙と白に食事を勧める。鈴仙はそれに素直に従い、白は恐怖や元来の性格から断ろうとしたものの永琳の謎の笑顔に冷や汗を出しながら従っていた。

「ウドンゲ。この後里に行ってきたもらえないかしら」

「里に……………ですか。つい最近も行った覚えがありますけど……………」

「貴方にとっては最近でも、人間にとってはそれなりの期間だわ」

「いやでも、一週間は人間でも十分に短い……………」

「白も連れていきなさい」

「白を? ……あ、何となく判りました」

「そういう事だから」

廊下から喧^{やか}しい足音が聞こえてくる度に、永琳の笑みが深くなる。

直接向けられている訳ではないのに、白と鈴仙はそそくさと食事を済ませて永遠亭を後にした。

その後、屋敷から悲鳴が二つ分聞こえたとか聞こえなかつとか。聴覚が人より優れている妖獣二匹が体を震わせていたということが確認されているとだけ言っておくことにする。

「人里に行くの？」

「まあそう言われたけどねえ……」

「行かないの？」

「あれは口実みたいなものだから。というか薬を持ってくる余裕も無かったし」

「じゃあどうするの？」

「ま、竹林を一周くらいしたら戻っても平気ですよ」

つまりは散歩よ、と続けて言う鈴仙に白は頷く。しかし顔は正面でも鈴仙の方でもなく、あさつての方向を注視している。

「どうしたの？ 何かいた？」

「うん。あの人達って……」

「え？ うわ、出来れば会いたくなかったなあ……あ、やばい気付かれた」

言うが早いか、その人物たち 藤原妹紅と上白沢慧音が鈴仙たちに向かってくる。妹紅の顔は昨夜の戦いからか不機嫌そうで、慧音がそれを窺たしなめているようだ。

「会いたくなかったはこっちの台詞よ。明け方まであいつと戦ってたっていうのに、もうあんたが送り込まれて来たって訳？ さっすが性格が悪いわねえ」

「こら妹紅。白を連れてきているんだからそれはないだろう。苛々して
いるからって他人に当たるな」

「妹紅お姉ちゃん怖い……」

「わ、分かったって。ごめん」

「白、妹紅もこう言っているから許して……うん？ どうした？」
「なんか痒い」

挨拶もそこそこにして、自分の首周りを掻き^{むし}る白。それに反応し
た鈴仙と慧音は患部の様子を見、乗り遅れた妹紅は更にその様子を
眺める。

「ああ成程。ちょっと妹紅は白に近づかないようにな」

「な、なんでよ？」

「ほらここ。白の首元に汗^{かんしん}疹が……」

「俗に言うあせもね」

「それ私のせいじゃないし」

「名の通り汗が原因の皮膚疾患だろう？ 妹紅は熱いからなあ……」

「だからって出会い頭五分でどうやったらなるのよ」

「ああ白、掻いては駄目だ」

「我慢して。あとで師匠にお薬貰おうね」

「聞けー！」

騒ぐ妹紅を見事に無視して白に話しかける兩名。白は白で痒い部位
を掻くなど言われてムズムズする体を持て余している。

「気を紛らわした方がいいな。そうだ妹紅、何か話してみたらどう

だ？」

「なんで？」

「竹林の案内を頼むのが大人だけとは限らないだろう。これも経験だよ」

「そうかもしれないけどさ……」

子供はどうもなあ……と頭を掻きながらもしゃがみ込んで白と目線を同じにする。そのまま白と妹紅は視線を合わせ、じつとお互いを見つめ合う。

「……」

「……」

「いや、何か喋れよお前ら」

鈴仙と慧音の突っ込みにもめげず、しばしその状態を維持する二人。時折頷き合ったりする辺りが何とも不気味だ。

「違うよ慧音。これはあれだ、目で会話っていうやつ」

「一朝一夕で出来るものではないだろう。そんなに子供が苦手なのか？」

「念のために聞いておくけど。白、本当に何か会話してたの？」

「うん。いい天気ですねーから始まって、最近の筈はどうよまで」

「ええ！？」

「嘘だけどね」

「うまく騙せたね」

「いえーい！」

「なんでそんなに仲良いの!？」

理解不能という感情を前面に押し出した二人を無視し、ハイタッチを交わしている二人。その顔は実に楽しそうだ。

「ちょ、ちょっと、いつの間にそんな意思疎通が……」

「長年の勘」

「野生の勘」

「何か通ずるものがあつたんだな……」

ついていけない展開に頭を抱えていた慧音に白は近づいていき、下からじつと見上げる。その目は何かを訴えているようだ。

「……どうした？」

「抱っ」

「……なぜ私なんだ？」

「さあ？ 慧音が良いんじゃないの？」

「寺子屋開いてるから子供の扱いにも慣れてそうみたいな理由じゃないのかしら」

「何にせよ、ご指名なんだからやってあげたら？ ほら、すっごく期待してるよ」

「……仕方ないな。おいで」

慧音の言葉に満面の笑みを返し、足元に歩み寄る。しかし、抱き上げられると最初は喜んでいたものの次第に顔が恐怖に満ちていく。

「ど、どうしたの？」

「何かあった？」

「く、来る……」

口々に心配する声が掛けられる中、恐怖に震えながらそれだけを言う。当然誰も意味がわからず、首を傾げている。

「輝夜お姉ちゃんが！ すごい殺気を纏いながらここに」

「新難題『金閣寺の一枚天井』」

「うわあ！ 慧音先生逃げて！ 死んじゃうよこれ！」

「姫様、私達もいるんですよ!？」

「うるさいわね！ 今虫の居所が悪すぎて八つ当たりしたい気分なのよ！ 誰でもいいから殺らせなさい！」

「輝夜あ！ 昨日の続き、ここでやってやるうじゃないの。いくぞ！」

「ふ、いい度胸ね。狂宴を繰り広げましょう！」

「うわあああん！ 怖いよー!!！」

殺し合いを繰り広げる妹紅と輝夜、泣き叫ぶ白を抱えて思うように動けない慧音、テンパる鈴仙。

この混沌たる場は、三十分後に永琳が妹紅、輝夜の両名を力尽くで黙らせるまで続いた。この日が原因で、白が竹林に近付くと原因不明の震えがするようになったのは余談である。

5日目〜白玉楼（前書き）

未だに終わっていない宿題がてんこ盛りの作者です！
あはは、英語どうしよう……orz

そんなわけで更新速度が落ちますごめんなさい。

では

- ・キャラ崩壊
- ・オチなんて存在しない
- ・あくまで作者の主観です（ある三人の議論内容）

が平気な方のみどうぞ！

5日目〜白玉楼

春には美しい彩りを見せる白玉楼の桜。

今は夏場ということであざやかな葉しかないが、それはそれで趣深いものがある。

白玉楼はその美しさもさるものながら非常に静閑としている。幽霊が多く、住人も少数ともなれば得心のいくところである。

これは、そんな美しく、静かなはずの白玉楼で起きた話。

「妖夢様、ここですか？」

「あー……うん、それで合ってるんだけど……」

「どうかしましたか、妖夢様？」

「その敬称をやめてくれると嬉しいというか……」

「……駄目、ですか？」

「駄目って言うか、幽々子様とか紫様だったら良いんだけどね、私はそこまで言われる器じゃないし」

「じゃあ、今は剣術を教えてもらっているので師匠の方が良いですか？」

「いや、それもちょっと……」

「いいじゃない、妖夢師匠。可愛い弟子ができたみたいで」

「あの、そもそも私は幽々子様の剣術指南役なのですが……」

「私はいいわ。見てるだけでお腹いっぱい」

「……はあ」

重い溜息をつく妖夢。傍には模擬刀を持った白が首を傾げて妖夢を不思議そうに見上げている。

子供は好奇心の塊という例にもれず、白も妖夢の腰にある刀に興味を持った。故に妖夢は少しばかり剣術を教えているわけだ。とは言っても、本当にさわりの部分だけ。

それを楽しげに見ているのは西行寺幽々子。普段は幽霊の管理、言い換えればいつも通り過ぎて暇をしていた所にやって来たのだ。新しい玩具を見つけたかのように瞳が輝いても仕方のないことと言える。

「幽々子様はお稽古しないの？」

「その内暇になつたらね。自分でやるよりも、貴方みたいな可愛い子を見る方が楽しいし」

「可愛いのは幽々子様ですよ？ 勿論妖夢お姉ちゃんも」

「あら、ありがとう。小さいのにお上手ねえ」

「本当のことを言うのに歳は関係ないです」

「ふふ……飽きないわ、この子。一家に一匹くらい欲しいわね」

「紫様がお怒りになりますよ？」

「いいのよ。紫より本人の意向が大事でしょう？ 今のうちから手懐けておこうかしら」

「もうお好きなように……」

楽しそうに笑いながら白を自分の元と呼ぶ。広縁に腰掛けている幽々子を庭から見上げる形なので、図らずとも上目遣いになっている。履き物を脱がせ、白を自分の膝の上に向かい合つように乗せてじつと見つめ合う。

「どうしたのですか？」

「んー……貴方、大きくなったら此処で番犬ならぬ番狼になる気はない？」

「番狼？」

「ええ」

「おお……！初めからきちんと狼扱いされたの久しぶりです」

「（ポイントそこなんだ……）」

「そうよねえ。貴方は狼なのに、皆ペットの如く扱うものね」

おそらくは幽々子の懐柔作戦の一つであろう会話に内心突っ込みつつ、そんな主人と客人のためにお茶でも煎れようと台所へ向かう妖夢。ふとその二人から目を離し辺りを見やると、普段なら有り得ない来訪者の姿があつた。

「え、閻魔様に死神……？」

「お久しぶりになりますか。どうです、私の言ったことをきちんと

」

「四季様、今日はそんな事を言いに来たわけじゃないんですから。

お、あそこに見えるが噂のちっこい白だね？」

「え、ええ、そうですが……まさか、白を目的にここまで来られたので？」

「勿論」

「（えー！？）」

「あつはは、済まないね。白は四季様のお気に入りなんだよ」

既に映姫は幽々子と白の所へ向かっている。妖夢はそんな映姫の言

行を目の当たりにして驚き、小町はその様子を見て苦笑する。
白もこの二人の登場に気付き、幽々子の膝の上から降りて映姫のもとに走って行く。

「あ、急に走ったら危な……あらら」

幽々子がそう言った直後に顔面から転んだ白。それを見た四人は苦笑するしかない。

「うう……」

「ほら、泣かないで自分で立ちなさい。出来るでしょう？」

「出来る……」

一番近くにいた映姫が声をかける。厳しいと思われるかもしれないが、甘えさせるのと甘やかすのは別だというのが此処にいる四人の共通意識だ。

映姫はゆっくりと立ち上がった白に笑いかけ、労をねぎらうかのようにならうにその頭を撫でる。

「よく頑張りましたね。偉いですよ」

「え、閻魔様が……あの閻魔様が何の打算もなく素直に人を褒めてくれる……！？」

「驚くところはそこか。まあ確かに四季様は此岸^{こし}じゃ説教してる姿くらいしか見れないけどね」

「彼岸（向こう）ではああいう姿は珍しくないということですか？」

「いや。あんな姿は初めて見たかもしれない」
「えええ！？」

微妙にかみ合わない会話に脱力する妖夢のもとに、白を取られて手持ち無沙汰になった幽々子が近づいてくる。小町と会釈を交わし、視線を映姫と白の方へ向けながら口を開く。

「まったく……折角いい調子で説得してたのに。貴方たちのせいで台無しじゃない」

「それは上司に代わって謝っておきましょう。見ての通り、あんな調子なもので」

「将来の夢が閻魔とか死神になったらどうするのよ」

「それはそれであたいの仕事が減るから魅力が……（ボソッ）」
「因みに私としては幽霊管理者になって欲しいわ」

「仕事丸投げじゃないですか！？」

妖夢の突っ込みを無視して幽々子は小町に家の中に入るように言う。白以外は平気だろうが、熱中症の危険も無いと言い切れないのでその予防策だ。二人にも言わなければと振り向くと、何故か桜の木に向かっている白とそれを首を傾げながら見ている映姫がいた。また子供特有の好奇心を撥られたんだろう、と全員が何も言わずそれを見守る。そんな空気の中、白は嬉しそうに声をあげた。

「あ、いた。毛虫だ！」

「ちょ！？」

「桜に付いてるからモンクロシャチホコかなあ。でも時期が……幽

々子様、これ分かる？」

「白、触っちゃ駄目よ。そのままこっちに来なさい」

「え？ どうして？」

「どうしてってかぶれるから……ち、違うわ。手で触らなければいいんじゃないの。だから枝に乗せて持って来ないでえー！」

「いやあの幽々子様？ あの毛虫も含めて冥界にいる生物は基本死んでますよ？ 幽霊ですよ？」

「そんなの分かってるわよ。でも今はこういう流れだったじゃない。私のか弱さをアピールするチャンスだったのよ」

「……か、か弱さ……」

「何、文句でもあるの？」

「と、とんでもない。御座いませんよ！」

幽々子と妖夢の会話を無視して小町と映姫は白に話しかける。その白はというと、興味が薄れたのか毛虫が乗っている枝を適当な場所に置いて次なる獲物を探していた。

「白は昆虫が好きなのかしら？」

「非常食になり得そうだから覚えてる」

「成程。確かに魚や肉に代わるタンパク源になるものね」

「四季様、その話は止めておきませんか？ なんか考えたただけですよ……」

「まあ、確かに昆虫食はこの国では忌避されていますからね。白、手を洗ってきなさい。その後でここのお宅にお邪魔しましょう」

「はい」

「あの、閻魔様？ 先程も言った通りあれは幽霊なので手を洗う必要はそんなに……」

「そんな事は知っています。ただの気分です、気分」
「……」

妖夢は考えることをやめた。

「ねえねえ小町お姉ちゃん」

「なんだい？」

「弱いものが強いものに勝つには……強くなるにはどうすればいいの？」

「ふむ……中々に難しい質問だ。そうだねえ、取り敢えずは精神が強くないとね」

「精神……心？」

「そう言い換えてもいい。どれだけ強い肉体や技を持つとも、それを御しきれる精神力が無くっちゃあ力に飲まれてしまう」

「そっか。……でもお姉ちゃん」
「ん？」

「戦う前から心が折れそうな時はどうすればいいの？」

「よく覚えておきな。世には逆らえないものっていうのも存在するんだ」

正座をしている小町の上に乗っている白は沈痛な面持ちをしている。

その原因はすぐ横の会話だ。

「……西行寺幽々子、貴方はまだ分かっていない。何年亡霊をやっているのですか」

「貴方こそ。ここまでのわからず屋は紫以来だわ」

「いいえ、この私が言うのです。そう、白は」

「絶対に認めないわ。白には」

「ツンデレが一番ッ！」

「デレデレこそ真理！」

お互いに声を張り上げ、持論を展開する。ちなみに上が映姫で下が幽々子である。

「私達の寿命を考えてみなさい。いつもいつもそんなにべったりしてはすぐに倦怠期が来て別れてしまうでしょう。適度なツン……刺激が必要なのです」

「そうなたら所詮それまでの愛だったということ。本当に愛し合っていたらそんなことにはならないわ。因みに、最近紫は『ツンツンも捨てがたい』と言ってるわよ」

「ほう……面白いですね。是非とも論を交わしたいものです」

「そうね。という訳で妖夢、紫を連れてきて。十分以内に」

「ええ！？ で、ですが紫様は何処にいるのか分かりませんし……」

「それでもよ。藍でも捕まえて聞き出しなさい」

「……はい、分かりました……」

とぼとぼと出ていこうとする妖夢を小町と白は同情の目で見つめる。かつてこれほどまで理不尽な要求を聞いたことがあっただろうか。しかしそんな視線の先に不自然な空間が広がっていく。紛う事無きスキマであった。

「それには及ばないわ」

「紫。覗いてたの？ 悪趣味ね」

「いえいえ、ただ面白そうな匂いを感じてやって来ただけです。どうやら私の勘は当たっているみたいだけど」

「ええ。私達のうち誰が正しいのか……気の済むまで語り合いましたよ」

「……ねえ、妖夢お姉ちゃん、小町お姉ちゃん」

「……何？」

「私はあの三人に何を求められてるの？」

「聞くな、あんな会話聞いちゃ駄目だ。お前さんはそのまま、純粋なままでいいんだ」

「どうして選よりに選よってあんな平行線を辿りそうな論議を……」

自分たちの上司がとんでもない議論に白熱している姿を見て頭を抱える両名。体からは倦怠感が滲みでている。ここだけ通夜の様な、どんよりとした空気が流れているのは気のせいではない。

そんな疲れた体にも、人の声というのは聞こえてくる。始まったばかりだというのに異様な盛り上がりを見せる三名の会話は、しっか

りと妖夢にも小町にも届く。白は小町が耳を塞いでいるので断片的にしか聞こえず、意味を理解するには至らない。

「そもそも、どうして紫はツンツンがいいの？ あの子が甘える時の恥ずかしそうで、でも嬉しそうな顔。あれを見たらすつこく和むのに」

「それには同感ですね。何故です？」

「……それを言われると辛いものがあるのだけど」

「何が？」

「私、あの子に素面で甘えられたことってないのよね……」

「そ、それ本当？」

「そうよ。だからデレだの甘えられると可愛いだの言われても分からないわ」

「しかしそれは貴方に問題があるのでは？」

「まあね。ほら、私ってしつこいじゃない」

「自覚あるならやめたら？」

「心配されなくても冬には逢えなくなるわ。で、その時に『いつもうるさい紫さんがいない……』となってくればいいの」

「で、その寂しい心を他の人間や妖怪や亡霊に埋められたらどうするのよ」

「さりげなく自分を混ぜたわね。まあ、そこらは藍とか橙に任せとくわ」

この会話でさらに部下たちの空気が重くなる。藍がいたらもつとどんよりとしていることだろう。

「ねえねえ妖夢お姉ちゃん」

「……………どうしたの？」

「何を言ってるのかよく分かんないけど、あの三人を見てると悪寒がするのはどうして？」

「……………正常な反応だから大丈夫よ」

「なあ、今日はもう部下同士で語らないか？ あの八雲紫の式神も誘って」

「……………そうですね、そうしましょうか。なんだか今此处にいと胃が……………」

「あたいも少し……………まあ、お互い上司の愚痴でも言い合おう。そうと決まれば善は急げ。白、出掛けるよ」

「何処に？」

「取り敢えずこの部屋から出て考えよう」

議論が白熱しているのか三人が出ていくのを咎める者はいない。気付かれているかもしれないが、何も言われないのでそのまま冥界を出て顕界に行く。そこで漸く小町と妖夢は一息つくことが出来た。

「ふうー……………何だったんだろうね、あれは」

「あれが幻想郷でかなり偉い方々なのですよね……………」

「あの方たちは対象が小さくなるうとやることは同じみたいだね。

……………ん、どうした白」

「眠い……………」

「まあ、あれだけ妙に熱気のコモった部屋にいましたからねえ」

「緊張の糸が切れたんだろうね。ほら、お姉さんの胸で眠らせてあげよう」

「ん……………」

目を擦っている白を抱き上げポンポンと背中を叩く小町。すると、白はすぐに眠りについたようで穏やかな寝息が場を支配する。

「こんな風に小さくなきゃ出来ないことをやればいいのにねえ……」
「抱っこなんてもとに戻ったら出来ませんしね。あとで貸してください」

「ああいいよ。さて、それじゃもう一人の苦労人を探すでしょうか」
「そうですね。今夜は飲みます？」
「いいね。なんだかもう……飲まなくちゃやってられない」

二度三度白の頭を優しく撫で、二人は有焼け色の空へ飛び立った。

オマケ・某酒屋にて

「だいたい紫様は白に熱を上げ過ぎなんですよ。もう境界弄ってるんじゃないかってくらいに」

「幽々子様も幽々子様で、虎視眈々と狙ってるようですし」

「四季様はどうにも可愛がる方向を間違えてる気がするんだよねえ」

……よし、白。三人の中で誰が一番好きなんだ？ 白黒つけよう

「え？ うーん……皆好き。ベクトルは違うけど、皆優しいもん。

けど……」

「けど何？」

「お姉ちゃんたちのほうが好き！」

にっこりと擬音が付きそうなくらいの笑顔で言い切る白。それに一瞬きよとんとした後、藍たちは嬉しそうに笑い始めた。

「あはは、上司を差し置いてこんな事言われるなんて。ありがとね。お礼に四季様の暴走をちよつとでも抑えつけられるように船頭の仕事頑張るよ。忙しくなったら流石の四季様も……」

「そうだな、じゃあ私もお礼に……紫様の動向が怪しくなったら報告するよ」

「私も幽々子様の会話術にきちんと突っ込みをいれるからね」

誰も自分の主人や上司の暴走を止めると明言しないまま、夜は更けていった。

5日目〜白玉楼（後書き）

私はなんとということをおの三人に討論させてるんでしょ……。

白は……どうなんでしょうね。

あんまり簡単に人に懐いたり人前でも甘えないだろうし……。
でも心を許したらベッタベタに甘えてきそう。人前以外で。

6日目／博麗神社（前書き）

ようやく書きあげました、このシリーズの最終話。

9月になると忙しいの何の……時間が足りない（泣）

今回もいつも通りキャラ崩壊というか何というのか……まあ、そんな感じに仕上がっておりますので、苦手な方はご注意を。

ちなみにこのお話、紫と藍が不憫な立ち位置に。魔理沙とアリスに至っては名前すら出ていません。本当すみません。

そう、これは霊夢の独壇場というかそんな話です。一人勝ちです。

なので、これも併せて許せる方のみ読んでください。

今回はちょっと言い回しとか自分なりに頑張ってみました。ちょっとは文章力が上がってるといいなあ……。

あ、それとここでの関係は本編には踏襲されません。

6日目 博麗神社

「霊夢お姉ちゃん。どうして紫様が傷だらけで寝ているの？」

「それはね、侵しちゃいけないものを犯したからよ」

「じゃあどうして藍様も倒れているの？」

「それはね、主人の不始末は部下も同罪に値するからよ」

「そうなんだ。じゃあ、最後にもう一つ」

「なに？」

「どうして私は霊夢お姉ちゃんのお膝の上でがっちり腰を捕まれているの？」

「離れたら逃げるでしょ？ これも勝者の権利よ」

「意味が判らないよー……」

時は少し遡って三十分ほど前。全ては紫が白を連れてきたことから始まった。

「霊夢、今いいかしら」

「駄目だっていても無駄なくせに、どうして許可を求めるのよ」

「そんな事を言うのなら帰るわよ？」

「帰れば。というか帰れ」

「ふーん、残念ねえ。帰れって言われちゃったわ、白」

「霊夢お姉ちゃんがそう言うのならそうするしかないです……」

「白！？ まだその姿のままだったんだ……」

「折角会いたいだろうと思って白玉楼から連れてきてあげたのに。仕方ないから帰りましょう」

「ちよつと待ちなさい。あんたは帰っていいけど白は置いていきなさいよ」

「それが、幽々子から面倒を頼まれちゃったのよねえ。任されたからにはきちんと熟こなさないよ」

白を膝に乗せ、更にスキマに腰掛けるという器用なことをしながら霊夢を挑発的な目で見る紫。それを睨み返す霊夢。殺伐とした空気がだ。

しかし、そんな空気をものもしないのが白である。空中の紫の膝上で船を漕ぐくらいに度胸が座っている。

「ほら、白も退屈なんじゃないの？ さっきからずっとそんな調子じゃない」

「夕べは遅くまで起きてたみたいなのよ。藍たちと一緒に酒屋で騒いでたみたいで」

「酒屋あ？ 何でそんなところに？」

「さあ。従者たちにも色々あるみたいね。……白ー、ここで寝たら駄目よ。もう少し起きててね」

「紫様の……御心のままにー……」

とは言うものの、夜更かしがたたっているのだろう、その声には覇気がない。ただ教えられた言葉を何も考えずに口に出している状態だ。

「……何、今の」

「え？ 何が？」

「何がじゃないわよ！ 何よ紫様の御心のままにっ！」

「だって、余計な知識もない純粹の塊だったから……。教えたら素

直に呼んでくれて」

「馬鹿じゃないのあんた」

「だってー、満面の笑顔で言ってくれるのが可愛かったんだもん」

「『もん』とかキモいんだけど」

「酷いわね。白はそんなこと思った？」

「ゆかりん可愛いー……幻想郷一です……」

「ふふ、ありがとう」

半分以上寝ているにもかかわらず、口を衝いて出るのはそんな言葉。どんな教育を施せばこんな状態になるのかは聞かぬが吉であろう。紫は予想以上の言葉を聞いて満足そうだ。『幻想郷一』というのは白が自分で加えた予定外のもの。紫に殺し文句を放ったのと同義である。

当然、素面の白がそんなことを言うわけがない。そうならば、子供の姿とは言えそんなことを言う白は（特定の人にとって）プレミアくらいの価値がつく。

つまり、『特定の人』に当たる霊夢がそれに腹を立てるのは必然的な流れだったのだ。

「紫、念仏でも唱えてなさい……！！」

「え、ちよ、ちよつと。何をそんなに怒って……」

「問答無用！」

「本気なのね……。くっ、藍！ 白を持ってて！」

腰掛けていたスキマは紫の自宅に通じていた。藍がいることを確認し、そこに白を投げ落とす。

藍は慌てて白を受け止め、困惑した表情で紫を見上げる。

しかしそこには、

「藍？ とつとと白を連れて上がって来なさい？」

既に倒された紫と、ニッコリ笑っている霊夢がいた。

「少々お待ち下さい」

「まったく……あいつらは何考えてんのよ」

呟く霊夢の腕には寝入った子狼（寝る直前に変化した）、足元には気を失った狐。二匹合わせて狡猾と揶揄される言葉もある中、この待遇の差は何なのだろうか。

「ま、暫くは起きないだろうし、のんびりお茶でも飲んでましょ」

起きない、という言葉为谁に向けたのか分からないが、腕にある毛を撫でながらそう言う霊夢。

片手に狼を持ち、お茶の用意という器用なことをして縁側に座る。白を膝に乗せ、緑色のそれを口に含んで一息つくくと、計ったかのように子狼の目が開いた。

「……ガウ」

「あ、起きた……って言ってもまだ眠そうね」

霊夢は苦笑しながらも、毛の流れに沿って全身をゆっくり撫でる。それに安心を覚えた白は、鼻を嬉しそうに鳴らして体を完全に預ける。

「起きたなら人型に戻ってよ。生憎と、私は動物に語りかける趣味は無いの」

「……？」

寝起きの頭では霊夢の言っていることを理解出来ず、首を傾げている。もう一度霊夢が同じ旨を伝えると、漸く合点がいったようで姿を変えた。

そして冒頭に繋がるわけである。

「逃げない。だから離してよう……」

「狼は嘘つきって相場が決まってるのよ？」

「私は嘘つかないもん。むしろいつつも騙されてる……」

「まあ、そうよねえ……」

普段の白の境遇を思い返すと反論ができない。おそらく子供の時は、山にいる神なり天狗なりにからかわれていたのだろう。

「それに……」

「ん、なに？」

「霊夢お姉ちゃんに抱っこされるの好きだから、降りたくない」

「……どうせ、誰にされても嬉しいんでしょ？」

白は人の気持ちを無自覚に盛り上げて、更にそれを無自覚に放置か叩き折ることが度々ある。それを痛感しているとはいえ、子供に対して随分捻くれた返答だなと少し霊夢は後悔した。

「確かに雛お姉ちゃんに抱っこされるのも好きだけど……霊夢お姉ちゃんに抱き締められるのが一番好き。なんだか安心する」

「……ゆ、紫とか藍は？」

予想外な返答に内心焦りながらも、それをおくびにも出さずに二の句を継ぐ。しかし、内容と噛んだことから動揺しているのは見て取れた。

「紫様はね、時々悪寒がするから怖い」

「あいつは……」

「藍様は尻尾がふさふさしてて気持ちいいし、優しいし、強いし、頭良いし、大好き」

「べた褒めじゃない」

「藍様はお母さんみたいで好き。霊夢お姉ちゃんと一緒にいて安心するから好き」

「安心？」

「うん。なんでだろうね」

聞きたいのはこっちのほうだ　　という言葉を飲み込んで、無邪気に笑う白を撫でる。頭の冷静な部分が子供と言い争うことを良しとしなかったためだ。

白も白で先程と同じように体を預け、目を閉じる。小さい子供特有の愛くるしい仕草に頬が緩むのと、白が口を開いたのはほぼ同時だった。

「あ、分かった。私、霊夢お姉ちゃんの匂いが好きなんだ」

「に、匂い？」

「うん。お日様みたいな香り」

「……………」

どう反応していいのか分からず黙ってしまった霊夢に、白はどうしたのと声をかける。じつと自分を見つめてくるその瞳にクスリと笑みを漏らし、顎を白の頭に乗せて覆うように抱き締める。

「ふふ……嬉しいことを言ってくれるわね」

「？なにが？」

「要約すると、私が好きってことなんですよ？」

悪戯っぽく笑い、霊夢は白の顔を覗き込む。少しの間きょとんとしていた白だが、すぐにこくりと頷いた。

「私は霊夢お姉ちゃん大好きだよ。お姉ちゃんは？」

「私？……そうね」

霊夢は顔を上げて少し考える。そのあと悪戯な笑みを大人びた笑みに変え、顎に手を置き自分の方を向かせた。そのまま自身の親指で白の唇をなぞり、疑問符を浮かべた白と目を合わせて妖艶な微笑みを送っている。

何してるの、と発しようとした白の唇は、霊夢のそれと重なり音にならなかった。

時間にして二、三秒にも満たなかった行為。幼い白はその間ただ呆然とするのみだ。

「な、何してるの霊夢お姉ちゃん！？」

「別に？こつするくらいには、私があなを思ってるっていう証明よ」

「ほえ？今のが？」

意味を完全に理解するには至らず頭を抱える白に、霊夢は苦笑を浮かべる。唸り続ける白を抱き上げて、縁側から部屋へと向かっていく。

「まあ、面倒くさい事は考えなくていいわ。……今は、ね」

「んむ？ 何か言った？」

「いいえ。そんなことより、まだ眠いでしょ？ 昼寝でもしない？
「する！」

この数十分後、仲良く眠る二人がいた。

side 白

「……………っ！！」

誰かに褒めてもらいたい。だってこんな状況で声を出さなかったのだから。

「（な、ななな何でこんな状況に！？ ……みぎゃああ！？）」

自分の恥ずかしい言行の数々が蘇ってくる。その殆どが思い出したくないというのはどうだろうか。

とりわけ、やはりというか一番きついのは記憶が新しい現在地
博麗神社での行動が私の気持ちを混乱させている。霊夢さんの行動
の真意が計れないのもあるが、もう一つ、大きすぎる問題がある。
小さくなった一週間を顧みて嘆いて悶えるよりも優先されるべきこ
とだ。

そう、私は確かに霊夢さんと昼寝をした。けれど眠る時、そこまで
近くにいたというわけではない。適度な距離に居たはずなのだ。な
のになぜ。

「私の背中に人の気配があるの……!？」

横向きに寝ていたらしい私の背後には生温かい何か。この温度はど
う考えても生き物……という人間。眠ってはいるようで規則正し
い寝息が聞こえてくる。

下手に動くと目を覚まさせてしまうので、取り敢えずは刺激しない
ように視線だけで周囲を確認する。したところで畳と壁が見えるだ
けで、何の収穫も無かった。……少し落ち着こう。

「これはあれだ。時間をかけてゆっくりと脱出すればいいんだ」

寝起きはいいのですぐに考えを纏めることが出来た。これ以外の混
乱事項や一週間の痴態はあとで考えよう、うん。

実際、私の背中辺りに霊夢さんの顔があるだけなので、逃げ出すこ
とが困難だという体勢ではない。しかしこの巫女さんは予測不能な
所があるので、万全を期したほうが良いのは確かなのだ。

「……………」

慎重に、一ミリずつ慎重に離れていく。時々乱れる寝息に動揺しながらも少しずつ距離をあげ、出立から数十分かけて完全に離れることが出来た。

細心の注意を払いながら起き上がり、抜き足差し足で襖に向かう。そつと外に出て、最後にそれを閉めた時、ようやくと私は安堵の溜息をつくことが出来た。

「はあ……なんだろう、この異様な疲れは……」

変に緊張して凝り固まった体をほぐしながら歩き出す。勿論家に帰るためだ。

……けど、山でもとんでもない事をやらかしてやり返されたっけ。どう考えてもあちらが大人気ないと思うのは私だけなのだろうか。

取り敢えず、あとで文さんにドロップキックでもお見舞いしてやるう。写真も出来るだけ焼却処分だ。守矢神社なんかもう行かない。諏訪子様と早苗さんを崇めるものか、神奈子様に私の信仰を向かわせてやる。あと雛さん。

……と、こんな取り留めのないことを考えながら縁側に出る。そこで私が目撃したのは、

「……ああ、そういうばこんな事もあったんだっけ」

未だに眠っていらっしやる（緩和表現）、紫さんと藍さんの姿だった。

「……ふう。生きてますかー？」

何かよく分からないため息をつきながら境内に出、声をかける。無論、相手は藍さんだ。理解出来ない単語を並べ連ねた紫さんに声をかけたいとは思わない。

声をかけて揺さぶっても起きない藍さんに、同情と申し訳なさ、それと霊夢さんへの恐怖心を抱く。殆どとばっちりだというのに、ここまで傷を負わされるのか……。

どういう訳かはわからないが、霊夢さんは私に甘いというか過保護というか、そんな態度を取っているようだ。おそらくこの二人に対する攻撃も、私の身を案じてのことだった……んだと思いたい。ただムシャクシャしていたとかそういう理由ではないことを祈るばかりだ。

……まあ、前者の通り私の心配からの攻撃だったとしたら、それもそれで何というか、疑問が出てくるけれど。

長くなりそうな思考を止め、立ち上がって再び帰り道を歩き出す。もうこの二人を起こすのは諦めた。だって完全に伸びてるんだもん。

「……………」

無言で長い長い石段を下る。飛んで帰るのが通例だが、今は誰にも邪魔されず一人で考えたいことがあった。山に戻ったら戻ったで、色々邪魔が入る。考え事には向かない。

「……………霊夢さんの、アレは……………」

思い返すは、霊夢さんのあの行為、あの表情。唇に、まだ温もりが残っている感覚さえある。あの一連の行為が指し示すものは。

「まさか、ね……」

各地で起こした自分の恥ずかしくて悶絶する姿を思い返すよりも、心を捉えて離さないのはあの人の姿。太陽のように、明るく暖かいあの人のことを思うと、どうにもこちらの心までそうなってくる。体中を駆け巡るむず痒い感覚は、しかしどうにも不快ではなく、私を和ませ、幸せな気分させる。先人たちはこれを何と呼んでいるのかも理解している。あとは、私か彼女が一步踏み出せば。

「……あとで、また此処に来ようかな。ペチュニアでも持ってきてペチュニア。花言葉は“あなたと一緒にいると心から和らぐ”。霊夢さんが花言葉を知ってるかは知らないけど、その後で私の言葉を伝えれば問題は無いだろう。その時、彼女はどのような表情をするのだろうか。」

「……ま、取り敢えず。山にいる方々には大芹おおせりでも贈っておこうか。附子ぶすでもいいけど」

大芹、別名ドクゼリ。読んで字の如く有毒植物である。附子、別名トリカブト。わりと一般的(?)な有毒植物である。

どちらも日本三大有毒植物と言われているので、その効能は言わずもがな。人間に食べさせてはいけません、絶対に。なので早苗さんは除外だ。その他の方は同情に値しない。

「そうと決まれば行動開始。腹痛で悶えよ、山の神々と天狗たち……！」

こそつと何かに混ぜて飲ませてやる。効果が良さそうだったらこの

一週間で行った所で同じ事をしてやろう。例えその後には口雑巾になろうとも。

この先、私の身にふりかかるであろう凶災と、博麗神社で怒るであろう吉兆を想像しながら、広い大空に飛び立った。

6日目 博麗神社（後書き）

書き始めと中盤頃は、時間があいてしまったので何を書きたいかわからなくなっちゃたんですよ。

なのでこんな仕上がりです。後悔も反省もしてます。

紫を鼻肩したいのに何故か霊夢にすり変わっている罫。どないせいと。

誤解される体質（前書き）

一気に書き上げました。一応推敲はしたのでそこまで酷くはないはず……。

しりあすっぱいのが混ぜてるのは、きっと私の精神が病んでいいるから。

そして一番重要なのは、神霊廟キャラを諦めたことです。今後出すかは未定だったりします。すみません。

誤解される体質

何となく、隣にいた雛さんに抱きついてみた。

「白？ いきなりどうしたの？」

どうしたと問われても特に理由があったわけではない。本当に何となくなのだ。

黙ったまま更に甘えるように強く抱きつくと、顔は見えないがクスクスと笑っている声が聞こえてくる。

「甘えたいの？」

優しい声とともに頭に降ってくる手。そのまま流れるように髪を梳かれる感覚に心地良さを覚え、目を瞑ってそれを受け入れる。

「それとも寂しかったのかしら？ 最近会ってなかったから」

「……両方」

呟くように答えると、更に弾む笑い声。それすらも心地よくて、だんだんと私を眠りへと誘いざなっていく。

「……あ」

「え、あ、その……すまない。こんな所に逢瀬あひまをしている方々がいるとは……失礼した」

半分以上寝ているような頭でも今とんでもない勘違いされたことは感じ取れた。雛さんすごく動揺してるし。

しかし今の私は眠くて眠くて仕様がな。体を動かすどころか口を

開くのも目を開けるのも億劫だ。

……なので、相手には勘違いをしたまま帰ってもらおう事にしよう。
知らない妖怪だし、別に構わないだろう。

私が体を動かさないために、必然的に雛さんも大きく動けない。かといつて私を振り払おうとはしない心遣いが嬉しかった。

そんなこんなで雛さんが軽く混乱している間に、相手の妖怪は去って行ったようだった。

「……白、起きてるでしょう？ 変な誤解受けちゃったわよ」

「んん……別にいいや。相手雛さんだし……」

「光栄だけど、これが他人に漏れたら不味いんじゃない？ というか私の命も危険になる気が……」

「……じゃあ後で話に行く。今は眠い……」

「ふふ。はいはい、お休み」

膝枕の体勢で、優しい温もりに包まれながら眠りに落ちた。

「……この辺りかな」

雛さんの膝枕による昼寝から目覚め、半ば追い出される勢いで誤解を解きにやられた。正直そこまで神経質にならなくても……とは思
うが、心配性な神様の為に一肌脱ぐとしよう。

匂いを辿ってやってきたのは人里の近くの寺。……こんなあった

っけ？

「おや、君はさっきの……」

「どうも。先程はお見苦しいところをお見せして」

「いや、あれくらいのことでは動揺する私も修行が足りないのさ。ところで、どうして此処に？」

「いえまあ……さっきのは誤解であり、他言はして欲しくないなあ、と」

「そんなこと、元からするつもりはないよ。恋人同士の幸せを壊すなんて」

「その『恋人』という部分が誤解なのですが」

そうだったのかい？、と笑う目の前の妖怪鼠さん。ぶっちゃけ生態系的に見れば捕食対象である。でも貫禄が凄いのでやらない。元からするつもりもないけど、怖いから更にしたくない。

「用件はそれだけです、これで失礼します」

「そう。わざわざ済まなかったね、こっちの勘違いで」

「いいえ、慣れてますから。あ、そうだ」

土産という程のものでもないだろうが、持ってきた食料を手渡そうとする。いい感じに勘でも働いたのか、野菜なので寺でも問題ないだろう。妖怪の山には色々な草も自生しているのだ。

それを渡そうと相手に近づいた時、なぜか十匹弱の鼠が私の足元を横切った。それに驚いてバランスを崩し傾く体。

不味いと思ったときにはもう遅く、目の前の妖怪鼠さんを巻き込んで盛大に転んでしまった。この年になって恥ずかしい。

目と鼻の先にある他人の顔に内心緊張しながらも、ゆっくりと上体

を起こす。しかし未だに私は妖怪鼠さんに跨またがったまま。足を捻ひねって
しまったようだ。

「す、すみません。大丈夫ですか？」

「いや、私の鼠のせいだしね……君の方こそ怪我は？」

「ないです。すみません、今退きま」

「ナズーリンに何をしようとしているのですか！ 光符『正義の威
光』！」

「え、いやちよつと待」

ピチューン

「大丈夫ですか、ナズーリン！」

「……御主人。彼女は何もやましいことはしていないのだが」

「え！？」

……目の前が赤に染まる。大切な、大好きな人が倒れていく。

私はそれを呆然と見ていることしかできない。身体が震えて動かな
い。

私の大切な人の返り血を浴びたそいつは、下卑た笑みを浮かべなが
ら私に向かってくる。

……再び目の前が紅くなる。赤い、紅い……これは、誰の血？

「……ん」

本日二度目の眠りから目覚めると、なんか目の前に鼠が大量にいた。

「……………」

そいつらを手で払いながら体を起こす。ふと自分が布団に寝かされていることに気付いた。どうしてだろう。そして此处は何処だろう。

「あー……攻撃をもらに食らって気絶したんだ。で、運んでくれたわけか」

横目で鼠たちが『報告だー』と言いながら部屋を出ていくのを見る。誰にするんだらう。

自分の体に目を向けると、あちらこちらに包帯を巻かれているのに気が付いた。その箇所が少し痛むが、まあ問題ない範囲だろう。

「目が覚めたみたいだね。体の調子は……………」

少しボーっとしていると、先ほどの妖怪鼠さんと虎っぽい方が入ってきた。虎柄の方は申し訳なさそうというか、そんな表情をしている。

「足以外には特に問題ありません。介抱までしてもらって申し訳ないくらいです」

「……嘘はつかなくてもいいんだよ」

「嘘？ ついてませんけど」

「なら、どうして君は泣いてるんだい？」

「え？ ……ああ、本当だ」

妖怪鼠さんに言われ、頬を触ると確かにそこは濡れていた。

最近あまりなかったんだけど……。お寺だからちょっとセンチメンタルな気分になってしまったのかもかもしれない。

「これは気にしてくれなくて結構です。時々あるんです、こういうのが」

「……そう。悩み事なら相談にのるよ。そういう寺だからね」

「大丈夫です。何を見て泣いているのかさえ覚えてないんですから」

そう、何の夢を見ていたかはいつも覚えていない。でも、私が泣くほどの出来事というと、思い当たるのはあれくらいしかない。

……お父さん！

白、逃げる！ 俺に構うな！

「つつ……！」

まただ。あの時のことを思い出そうとするたびに頭に痛みが走る。おかげであることは断片的にしか覚えていない。

二度三度深呼吸をし、痛みが引くのを待つ。こうするより他に、痛みを和らげる手立てはない。

「本当に大丈夫かい？」

「……はい、もう平気です。ご迷惑をおかけしてすみません」

「いや、基本的に全てこちらが悪いから当然だよ。ほら、ご主人も謝って」

妖怪鼠さんに促されて前に出てきた虎柄さん（仮）。この二人は主従関係にでもあるのかな。

ちなみに、虎柄さん（仮）の弾幕はしつかり私のトラウマになっていたりする。

「ほ、本当にごめんなさい！ 早とちりをしてしまったみたいで……ああ、謝って済む問題ではないですね。本当に、本当に……」

「いやあの、そんなに謝らなくても結構です。見れば徳の高いお方とお見受けしますし、そこまで深い傷でもありませんから」

「な、なんて心優しい妖怪なの……。あ、申し遅れましたね。私は毘沙門天代理の寅丸星と申します。それでこちらの妖怪鼠が部下の……」

「ナズーリンと言う。まあ、よろしく頼むよ」

「白と言います。こちらこそ」

妖怪鼠 ナズーリンさんと握手を交わす。なんか寅丸さんが「種を超えた友情……！」とか言ってるけど貴方も虎の妖怪でしょう？

鼠の捕食者でしょう？

「……日が傾いていますね。目も覚めましたし、もうお暇します」「無理はしなくていい。足を挫いているんだらう？ 調子も悪そうだし」

「飛んで帰れば平気です。それと先ほどの野菜、良かったら召し上がってください。三厭五輩さんえんごくべいくらいは踏まえますから」

「仏教のことをよく知ってるのね」

「さわり程度なら」

それ以上のことは知らないし、あまり興味もない。

「では、もう帰りますね」

そう言い歩を進めた途端、捻った足や弾幕で受けたであろう傷が痛み出す。それに顔をしか顰めると、寅丸さんが体を支えてくれた。

「無理はしないで。私達は貴方を悪いようには扱いませんから。ね？」

言い、私を横抱きに抱えて歩き出す。所謂姫抱きというものっておい。

「飛べる！ 飛べるから離してください！」

「駄目です。貴方は自分で背負い込むきらいがありそうですから」

「それと飛ぶのは別です！」

「ご主人、彼女を何処に？」

「聖たちにも紹介しておきましょう。聖ならこの子の力にもなれそうですしね」

聖って誰ですかと聞くのも諦め、このままの体勢で連れて行かれるのだった。

……これ、文さんとかにバレたら凄いことになりそう。

魔法使いの僧侶（前書き）

ここに活動報告を見てくださった方がいるかは分かりませんが、いたら「何が更新停止やねん」とお思いになるでしょう。

私自身投稿しようか迷ったのですが……前書きで活動報告に触れればそこを読む方も増えるかなあ、という打算が含まれております。元々書き上がったというのが大きな理由ですが。

上記が気になつた方は活動報告を見てください。勿論、見なくても何の問題もありません。

魔法使いの僧侶

「あら」

「星、誰その子？」

「お二方のお知り合いの方ですか？」

「……………」

連れてこられたのは……食卓、的な部屋であろうか。

そこには四人の女性と雲的な何がいた。最早何でもありだこの寺。なんで雲？

最初に声を発したのは金と紫の髪色をした優しそうな女性。今も私を微笑ましげに見ている。

寅丸さんに質問したのはセーラー服を着ている少女。興味津々で此方を見ている。

常識的な質問を投げかけてきたのはフードを被った雲と仲が良さそうなお人。でも楽しげに私達を見つめている。

最後に終始無言なのは短い黒髪に、黒いミニスカワンピースという特定の人には絶大な支持を誇りそうな少女。私をもものすごく睨んでいて怖い。冗談抜きで。

まあ、この方々がどういう人となりをしているかなんて分からないが、確実に言える事がある。

……………なんだか、ここでも誤解されてるっばい。

「君はいろんな人から誤解されるんだね」

「今は私のせいじゃない……………」

「何の話？ ナズーリン」

「ご主人様に対して白が嫌悪感を抱いているということだよ」

「ええ!？」

「そこまでは言っていないです」

ああほら、何だか黒髪少女の視線が厳しく……どう考えても嫉妬されてますね、分かります。

そんな視線を向けられて大人しくいられる性質たちではないので、無理矢理拘束から抜け出し地上すれすれで浮いておく。つまりはドラもんみたいなの。

「……器用だね」

「ずっとやっていると疲れますけどね」

「そ、それなら私が抱いていたほうが」

「天然は黙っていてください」

「時と場所を考慮るご主人」

言われた言葉を情け容赦なく却下する。これ以上羞恥プレイをやっているとこの神様代理は。私が泣いたら八百万の神々がいっぱい飛んで来るんだぞ。

「ふう。彼女はあれだ。ご主人が激しくやって気絶させた少女だ」

「あのナズーリンさん。誤解させようとか考えてないですよね？」

「かく言う私も押し倒されたしな」

「貴方の鼠のせいですよ!？」

聞きように寄ってはとんでもないスキャンダルである。文さんが目を輝かせているのが簡単に想像できた。

そんな漫才のような問答をしていると更に黒髪少女からの視線が険しくなる。マジ怖い。帰りた、うんよし帰ろう。

「……それではさようなら」

「あ、駄目よ！ 怪我してるんだし、もう日も暮れるから」

空気読んでよ！ 日が暮れるから帰れないほど子供じゃないし！
ナズーリンさんも何か言って……ニヤニヤするなあ！

「そうよ。日が暮れたら強い妖怪が出てきてしまっわ」

紫と金の髪をした人にそう言われる。でもその顔は楽しそうだ。

「あの、私のこの獣耳と尻尾見えてますよね？ 妖怪ですよ私」

「それは分かるけれど……貴方、そんなに強そうに見えないものですから」

……うん、まあ。確かにそうだけでも。面と向かって言われると……
刺さるね。

「……神の威を借る狼なので平気です」

お寺で虐められたー、と有ること無いこと共に言えば諏訪子様怒ってくれるもん。霊夢さんや紫さんだつて……駄目だこの二人は不味い気がする。主に破壊活動的な意味で。

「神？ 星のこと？」

「そつちではなく……山にいる数多の神様です」

「なんだか、あまり敵に回したくない子ね」

「七光りというのが微妙ですが」

なんだかそろそろ空中浮遊疲れてきた。飛び回ってたほうが楽なんだよね……やっぱり帰っていいかな。

「それでナズーリン？ 本当の所、彼女は何者なの？」

「さっき言ったので概ね合っているが……私と平和に話していた所にご主人のLunatic攻撃を浴びせられた憐れな妖獣かな」

「星！？ なんて事を！」

「それでそんな包帯が……」

寅丸さんに一気に集まる視線を感じ取り、こっそりと部屋から出ていこうとする。道は匂いを辿って行けばいいだろう。

そう思っただけに入ってきた扉を開ける。そのまま出ていこうとすると……何故か雲的な何かがその道を阻んできた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

暫く沈黙が続く。寅丸さんに集まっていた視線は既に私に戻っている。誰も口を開かない中、私と雲的な何か改め、雲山さんは握手を交わした。

「……………いや、何をしてるんだ君は？」

「雲山さんって良い方ですね。誤解していました」

「何を言っ……」

「え？ 寅丸さんは責任を持って肅清しておくから？ いいですよ。そんなのは。誤解も謂れなき暴力も慣れっこですから」

「まさか、雲山と喋っているの？」

「そうですね？ えっと雲山さん、この方の御名前は……。なるほど、雲居一輪さんというのですか」

「本当に話せる……」

この部屋にいる人に驚愕の色が浮かぶ。そこまですごいことなのだろうか。

「あの堅物な雲山が気に入るなんて……」
「そっちですか」

確かに少し頑固な所がありそうだけど、でも話してみたら意外と優しくかった。私の周りにはいないタイプだ。

コホン、と場を静めるような咳払いが聞こえる。発信源は……雲山さんによると聖白蓮という方らしい。魔法使いの僧侶？ ……これも和洋折衷と言えるのだろうか。

「面白い方ですね。雲山が気に入るということは悪い方ではないのでしょうか。貴方の怪我は此方に非があったとのことですし、もう日も暮れてしまっています。宜しければここに泊まっていきませんか？」

「いえ結構です」
「泊まっていきなよ」
「結構ですって……ええと、村紗水蜜さん？」

随分とフレンドリーな僧侶さんたちだ。素性もわからない野良妖怪を泊めようとするなんて。

……ああ、「お前が襲ってこようと蚊に刺された程度だよ。調子乗るなバーカ」という余裕の現れか。

「いえ、そういう訳ではないんですけど……」

馬鹿な、心を読まれた！？

「口に出てましたよ」

「古典的なことをするね」

「一人暮らししていると独り言が多くなるんです」

なんだかすごく恥ずかしい。……ちょっとその神様代理、口に手を当てて肩を振るわさないでください。行き過ぎたら神奈子様呼びますよ。

「……兎にも角にも、私達は妖怪だろうと人間だろうと神だろうと、傷つき、苦しんでいれば助けます。特に、貴方の怪我はこちらの不手際が元。このまま別れるのは私達が納得できないのです」

「してください」

「無理です」

にっこりと擬音がつくくらいの笑顔で言い切ってくれた聖さん。眩しすぎる笑顔ダナー。

「命蓮寺は妖怪のために造った寺だから、何の気兼ねもしなくていいんだよ？」

「生憎と、人間みたいな性格だとよく言われるもので」

実際半分は人間だし。

「そういえばそうだね。普通の妖怪と比べて、人間的な常識が身についているというか」

「妖怪的な常識ってものがよく分かりませんが、まだこの世に生を受けて十幾年ですからその辺りは追々と」

村紗さんは……うん、普通に優しいと思う。腹に一物抱えているよ
うなタイプではないだろう。雲居さんも同上。

「え、そんなに若いの!？」

「ええまあ。性格が人間よりなのは育ての親が仙人だったからでしょうね」

さて、そろそろ本当に帰らないと。

なんだか空模様も怪しくなって、一雨降りそうな気配さえするし。

「では、本当にこれで失礼します。別に怪我をさせられたなんて吹聴する気なんて更々ありませんし、怪我がどうしても心配なら完治した時見せに來ますから」

「……そんなにここに泊まりたくないの？」

「私、人見知りなんですよ。知らない人がたくさんいる所に一人なんて耐えられません」

「人見知りはこんなに会話できないと思うよ」

「餌のいらぬ猫がいますから」

それに、と続ける。

「大雨でも降ってたらアレですが、今はそんなに」

その瞬間、雷鳴が鳴り響き、同時にたらいをひっくり返したような大雨の音が聞こえてきた。

「……………」

「さ、お泊り決定ね。一輪、用意をお願いしますか？」

「はい」

……………どうやら、私は天にも見放されたいらしい。

稿は気付く(前書き)

後書きにアンケートあります。答えていただけたら嬉しいです。

鶴は気付く

「人と妖怪が平等な世界？」

殆ど強制的に泊まることになってしまい、今は命蓮寺に住んでい
る人達と談笑中。

上の台詞はその最中さなかに聖さんが放った言葉を、私が何となく復唱
してみたものだ。

「そう。それが私の目指す世界です」

「壮大な夢ですね」

「出来ると思いますか？」

「さあ」

「……ちよつとは考えてくれると嬉しいのですけどね」

いえいえ、考えましたとも。どうして雨があんな降ってるんだよ、
とか。

「知能の高い妖怪なら出来るとは思いますが。ただ、妖怪は人を襲い、
人はそれを退治する生き物。この関係が崩れるのはあまりいいとは思
えませんが」

「確かに課題はたくさんありますね」

「まあ、皆様は長く永く生きられるのでしょうし、ゆっくり解決す
ればいいんじゃないですか？」

「投げやりだね。というか、長く生きるのはむしろ貴方じゃないの
？」

「……ああ、そういえば言ってますでしたっけ、村紗さん。私は
半妖です」

「「「え!?!」」」

なにこの食いつきの良さ。思わずビビってしまったじゃないか。

「母親が妖怪で、父親が人間なんです。ですから千年も二千年も生きられない、と思います。百年くらいは余裕でしょうけど……」

「ほ、本当に半妖なの？」

「はい。寿命をのばす方法も無いわけではないようですが」

紫さんが「私の式になれば万事解決！ さあ私の胸に飛（ry）って酔った時に言ってたから。霊夢さんに叩きのめされてたけど。」

まさかの半妖怪カミングアウトで、驚いたように見つめてくる人たち。ただ、一人だけ……聖さんがそれとは別の目を向けてくる。

「……素晴らしいわ」

「は？ な、何がです？」

「貴方は妖怪と人間から生まれたのでしょ？ 私の理想とする世界に近い存在だわ」

「おそらくそんな単純な話ではないかと」

確かに人間と妖怪が分かり合ったからこそ半妖が生まれるんだろうけど……普通の妖怪が子を成せれるのかな。私は特殊ケースだろう、たぶん。

しかしそんな私を無視して手を握ってくる聖さん。我を忘れていのか力が強く、折れてしまいそうだ。片腕と片足をこの寺で失うことになるのだろうか。

「でもまあ、そうですね。そんな世になれば、半妖^{わたし}を理解してくれる方が増えてくれるかもしれませぬからね。それは少し憧れます」

「理解してくれる？ ……貴方の周りに、そういう方はいないの？」
「ああいや、そんな深刻に受け取らないでください。半妖の悩みは半妖にしか分からないものなんですよ」

人間と妖怪が分かり合えたとしても、半妖と分かり合えるとは限らない。なまじ半分は自分たちと同じ種族だから、むしろ半分違うというその差異を理解し得ないかもしれない。

私だって、時々自分が分からなくなるのだ。自身が妖怪なのか、人間なのか。

「……………」
「……………」

空気が重い。理由は分かりきっている。今この場に、私と私を睨んでいる少女 封獣ぬえさんしかいないからだ。他の方々はそれぞれやることがあるらしく、暫くは二人きりだ。

どうやら私はとことん嫌われたらしい。そんなに寅丸さんたちと仲良さそうに見えたのだろうか。

困ったことにこの少女、いろいろな感情を向けてきている。嫉妬と嫌悪、そして

「……………あんたさあ」

「はい？」

「何者なの？」

警戒と興味。

「……ただの、半獣ですよ」

「ふうん。そんなに隠したいことなの？」

「……何のことです？」

「それ、それなりに強い力を持つてる奴なら誰でも気付くんじゃない？」

「……ええ、おそらく。とは言っても、その方面の知識がある方に限り、ですけど」

「あれ？ もう認めちゃうの？」

「何となく、貴方には嘘が通じなさそうで」

紫さんにさえ白を切り通してきたのにね。殆ど他人だからっていうのもあるんだろう。

「……別に何をする気もないんですよ。こうなったのも自業自得ですし」

「へえ。まあ、納得してるならいいけどね」

「しています」

こうなったのは、本当に私が悪いからだ。文句をいう筋合いなど何処にもない。むしろ、こうして更正の機会を与えてくれたあの方たちには感謝してもし尽くせない。

「まあ、それなら私が言うことはもうないんだけどね」

けど、とぬえさんは続ける。

「聖たちを利用したりする気なら容赦はしない。あんたをここに泊めたのだって善意からだ。それを踏みにじるようなら」

言いたいことは嫌というほど分かったので、その先は言わなくていいと手で制す。

「……そんなことをするつもりは毛頭ありません。私はただ、もう少し自分を見極めたいだけですから」

「見極める？」

訝しげにその言葉を復唱し、視線を私に向けてくる。顔全体にも意味が分からないと書いてある。

「……ねえ、ぬえさん」

それを無視し、私は言葉を紡ぐ。

「親殺しって、どれだけの罪なんでしょうね」

鶴は気付く(後書き)

暗っ……。これ書いてた時はそこそ病んでたんですよね……。

まあ、そんな事よりアンケートです。というか質問です。

一つ目は、このまま白の過去を投稿していいかです。

というのも、この後は昼ドラ的な展開、つまりドロドロです。愛とか憎しみとかそんな感情最優先で行動します。

「妖怪が人間と同じ様にそんな感情に走るのか」と問われれば「うーん」かもしれませんが、そこは自己解釈の違いです。ちゃんとタグ編集しました。

纏めると、「白の過去ってドロドロだよ。見たい？」です。シリアスとか通り越してる気がします。

二つ目は誰落ちがいいか、です。

これは本来なら私が決めることなのでしょうが、ここまでやって来れたのは偏に読者様のおかげです。なので、なるべく読者様の意見をお聞きしたいのです。

因みに、現時点はハーレム、若しくは紫か霊夢落ちの可能性が高いです。

この話で既出なら誰でも構いません。人気が分割されるようなら個別エンドも考えています。

ただ、話の流れに寄ってはご期待に添えない可能性もあるので、そこはご了承ください。

では、上記二つの質問に回答よろしく願いします！

独白（前書き）

さあ、過去話を投稿しました。

『告白』や『こころ』や『ぬら孫』に感化された結果がこれですよええ。

言うほどシリアス部分がないかもしれないです。というかこの話だけだと意味が分からないかも……。そして聖さんマジ良い人。

もう少し書きたいこともあったんですが……文章に起こすのが難しくすぎましたorz

独白

私には生まれたとき妖力、つまり妖怪としての力がありませんでした。確かに妖怪である母の血を継いでいたはずですが、母が生きている間についぞ‘妖怪’としての力が目覚めることはありませんでした。

そんな私にも母は妖術の使い方を教えてくれましたが、使うことはいないだろうと思っていました。使い方がわかって、使うための妖力がないのですから。

‘妖怪’として生きられなかった私は父と共に暮らす内、必然的に‘人間’らしくなっていきました。とは言え、小さいころから妖怪とかかわってはいましたし、妖怪の山という特殊な場所に住んでいたため妖怪を畏れたことはありませんでした。

この山の脅威ともいうべき天狗とは、母を通じて小さいころから仲も良かったのです。だから‘人間’の子でも天狗たちは私を山から追い出そうとはしませんでした。

ただ、当時の私は失念していたのです。天狗が、余所者に対してはとことん排他的であることに。

母が亡くなったあとも、父は山を出ることをしませんでした。元々外来人である父は里に知り合いなどいません。少数ながらも顔馴染みのいる山のほうが暮らしやすかったでしょう。

また、里に行くとなると私の処遇も決めなければなりません。里人は妖怪を恐れています。いくら半分人間とは言え、私が歓迎されることは有り得ません。好奇や嫌悪の目でみられることは容易に想

像がつきます。父は、それを恐れて山に留まることを選択したのです。

私も私で人間の知り合いなど父しかおらず、嫌悪こそ抱いていなかったものの、人間に対してそこまでの好意も持っていませんでした。どうでもいい存在だったのです。

加えて、まだ幼かった私は母を失い、精神的に不安定になりました。思い返すと、その辺りは父に依存して過ごす毎日です。何をすることも、何処へ行くにも父と一緒にでした。

しかし父はそれに不安を感じました。このままでは自立が出来ず、一人では何も出来ない子供になってしまう、と。

だから父は私と距離を取り始めました。こう言うと大袈裟に聞こえますが、実際は食料調達の間の留守番などの、至って普通のことです。しかしそれすらも、当時の私には困難なことだったのです。

しかし一ヶ月もそうしていれば、私の依存も徐々に影を潜めていきました。それでも世間ではファザコンと言われる部類に入っていたとは思いますが、四六時中べったりと付き纏うことはなくなりました。

山で天狗と遊んだり狼たちと戯れたり、着実に立ち直りの道を歩んでいたのです。

あの日が、訪れるまでは。

*

「お父さん、どこに行くの？」

「ちよつと食料を取ってくるよ。もうすぐ尽きてしまいそうだし、冬支度は早めにと思ってたね」

「私も行く。手伝う」

父は少し考えたあと、笑って頷きました。

季節は秋、穰子様と静葉様のおかげか、たくさん^{たくさん}の作物が生え、美しい彩りが山を覆っていました。

手早く用意を済ませ、私と父は連れ立って獣道を歩きます。山にはたくさん^{たくさん}の食べられる野草があります。父はそういった野草を取るのが得意でした。

また、このとき既に私は狼の群れに入っていました。適切な言葉が見当たりませんが、ボスと言う立場ではなく、四六時中一緒にいるメンバーでもない……言ってしまうえば、今と大して変わりませんね。

なのでそれを生かし私は肉を、父は野菜を採取するため別行動をとることにしました。二時間後くらいに再びここで落ち合う約束を交わし、手を振りながら父と別れました。

おかしいと思い始めたのは、約束の時間が過ぎてからでした。正確な時間は分かりませんが、ずっと山で暮らしていると影の向きなどから予測がつくものです。凡そ三十分くらいが過ぎても、父は私のもとに現れません。

不思議に思った私は、父を探すことにしました。狼たちにも手伝ってもらい、父が行きそうな場所を巡りました。そして、人気どころか妖怪気も動物気もない場所に、父はいました。また、私とよく

遊んでいた天狗の姿もありました。

私はここでも不思議に思いました。母や私と天狗は仲が良かったのですが、父は人間だからかそこまで好かれてはいなかったのです。その二人がなぜ、と思いましたが、特に深読みもせず彼らへ近づいて行きました。

「白、来るな！」

「お父……さん？」

近寄る私に気付いた父が叫んだのと、爆風が起きたのはほぼ同時でした。何が起きたか分かりませんでした。しかし必死な父の叫びに、ただ事ではないことを理解しました。

猛風に煽られて折れた木々や石つぶが私の体に当たり、血まみれになりました。当時の私の身体は人間の子供です。暴風に巻き込まれ無事であるなど、有る得るはずがありません。幾度も襲ってくる耐えがたい痛みにも、私は強く目を閉じよう願いました。

『死にたくない』

*

暴風は、いつの間にか止んでいました。ふと気づけば、私には耳と尻尾が生えていました。そしてその尻尾には、血がべっとりと付いていました。鋭くなった嗅覚に、生臭いような、鉄臭いような臭いが飛び込んできます。

私の血ではありません。私の体は確かに血に塗まみれていましたが、

自分の血が尻尾につく道理はありません。

では誰の血か、という疑問はすぐに氷解しました。それとは対照的に、私の心は凍てついていきました。私は此处で起きたことを瞬時に理解したのです。

足下に、首と胴体が切り離された天狗と、全身に切り刻まれたような傷がある父の死体がありました。どちらも、私がやったのです。尻尾にこびり付いている血が何よりの証でした。

呆然としている私のもとに、鴉天狗がやって来ました。その鴉天狗はこの惨状を見、それから私を見ました。そこで何かを言われた気もするのですが、如何せんその時の私は何か信じられぬものを見るようなそれでしたから、耳には入ってきませんでした。

近寄ってくる鴉天狗に、私は微動だにしませんでした。天狗は種族間の結束が固い妖怪です。この場を見れば、私に襲いかかってくるのは目に見えていました。私は心の何処かで、それを望んでいたのかもしれない。

しかし、鴉天狗はそんな私を自分に血がつくのも構わず、抱きしめてくれました。私はその温もりの中で涙しました。

気づけば、天狗たちの住処にいました。どうやら気を失っていたらしいのです。

先の鴉天狗から連絡がいつていたらしく、何があったかを尋ねられることもありませんでした。

私はそこで、天魔様と色々なお話をしました。掻い摘むと、天狗を殺したにも拘らず、その罪を問わないから今まで通り山で暮らしていいとのことでした。無論、私はそれを断りました。天狗だけでなく、父も殺してしまった自責の念から、そんな待遇を良しと出来なかったからです。

しかし天魔様は頑として譲りませんでした。どうやら、母に何かしらの恩があるようでした。母は母、私は私と言っても聞き入れてもらえず、結局押し切られてしまいました。

ただ、こう言われました。

「お前の力を野放しには出来ない。お前が寝ている間に尻尾に封印を施した。それを外さない限り、我々天狗はお前に手を出さない」

私は、これを当然だと思いました。天狗を倒せるほどの力を、それをコントロール出来ず、感情に流されるような子供に与えることは危険です。それくらいのは、当時の私でも理解できました。

その後私は仙人様に引き取られ、数年間を過ごしました。

*

「そうした紆余曲折の末、現在の私があるのです」

いきなりの告白に、どこか呆然とした顔をするぬえさん。当たり

前か、初対面にいきなりこんな話をされたら。

沈黙が続く部屋に外の雨音が響く。この雨と共に、私の咎も流れてしまえばいいのに。

「……ふーん。中々な過去だね」

私はこの呟きに微笑で返す。ぬえさんは、別に同情しているわけでも咎めているわけでもない、そんな声だった。

「ま、私はあんたじゃないから、あんたの気持ちなんて分からないけど」

そこで言葉を区切り襖に向かっていく。それを開け、体を外に出してそれを閉めていく。この間、言葉もなければ視線も私に寄越さない。

「けど、そうやって自分の行いを反省できる奴、私はそこそこ好きだよ。見直した」

最後まで私に視線を戻さず、そう言って襖を完全に閉めきった。

……何を言っているんだろう、ぬえさんは。私は貶されるようなことこそすれ、見直されるような事などしてないのに。

「ごめんなさいね。ぬえは中々素直になれない子ですから」

「……聖さん。聞いていたんですか」

首肯する聖さんを見て、知らず知らずに溜め息が漏れる。聖さんではなく、その気配に気付かなかった自分に対して。

しかし人のよい魔法使いさんはそう受け取らなかつたらしく、不

賤なことをしたと謝罪をしてきた。それに私は頭かぶりを振る。

「ただの自己嫌悪ですよ……弱い弱い自分に対する、ね」
「……」

そう言つと、どこか聖さんの視線が厳しくなった、ような気がする。果たしてそれは正解だったようで、私の頬は乾いた音を発していた。

「っ……!？」

「貴方は自分を大事にしなさ過ぎです」

叩かれた頬を触りながら、今の言葉を反芻する。しかし、どうにも聖さんの言いたいことが分からない。

「貴方は、ご両親がとても大好きだったのでしょう?」

「当然です」

「ならばなぜ、そのご両親が望まぬような生き方をするのです」

母さんや父さんが望んでいない生き方? 何を言つて……。

「今の貴方は、ただ徒いたずらに自分を苦しめて生きているようにしか見えません」

「そんな事は……」

「ないと言いつ切れませんか。孤独が寂しくて、誰かに助けて欲しい。そう声を上げたことがあるのですか?」

ある。しかし、そう言おうとした唇はカラカラに渴いていて、音を発するに至らない。

「……貴方は臆病ですね」

「な、にが……」

「先程、半妖は半妖にしか理解されないと言いましたね。でも、私は違うと思います」

私の目を見つめてどこまでも真剣に、彼女は言う。

「貴方の周りには、助けを求めればそれに応えてくれる方がいる筈です。そうでなかったら、貴方は今ここに生きてはいないでしょう。貴方の知らない所で、貴方は助けられているのです。それが『生きる』ということなのです」

聖さんの言葉に、私は今まで出会った人たちを思い浮かべる。天狗、河童、神々……そして父さんと母さん。この短い生で、私はこれだけの方と会っていたんだ。だけど、

「親殺し、ですよ？ その大好きな両親を手にかけた私を、どこの誰が助けてくれると言っんですか……！」

「……」

「母さんは私を産んで衰弱し、父さんは直接手にかけた。それだけじゃない、私は半妖です。人間を襲いたくなる衝動に駆られ、襲ったあとに罪悪感を感じるような、そんな中途半端な存在なんです。そんな私を誰が……理解し、助けてくれるとっ…………！」

妖怪なら、大切な人を失ってもすぐに立ち直る。

人間なら、大切な人を失ったら中々悲しみを癒せない。

「どつちの本能も、同じくらいあるから……いつもいつも、人間にも妖怪にも理解されない行動をする。両親を失って悲しんでいた私は、仙人様に預けられてからも数年はずっと塞ぎ込んでいました。」

でも、ある日突然に立ち直ったんです」

「^{マイナス}負から一気に^{プラス}正へ。その途中の段階が、私には存在しないのかも
しれない。」

「気持ち悪いでしょうか？　ずっと暗いと思っていたら、いきなり明るくなる。でも、それが私なんです。これが……人間と妖怪の狭間なんです」

聖さんは、私の話を黙って聞いてくれていた。荒げた息を整える私を見つめて、ゆっくりと口を開いた。

「優しいのね」

「……はあ？」

正直、予想だにしていなかった発言だったので、かなり失礼な返答をしてしまった。だが、さして気にする様子もなく聖さんは言葉を続ける。

「貴方はそれだけ悩んでいる。己の半妖という立場や葛藤に。でも、それだけ考えて苦しんでいるのに、一言も『両親を恨んでいる』とは言わなかった。普通なら、自己に不満がある時、どうしても両親にその不満が向くものなのに」

「……有り得ない。それは何があっても有り得ません。あの人達は、私を愛してくれた。半妖とかそんなの気にせず、ただ私を……」

「そうね。貴方を見ていれば、貴方のご両親がどれだけ愛情を注いでいたか分かります。でも、だからこそ……」

言葉を濁して俯いたかと思えば、勢いよく顔を上げて再び強く言う。そもそも、どうしてもは貴方は両親だけしか自分に愛情を注いで

いないと考えるのか、と。

「そ、れは……自分の子供だから……」

「残念なことに、世には自分の子を愛せない方もいます。また、自らの子でなくとも存分に愛情を注がれる方もいます」

「そう、ですけど……」

「愛情を与えるのは、その対象に幸せになって欲しいからだとは思っています。きっと貴方の御父君も、そう願っていると思います」

「けど……私は、父さんを……」

「それでも、です。子が親を想うように、いえ、親はそれ以上に子を想っているものです」

「……」

「今はまだ難しいかもしれませんが、けれど、落ち着いたら周りを見渡してご覧下さい。きっと……いえ、必ずご両親以外にも貴方の幸せを願っている方がいらつしやるでしょう」

私の幸せを願う……願ってくれている……？

「それでももし、誰も信じられないのなら私達を頼ってください。ここは妖怪のために開いた寺ですが、人も受け入れています。人と妖を受容しているこの場所が、半妖をそうしない道理はどこにもありません。この寺は……私達は、貴方の味方ですよ」

ふと、思い出した。あの時鴉天狗に 文さんに言われたこと。

『貴方の味方』って、抱き締めながら言ってくれたんだ。安心して嬉しかったのに……あの後、自分の妖怪の部分が嫌いになった私は、純粹な妖怪である天狗や河童に酷い態度をとってしまいました。ずっと心配を掛けてしまった。今思えば、私はなんてことを……。

「っ、う……！」

様々な感情が交ざり合って、目頭が熱くなる。それに気づいた聖さんは私の頭をポンポンと撫で、抱きしめてくれた。

明日から、私はきっと生き方が変わる。変えてみせるよ、父さんと母さんがいつも言っていたように。だから……見守っていてください。

独白（後書き）

次話の方がシリアスっぽいです。

事実の補足、っていう感じですね。
なるべくすぐに投稿します。なるべく。

もう一つの真実（前書き）

事実と真実は違う。って何かに書いてあった。
という訳で、事実のお話です。

まさかのオリキャラ、天魔が登場します。

もう一つの真実

「ねー、いい加減認めてくれてもいいんじゃない？」
「何をだ」

月光が地上を照らす時、ある大妖怪たちが優雅に話す。

「分かってるくせに。白の尻尾の封印のことよ。解いていいでしょ？」
「ならん」

八雲紫は問う。それに対し、もう一人の大妖怪　天魔は首を横に振る。

「どうして？　あれがあると私が式を打つのに邪魔なのよ。暴走が心配でも、私がいれば何の問題も無いっていつも言ってるじゃない」
「……ならんものは、ならん」

不服そうに紫は反論する。しかし、それに対しても天魔は首を横に振る。

「いつもいつもその返事ね。しっかり納得できるような理由なら私も何も言わないのに。今のだと、ただ貴方が私情で封印を解かせたくないだけに聞こえるわ」
「……………」

ついには何も言わなくなった天魔に紫は溜め息をつき、今日も黙^{だんま}りを決め込むの、と言う。いつもはこの紫の呟きにも天魔は反応せず、そのままお開きになるのが通例だ。しかし、今日は違った。

「なあ、紫」

「何かしら？」

突然の呼び掛けにも動じず、紫は返事をする。それを聞いた後、天魔はゆっくりと重々しく口を開いた。

「お前はあの子の……白の過去を知ってるのか？」

「ええ。さつき盗み聞きをしたわ」

「……そうか」

「尻尾が封印されてるのも、自己否定的な理由も分かったけど。総じて感じたのは、やっぱりあの子は人間みたい、ってことね」

「何故？」

「確かに父親を手にかけてしたのはショックだったかもしれないけど、それを引きずるのは人間くらいよ。妖怪は二、三日も経てばそんなのコロリと」

「……違う」

紫の言葉を遮り、天魔は否定の言葉を現す。訝しげな表情をする紫に構わず、天魔は自分のペースでゆっくり言葉を続ける。

「あの子は父親を手にかけてなどいない」

それを聞いた途端、紫に驚愕の色が浮かぶ。

「どういうこと？」

「そのままの意味だ」

「きちんと説明しなさいよ」

紫はしつこく天魔に問いかける。天魔は煩わしげに紫を見たあと、

逃げ切れないと悟ったのかポツリポツリと話し始めた。

*

「まず確認だ。紫、白の母親が天狗にとってどんな存在か知ってるか？」

「元々は貴方のペットだったって聞いてるわ」

「そう、あいつは私の飼っていた狼が妖獣になったやつだ。妖獣になる前は色んな天狗たちから可愛がられていた、私の娘みたいなものだ」

「何年くらい前の話だったかしら。一尾だったと思つたら、数年後には九尾になつてて。思わず式にしようと思い掛けたわね」

「四、五百年くらい前だ。鬼は既に地底に身を潜めていたから。あの時はお前と幾度と無く戦つたな」

「貴方が親馬鹿だったのよ」

当時のことを思い出しているのか天魔は笑っている。しかし、次の瞬間には暗く俯いてしまった。

「……そうだな。あの時お前のもとに遣つていれば、あんなことにはならなかったのかも知れない」

「タラとかレバとか、仮定の話をしに来たんじゃないの。大体、なんで今その話が必要なのよ」

「紫、なんであの子が白を産んだくらいで衰弱したと思う？」

質問を質問で返され、少し不機嫌になる紫。しかしきちんと考えてはいるようだ。

「さあ……検討もつかないわ」

「相変わらず嘘くさいな。答えは、白に『力の大部分を持って行かれた』からだ。尤もそれが予想外だったのか、はたまたあの子が望んで受け渡したのかは判らない」

けど白を見て、嬉しそうに愛しそうにしてたあの子を見ればそんなのはどうでも良かった、と天魔は続けた。その言葉には、純粹に親が子を思う情があった。

「白の話を聞いて不思議に思っただろう？ 封印するほど危険なのかって。危険なんだよ、実際。あの事件の時も尻尾は五本あった」「じ、冗談でしょう？ あれってせいぜい十年くらい前のことじゃない。白だってせいぜい四、五歳で……」

「そうだよ。だけどそれだけの妖力があつたんだ。まあ、これはまたあとでだ」

話疲れたのか、天魔は酒を要求する。紫は不承不承ながらもスキマを開き、傍から見ても上等そうな酒瓶と盃を二つ取り出した。

注がれた酒を一気に飲み干し、大きく息をはいてから天魔は続きを話し始めた。

「最初に戻るが、つまりあの子は天狗たちと仲が良い。友情以上の感情を抱く奴も少なくなかった」

流石私の娘だ　と、またも酒を呷りながら言う。紫もその横で、ちびちびと飲みながら続きを待つ。

「ただ、これは妖怪の癖というか何というか……何せ時間なんぞはたっぷりあるから、そこまで積極的に近づく奴はあまりいなかった

んだ。若しくは玉砕だったかな」

だからだろう、と天魔は呟く。

「人間は妖怪より寿命が短い。だから後悔のないように一生を駆け抜ける。そんな姿にあの子は惚れたんだろうなあ……」

「……白の父親は外来人って聞いたけど？」

「そうだ。山に落ちてたんだよ。それをあの子が介抱したんだ」

それから時間は掛からなかった。妖怪と人間はお互いに惹かれ合い、ついには子を設けるまでに至った。

「ただ、それでめでたしめでたしとは行かなかったんだ」

「周囲からの嫉妬、かしら？」

「そうだ、と天魔は頷く。空になった盃に波々と酒を注ぎ、それを飲まずに口元に掲げる。

「数百年かけて誰も近づけなかったのに、数ヶ月で夫婦めおとになったんだ。当然といえば当然かもしれないな」

「そうかしら。私は行動しなかった奴らが悪いと思うけど」

「まあ、お前からすればそうかもな」

酒に映る自分を見つめ、悲しげに笑う。

「あの子が生きているうちはまだ良かったんだ。他の奴らも大っぴらに行動できないから……」

「あの子ってそういうのに疎かったの？ それだけ他人に好かれてたんでしょ？」

「疎い。白を見てれば分かるだろう。あれは母親似だ」

「納得」

紫は白の思わせぶりな態度の数々を思い出す。それを反芻し、クスクスと笑いながら酒を飲む。

「話を元に戻すぞ。……あの子と白は天狗たちに歓迎された。今からは想像がつかないかもしれないが白は子供の時、それはそれは活発だったんだ。快活で利発だから、すぐに順応した」

「想像できないわねえ。今の白はどちらかというと理知的なもの」

「そうだ。あの事故を境に、白はああなった」

「いい加減話してくれない？ その真実とやらを」

「お前が横道に逸らしてるんだろっ」

紫の発言に深い溜息をつき頭を抱える天魔。そんな姿を見て、紫は失礼ね、と声を上げる。

「貴方が中々核心に迫らないせいよ。外堀なんて埋めなくていいから、さっさと言いなさいよ」

「分かった分かった。本当にお前はあれだな、空気をわざと読まないところとか変わってないな」

「いいから続き」

「……あの日、ついにある天狗が行動に出た」

あの日、というのは白が妖力を解放した日。父親を失った日のことだ。

「あの天狗もあの子を好いていた。そして白も。だから、その父親が邪魔だったんだろっ」

「邪魔ねえ。白がその血を継いでいるのに？」

「ああ。そもそも妖怪は血縁をそこまで重視しないだろっ？」

「まあ、血縁がいること自体稀なものね。だから大抵の妖怪は、『血』ではなく『個』を見る」

「その通り。白とよく遊んでいたらしいが、その度に父親の話をされたらう。好意を持っていた者の娘に、更に同じ男の話をされるんだ。憎くならないわけがない」

私だつてその感情を抱いたしな　天魔はそう言った。紫は黙つてそれを聞く。

「その日、あの天狗は機会を伺っていた。白と距離が十分に離れたところで、一人になったあの男を襲った。ただ、あの男も伊達に此処に住んでいるわけではない、抵抗した」

互角に渡り合う男に苛立った天狗はついに暴走した。全力で攻撃し、それで男を殺そうとしたのだ。ただ、一つ誤算があった。

「気が急いでいたのか、白が近づいていたのに気が付かなかったんだ。だが放たれた暴風は止まること無く、男の命を刈り取った」

白は父親を手に掛けていない。むしろ、目の前で顔馴染みの友人にその命を奪われたのだ。その衝撃は如何ほどだっただろうか。

「白は混乱した。目の前で起こったことを中々信じられなかった。だが理解した瞬間、彼女は暴走した」

「……」

「白の中では、『父親>天狗』だったんだ。憎しみや怒り、悲しみの負の感情が彼女の心を覆い、そうして妖怪となった。どれほどその感情が強かったかは、人間から妖怪になり、一気に五尾になったことから推して知るべし、だ」

「天狗、は？」

「そつちは間違いない。白がやった。白は気づいてないだろうが、男と天狗の傷のつき方は明らかに違っていたからな。男は風でスツパリと切り刻まれていたが、天狗の首と胴体はまるで切れない刃物で無理やり切られたようなそれだった。力尽くで切り落としたんだろうな」

ふう、と大きく息を吐き出しながら遠い目をする。そこから感情を読み取ることとはできない。

「父親を目の前で殺され、その犯人である天狗を殺した白は混乱した」

「事実を受け入れられなくて？」

「それもあつたらうが、あの子は人間よりはドライな子だ。その辺は何処かで諦めていただろう」

「じゃあ何に？」

「妖力の使い方だ。いきなり膨大な力を与えられて使いこなせるやつなど殆ど居ない。まして、白はそれまで靈力くらいしか使ったことがなかったんだ。だから当然の如く、白は溢れ出る憎悪も妖力も持て余した」

どうしていいのか分からず、更に慌ての、悪循環。幼い白には抗う術などなかった。

「制御できない力は持ち主さえ傷つける。白の体は更に傷ついたが、本人にはどうしようも出来ない。幸いなことに近くにいた鴉天狗がすぐその場に駆けつけ、それを発見した」

「それで？」

「事の顛末を瞬時に理解した鴉天狗は、白の暴走を止めた。あと少し遅かったら白も危なかった」

「その天狗はどうやって暴走を止めたの？」

「自分の身が傷つくのも構わず白を抱き締めたらしい。白は泣きながらずっと『ごめんなさい』と謝っていたそうだ」

自分自身も重症を負いながら、気絶するまでずっと白は謝っていた。父を見つめ、天狗を見つめ、酷く罪の意識に苛まれた。

「ここからが、ある意味一番問題だ。封印を解いていけない理由もこれなんだ」

「聞きましよう」

「……白をあのままにして再び暴走されるのは困るので、我々は先代の博麗の巫女に封印を頼んだ。金一封を携えて」

「……貴方たちがやったんじゃないのね」

「こういうのは専門家に頼んだほうがいいからな。ただ、封印は無事に終了したんだが、誤算が生じた」

「記憶の改変……」

「そうだ。意図したわけではないようだが、白は前後の記憶が曖昧になった。その内、はっきりしない記憶は失われ、鮮明な記憶同士がくっついた」

「……だから白は、『顔見知りの天狗が父親を殺した』という事実を忘れ、どちらも自分がやったと思っ込んでいる、ってわけね」

「……封印が解かれれば、おそらく全てを思い出さるう。私はそれが怖い。あの子に加え、白さえも私の側から離れて行ったら……」

「理由はよく分かったわ。じゃあ、明日にでも封印解くわね」

「そうか、分かってくれ 何言ってるんだお前！ やめてくれ、

白は、白を失うのは……！」

「黙りなさい」

酷く抑揚のない声で紫は言った。それは、大妖怪たる天魔に畏れを抱かせるようなものだった。

「父親を手にかけてた悩んで苦しんでるあの子を見てきたんでしょ？ それは違つと言つてあげることさえ出来ないの？」

「……お前の言つとおり、自分勝手な言い分だ。だが白は……私の孫みたいな存在で」

「大丈夫よ」

ふわり、と優しいに笑みを浮かべる紫。先ほどまでの冷たい印象など何処にもない。

「あの子は大丈夫。大切な事を分かつたみたいだから。どんな事実だろうと、逃げずに受け入れることが出来るわ」

「……」

「お礼は私ではなく命蓮寺にね。流石はお寺、的確な説教だったわ」

立ち上がりスキマを開く。それに盃を入れたあと、自身も身を埋める。

「あ、そうそう」

「……なんだ」

「白の封印を解いて欲しくない理由つて、さっきの私情もさることながら、本当は暴走が一番心配なんでしょ？ 白は当然のこと、ついでに私も傷ついちゃうんじゃないかー、つて」

「っ！？ な、そんな訳……」

「はいはい、ツンデレちゃんね。でも大丈夫つて言ったでしょ？」

「だからちがつ……」

「心配しないで今度無事な姿を見せに来るわよ。私の新しい式兼お嫁さんと」

「違つと言つて おい待て、白を汚すな！ 式というのも突つ込みどころ満載だが、後者は何だ後者はあー！ー！！」

「結婚式には呼ぶからねー」

「待て紫いー！ー！」

夜明けが近づく空に、天魔の大声が響き渡った。

もう一つの真実（後書き）

実は天魔については、能力はおろか性別すら決めてないです。でも、山で天狗を纏めているカリスマいっばいな感じですよ。たぶん。

動き出す過去（前書き）

ラブコメか！ って途中で自分につっ込んだ。

霊夢が青信号状態です。

おかしいなあ、紫を動かさそうと思えば思うほど霊夢がグイグイ来ちゃう……。

動き出す過去

「はい、ご機嫌よう。迎えに来たわよ」
「……………」

怪しい人に声をかけられたら無視をするのがいい。って慧音さんが言ってた。

「ちよつと、酷いじゃない」

「生憎と私は、嬉々として人を縄で縛ろうとする妖怪の知り合いな
どいません」

というか他人の家、もとい寺に何故我が物顔で入って来てるんだ
ろう。しかも今は朝。貴方はいつも寝ている時間でしょうに。

「あの夜は喜んで縄で縛られていたじゃない。あれは……………私のこと
は遊びだったの!？」

「誤解されるようなことを言わないでください。ただでさえ此処で
の評価は微妙なのに……………。それとそんな性癖持ってないです」

「でも貴方攻められるの好きでしょう?」

「むしろ嫌いですから。大嫌いですから。冗談も大概にしてください
い、紫さん」

私の心からの言葉を聞いて尚楽しそうに笑う紫さん。性格悪い。

「あーもう、朝から何か御用ですか?」

「ええ。今から博麗神社に行きましょう」

「博麗神社? 今から?」

「そうよ。だから迎えに来たの」

「無理です」

「さよならー、と言いながら手を振る。

さて、聖さんたちも起きてるだろうしさっさとそっちに行こう。

「どうして？ もう帰るんでしょう？」

「一宿一飯の恩義はきちんと返すのが礼儀でしょう。微力ながらお寺のお手伝いをするんです」

「人間みたいね」

「人間でもありますから」

こうやって、自分が『人間』だとか『妖怪』だときちんと認めたのはいつ以来だろう。今までは自分が分からなかったから。

「でもダメ。もう準備は整っているのよ」

「準備？ 何のです？」

「うふふ、秘密」

……怪しいにも程がある。絶対に行きたくない。

「とにかく駄目です。ここではお世話になったのでそれを返さない
と……」

「馬鹿がつくほど真面目ねえ。足に怪我を負わされてもそんな事をするの？」

「それ以上のもてなしを受けましたから」

「それこそ聖さんには感謝してもし尽くせない恩義がある。多少のお手伝いはしたい。」

「そう。ちょっと見ない間に良い顔つきになったわね」

「顔つき？」

「迷いがなくなっているわ」

「……もう、悩まないことに決めたんです。私は……私の道を歩むのみです」

私がそう言うといつもの胡散臭げな笑みではなく、綺麗な、思わず見惚れてしまう笑みを浮かべる紫さん。しかしそれは一瞬だけで、すぐに前者に戻ってしまった。

「いい心がけね。だったら尚更行かなくちゃ」

「だから嫌だと何度も……」

「問答は無用。私からここの住職たちには言うておくから、先に行つてなさい」

「ちよつと!？」

思ったことはただ一つ。スキマの中って怖いよね。

*

「……お、おはようございます、霊夢さん……」

「……おはよう、朝から飢えてる狼さん」

「ち、違います!」

お、おお落ち着け。こういう時にこそ冷静になるべきだ。よし、何があったのかももう一度確認してみよう。

スキマの先が地上二メートルというとんでもない場所で、飛ぶこ

とすらままならず落下。ここまではいい。問題なのがその下に霊夢さんがいたということだ。霊夢さんがいたからこそ、余計にパニックになって飛べなかったんだけどね。

そしてその後は予想通り、霊夢さんを巻き込んで転倒した。私が押し倒す形で。昨日これで寅丸さんに誤解を受けたばかりなのに……。

「飢えてるじゃない。手が」
「手？ ……うわあっ、ごめんなさい！」

言われるがままに自分の手を見みると、それはちょうど霊夢さんの胸に乗っていた。うわまっすいどうしよう怒らせたら殺されるっ……！

「だ、ただ大丈夫ですよ。殆ど感触とかありませんでしたっけ
うか普通にお腹に手を置いてる感」
「うるさいわね！」

霊夢さんの右拳が私の鳩尾に炸裂した。

「ゲフツ……」
「悪かったわね、紫みたいじゃなくて」
「ぐう……ボディーブローは地味に残るのに……」
「自業自得よ」

原因は間違いなく紫さんなのに……まずい、吐きそう。

「ていうかあんただって私と大差なっ……」
「うう……っていきなり何を!？」

腹部を押さえて悶絶していたら、いきなり霊夢さんに胸を触られた。仕返しですか。

「馬鹿な……着痩せするタイプなの？」

「知りませんよ……うおえ、まだ気持ち悪い」

「ほんとにあんたは一々私の琴線に触れるわね！」

「やめてください。この上に攻撃されたら映姫様に会えます」

何をそんなに怒ってるんだろう、霊夢さんは。よく分からない。

「お待たせ……ってどうしたのよ、この惨状は」

「紫、全て貴方のせいですよ。この恨み、はらさでおくべきか……」

「ちよつと、顔色悪いけど大丈夫？」

「リバーす寸前です……」

「……『紫』？」

ゾクツ、と悪寒が走る。底冷えするような声が響き、それに伴って空気も冷たくなった気がする。

「いつの間にあんたらは呼び捨てで呼び合つようになったのかしら？」

「つ、つつい先日です……」

「へえ。私のことを避けてる間に、紫とよろしくやっていたってわけ？」

「あ、あの日は完撤してて、気づいたら口車に乗せられて……。で、でも未だにさん付けしたり確定していないというか……」

な、何だろう、今日の霊夢さん怒りっばすぎる気がする。

そして私は私でどうしてこんなにも必死に弁解をしてるんだろうか。

「霊夢、そんな事より早く……」

「『そんな事』?」

「そうね、大事な話よね」

冷たい目で睨まれたからか、紫さんは直ぐ様自分の言葉を否定した。気持ちは分からないでもない。

「ねえ、白」

「な、何でしょうか」

「私のことも呼び捨てで呼びなさい」

「え……で、でも」

「肝臓を殴るとどうなるのかしら」

「……時間をください」

今それをやられたら吐けます、「冗談抜きで。

……それにしても、どうして私に呼び捨てで呼ばせたがるんだろう。不思議でならない。

納得し切れないような霊夢さんに、「紫と呼ぶのにも時間がかかった。というか今もさん付けが交ざっている」と説明と懇願をしたおかげで、渋々ながら了承も得ることが出来た。

……無駄に疲れたが、ここに連れてこられた理由はまだ謎である。どうしてこの二人と絡むと余計に疲れるんだろう。

「それで紫さん。どうして私をここに?」

「ああ、そうね。説明がまだだったわね」

咳払いをし、真剣な顔になる。不真面目ではない紫さんの顔は初

めて見るかもしれない。

「単刀直入に言うわ。白、貴方の尾の封印を解除します

」

放たれた言葉は、私の心を深く抉^{えぐ}るものだった。

動き出す過去（後書き）

これから二、三週間は更新遅いです。
とつかしないかもしれないです。

理由は簡単、定期テストです。

そして両親からの「良い点とったら新しいパソコンあげる」宣言。

……ここでもやらずしてどうする！

そんな訳ですのでよろしくお願いします。

以上、地味にtwitterやろうか悩んでる私でした 超どうでもいい

リハビリり小話 紫ver（前書き）

どうも、お久しぶりです。漸くテストから解放されました。

色々解放されて早速次話に取り掛かろうとしたのですが、約二週間も何も書いていなかったので勝手がよく分からなくなっていました。

なので勘を取り戻そうと今回の話を書いた、という次第です。続きを期待していた方々には申し訳ありませんが、お付き合いいただけると幸いです。

リハビリ小話 紫ver

「ねえ、白」

「……………何ですか、紫さん」

「その微妙な間と嫌そうな顔、刺さるからやめてね」

「刺せてるならやめるつもりはありません」

私はその顔のままそう返すと、紫さんは溜め息をついた。幸せ逃げますよ。

「はあ……………やっぱり、式にしてあんなコトやこんなコトをするしかないのかしら」

「わーい！ 紫さんと会えて嬉しいなあ！」

式云々より、あんな事やこんな事という言葉がとても怖いのは何故だろう。

「そう？ 私も白に会えて嬉しいわ」

「自分からやって来て嬉しいも何もごめんなさい」

笑顔って、時として相手に恐怖を与える武器になるんだね。

「ところで白、今暇よね」

「どうして断定するのです」

「貴方が忙しくても私は暇だから」

何この人。我が強いとかそういう次元じゃない。今更だけでも。

「……………じゃあもう暇でいいです。暇ですけど、何かご用でも？」

「ええ。私とデートをしましょう」

「……………は？」

「だから、私とデート。何回も言わせないでよ、恥ずかしいじゃない」

「頬を染めないでください気持ちわ可愛くてこっちまで照れてしま
うじゃないですか」

「恥じらうか睨むかどっちかにしてほしい。」

「ふふ、ありがとう。褒めてくれて嬉しいわ」

「そーですか……………」

「じゃあ、そろそろ行きましょうか」

「らじゃー……………」

どうせ何を言っても無駄なので素直に従う。

しかしデートねえ……………また何に触発されたのやら。

「……………って、紫さん」

「なあに？」

「『なあに？』じゃなくて。手」

「あら、どこかご不満？」

「ご不満も何も……………これって」

「んー、俗に言う恋人繋ぎね」

差し出された手を取ったら、いつの間にもやら私の右手は紫さんの左手に絡め取られていた。最初から狙っていたとしか思えない。

「は、離してくださいよ……………」

「……………嫌なの？」

「う……………嫌と言うか恥ずかしいと言うか……………」

「じゃあ人前ではやらないから。それならいい？」

今までの勝手とも強気とも取れる態度は何処へやら。弱気に尋ねてくる紫さん。

しかし騙されてはいけない。これはわざとこうしているのだ。私が出手に出られると断れない性格と知っての行動。……まあ、高圧的に言われても断れないのだけど。

だけど何回もやられたらいい加減慣れるもので。もう拒否することなど容易

「……ダメ？」

「……分かりましたよ。でも人前ではやめてくださいね」

演技とわかっていても無理だった。向こうも向こうで何かを感じ取ったのか、涙目まで使ってきた。卑怯だ。そこまでやられたら断れないでしょうが。

「分かったわ。さあ、行きましょう」

「はいはい……」

でも、文さんとかなら涙目使おうと上目遣いだろうときっぱり断ることができるのに、どうして紫さんだと出来ないんだろう？

「それで、やって来たのは人里ですか」

「ええ。他の場所だと色んな邪魔が入ってイチャイチャ出来ないでしょ？」

「それ死語ですよ」

なんて軽口を叩きながら里に入るってちょっと待って。

「どうしたの？ 行きたくないのかしら？」

「約束したじゃないですか。手、離してください」

「えー。いいじゃない、知らない人たちなんだし」

「そんな事を言っていると大抵知り合いに会「あ、紫さん。お久しぶりですね」……ほらね！」

声をかけてきたのは見覚えのない少女。紫さんと知り合いのようだ。

「阿求じゃない。散歩？」

「ええ、そんな所です。そういう紫さんは……」

「デート「散歩です！」」

ここは力強く断言させてもらおう。……ちょっと紫さん、拗ねないでください子供ですか。

「あら、貴方は……」

「はじめまして。白といいます」

「私は稗田阿求です。貴方のお話がかねがね伺っていますよ」

「え？ 誰に……」

人里の知り合いと言われると……慧音さんくらいだ。とは言え、あの人とそんなに会話をしたわけでもないんだけどなあ。

「慧音さんや紗希からよく聞きますよ」

サキ？ そんな知り合いいたっけ……？

「特に紗希は会う度にお姫様抱っこをもう一度して欲しいと言っています」

お姫様抱っこ？ 本当に誰だろうその人。そんな事した覚え私の右手に激痛が！？

「紫さあん！？ 折れる折れるミシミシ言ってる！」

「ねえ、お姫様抱っこって何のこと？ いつ、どこで、誰にやったのか詳しく教えてもらえない？」

「し、知らない！ だから離してください！」

「私の質問にきちんと答えなさい？」

見た目はか弱く見えても、大妖怪である紫さんの腕力に敵うわけがない。

阿求という方が止めに入るまでの数秒間、私はかつて無いほどの痛みに叫んでいた。

……………あれ？ 右手に力が入らないよ？

激痛で泣き叫んでいた私を見兼ねた阿求さんが、里にある自分のご自宅に招いてくれた。怪我の手当てをしてくれるとのことなので、一も二もなくそれに甘えることにした。

骨折一步手前までいった私の右手は赤く腫れ上がっており、暫くはその機能を果たしてくれないだろう。不便だ。

因みに阿求さんという方は幻想郷縁起という書物を編纂しているらしい。その関係で紫さんと繋がりがあり、また慧音さんとは寺子屋で使う資料の貸し借りなどで親しいとのこと。

「 ああ、紗希ってあの時の子のことですか 」

ついでに、先程気になったことも訊いてみた。一体紗希って誰ですか、と。

結論を言うと、それはいつだったか妖怪に襲われていたのを助け、里に送り届けた子供の名前だった。そういえばそんな事もあったね。私の中では比重が軽いから忘れてたけど。

「 ええ。また会いたいと何度も言っていますよ 」

「 どうしてそこまで懐かれたんだか…… 」

うる覚えだが、大して愛想のいい問答なんてしなかった気がする。名前さえも訊かなかったし。

「 颯爽と現れて格好良く妖怪を退治してくれた、と行っていました 」
「 私も妖怪ですけどね。まあ、子供によくありがちな誇張と憧憬でしよう 」

よく覚えてないんだよね。あ後はあその後で色々あったし。

「ま、そのうちいつかきつと気が向いたら会いに行きましょう」

「今は行かないので？」

「苦手なんですよ、年下の相手をするの」

そんな取り留めもないことを阿求さんと話す。そうこうしている内に一時間ほど経ったようだが、帰るに帰れない理由がある。それは、

「紫さーん、いつまで拗ねてるんですか……」

「拗ねてないわよ」

どこからどう見ても不機嫌そうな紫さんが此処から動こうとしな
いから。

なぜだか虫の居所が悪いみたいだけど、理由がわからない。ちょうど私の手を折ろうとした時くらいからこんな感じなのだ。阿求さんに視線で助けを求めても曖昧な笑みを返されるだけで、一向に解決の兆しなど見えない。

むう……一体何が気に入らないのだろうか。ちよつと考えてみよう。

私の手を折る前にあったことと言えば、阿求さんと話をしたことくらいだ。その前は機嫌良さそうに私と喋っていた。だとすると、阿求さんに出会ったという行為自体が、その話の内容がお気に召さなかったのだろう。

出会ってすぐ、は別段変わりはなかった。むしろそこそ親しげに話しかけていた。つまりは会話内容が気に入らなかったということか。でも、内容って言えばただの挨拶くらいしかしてないよね……分らない。

「紫さんも、そのような表情をするんですね」

「何のことかしら」

「ふふ、幻想郷縁起に書き足しておきましょうか。意外と嫉妬深い、と」

そんな二人の会話が聞こえてくる。

嫉妬？ 誰が何に対して……。

「……はあ。ここまであからさまに態度で示しても分からないなんて」

「鈍感なのですね、白さんは」

「何だか小馬鹿にされた気がするのは気のせいでしょうか」

初対面の人にまで言われるとは。

「阿求の言う通り鈍感じゃない、貴方。もうちょっと女心を学びなさい」

「私、生物学上女なんですけど……」

心も女だと自分では思ってるし。

「白さん、紫さんはもっと自分に關心を持ってもらいたいですよ
「關心？」

「もっと言えば、紫さんは紗希に嫉妬をしているんです」

「……なんですか？」

紫さんが人間の子供に嫉妬？ 妬む要素なんてどこにも見当たらないんだけど……。

「そりゃあ、誰しも意中の相手が自分以外に関心を向けるのは嫌でしょう?」

「阿求!」

と、ここで紫さんの声が阿求さんを遮った。しかし私の聴覚は阿求さんの言葉を全て拾っていた。

え、紫さんの意中の相手? そんなまさか

「紫さんが紗希って子を好きだなんて」

「どづいつ思考回路してるのよ……」

「言葉からはそう捉えられなくも無いですが……」

すごい溜め息をつかれた。なんですかその疲れた顔は。

だって、紗希さんとやらが私に関心を持つちゃったから拗ねてるんじゃないの?

「白さん、もう一度よく考えてみてください。さっきの言葉からもう一通りの可能性が考えられるでしょう?」

もう一通り? 紫さんが紗希さんに嫉妬していて、紫さんは意中の人に関心を示して欲しいという事実から?

……ああ、そうか。分かった!

「紫さんの意中の人は阿求さ」

ボキッ

「私の腕が!? ヒビで済んでいたはずの私の手首があー!?」

折れてるでしょうその曲がり方 って痛ああ!! 認識したら

すごい痛みが全身にい！

「ふう。阿求、そろそろ行くわね」

「ええ。前途多難な予感しかしませんが、頑張ってください」

「なんで！？ どうしてそんなに平然としてるんですか！？」

痛みに悶えている哀れな半獣を、まるでそこにいないかのように扱う二名に涙が出そう。

「ほら白、帰るわよ」

「痛くてそれどころじゃ……な？」

あれ？ 痛くなくなった？

「境界を操る私にとってこの程度のこと、朝飯前ですわ」

「だったら最初からやらなきゃいいのに……何でもありませんがとうございました」

何処か釈然としない気持ちもあるが、凄みのある笑みをされたのでお礼を言っておく。本当に釈然としないが。なんで怪我をさせた張本人にお礼を言わなくてはならないのだろうか。

「ああもう……どつと疲れが……」

「それはごっちの台詞。なんであそこまで言われて分からないのよ」「何の話ですか」

いつもながら紫さんの言いたいことが分からない。っと、そういえば、

「結局、紫さんの意中のお相手は誰なんです？」

気になるから訊いてみた。だってあの紫さんが気に掛ける相手だよ？ 妖怪が誰かをそういつた意味で好きになるなんてあまり聞いたこと無いし。

「……自分で気付きなさい」

「えー、いいじゃないですか」

「もう一回折られたい？」

「人の恋路に首を突っ込む奴は馬に蹴られるって言いますもんね。他人のそういうのに関わってはいけませんよね」

「いえ、私は貴方の恋愛事情に突っ込む気満々だけど」

「やめてよ!？」

自分だけ甘い蜜を吸おうって魂胆か……！ くそう、それに抵抗出来ない非力な自分が妬ましい……っ！

「あら、その反応は踏み込まれると困ることがあるからかしら。ふふ、素直に白状しなさい？」

「さようなら阿求さん！ お世話になりましたまた今度お礼に来ます！」

流れが私に向いてきたので全力で走りだす。もう人里だとか構っていられるか、文字通り飛んで帰らなくては……！ まだ紫さんに訊かれてはいけないんだ、私の恋愛に関することは。

「だってまさか、私の好きな人が」

そう、バレてはいけない、私だけの秘密。

「父さんとか母さんみたいな人なんて言ったら笑われるに決ま

ってるんだから……」

マザコンだのファザコンだの言われるに決まってる。山でもよく言われるから。だけど声を大にして言いたい。両親が好きで何が悪い、と。

私にとっての理想の人は母さんのように優しく、父さんのように頼り甲斐のある人。私も斯^かくありたいと常々思っているわけだ。

まあ尤も、一番知られてはいけないのは

「その理想に一番近いのが、紫さんかもしれないってことなんだけどね」

これが恋心なのかは分からない。だから言うにしても、もう少し先で良いよね。

リハビリ小話 紫ver（後書き）

時間軸としては本編より少し未来、でしょうか。

紫ルートを選ぶとこんな感じになるのかもしれない。

それと、ここで阿求と初めて会いましたが、その関係はおそらく本編に引き継がれないと思います。端的に言うと、この話はEFということですね。

あーあ、甘い展開に持っていけないのはなんでなんだろう。次は霊夢にでも挑戦してみるかなあ……。。

リハビリ小話 霊夢ver (前書き)

少女な霊夢を目指したかったんだ。
結果はものの見事に撃沈しました。

リハビリ小話 霊夢ver

「ねえ白、いいでしょ？」

「れ、霊夢さん、早まらないで……」

「散々人を我慢させといて、今更何を言ってるの？」

「だ、だって……。けど、そうだとしたってこんな急に……。っん」

妖しく月が煌めく夜。そんな時間に、私は博麗神社で霊夢さんと二人きり。

「ほら、力抜いて……？」

「だ、だめですって……。っあ」

「ふふっ、体は正直みただけど？」

まるで太陽のように温かい手が私の体に触れてくる。そのなんとも言えない感覚にピクリと反応を返してしまう私の身体。

「さあ、もう諦めて」

その手から逃れようにも死角が見つからず、ただされるがまま。そう、私達は今から。

「毛づくろいさせなさいって言ってるのよー！」
「嫌ですってばあー！」

グルーミング作業に取り掛かるかで揉めているのだ。
……どうしてこうなったんだろう？

（遡ること約三十分前）

「こんばんは。お呼び出しを喰らったのでこんな時間にやって参りましたー」

「喧嘩売ってるの？」

「夜に呼んだの霊夢さんじゃないですか」

「あんたが昼間は忙しいとか言うからでしょ？」

だって、久しぶりに群れの皆と一緒に居たかったんだもん。

「それで、用件は何ですか？」

「え？ 別に無いわよ？」

「どうしてそこまで不思議そうな顔ができるんですか。その表情は私がするべきです」

「何、あんたを呼ぶのに用件がなくちゃいけないの？」

「というより、用もないのに呼びつける理由がないでしょう？」

「理由……理由は会いたかったから。これでいい？」

会いたかった？ 霊夢さんが私に？ そんな、私は夜に呼び出されるまでに、

「何か怒らせるようなことをしてしまいましたか……？」

「あんた、私を一体どういう目で見てるの？」

やや口調を強くされて問われる。しかし呼び出された理由は折檻ではないのようなので一安心だ。

「深読みしないで素直に言葉を受け取りなさい。時々あなたの思考

についていけなくなるわ」

「極々普通に考えてるだけなんですけど……」

少なくとも、何か変なことを言っているという自覚はない。

「会いたいですか……天下の博麗の巫女様にそう言われるのは嬉しいですけど。でもそこまでして会う価値が私にあるのかが甚だ疑問ですね」

「馬鹿な事を言っんじゃないわよ」

つん、と鼻先を押される。その指の持ち主を見れば不機嫌そうな顔。

「自分の価値を自分だけで決めるのをやめなさい。あんたの悪い癖よ、それ」

「……すみません」

「謝るより態度で示して欲しいものね」

棘のある言い方で言われ、ついでに溜め息をつかれる。何だろう、すごい罪悪感。

「……まあ、今はいいわ。とにかく、私が白に会いたかったってことよ。明日を待てないくらいに、ね」

「夜更かしは肌に宜しくありませんよ？」

「今までの台詞で気にする所はそこなのね」

はて。他に気を向けるべき部分があったらだろうか。

「はあ……、今に始まったことじゃあないけどね……」

「何がです？」

「なんでもないわよ鈍感阿呆狼」

「最後に付け足された語群で、何かあると勘繰るのは仕方のないことだと思っんです」

馬鹿より阿呆のほうが心に刺さるんだね。そんな知識が増えてもどうしようもないけど。

と、そんな会話を繰り広げた後、明確な理由も聞かされないまま部屋に上がらせてもらう。別に暇だからいいけどさ……。

「ねえ白、これあんたの毛？」

「あ……そろそろ夏毛から冬毛に生え変わる時期なんですよね。すみません、掃除します」

「大した量でもないし、アレルギーでもないから別にいいわ。明日にでも私がやっておくから」

「そんな……私のせいですから私がやります」

「あんたは私との時間を掃除で潰したいの？」

「潰したいとは思いませんが……でも私が迷惑かけているわけですし……」

私がそう言うと、少し嬉しそうな表情になった霊夢さん。その調子のまま言葉を紡がれる。

「迷惑なんて一言も言ってないでしょ？　というか、動いて毛が抜けるなら掃除する端からどんどん増えてくだけで、終わりが見えな
いじゃない」

「人間に化ければなんとか……」

「そこまでしなくていいって言ってるの」

むう……霊夢さんも変な所で頑固だなあ。

「だから今は……」
「へ？ ……わ、っ」

いきなり腕を引っ張られ、霊夢さんの胸で抱きとめられる。しかも離す気がないように感じる。

「私の湯たんぽにでもなりなさい」
「……今日、そんなに寒くないじゃないですか」
「文句あるの？」

暴君だ。

「……せめてこの体勢はやめてください」
「私が飽きたらね」

俺様系巫女か……賽銭が増えないのも領け超痛い。

「いいですか霊夢さん。動物にとって尻尾は重要な部位なのです。そこを引っ張られたらそりゃもう痛くて泣きそうになります」
「泣けば？」

前言撤回。俺様と言うか鬼畜だ。慈悲の欠片も無い。

「毛が抜けるわねえ……」
「生え変わりの時期ですからね。言うほどの手入れをしてるわけでもないですし」

「え？ 手入れしてないの？」
「今の姿なら言うほど抜けませんからね。酷いのはやっぱり狼の姿の時ですけど、四足歩行動物にそんなことできません」

もちろん、群れの仲間と毛づくろいくらいはする。あとは……気が向いたら行水的な。

「……そう」

「霊夢さん霊夢さん、人の話を聞いてましたか？」

どうして尻尾を掴んでるの？

「ええ、聞いてたわ。で、私がやってあげようかって」

「何を」

「毛づくろいを」

さあ走りだすんだ私！

「あら、逃さないわよ？」

「嫌ですよ！ 人にペタペタと体を触られるのは苦手なんです！」

「大丈夫大丈夫。べつとりねつとり触るから」

「どこがどう平気なんですか！？」

むしろ気持ち悪い擬音だ。トラウマになりそう。

私を掴んでいる手を振りほどこうと暴れるも、全く意に介さない霊夢さん。依然として不利な状況のまま、冒頭の舌戦にもつれ込んだのである。

「なんでそこまで嫌がるのよ」

「さっきも言いましたよ。他人に必要以上に触れられるのが嫌なん

です」

「どろして？」

「……だって、気持ち悪いじゃないですか」

何というかこう、自分の意思ではないものが体を蠢く^{めい}？ 這いずり回る？ まあ、そんな感覚がどうにも苦手なのだ。あ、あと擦っ^{くすく}たいし。

「……私でも嫌？」

「え？」

「こうして抱きしめて……温もりを分かち合っている私でも？」

尻尾にあつた手を首に回され、至近距離で見つめ合う格好になる。目の前には憂いを帯びた霊夢さんの顔。

「……ごめん、忘れて」

「あ……」

すつと離れていく手。今までは暑いくらいだったのに、急に熱を失っていく体。

そんな初めての感覚に戸惑いを感じる。

「そこまで嫌がることを無理にやってもお互いに楽しくないものね。気を悪くしたなら許して頂戴」

「あ、いえ……大丈夫です」

「そう？」

ほつとしたように息をつく霊夢さんは、いつもと違って見えた。例えるなら博麗の巫女ではなく、年相応の少女の雰囲気醸しているというか……。

「……」
「……」

微妙な空気が流れる。沈黙が痛い、私にはそれを打破する術など持ち合わせていない。

「あの、さ……」

「ふえい！？ あ、な、何ですか？」

どうするかなー、なんて思考をトリップさせている時に声をかけられ、素っ頓狂な悲鳴をあげながら返事をする。途中で舌まで噛みそうになったのは秘密にしておきたい。

「……もつと近づいてもいい？」

「っー！」

……何これ。というか誰この人。もはや別人だよ。

「ど、どうしたんですか？」

「何が？」

「なんだかいつもと違う……」

さっきまでグイグイ迫ってくると思ったら、いきなり引いて私の様子を伺ってくる。いつもの霊夢さんならそんな事はせず、多少強引に我を通そうとするはずなのに。

「……こんな私は嫌？」

「そういうわけじゃないですけど……何というか……」

体調でも悪いのではと思ってしまつ。熱でもあるんじゃないかなあ。

「……無いわよ」

「本当ですか？ 風邪は引き始めが肝心ですよ？」

「……」

すつごく重い溜息だ。やっぱり体調が悪いんじゃないかな、心配だ。

「ふう……まったくあんたは」

「ど、どうされました？ やっぱり体調が……」

「押しても引いても駄目とか……この馬鹿！」

「わ、きやつ！？」

勢い良く肩を押され、強かに背中を打ち付ける。そんな私のお腹の上に跨る^{またが}霊夢さん。

「重……ぐふうっ!？」

「なあに？ もう一回言つてくれる？」

「た、体重かけるのは勘弁してください……」

圧迫感が半端ないから。

「白、一応聞いておくけどこの体勢で思うことは？」

「霊夢さんの体調がすごい悪いんだなあ、って」

「この阿呆」

「げふうっ!」

耐える私の内臓器官……っ!

「本当に何なのよ……」ここまでやってるっていつのに」

「さっきから阿呆だの馬鹿だの言いますけど、納得できないです。一体私のどこが……」

「この体勢で動じてない時点で脈はないのかしらね」

「霊夢さん？ 人の話聞いてますー？」

反応返してなんて言わないから、せめて腹部の圧迫感から解放してください。

「ん？ ああ、どけて？」

「はい」

「んー……そうねえ」

「お、おお？ どうして近づいてくるんですか？」

「圧迫は少し減ったが、今度は霊夢さんの体が私に向かって倒れてくる。ち、近い……」。

「……ん」

「……霊夢さん？」

完全に私に乗っかり、頭を私の首筋に埋めてくる。吐息がかかる部分がとても熱い。

「……」

「だ、大丈夫ですか？ やっぱり気分が」

「……馬鹿」

駄目だもう子供じみた暴言しか言ってくれない。本当にどうした

んだろう。

無理矢理にでも永遠亭に連れていこうかと考えていると、不意に体にかかる重みが増した。

「……疲れた。もう寝るわ」

「え、このままで？」

「動くのも億劫なのよ……」

「なら私が布団を敷いてきますから、ここで待って……」
「いや」

私を抱く力が強くなる。まあ、私も半分妖怪なので人一人くらい乗っかられたり、多少苦しい体勢になっても平気だけど……。

結局、この状態は霊夢さんが眠りに落ちるまで続いた。

「やれやれ……」

本当に眠ってしまった霊夢さんを起こさないように脱出し、その後で彼女の額に手を当ててみるとさあ大変。物凄く熱かった。つまりは熱があった。

こんな時間に霊夢さんを背負って永遠亭に行くのも気が引けたため、前言通り布団を敷き、そこに寝かせた。その動作でも目を覚まさないの、相当深く眠っているようだ。好都合である。

「様子がおかしいとは思ってたけど、まさか本当に熱があるとは……」

どうしてこんなになるまで放っておいたんだか。結構辛かっただろっ！」……。

「……まさか私と会う約束があったから？」

よく分からない事態に首をかしげながら枕元に座る。荒い息遣いが聞こえてきて、更には苦しそうに唸る声もする。どうやら夢見がよろしくないようだ。

「……全くもっ」

そっとう霊夢さんの右手を両手で包む。熱い。

「私が傍にいますから。だから安心して休んでください」

そう言うと、少しだけ安らかな顔つきになった。徐々に苦しそうな声も聞こえなくなってきたので、一安心だ。

「……早く良くなってくださいね？ それで、いつもの霊夢さんに戻ってください。あれだと私の調子も狂ってしまいますから」

いつもの様に私を強引に振り回す日々を想像しつつ、私は夜が明けけるのを待つのがだった。

……あれ？ もしかして私って潜在的に被虐趣味を持つ者になってる？

リハビリ小話 霊夢ver（後書き）

最近中々書けないです。

時間も取れないし、純粹に筆も進まない……。

勘も戻ってきたのか甚だ疑問。この小話を書いて痛感したのは私に甘い小説は書けないってことですね。

次はそろそろ本編戻っても良いんですが、人気のある咲夜さんの小話を書くかで悩み中です。

どちらにせよ、気長に待っていてください。

リハビリ小話 咲夜ver（前書き）

落ちなし意味なし山場なし。

自分の感情を理解しているようでしていない咲夜さんと、どこまでも無自覚なバカ（白）を書きたかったんだ。

読了後は過去最高の意味不明感が皆様を襲います

でもリハビリだから許してください。腰を据えて書ける時間がな
いんですよ……。

リハビリ小話 咲夜ver

木枯しも吹き始め、秋の様相が現れてきた今日この頃。

そんな少し肌寒い中、私は外に立っている。いや、正確に言うならば立たされている。自発ではなく命令だ。

防寒に優れている尻尾を自分に巻きつける。別にそこまで体が冷えているわけではないが、何となく心が寒いのだ。有り体に言えば、……寂しい。

「……なんか泣きたくなってきた」

秋は私を物悲しい気分させる。あの記憶が、父さんの最期が鮮明に思い出されるから。命蓮寺で吹っ切れたと言えど、一生忘れることはないだろうあの日の出来事。

「あれから……約十年、か」

思えばあつという間だった気がする。いつの間にか時間が過ぎていつの間にか今日まで生きていた、そんな感覚がする。

長く生きる妖怪は時間をそんな風に捉えるのかもしれないが、そういう妖怪は数百年後の自分を思い描くことも出来るだろう。しかし対する私は明日の事さえ見通せない。そこら辺が、かねがね私が人間臭いと言われる所以なのだろうか。

「どうかした？ さつきから元気がないみたいだけど」

「……ちよつとおセンチな気分になっていました。まあ、思春期特有の突発的なものですからあまり気にしないでください」

「思春期ねえ……」

「何ですかその微妙な目は。私はまだ十代なんですよ?」

埋没しかけていた思考は一緒に外に立っている妖怪　美鈴さん
によって引き上げられた。そう、私達は門番の仕事をしている真っ
最中なのだ。

「……………そうだったっけ?」

「酷い……………そこらの人間よりも年齢的に若いのに……………」

「精神的に成熟し過ぎなのよ。霊夢とか魔理沙みたいに嬉々として
私を倒したりすれば、若いな〜とか思うわ」

それで自分が傷ついて良いんですか。

「確かに長く生きた妖怪は活発ではありませんが、それで若い妖怪
が活動的だと思うのは偏見ですよ。実際、私みたいなのがいるわけ
ですし」

「うーん、そういう事じゃなくて……………。何というか雰囲気は大人っ
ぽいのよ。流石に大妖怪張りの思慮深さはないけど、人間の大人と
大差ない感じ?」

「何だかよく分かりません」

「要するに大人びてるのよ、貴方は」

大人びてる、ね。どこをどう見ればそう思うんだろう。

……………あ、でも。

「咲夜さんとかも大人びてませんか?」

「いや、実はそうでもないのよね。客人の前だとしっかりしてるけ
ど、結構天然な所があるわ」

「そうなんですか?」

咲夜さんが天然……。あまり想像がつかない。だって私と会う時はいつもナイフを首筋に当てたり、ナイフを投げてきたり、主人の暴走を止めてくれなかったり……。あれ？

「ね？ 咲夜さんはああ見えて結構お転婆なのよ」

「お転婆じゃなくて悪魔か何かでは」

「まあ此処、悪魔の館だしね」

そうですね。あれよあれよの内に門番させるくらいには悪魔がいましたね。

「いたあっ!？」

「私がどうかしたの？」

「咲夜さん、ナイフをこちらに向けている時点で話聞いてたって分かりますよ」

「あら、ごめんなさい。陰口でも叩かれているのかと思ったのよ」

音もなく、いつの間にか美鈴さんに凶器を投げつけていたのは会話の渦中の人、十六夜咲夜さん。最近は慣れてきたが、気配なく近づいて来るのはやはり驚く。

「陰口は当人にバレないように遠くでやるものです。こんな目と鼻の先でやるわけ無いですよ」

「それって、私が近くにいなかったらしてるってこと？」

「言葉の綾ですって。私は咲夜さんに嫌な印象は持っていませんし」

貴女のご主人様が色々アレ過ぎるから、それ以外は霞むというか。

「まあ、私は周囲にどう思われようともいいんだけどね」
「というか、幻想郷は自分の周りが良ければ他人はどうでもいいという人たちばかりですから。陰口を言う人も少ないですよね」

むしろ陰ではなく、本人の前で言いそうな人たちだし。

「ところで咲夜さん、わざわざ門に来るということは、何かご用事が？」

「ええ、ちょっと里への買い出しに付き合ってもらおうと思ってね」
「だ、そうですね、美鈴さん」

「いたたた……。咲夜さん、私今きちんと門番してたのに何故ナイフを……」

「ちょっと苛ついてて」

にこやかに言い切った咲夜さんには、罪悪感という感情がどこにも見当たらなかった。もうこの人そこらの妖怪よりも危険だと思う。

「白に当たったらどうするんですか。半分人間なんですから、私のように痛いだけでは済みませんよ」

「私がそんなミスをすると思う？」

すごい自信で言い切るなあ。実際それに見合うだけの腕があるんだけどね。

「そんな事より美鈴さん、里に買い出しだそうですよ。いってらっしゃい」

「あー……」

買い出しというからには荷物が多い気がするので、私よりも美鈴さんが適任だろう。そう思って美鈴さんをせつつくが、歯切れの悪

い返答しか返ってこない。あんまり遅いとまた咲夜さんに刺されま
すよ。

「……うん、刺された箇所が痛いから私は行けないわ。咲夜さん、
申し訳ありませんが白と一緒に行ってもらえませんか？」

「え、大丈夫ですか？ そんなに酷い怪我を……？」

見た目はそんなでもないけど、本当はかなり痛かったのかなあ……
…。

「そ、そんなに酷くないから大丈夫。それよりほら、咲夜さんは他
にもやることがあるんだから待たせちゃ駄目よ。それとも行きたく
ない？」

「いえ、別にそんな事はありませんが……」

「じゃあお願い、代わりに行ってきてもらえない？ 私はおとなし
く門番してるから」

「ですけど、妖怪が歩けないほどに酷い怪我をしているのを放って
はおけません」

それともどこか調子が悪いのだろうか。だとしても心配なものには
変わりはないけど。

そんな渋っている私を美鈴さんは呼び寄せる。そして、声を潜め
て耳元でこう囁かれた。

「あのね、私実は少し疲れちゃったのよ」

「は、はあ……？」

「暑い日も寒い日も毎日外に立たされて、少しだけ眠っていたらナ
イフが飛んでくる職場。だから、偶には休んでも罰はあたらな
いと思わない？」

「ま、まあ」

「でしょ？ だからお願いできない？」

うーん、聞きしに勝る職場だ。こんなところで働いていたら私なんてすぐに倒れちゃいそう。

ここまで言われたらさすがの私も閉口するしかない。首を縦に振って了承の意を示した。

「……これで終わりですか？」

「そうね。まあ、言うほどの量でもないでしょう？」

「そうですね、実を言えばもっととき使われるかと思ってました」

なんかもう、自分の体重より重いものを持たされるかと思っただけ。しかし現実はその手に袋を数個ずつ持っているだけだ。しかも咲夜さんが遠慮したのを半ば無理矢理もぎ取ってこれだから、本来ならもっと軽かったのだろう。

「咲夜さん、本当にもう良いんですか？ まだ持てますよ？」

「……顔に似合わず結構力があるのね」

「まあ、人間よりはあるでしょうね」

妖怪だということも抜いても、野山を駆けまわって培った体力は人間の比では無いだろう。毎日そこそこの運動量をこなしていると自負もしている。

「でも、今日はもう大丈夫よ。今度また来るわ」

「そうですか……では、そろそろ帰りましょう」

さつきから人の視線が痛い。けど、メイドと妖怪が連れ立って歩いてたらこうなるのも頷けるか。おそらく、私でも好奇の目を向けると思う。

「そうね。お嬢様が起床される前に帰らなくちゃ」

「今まだお昼ですよ？」

「貴女だって朝早く目が覚める事くらいあるでしょう？」

つまりいつ起きるか分からないということか。まあ、確かに毎日同じ時間に生活する人はそうそういないもんね。

「じゃあ、さつさと帰……あ」

「ん？ 君は……いつぞやの妖怪か」

「こんにちは。お久しぶり……に、なるんでしょうか、慧音さん」

「ああ、こんにちは。確か白と言ったね。今日は……珍しい組み合わせだな」

隣にいる咲夜さんと会釈を交わしてから慧音さんが言う。それに苦笑で返し、軽くこの状況の説明をした。

「なるほど、荷物持ちか。君は随分と優しい妖怪なんだな」

「？」

「だってそうだろう？ 何の見返りも求めずにそういう事をしてるんだから」

「背後に控えているのは吸血鬼ですけどね」

「だが、その吸血鬼から直接命令されたわけでもないだろう？ それだったらただの『お願い』だ。それを嫌な顔ひとつせずやっているんだから、やはり君は優しい子だよ」

「……………」

「照れるな照れるな。誇っていいことだ」
「て、照れてないです！」

そう否定するが、慧音さんは笑ってそれを流す。しかも勞つみたいに頭を撫でてきた。なんというか、先生というものをやっているからこういった子供を褒める方法に長けている気がする。

「うう……………さ、咲夜さん、もう帰りましょう！」

「はは、初々しい反応だな」

「し、失礼します！」

なぜだか恥ずかしくて仕方ないので、荷物を肘あたりにずらし、空いた手で咲夜さんを掴んで足早にここを去った。袋が肉に食い込んで少し痛いが、そんなことは二の次だ。

……………後方で慧音さんが大笑いしていたのは氣のせいだと信じたい。

「白」

「え、あ、何ですか？」

あと少しで紅魔館という場所で咲夜さんが口を開いた。別に今までの道中が無言だったわけではないが、何となく雰囲気が違ったので何事かと少し構えながら返答をする。

「……何でもないわ」
「そ、そうですか」

何か言おうとしていたが、すぐに口を噤まれてしまった。どうしたんだろう。

結局その後は無言で紅魔館まで歩いた。途中、ちよつと気まずかったので話しかけたりもしたが、生返事ばかりだったので諦めた。瀟洒なメイドさんが一体どうしたことだろう。

そうこうしている内に門に辿り着く。そこには当然のことながら美鈴さんが立っている。昼寝はしていなかったようなので一安心だ。

「お帰りなさい、咲夜さん、白」

「ええ、ただいま。早速だけど美鈴、これを食料庫に持って行ってくれない？」

「分かりました」

「手伝いましょうか？」

そう申し出るも、美鈴さんは首を横に振った。この程度の量なら自分一人で十分だと言って、私たちが二人がかりで持ってきた荷物を一人で軽々持って行った。すごい。

「じゃあ、私は美鈴さんが戻ってくるまでまた門番でも……」

「そう。お願いね」

「はい」

「……………」

「あ、あの？」

もうここには用がないはずなのに、咲夜さんは動こうとしない。

ついでに言葉も発しないものだから、彼女のしたいことがさっぱり見えてこない。

「咲夜さん、そろそろ肌寒い季節ですし、このまま外にいたら風邪を引いてしまいます。早く中に入られたほうがいいですよ」

「……手」

「手？ 手がどうかしました？」

私の質問には答えずに近づいてくる咲夜さん。そして疑問符を浮かべている私の手を、そっと自分の手で握って来た。

「……ほへ？」

「やっぱり冷たいわね」

「へ、あ、な、何を」

「さつき里で私の腕を掴んだ時から気になってたのよ」

「ああ、あの時……」

確かに今日は朝からずっと外にいたから冷えていたかもしれない。ただ、あの時は顔がすごく熱かったけど。子供扱いの羞恥と、認めたくないが幾許かの嬉しさで。

「あのハクタクと随分仲が良かったみたいだけど」

「まあ、大雑把に括ればお互い半獣ですからね」

実際は獣人と妖獣なのでちょっと違うが、少し似通った所があるから完全な人間や妖怪という面々よりも親しみを感じるのは確かだ。とは言え、そんなに頻繁に会うわけでもないけれど。

「あのハクタクが好き？」

「……咲夜さん？」

握られている手に力が入り、そんなことを問われる。冷えた指先が熱くなると同時に、それが震えている。私の震えではない、彼女からの伝染。

「答えて？」

「……まあ、好きですけど」

「そう……」

「でも私は、頭を撫でられるよりも、こつやって何も言わずに手を握ってくれる人のほうが好きですよ」

「え？」

にこり、と笑いながら言う。もう震えは感じない。

「それはどういう……」

「へ？」

「……いえ、なんでもないわ。なら、もう少しだけ温めてあげる」

綺麗に微笑んだ顔を目に映しながら、私は自分の手を咲夜さんに委ねたのだった。

リハビリ小話 咲夜ver（後書き）

白「言い残すことは……ありますか？」

ただ一言。申し訳ありませんでしたあつ！

白「クオリティが落ちすぎですよ。死して償ってください」

そんなキャラじゃないでしょ!?

そ、それにね、あれだよ。時間がない焦りとビミョーなスランプが
ね？

何書いても納得いかないあの時期だよ。

白「関係有りません。永遠にさようなら」

だからそんなキャラじゃないで うわああ！

懊悩、そして決意（前書き）

難産すぎた……矛盾がありそうで怖い。
そのうちに改定するかもしれません。

懊惱、そして決意

山以外で出会った人や妖怪たちは、総じて私のことを老成した性格だと言う。

正直、私はこれに疑問を持っている。どう考えても私の行動には理論だったものなどないからだ。全て直感、全て気分で過ごしてきた私にとって、『落ち着いた』性格と言われるのは意味を理解しかねるのだ。

ただ、そう思われているということは、そう思わせるような言行をしているということ。相手に質問してみれば、私の『敬語』や『冷静』な態度がそう思わせるらしい。

敬語はただの癖。誰にも私の奥深くに踏み込ませないための、また私自身も踏み込まないための、あの時から張った予防線。意識しなくても常に出るくらいには習慣化した。

冷静さはただの見せかけ。他人に頼らないように自分を律するため、表向きの性格。本当の私は、もっと騒がしくて臆病な生き物。

自分のことは自分が一番解っているつもりだ。私は紫さんが評価しているほど強くない。弱いから、自分のしたことに耐えられなかったから、偽りの性格を作って外野を遮断した。その結果が、今の私。

他人に言われるまでもなく、この行為が無意味なことくらい解っている。こんなことをして私の犯したことが許されるわけでもないし、また赦されてはならないのだ。

結局私はどこまでいっても、どれだけ年齢を重ねようとも、『中途半端』のまま。自分の力に怯え、犯した罪から逃げ、何事とも向き合おうとしない。

私が世界で一番嫌いなのは『私自身』。臆病で、狡猾で、卑屈な
どうしようもない自分を言葉では表せないくらいに嫌悪している。
厭忌しながらも何もしない自分に絶望している。『死』という単
語が幾度と無く頭をよぎったが、それを躊躇する自分が滑稽だ。失
うものなど何も無い筈なのに、

「どうして……」

こんなにも動揺しているんだろう。なぜ、先程から紫さんたちに
『知られてしまった』という『恐怖』が頭を渦巻いているんだろう。

「白!?!」

霊夢さんの焦った声が遠くに聞こえる。身体が震えて立っている
ことすらままならず、上手く息が出来ない。目の前が真っ白になり
かけた時、体が何かに包まれた。

「紫、さん……?」

目の前には、驚くほど悲しげな表情をした紫さん。その手の中
は、私。

「落ち着いた?」

言葉は優しいのに、酷く辛そうな顔をして私を撫でてくれている
のは霊夢さん。

……何故? どうして二人がそんな表情をするの? ?

「聖」

「ぬえ。どうかしましたか？」

「……あいつ、どうしたかなって」

「あいつ……ああ、あの半獣の少女ですか？」

「いや、別に気になってるわけじゃないんだよ。ただちょっと……」

「彼女は、とても危うい均衡の上で成り立っているように感じました」

「……………」

「本人は気づいているのかいないのか……おそらく後者なのでしようね」

「……あいつ、さ。昨日話してた時、ずっと感情を押し込めてた。少し泣いたくらいじゃ割りに合わないくらいの感情を」

「……人は通常、自らに親しい者にこそ自身を理解してもらいたいものです。しかし本人にとってその悩みが深ければ深いほど、親しい人に相談するのは難しい。『相談した結果、相手に去られてしまうのではないか』。そんな感情が胸を覆うのです」

「でも、『だから相談できない』ってというのはただ相手を信用してないだけじゃないの？」

「そうですね。お互いに信じあっていたら簡単に出来るでしょう。しかしその信頼に足る人物というのは、長く時を過ごしてきたもの家族や配偶者、数年来の友人などが主でしょう」

「……でも、あいつは妖怪でもあるんでしょう？ 妖怪なら全部なくともおかしくはないんだから、あそこまで自分を追い詰めなくても」

「あの子は人間です。姿形や価値観は違えど、根本的な考え方がまるで『妖怪であること』を拒絶しているくらいに」

「妖怪であることを……否定？」

「あの子を見て思いませんでしたか？ 自虐的で自己否定的な発言が多いと」

「……そう言われれば、そうかもしれない」

「あの子は意識的に他人との関わりを避けています。そうすることが自分を傷つけられる道だと思っているのでしょう」

「自分を傷つける？ ……まさか、それが両親への弔いになるなんて思ってるの？」

「そうですね」

「……有り得ない。それならここで読経するほうがいいじゃない。」

自分を傷つけるとか馬鹿じゃないの」

「だからあの子も辛いのです。『幸せ』を感じてしまったから」

「……どういこと？」

「最近のあの子の周囲にはたくさんの方がいます。そしてその人達と関わることを『楽しい』と感じるようになりました。これはそれまでの自分の行いを否定することです」

「そう、だけど」

「以前までの彼女ならば、私達に打ち明けることもなかったでしょう。そうしてしまうくらいに現在の彼女は不安定で追い詰められています」

「そうは見えなかったけど……」

「それはそうでしょう。彼女自身、自分が壊れかけていることを自覚していませんから」

「それ、一番駄目なパターンじゃ……」

「この手の人は許容量を超えて初めて気づく人が多いですからね。ですが、彼女への心配は無用ですよ」

「なんで？ 話を聞く限りじゃ不味い状態にしか聞こえないんだけど」

「これは私ではなく、他の方が行動して初めて解決する問題ですか」

ら

「他の方？」

「例えば、 さっき彼女を拉致して、私にこんな情報を与えてから去っていった妖怪とか」

「……誰？」

「ふふ。彼女を好いていて、尚且つ理解しようとしている存在がいるということですよ。ですから私達が出来るとはもうありません」

「……まあ、聖がそう言うのならいいや。変な時間にごめん」

「いいえ。ぬえが人の感情に対して鋭くなってくれて嬉しいですよ。御悩み相談が来たら次はぬえに任せてみましょうか」

「……気が向いたら、ね」

分からない。二人がなぜそんな表情をしているのかも、私自身の感情も。

恐怖？ ……違う。知られてしまった恐怖は既がない。

困惑？ ……少しはあるけど、大部分はこれじゃない。

「傷付けてしまっでごめんね。でも、放っておけばあんたが壊れて

しまつかもしれない。分かって、これは貴方にとって必要なことなの」

霊夢さんが辛そうに言う。

「白、貴方は事実と向き合わなくてはいけない。封印されて安心しているようでは、いつまでたっても変わることが出来ない。自分の力を怖れているようでは、どこまでも自責の念に駆られるでしょう」

「紫さん……まさか、知って」

私の呟きとも言えないほど小さく震えた声に、紫さんは意味深に笑みを深めて応える。

ああ、知っているんだ。私が何をしたのかも、どうして封印が掛けられたかも。

そして何より、それをしてしまった私自身の力が怖くて嫌いで堪らない、ということも。

「向き合いなさい、白。自身の力とあの日の事実」

「……随分と厳しいことを仰る。それでも自分の罪については考えているつもりなのに」

「そうね、貴方は逃げずに向き合った。でも、それは立派であると同時に愚かでもある」

「知ってますよ、自分が救いようのない痴れ者だつてことくらい」

「違うわよ」

これ見よがしに大きな溜め息をつかれる。なんだかすごく呆れられているらしい。

「物事はもっと多角的に見なければいけないのよ。主観だけで判断

を下すのは愚の骨頂だわ」

「主観も何も、私がしたことは変わらないでしょう」

「変わるのよねえ、これが。不思議でも何でも無い事に」

「……」

呆れられているどころか、もはや憐れみの目で見られている気がする。若しくは馬鹿にされた目だ。

「全てを知り、それから結論を出すのが最善の手よ」

「……それでも、嫌だと言ったら？」

「別に？」

聞いたことのないくらい冷たい声で紫さんは言った。

「白、私が貴方に対して興味を持ったのはその封印があったから。その封じられた力が気になったから」

別に驚きはしない。紫さんや霊夢さんなら初見で私のことくらい見抜いていただろう。

「まあ、その内に貴方の馬鹿みたいに素直で純粹な所も気に入ったんだけどね」

「……この空気ですごいうの挟みます？」

どうでもいいじゃないですか、私の性格なんて。それと自分では結構捻くれていると思っっているんですけど。

「だけど今、全てを知ることが出来るのにそれをせず、これから先も逃げると言うのなら私の見込み違いだわ。腑抜けた奴に興味はないの」

今までとは打って変わった冷たい目で私を見下ろす紫さんが、どこまでも恐ろしく見える。意にそぐわない事を言おうものならその瞬間、どこまでも冷静に、眉ひとつ動かさず私の命を絶つと思わせられるくらいに強大な圧力が私を襲う。

突然とも言える殺気にもはや足が震えて立っていられず、その場へあたり込む。それを冷徹に見下す大妖怪と、私はもう目を合わせることさえできない。

「…………それが貴方の選ぶ道なのね。ならば二度と会うことはないでしょう。さようなら、弱く愚かしい半妖よ。私は弱者に機会を与えれども、愚者に道は指し示さない」

まともに上を向くこともできず、ただ言われた言葉を反芻する。言った張本人が、私から遠ざかっていく音が聞こえる。

「ちよつと紫！」

「霊夢、あれがあの子の答えよ。私は人だとか妖怪だとか、そんなのに固執する者は要らないの。私が欲しいのはもつと…………」

何をしているんだろう、私は。生き方を変えるのではなかったのか。昨日、そう心に誓った筈なのに。それとも所詮、泥に塗れ、震えながら生きていくしか道はないというのか。

…………違う。もう一つ、決めたことがあったじゃないか。今まで満足に出来なかった分、そうしていくと誓ったことが。

「で」

「……何？ もう少し大きな声で言ってもらわないと分からないわ」
立ち止まり、振り返る気配がする。

「……やっぱり優しいな。待っていてくれてるんだ、こんな私なんかのために。そうだ、だからこそ私は

俯けていた顔を上げる。頬に何か熱いものが伝わっている気がするが、そんなのはどうでもいい。

「……行かないで。私を……また独りにしないで」
「……」

「分かった。あんなことをしても父さんたちが喜ぶわけがないし、私のしたことが赦されるわけでもない。でも、他にどうしていいか分からなかった」

当時のことを知っている山の妖怪や仙人、神様たちは私のことを心配してくれている。私が一番信頼しているのは彼らだし、現状のことを相談すれば皆親身になってそれに乗ってくれるだろう。だけど、私は彼らに甘えっぱなしだった。もうこれ以上、彼らに迷惑を掛けたくなかった。

「怖かった。父さんといいた日々が……幸せな時が一瞬でなくなったから。山で誰かと話していたりすると、ふとその恐怖が私を襲うんです。『また消えてしまう』んじゃないかって」

あの感覚に慣れることはないのだろう。背中に感じる恐怖と全身を駆け巡る悪寒、そして頭痛。息が苦しくなると何も考えられなくなり、そのまま意識が遠ざかっていく感覚。

「今も、感じました。二人に抱きとめられたので気絶はしてませんけど」

自分よりも、二人の悲しんでいる表情に意識が向かった。そんな顔をして欲しくないって思った。

「でも、今ので分かりました。私はただ逃げていただけ。これじゃあ駄目なんです」

私は馬鹿だ、今頃になって気付くなんて。でも、今からでも遅くはない。

「私からお願いします。封印を解いてください」

取り戻そう、今まで見て見ぬふりをしてきたモノを。どんなものであれ、私の父さんと母さんから受け継いだ、大切な誇りあるものなのだから。

もう迷わない。そう思いを込めてまっすぐに紫さんを見つめる。その紫さんが微笑んで口を開く頃には、私の震えはもう止まっていた。

覚醒、新たな始まり（前書き）

七尾 五尾へ変更しました。流石に強すぎたということであと、今回の話は微グロ注意です。問題ないと思いますが、念のため。

そして父親万能説が浮上する回だったり。

覚醒、新たな始まり

記憶が蘇る。私のチカラと共に。

……ああそつだ。あの時本当は、父さんは即死というわけではなかった。私へ注意がそれたのか、あの天狗の攻撃が直撃しなかったのだ。致命傷に変わりないが、それでも最期の言葉を交わせていたんだ。

全て、思い出した。

私は天狗の攻撃を受けて、死にたくないと思った。その願いが届いたのか何なのか、私は人間という殻から脱し、妖怪 少し変わり種な半妖怪の妖獣 へと変貌を遂げていた。

けどその時は不思議に思わなかった。臀部に生えた一本の尻尾も身に纏っている妖気も、まるで最初から備わっていたかのように馴染んでいた。

あの時私がすぐにした行動は、当然父に駆け寄ることだった。私も怪我をしていたが父はそれ以上の状態で、力なく横たわっていた。

「うっ……お父さん！ お父さん、大丈夫！？」

「白……無事、だったか？」

「私なんていいから！ それより早く手当……誰か呼んで来るから！」

「いい。それよりも怪我はないか？」

「ないよ。私なんかよりお父……」

「白」

父は静かに私の言葉を遮った。その目には慈愛に満ちていて、分かりたくない事実を突きつけられた。

「お、父さっ……！」

「俺はもう駄目みたいだ。……泣くな、白」

「嫌だ、やだよ！ そんなことない……！」

「自分の死が近いことくらい分かる……これでもお前より長くここで暮らしてるんだ、ぞ？」

苦しそうな呼吸が耳を打った。どうしようもない現実が目の前に迫っていた。子供な私は何も出来なくて、そんな無力な自分が腹立たしくて。ナニカが一つ、爆ぜた気がした。

泣きじゃくる私を動かすのも辛いであろう腕で撫でていたのに、父はそんな苦しさを感じさせないような表情と声色で喋り続けた。

「泣かないでくれ。お前の笑顔が見られないんじゃないじゃ、俺が体を張った意味も半減するだろ？」

「だって私がいなければ、お父さんはっ……！」

こんな目に遭わなかったのに。

その言葉は音にならなかつた。代わりに鳴ったのは、弱々しいけれど何故か芯まで響くような、父から私へ対する張手だつた。

どんなに甘えてもどんなに酷い失敗をしても、口での叱責だけで手をあげることは一度もなかつた。そんな父だつたからなのか、その時初めて本気で怒られたような心象を持った。

「そんなことは二度と言うな」

「でも、だって……」

「いいか、白」

辛そうに息をしながら、目を真っ直ぐ私に向けてくる。

「俺にとってお前は宝なんだ。愛する母さんとの間に産まれた……俺にとつて最後の希望」

「宝……？」

「ああ、宝だ。母さんが死んだ時、白がいたから立ち直れた。この子と共にもう一度生きようと思えたんだ」

「お父さん……」

「その大切な娘が危険だったのに、命張れないでどうする。……そうだ、天狗はどうなった？」

その言葉で私は思い出した。あの時、一度に色々なことが起きてそれを上手く処理することが出来なかった私は、様々な感情に支配されていた。悲しみ、混乱、恐怖、……そして怒りと憎しみ。

そんな状態だったから天狗を引き合いに出された時、当然私は怒りと憎しみが増大した。幼い私には、それを解消する術が一つしか見当たらなかった。天狗の息の根を止めること、だ。

今にして思い返しても、こうなることは仕方がなかったのと思う。この世界のどこに親を目の前で失う時冷静になれる者がいるのだろうか。少なくとも私には無理な注文だ。

当時の私は子供らしく、一つのことには集中出来なかった。父の心配をする時は父だけを、天狗を憎いと思う時は天狗だけを。周囲を気にする余裕などまるで無かった。

だが憎しみで染まった心に従い、背後にいるであろう天狗に目を向けた私は絶句した。

「死ん、で……る……？」

冷静になれば、生きているのなら私達の会話に割り込んでいたはずだとか、もつと父が警戒していたはずだとか、そんな事が頭に浮かんだ。だが目の前のそれは、幼い私にとって正視に耐えうるものではなかった。

「う、うわ……！ おえ……げほっ」

初めて見るものだった。食べるために、生きるために動物を狩るのとは違うその死に心底恐怖した。流れ出る紅い液体、飛び散った肉の破片……直視出来なかった。

「白、大丈夫か！？ ごめんな……辛いものを見せちゃったな」
「っ、平気だもん……私は妖怪なんだから、こんなもの……！」

頭ではしつかり『私は妖怪だ』と理解していた。だけど耳と尻尾に何の違和感もないのに、妖怪なら心を動かされない目の前の光景に動揺している自分が分からなかった。

ここで新たな感情が私を支配した。『自分自身への恐怖』だ。

「お父さん……私、何なの？ 妖怪なの？ 人間なの？ 妖怪なら、なんで血くらいでこんなに驚いてるの……人間なら、どうして妖力が使えるの……？」

「白……」

死に際の父にする質問では無かったかもしれない。無理してでも笑って見送るべきだったのかもしれない。でも、子供だった私は問わずにはいられなかった。

「ごめん……ごめんな、白」

「お父さん……？」

「白、これだけは覚えておいてくれ。俺は、この世界に来て幸せだった。俺は、俺に幸せを与えてくれたこの地が大好きだ。だから……」

父が咳き込む。さつき見た紅いモノがその口から出てきた。怖かったけどそれより悲しくて、涙が溢れた。

「お前にもこの世界を愛して欲しい。この地は何でも受け入れる。お前が恨みを持って、それを受け入れる。だが、そうしないでくれ」

段々と浅くなっていく呼吸、鋭くなった聴覚でやっと聞き取れる声が、本当に時間が無いことを示していた。そして父は、こうはつきり言った。

「白、お前は半妖だ。人間にも妖怪にも分からない苦勞を背負うかもしれない。そうなくてもこの地を、他人を恨むな。その感情は全て俺に向ける。要らない苦勞を生まれながらに背負わせたのは俺だ。全部、俺が悪い」

「半、妖……？」

「ああ。人と妖の……俺と母さんの子だ。そのせいで苦しむ時が来ても、お前は何も悪くない。悪いのは全部」

「大丈夫！」

父の言葉を遮り、笑顔を向けた。父のおかげで自分への恐怖もなくなっていた。また一つ、何かが弾けた。

「私の混血は、お父さんとお母さんの子っていう証だよ。いつまでも残る証だから……お父さんとお母さんがくれた、大事な……！」

ずっと笑顔でいるのは不可能だった。心音が段々とゆっくりになつていく父にすがりついて再び泣いた。

「白、お前は生きる。俺も母さんも傍にはいれないが……いつも見守ってる」

「うん……」

「ちゃんと周りの奴らに頼れよ？ 人間は一人じゃ生きて行けないんだからな……」

「うん、頑張る……」

「すごいよな、人間って。一人じゃ出来ないことも周りに頼れば解決するし、守るものがあれば天狗だつて倒せるんだ」

「うん、うん……っ！」

「頼ることも強さだ。意固地になつて迷惑かけるんじゃない、……ぞ」

優しい声だった。それは驚くほど私の胸に落ち着いて、気持ちを穏やかにさせた。

「もうそろそろ時間だ……その前に」

「なに？ どうし うあっ!？」

「まだお前にこんなドロドロしたものを見せたくない。もう少し……そうだな、あと十年もしたら思い出すようにしておくから、それまでは幸せに生きてくれ」

「うあ、っ……お父、さん！」

「ごめんな。お前を置いて逝き、悲しみさえ先延ばしにするなんて父親失格だ……こりゃ、地獄行きかな」

父が陰陽術に長けていたのは知っていたが、こんな事まで出来るなんて知らなかった。

だが、そんな事を差し置いてでも言いたいことがあった。痛む頭

を無視して、私は父に向かってこう言った。

「大好きだよ、お父さん……」

「！……俺もだ。白、愛してる。ごめんな……そして、今までありがとう。俺はお前と入れて幸せだった」

父は最期に一瞬だけ微笑んだ。そして、その後を追うようにして私も倒れた。

そこまで長く気絶をした訳ではなかったのだろう。目覚めても光景は変わっていなかった。違っていたのは、父がかけた記憶の封印によって、この凄惨たる状況がどうやって作られたのか何も分からなくなっていた私だけだった。

父に重なるように倒れていた私には夥しい返り血がついていた。少し離れたところにはあの天狗。対する私には三本の尻尾が生えていて、かつてない程に力が満ちていた。

そして、理解したのである。実際は勘違いだったわけだが、当時にそんな事が分かるわけもない。

『父を殺した、天狗を殺した、母も私のせいだ』湧き上がるは負の感情。心の奥底から沸き上がってくる黒々とした思いが強まれば強まるほど、それに対応するように尻尾が二本増えた。

考えてみると、私の尻尾が増えるのは制御できないほどの感情が胸を覆いつくした時だった。だから既に二本増えていたのだろうし、この時も増えたのだ。

そして、この後は知る人ぞ知る結果を辿っていくことになる。

ふう、と息をつく。

激しい記憶の波は確実に私の体力を奪っていて、体中が汗に塗れていた。

「白……」

「大丈夫かしら？」

目の前にはもうあの光景ではなく、霊夢さんと紫さんがいる。どちらもとても心配してくれていたようで、私の手は二人に握られていた。

息を整え、そんな二人に向かって私は笑顔を向けて、言った。

「もう大丈夫です。私はきちんと愛されていました」

そして日常へ

あの日から三日が経った。

あの時は「取り敢えず落ち着きたいから」と言って二人に何も説明せず帰ってきたが、そろそろ会いに行くべき時期だろう。

「白」

「ん？ 何ですか、雛さん」

「……大丈夫なの？」

「ご心配には及びませんよ。そう何度も言ってるじゃないですか」

実を言うと、山の知り合いにも本当のことは言っていない。言った所でどうにかなるわけでもないし、既にアレは過去のことだ。今更蒸し返すこともない。

あの時の出来事は私だけが知っていればいい。父の愛は、交わした約束は私だけの秘密だ。

「無理してない？」

「してない。大丈夫だよ、辛くなったら相談するから。心配してくれてありがとう」

「……変わったわね。いえ、戻ったと言うべきかしら」

「どこが？」

「喋り方とか、少し昔に戻ってるわよ」

「あ……嫌でした？」

「いいえ、ずっとそのままでもいいわ。でもちよっと珍しいかな、って思っただけよ」

「……そろそろ、本当に前に進もうと思ったんです」

幸せに生きると父は言った。漠然としてよく分からないが、

それを見つげるためにはもっと人と関わって、見聞を広める事が必要だと感じた。まあ、私が楽しいと思うことを順々にやっていけば、自ずとそれも見つけられるだろう。

「そう、応援してるわね。頑張って」

「やっぱり雛お姉ちゃんは優しいね。だから大好き」

「私もよ。辛くなったらいつでも頼りなさい。私は貴女の味方だから」

「ありがとう。じゃあ、行ってくるね」

「いつてらっしやい」

聖さんの言う通りだ。私の周りには私を助けてくれる人がいる。それに気づいてからは、なんだか世界がより身近に、でも広くなった気がする。それに比例するように毎日を楽しく感じるようになった。まだ三日しか経っていないが、もっとそうなっていけたらいいと思う。その為には

「なんだか久しぶりに来た気がするなあ……実際はそうでもないんだけど」

「何ブツブツ言ってるのよ。来てたのなら賽銭入れるなり挨拶しにくるなりしなさいよ」

「少し感慨にふけていただけじゃないですか。これくらい見逃してくださいよ、霊夢さん」

「……そ。ちなみに素敵な賽銭箱はあつちよ」

「さっきから賽銭賽銭って……そんなに吝嗇家でしたっけ」

別にそんなに不自由な生活をしているわけでもなさそうなんだけ
ど。私もちよいちよい食べ物を持ってきてるし。

「今のはね、霊夢なりの照れ隠しなのよ」

「あ、紫さん。……照れ隠し？」

「ええ。貴女、ちょっと雰囲気が変わったでしょ？ それに驚いて
意味不明なことを口走っちゃってるのよ、霊夢は」

「変わりましたか、雰囲気」

「何というか明るくなったわね。自信が全身に漲っていて、以前よ
りも一層可愛くなってるわ」

明るくなった、か。自分としてはそんなに変わったつもりはない
んだけど、そんなに違って見えるのだろうか。最後の言葉はお世辞
だろうけど。

「急にどうしたのよ。今まで私達がどんなに褒めてもネガティブ思
考から抜け出さなかったっていうのに」

「んー……内緒、です」

「……他人からの万の言葉より響く、もっと重い言葉を貰ったのか
しらね。もしそうだとしたら」

「？」

「私もその人に会って言いたいわ。“娘さんをください”って」

「ちよおおおう！？」

バレてる！？ いやそこはまだいいんだけど今のは色々突っ込
みどころが満載すぎて頭がショートしそうだよ！？

「な、何を言っんですか。聞きようによっては告白ですよ、今の」
「告白だもの」

さらりと告げられた、真実。

「……し、式としての器を買って、ですよね？」

「そっちも零じゃないけど、主だったのは愛玩動物としてとか恋び
あらし霊夢。そんな親の敵を見るような目で睨むなんてどうした
の？」

「いけしゃあしゃあと……白！」

「ほえい！？ すみません今ちょっと急展開すぎてもう訳が分から
な……！」

「こ、告白？ あの紫さんが？ 落ち着け落ち着け有り得ないだろ
う、からかわれてるんだそうに違いない。全く、年齢とかが人間と
さして変わらない私を弄るなんて趣味が悪いなあ。」

「あ、冗談じゃないわよ？ 貴方が望むなら八雲家に迎え入れるこ
とも吝かでは……」

「吝かだよ！ 一旦深呼吸して落ち着き 痛い！？ 霊夢さん、
私の尻尾が増えたのは驚掴みにされるためでも、ましてや引つ張ら
れるためでもないんだよ！」

「ねえ白。私の質問に答えてくれないかしら？」

「内容以前に、前提条件は私を解放することです！」

心機一転、生まれ変わった気持ちで博麗神社にやって来たついで
うのに何この仕打ち。封印解く前と何も変わらないよ。むしろ余計
に酷くなってない？

……でもまあ、そんな『変わっていない』日常に安心して私
も確かにいる。封印を解いたことで何かが変わってしまうんじゃない
か、と思っていたから。でも、ここにいる二人は何も変わらずに
私を迎え入れてくれた。それだけでとても嬉しい。

「白、あんたは私と紫、どっちの方が好き？」

「前提条件無視された!？」

「もう『二人とも』なんて回答は通用しないわよ。きちんとどっちかを選びなさい」

「もちろん私よね？」

何これどんな拷問？　ねえお父さん、私どうしたらいいのかな？

「中々に興がそえられることをしているわね」

「けど、それを二人占めつてずるくないかしら？」

「ちっ……どこから湧いて出てきたのよ」

あ、あれは……レミリアさん率いる紅魔館の人たち？　どうして全員で来たの……？

「お嬢様、あまり前に出すぎると太陽光に当たって……」

「あちっ！」

「あーあ、人の話を聞かないからですわよ、お姉様。もう少し落ち着きを持ったほうが宜しいのでは？」

フランさんが物凄く毒を吐いている。ちよ、レミリアさん頑張つて。そこで泣いたらカリスマ崩壊しますよ。

「いいわね、こういうのも。こんな楽しそうなおことがあるなら毎日でも外に出たいわ」

「姫様、今度ウドングと里に薬を売りに行かれてはどうです？」

「牛車か白に乗ってなら考えるわ」

「何故そこに私が!？」

「白はさ、鈴仙に並べるくらいの弄られキャラになれるよ」

「てゐ、私はあの子ほど天然じゃないわよ」

「散々な評価すぎる……」

次いでやって来たのは永遠亭の皆様。どうやらあそこでの私の評価は乗り物らしい。

「私たちを忘れてもらったら困るわね」

「白ー！」

「ごはぁっ!？」

現れたのは地底の妖怪たち。因みに、私の名を叫びながら飛びついてきたのはこいしさんだ。

言い忘れていたが、私は封印を解いたことで身長が少し伸びた。どういう原理かは知らないが、封印が成長も阻害していたという趣旨で納得している。現在は霊夢さんと同じ、ないし少し低いくらいになっているので、飛びかかってきたこいしさんの頭と私の顎がごつつんこ。しても何の不思議はない。結果として「めっちゃ痛い」が残るだけだ。

603

「舌嚙んだ……血の味がする……」

「ごめんね、白。お詫びに私の舌で消毒してあげようか?」

「また危険なセリフを!」

からかいにしては度が過ぎてますよ!? というか突っ込みどころが多すぎて私一人では捌けない……!

「わあ、見てください! 本当に尻尾が増えてますよ!」

「本当だ。ということとで突撃ー!」

「お願い諏訪子様! 神の威厳を保って!」

そんな事するから私の信仰が早苗さんと神奈子様に

「諏訪子様、次変わってくださいね」

神奈子様だけに向かうんだよ！

それからも次々と現れる見知った顔の人妖たち。今は人ごみを逃れて少し離れた場所にいるのだが、最早人数を数えることすら面倒だ。しかも酒も入っていないというのにこの盛り上がりは……。

「白」

「あ、映姫様……」

「何を呆けた顔をしているのですか。ここにいる者たちはみな貴方の為に集まったのですから、それ相応の対応をしたらどうなのですか？」

「私の……ため？」

「そうです。彼女らは、貴方と懇意にしている天狗の呼びかけに応じたのですよ」

「文さんが……」

あの人もとても心配してくれていたんだ。……どうして私は今まで気付かなかつたんだろう。大事なものは全部……近くにあったのに。

「過去に生きるより現在を、そして未来に生きなさい。貴女の父は、ずっとそう願っていましたよ」

「！……父は、立派でしたか？」

「ええ。私の裁きを受けている間も、ずっと貴女の母と貴女のこと

を想っていました」

「そんな時くらい、自分の心配をしたっていいのに……」

どこまでも優しく真つ直ぐで……そんな人が父だということは、私の生涯誇れるものだろう。

「……主役がそんな顔をしてどうしますか」

「そう、ですね……本当、その通りです。　　楽しみです、今を」

自分の両頬を叩き、活を入れる。私のために集まってくれたというのなら、私がすべきはここで膝を抱えていることではない。

「お、漸く主役の登場か」

「待ちくたびれちゃったわよ」

「すみません。色々とあった突っ込みたい部分を投げて捨ててきましたので、もう大丈夫です」

私はこの地で生きる。こんな風に大切な人たちと他愛ない話でもしながら、ずっと。

「あ、白。さっきの論が発展して、今は『白は誰に虐められたいのか』になってるんだけど」

「どこをどう論じたらそうなるんですか!？」

……きっと力強く生きていきたいなあ、と思う。

私に愛を絶望を、善悪を教えてくれた　清濁併せ呑む、この美しくも残酷な世界で。

そして日常へ（後書き）

これで一区切りがつかしました。

後は個別エントドを書いていきます。とは言っても、霊夢と紫くらいしか考えていませんが……。他キャラは私の気力や、「書いて！」という要望次第です。

今後は更にゆっくり更新になると思われますが、よろしくお願ひします。

それとクリスマスに小話書くとか言っていたことを知っている人は知っていると思うのですが、掲載は断念しました。

理由はまあ……色々です、色々。「欲しい」という方がいたら個別にメールで送ることは可能なレベルですが……。

なので（もし万一）楽しみにしていた方がいたのなら申し訳ありませんでした。

【番外編】 結婚小話〜準備編（前書き）

個別エントを期待していた方ごめんなさい。難航中のためこちらを先に投稿しました。

ええと、これは紫と白がもつくっついてるのが前提なのでご注意ください。

それとゆかりんの大暴走と白のキャラを忘れたのでかなりひどい出来です。ビバー時間クオリティ。

いえあの……本編は頑張るので。番外編はしっちゃんかめっちゃんかになりますか、ご理解いただけたらなあ、と思います。

では上記が許せる方のみどうぞ！

【番外編】 結婚小話／準備編

「白、どつちを着たい？」

「……………いやあの、本当勘弁して下さい」

「聞かれたことにはきちんと答えましょうね。今ならまだ許してあげる」

「どつちも嫌です」

そう返答すると扇子の骨組みで頭を叩かれた。なんだか芯まで響く痛みだ。

「……………いてえ」

「こら、そんな乱暴な言葉を使わないの」

「何呆れ顔で諭してるんです。貴方が叩かなければいい話でしょう」「教育的指導よ。いわば不可抗力ね」

何かその『私だって好きで貴方を殴ってるんじゃないの』という顔に無性に腹が立つ。嘘つけ。

「で、どつち？」

「だからどつちも嫌だと」

「そう、分かったわ。両方着たいのね」

「誰かー、通訳を」

私は日本語と紅魔館で習った英語しか分からないんです。眼前の妖怪はどうやら新言語を使っているようなので、私と意思の疎通が出来ないらしい。

「こつなったら逃げるが勝ち……………」

「い・つ・ま・で。こんな問答をするつもりなのかしら？」

「いたたたた！？ ほ、頬を引つ張らないでくださいよ……紫さん
「貴方がいけないの。過ぎたツンデレは好みじゃないわ」

「つんでれ”って何？ 紫さんは私の知らない言葉を使うから困る。」

「全く、折角意向を聞きにきてあげたのに。そういう態度なら全部私が決めるわよ？」

「何となく予想がついていますが……何を全部決めるつもりですか？」

「私と貴女の『結婚式』について」

「予想通りだけど誰かあー！ 助けむぐうっ」

手で口を塞がれて反論を封じ込まれる。古典的だが効果的な方法だ。

「しー。誰からに聞かれたらどうするの？ こういうのは直前に知らせるのが楽しいんじゃない」

「ぶはっ……それもどうかと思いますけど」

「もちろん必要最低限には伝えるわ。それ以外に対するドッキリ企画ね」

「今まさに私もドッキリされましたけどね……」

ていうか結婚で。色々ツッコミどころがあり過ぎて困る。

「寝耳に水ですよ、そんなこと」

「昨日寝ている時に言ったわよ。耳元で」

「本当に寝耳だし……」

「そんなことはいいいじゃない。それより、最初の質問に答えてくれ

ない？」

最初の質問、と言うけれども。いきなりあんな物を持って来られて結婚とか言われても、現実感など湧くわけもない。正直、まだ嘘じゃないかと疑っているくらいだ。

「……その左手に持ってるのは見たことないんですけど。予想はつきませんが、それって外の世界で着る感じのやつですか？」

「そうよ。ウエディングドレス……って言っても分からないわよね。まあ、西洋の結婚式ではこれを着るの」

「で、右手に持ってるのが打掛……もとい白無垢」

「ええ。どっち？」

「両方持って帰れ」

本当に何を言い出すんだこの妖怪は。賢者の本性垣間見ゆ。

それと、私がそれを着たら貴女はどうするんですか。袴か。……

逆のがいいでしょう、絶対。

「そう……」

願いが通じたのか、残念そうな顔つきで溜め息を零す。う……、そ、そんな顔されると私が悪いみたいになるじゃないですか……。

しかし次第に喜色に染まっていく紫さんに、えも言われぬ悪寒が背中を駆け巡る。今度は何を言い出す気だ。

「分かったわ、裸エプロンがいいのね」

ああ駄目だ。この妖怪はきつと、頭のネジを半分位どこかに置いてきてしまったんだ……。

「あのですね、そういうのは結婚式とは言わなくて……露出狂です、それは」

誰かがこういう時には否定したりせず受け止めてあげるとか言っていた気がするけど、無理です。こんな爆弾受け止められない。

「何を言ってるの？ 貴女のそんな姿、誰にも見せるわけないじゃない。私が美味しく頂けためよ」

「人喰いのな意味で言われたほうがまだ気が楽なんですけど……」

「無論性的な意味だ」「五月蠅いな解ってますよ十二分に！」「……あらあら顔が真っ赤よ？」

そんな初心な間柄でもないのに、と至極楽しそうに笑われる。なんだか差をありありと見せつけられているようで悔しい。……何の差か、と言われるとよく分からないけど。

「それで、どうするの？」

「ど、どうつて、さっきから何度も……」

スキマで上半身だけを私の傍に持ってきて、問う。そのままごく自然な動作で顎に手を置かれ、何をされるか感じ取った私は目を閉じる。

「んっ……」

触れるだけの唇の感触に暫し身を任せる。……なんか、やっぱりずるいなあ。こういう時でもすごく余裕がある。

軽い割には長かったキスが終わると、私は自分でも分かるくらいに顔に熱を持っていた。

「確かに、未だにこれだけで赤面する娘にはちよつと刺激が強かったかしらね？」

「……すみませんね、お子様で」

「ふふ、拗ねちゃって。そういうところも可愛いわよ」

「っ！」

途端に恥ずかしくなり、顎にある手を振り払って紫さんの肩に額を押し付ける。きつと今の私の顔は林檎のように真っ赤だろう。

そんな私の心情を理解しているのか、クスクスと笑いながら髪を梳いてくる。背中に手を回されてより密着した形になるが、私の視線の先には目玉が蠢く理解不能な異次元があるためもう気持ちに変化は起きない。恥ずかしいとかより興味を引かれる……あ、目が合った。

「ね、白」

「……何ですか」

「どうしても嫌ならやめるわよ。私は貴女がいてくれさえすれば、そういう形式張ったのはどうでもいいもの」

裸エプロンはいつでも出来るし、という不吉な言葉は聞かなかつたことにして考える。

私は紫さんが好きだ。公言するのは躊躇われるけど、既に文さんにすっぱ抜かれてるから周囲どころか全く知らない人妖まで私たちの仲を知っている。半殺しにしたのは記憶に新しい。

なら、結婚式くらい挙げてもいいんじゃないか？ 文さんのせいで根掘り葉掘り公表されたのだから、最早何をしても生温かい目で見られるだけだろう。

そうなんだけど……何なんだろう、このモヤモヤは。どうにもすっきりしない。

式をあげるのが嫌なのでもなく、紫さんに振り回されるのが気に入らない訳でもない。不満がる要素なんて、どこにも無い筈なのに。

「白？」

押し黙ってしまった私に心配そうな声が振りかかる。かの大妖怪にこんな声を出させられる者はそういないという、密かな優越感が私の心を支配する。……いつの間にか、私も毒されていたものだ。

再び私の名を呼ぶ声がしたので、素直に顔を上げる。胡散臭くない笑みを湛えた愛しい妖怪と目が合うと、不意にさっきの疑問が氷解した。

……ああ、なんだ。そんな事か、と自嘲する。本当に、随分私は毒された。こんな子供じみた事だったなんて。

「……ねえ、紫さん」

「何？」

一人笑っていたからだろう、不思議そうな顔で聞き返してくる。その目を見つめ、ゆっくりと口を開く。

「私、確かに紫さんのこ、恋人です」

「ええ」

「でも別に、夫婦めおとになった訳ではありません」

「……そうね」

一瞬辛そうになった紫さんに抱きつく。別に傷つけようとして言っているわけではない。

「だ、だから……言って、ください」

「？ …… ああ、そういう事」

「最初こそ私の意図が分からなかったらしいが、そこは変態でも賢者だ。瞬時に理解して、微笑を携えながら私の手を取る。」

「白、愛してるわ。ずっと私と一緒にいてくれる？」

真剣な目で、声で言ってくれたのは、『求婚の言葉』。

「……貴女が、私を捨てない限り。一生ついて行きます」
「なら、離れることはないわね」

そう言って、手の甲にキスをしてきた。形容はおかしいかもしれないが、さながら王子様のような動作に、私の視線は釘付けになってしまった。

「ふふ……お顔が先ほどにも増して真っ赤ですわよ、お姫様」
「なっ……！？」

「あら、いけませんわ。そんなに可愛らしいお顔をお隠しになられたは、余計に私を煽るだけですわ」

「ぐっ、こ、この変態賢者……っ！」

「お姫様がそのような粗暴な言葉を使ってはなりません。私めが指導して差し上げましょう。……誰も来ない私の家で、ね」

「ちよ、ちよっと待って落ち着きましょう。一旦深呼吸して……あっ！？」

声にならない悲鳴を上げる。確かに深呼吸しては言ったけど、それは私の首筋で匂いを嗅ぎながらするものじゃないですよ、紫さん。

「まあ、こうなったら諦めなさい。ね？」

「……予定立てるんじゃなかったんですか」

「それは後で、藍でも交えて話し合いますよ。度肝を抜くものにしてあげるわ。……それより今は」

守矢神社で普通の神前結婚式が良いです、という言葉は何か柔らかいもので遮られので、あとで進言しておこう。

今はただ 目の前にある幸せを享受しよう。そう思いながら、いつまで経っても慣れないスキマへと身を投じた。

【番外編】 結婚小話の準備編（後書き）

……感想に、この手の話は苦手だとか書いてくだされば続きは書
きません。逆に続きプリーズという神のような方がいましたら続く
かもしれない オイコラ

と、兎にも角にも、読了ありがとうございました！
……ていうか、これもう紫ルートでいいんじゃないやん（ry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845q/>

妖怪の山の半獣

2012年1月11日01時55分発行